

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第45集

新堀遺跡

静岡県住宅供給公社新堀団地造成に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1993

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

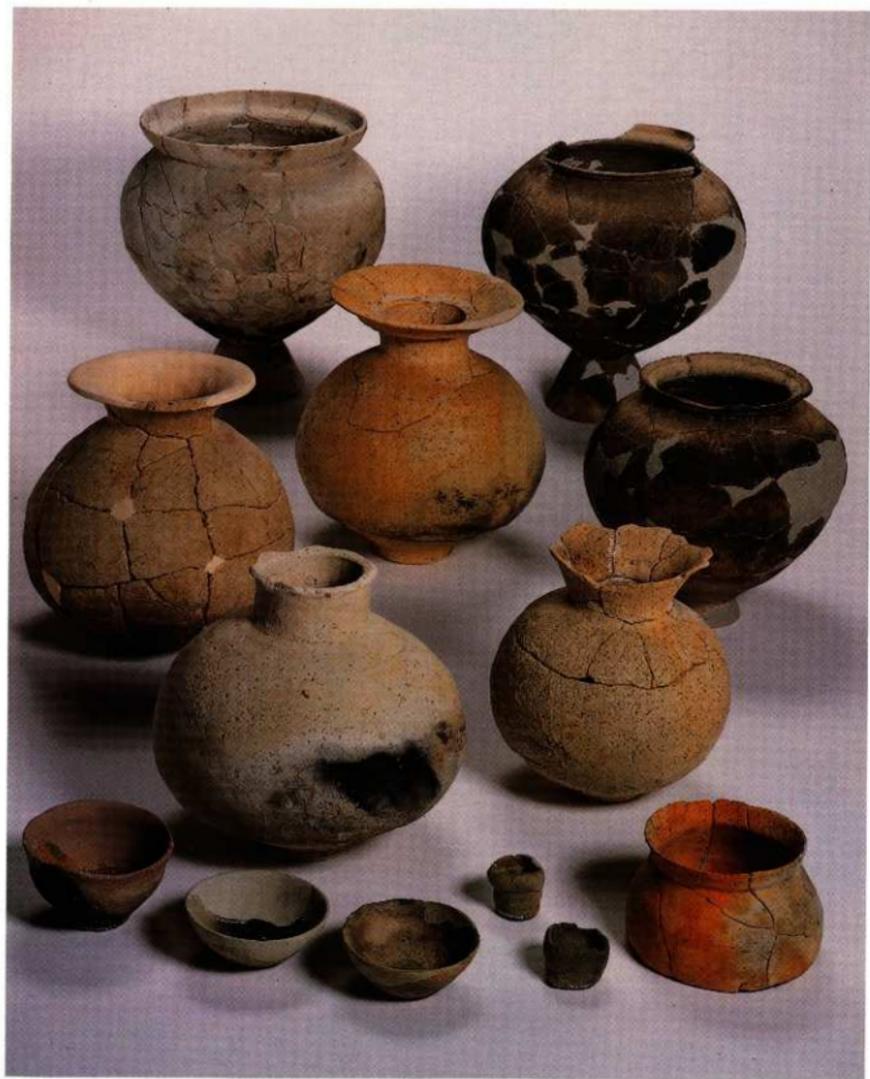
静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第45集

新堀遺跡

静岡県住宅供給公社新堀団地造成に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1993

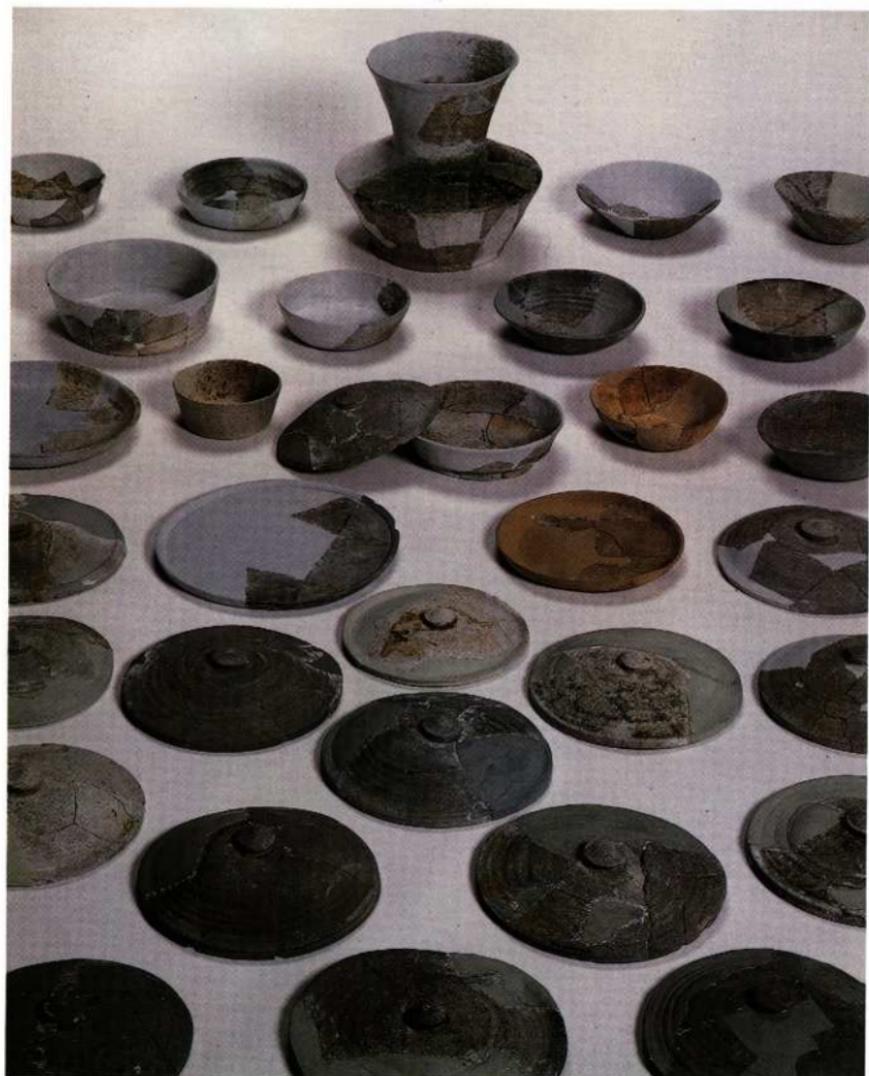
財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所



古墳時代土坑 SF427 出土土器



「山名厨」墨書須惠器



奈良時代溝 SD305 出土土器

序

新堀遺跡の所在する磐田郡浅羽町は静岡県西部の東遠江地域にあたり、最近の発掘調査により、小笠丘陵末端に立地する5世紀の豪族居館跡の古新田遺跡、輸入品という説もある耳環が出土した五ヶ山B1号墳、沖積平野の低地では、砂堆列に立地する、松原・梅山地区等の遺跡群の様子も明らかにされつつある。

このような状況のなか、平成元年度に浅羽町教育委員会が本遺跡の試掘調査を行なった。この結果をもとに、静岡県住宅供給公社の委託を受けた当研究所は、3年にわたる現地調査と資料整理報告事業を展開してきたものである。この報告書の刊行をもって、新堀遺跡に伴う事業はすべて終了することとなった。

新堀遺跡はすでに新聞等で紹介されており、特に「山名厨」と墨書された須恵器杯の出土は大いに注目された。古代遠江国山名郡については、今まで文献と平城宮木簡にその名がみえるのみであり、今回は墨書土器でも確認されたことの意義は大きい。この発見は、山名郡に限らず遠江地域において郡域と郡衙所在地を検討する貴重な資料となった。また溝から一括出土した須恵器・少量ではあるが布目瓦の出土も供給の問題に関して、本遺跡の性格を暗示しているものと考えられる。

奈良時代以外にも、平安時代末から鎌倉時代に多量に供給されている山茶碗の産地と供給の問題、古墳時代においてはこの地域では最終末の方形周溝墓・多様な土坑の在り方等、貴重な調査例を得ることができた。最近、遺跡の立地・物資の供給の観点から、水上交通の問題が重視されつつあり、この意味でも本遺跡が提供する資料は重要なものであろう。

調査ならびに本報告の作成にあたっては、静岡県住宅供給公社・浅羽町教育委員会をはじめとした関係機関各位に多大の援助・協力を頂いた。調査の終了にあたり、関係各位に深謝するとともに、御多忙のところ本調査の一環として行なった各種の調査・分析に玉稿を頂いた加藤芳朗・三辻利一氏、及び柱根の樹種同定をしていただいた山内文氏に深く感謝申し上げる次第である。

1993年3月

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

所 長 齋 藤 忠

例 言

- 1 本書は、静岡県磐田郡浅羽町新堀に所在する新堀遺跡^{にいぼり}の発掘調査報告書である。
- 2 調査は平成2～4年度新堀団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、静岡県住宅供給公社からの委託を受け、調査指導機関静岡県教育委員会・調査実地機関(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所が行なった。
- 3 調査の体制は次のとおりである。
平成2年度(発掘調査)
所長 斎藤 忠、常務理事 亀山千鶴男、調査研究部長 山下 晃
調査研究三課長 佐藤達雄、主任調査研究員 佐野五十三、調査研究員 竹山喜章
平成3年度(発掘調査、資料整理)
所長 斎藤 忠、常務理事 鈴木 勲、調査研究部長 山下 晃
調査研究三課長 佐藤達雄、主任調査研究員 佐野五十三、調査研究員 鈴木光一
平成4年度(資料整理)
所長 斎藤 忠、常務理事 鈴木 勲、調査研究部長 山下 晃
調査研究部次長兼1課長 平野吾郎、主任調査研究員 佐野五十三
なお、平成2年度調査には、埋蔵文化財担当職員養成研修で榛原町教育委員会主査本杉和美氏が参加した。
- 4 資料整理及び報告書作成作業は、平成4年度事業として、平成4年4月から平成5年3まで行なった。
- 5 本書の執筆は、特論を除きすべて佐野五十三が当たり、遺物写真撮影は、楠本真紀子、池田洋仁が行なった。
- 6 本書で扱った遺物のなかには、平成元年度に浅羽町教育委員会が行なった試掘調査で出土した須恵器もあわせて図示した。
- 7 発掘調査資料はすべて(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所が保管している。
- 8 本書の編集は(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所があたった。
- 9 本書では、遺跡土地について現地指導を頂いた加藤芳朗先生及び須恵器の胎土分析について三辻利一先生に玉稿を頂き、特論として掲載した。また、柱根の樹種同定は山内文氏にお願ひし、表7にまとめた。
- 10 発掘調査及び報告書の作成・執筆にあたっては、次の方々から御教示や御協力を賜った。特に浅羽町教育委員会には、大変なお世話をいただいた。記して厚くお礼申しあげる。
加藤芳朗 寒川旭 柴田稔 松井一明 向坂鋼二 山本義孝 山中敏史 吉岡伸夫 浅羽町教育委員会

目次

巻頭カラー
序
例言
目次

第Ⅰ章	位置と環境	1
第1節	位置と地理的環境	1
第2節	歴史的環境	1
第Ⅱ章	調査の概要	5
第1節	調査の経過	5
第2節	調査の方法	7
第3節	基本層序	7
第4節	3・4区発見の噴砂について	11
第Ⅲ章	各時代の遺構	12
第1節	古墳時代の遺構	12
A	1・2区	12
B	3・4区	23
C	5・6区	39
第2節	奈良時代の遺構	48
第3節	平安時代末～鎌倉時代の遺構	56
A	1・2区	57
B	3・4区	59
C	5・6区	64
第Ⅳ章	出土遺物	77
第1節	土器	77
A	古墳時代の土器	78
B	奈良時代の土器	112
C	平安時代末～鎌倉時代の土器	117
D	墨書土器について	146
第2節	土製品	148
第3節	木製品	150
第4節	石製品	154
第5節	金属製品	156
第Ⅴ章	まとめ	159
第1節	山名厨をめぐって	160
第2節	遠江地域からみた奈良時代の新堀遺跡	161
特論	165
1	浅羽町新堀遺跡の地学的背景	165
2	新堀遺跡出土須恵器の蛍光X線分析	176
	加藤芳朗	
	三辻利一	

挿図目次

図1	遺跡位置図及び周辺遺跡分布図	2
図2	グリット配置図	8
図3	新堀遺跡2・4・5区土層模式図	9
図4	3・4区噴砂分布図	11
図5	1・2区遺構全体図	13
図6	1・2区古墳時代土坑・井戸実測図	15
図7	2区古墳時代住居跡 SB201 実測図	16
図8	2区古墳時代住居跡 SB202・203 実測図	17
図9	2区古墳時代住居跡 SB204 実測図	18
図10	1区古墳時代1号周溝墓実測図	19
図11	2区1号周溝墓実測図	20
図12	2区2号周溝墓実測図	21
図13	2区3号周溝墓実測図	22
図14	3・4区遺構全体図	25, 26
図15	3・4区古墳時代遺構全体図	27
図16	3・4区古墳時代土坑実測図	28
図17	4区古墳時代土坑実測図Ⅰ	29
図18	4区古墳時代土坑実測図Ⅱ (SP427)	30
図19	4区古墳時代土坑実測図Ⅲ	31
図20	4区古墳時代土坑実測図Ⅳ	32
図21	4区古墳時代土坑実測図Ⅴ	33
図22	4区古墳時代井戸実測図	34
図23	4区古墳時代住居跡 SB401 実測図	35
図24	4区古墳時代住居跡 SB402・406 実測図	36
図25	4区古墳時代住居跡 SB405 実測図	37, 38
図26	5・6区遺構全体図	41
図27	5区古墳時代溝 SD520 土器出土状態実測図	42
図28	5区古墳時代土坑・井戸実測図	43
図29	5区古墳時代住居跡 SB501 実測図	44
図30	6区古墳時代住居跡 SB601 実測図	44
図31	3・4区奈良時代遺構全体図	49
図32	3区奈良時代溝 SD305 土器出土状態実測図	51
図33	4区奈良時代掘立柱建物跡 SH401・402 実測図	52
図34	4区奈良時代掘立柱建物跡 SH403・404 実測図	53
図35	4区奈良時代掘立柱建物跡 SH405 実測図	54
図36	4区奈良時代掘立柱建物跡 SH406 実測図	54
図37	1・2区平安時代末～鎌倉時代土坑・井戸実測図	58
図38	3・4区平安時代末～鎌倉時代遺構全体図	61
図39	3区平安時代末～鎌倉時代土坑実測図	62

図40	4区平安時代末～鎌倉時代土坑実測図	63
図41	5・6区平安時代末～鎌倉時代遺構全体図	65
図42	5区平安時代末～鎌倉時代土坑・井戸実測図	66
図43	5区平安時代末～鎌倉時代掘立柱建物跡 SH501～503 実測図	67
図44	5区平安時代末～鎌倉時代掘立柱建物跡 SH504 実測図	68
図45	5区平安時代末～鎌倉時代掘立柱建物跡 SH505・506 実測図	69
図46	5区近世墓 SF503 実測図	71
図47	1・2区古墳時代溝・土坑出土土器実測図	79
図48	1区井戸 SE101 出土土器実測図	79
図49	2区古墳時代住居跡出土土器実測図	80
図50	2区古墳時代方形周溝墓出土土器実測図	81
図51	4区古墳時代溝 SD448 出土土器実測図	82
図52	3・4区古墳時代土坑出土土器実測図	83
図53	4区古墳時代土坑出土土器実測図Ⅰ	84
図54	4区古墳時代土坑出土土器実測図Ⅱ	85
図55	4区古墳時代土坑(SF427)出土土器実測図Ⅲ	86
図56	4区古墳時代土坑(SF427)出土土器実測図Ⅳ	87
図57	4区古墳時代土坑(SF427)出土土器実測図Ⅴ	88
図58	4区古墳時代土坑(SF429)出土土器実測図Ⅵ	89
図59	4区古墳時代土坑(SF431)出土土器実測図Ⅶ	90
図60	4区古墳時代土坑出土土器実測図Ⅷ	91
図61	4区古墳時代土坑(SF464・465)出土土器実測図Ⅸ	92
図62	4区古墳時代土坑(SF464・465)出土土器実測図Ⅹ	93
図63	4区古墳時代井戸出土土器実測図	94
図64	4区古墳時代住居跡出土土器実測図	94
図65	4区古墳時代ピット出土土器実測図	95
図66	4区古墳時代凹地出土土器実測図	95
図67	4区出土土器拓影図	96
図68	5区古墳時代溝(SD520)出土土器実測図	97
図69	5区古墳時代土坑出土土器実測図	97
図70	5区古墳時代井戸(SE516)出土土器実測図	98
図71	5・6区古墳時代住居跡出土土器実測図	98
図72	3区奈良時代溝(SD305)出土土器実測図Ⅰ	114
図73	3区奈良時代溝(SD305)出土土器実測図Ⅱ	115
図74	3区奈良時代溝(SD305)出土土器実測図Ⅲ	116
図75	3区奈良時代溝(SD305)出土土器実測図Ⅳ	117
図76	1区平安時代末～鎌倉時代溝(SD102)出土土器実測図	119
図77	2区平安時代末～鎌倉時代溝出土土器実測図	120
図78	2区平安時代末～鎌倉時代土坑出土土器実測図	121
図79	1区平安時代末～鎌倉時代井戸(SE102)出土土器実測図	122
図80	1区平安時代末～鎌倉時代井戸(SE103)出土土器実測図	122

図81	2区平安時代末～鎌倉時代井戸出土土器実測図	123
図82	2区ビット・遺構外出土土器実測図	124
図83	3区平安時代末～鎌倉時代溝出土土器実測図	125
図84	4区平安時代末～鎌倉時代溝出土土器実測図Ⅰ	126
図85	4区平安時代末～鎌倉時代溝（SD412）出土土器実測図Ⅱ	127
図86	4区平安時代末～鎌倉時代溝（SD412）出土土器実測図Ⅲ	128
図87	4区平安時代末～鎌倉時代溝（SD412）出土土器実測図Ⅳ	129
図88	3区平安時代末～鎌倉時代土坑出土土器実測図Ⅰ	130
図89	3区平安時代末～鎌倉時代土坑（SF315）出土土器実測図Ⅱ	131
図90	4区平安時代末～鎌倉時代土坑出土土器実測図	132
図91	4区ビット出土土器実測図	132
図92	5区平安時代末～鎌倉時代溝出土土器実測図	133
図93	6区平安時代末～鎌倉時代溝出土土器実測図	134
図94	5・6区平安時代末～鎌倉時代土坑出土土器実測図	134
図95	5・6区平安時代末～鎌倉時代井戸出土土器実測図	135
図96	5・6区ビット出土土器実測図	136
図97	2区遺構外出土土器実測図	136
図98	3・4区遺構外出土土器実測図	137
図99	5・6区遺構外出土土器実測図	138
図100	6区遺構外出土土器実測図	139
図101	土製模造品実測図	147
図102	土錘実測図	149
図103	布目瓦拓影図	149
図104	木製品実測図Ⅰ	151
図105	木製品実測図Ⅱ	152
図106	石製品実測図	155
図107	金属製品実測図	156
図108	新堀遺跡奈良時代須恵器の分類	157
図109	新堀遺跡古墳時代土器の分類	158
図110	浅羽平野の復元	162

特論 1

図 1	遺跡周辺地形分類図	165
図 2	新堀地区砂礫層上面の海拔等高線	166
図 3	4区南壁セクション模式図	167
図 4	3・4区におけるグライ層頂面の海拔等高線、建物跡、砂層出現範囲	168
図 5	3・4区3層上面の噴砂脈の状況	169
写真 1	3区東南壁の噴砂脈	170
写真 2	4区東端の噴砂脈	170

特論 2

図 1 湖西窯群出土須恵器の Rb-Sr 分布図	176
図 2 清ヶ谷窯群出土須恵器の Rb-Sr 分布図	176
図 3 清水谷群と湖西第 2 群の相反識別	177
図 4 新堀遺跡出土須恵器の Rb-Sr 分布図	178

挿表目次

表 1 周辺遺跡地名表	3
表 2 新堀遺跡古墳時代遺構一覧表	45~47
表 3 新堀遺跡奈良時代遺構一覧表	55
表 4 新堀遺跡平安時代末~鎌倉時代遺構一覧表	72~76
表 5 新堀遺跡出土古墳時代土器観察表	99~111
表 6 新堀遺跡奈良時代~鎌倉時代土器観察表	140~145
表 7 新堀遺跡出土柱根樹種同定一覧表	153

特論 1

表 1 新堀遺跡と周辺の環境変遷	172
------------------------	-----

特論 2

表 1 新堀遺跡出土須恵器の分析値	178
-------------------------	-----

図版目次

巻頭カラー 古墳時代土坑 SF427 出土土器
「山名厨」墨書須恵器
奈良時代溝 SD305 出土土器

図版 1	遺跡周辺の環境 (空中写真、西から)
図版 2	5・6区全景、南から
図版 3	1 1・2区遺構全景、北から 2 3・4区古墳時代遺構全景、北から
図版 4	1 5区古墳時代溝 SD520 土器出土状態 2 5区古墳時代溝 SD520 土器出土状態 3 3区古墳時代土坑 SF312 土器出土状態
図版 5	1 4区古墳時代土坑 2 4区古墳時代土坑 SF411 土層 3 4区古墳時代土坑 SF411 井戸枠
図版 6	1 4区古墳時代土坑 SF419 土器出土状態 2 4区古墳時代土坑 SF420 上層の土器 3 4区古墳時代土坑 SF421

- 図版 7 1 4区古墳時代土坑 SF422 土器出土状態
2 4区古墳時代土坑 SF422 焼土検出状況
3 4区古墳時代土坑 SF423 土層
- 図版 8 1 4区古墳時代土坑 SF427 土器出土状態
2 4区古墳時代土坑 SF427 上層査検出状況
3 4区古墳時代土坑 SF427 下層土器出土状態
- 図版 9 1 4区古墳時代土坑 SF429 上層土器出土状態
2 4区古墳時代土坑 SF431 土器出土状態
3 4区古墳時代土坑群
- 図版10 1 1区古墳時代井戸 SE101 土器出土状態
2 4区古墳時代井戸 SE403 土器出土状態
3 5区古墳時代井戸 SE516 土器出土状態
- 図版11 1 1・2区古墳時代竪穴住居跡
2 2区古墳時代竪穴住居跡 SB201
3 2区古墳時代竪穴住居跡 SB203
- 図版12 1 2区古墳時代竪穴住居跡 SB202
2 2区古墳時代竪穴住居跡 SB204
3 2区古墳時代竪穴住居跡 SB204 土器出土状態
- 図版13 4区古墳時代竪穴住居跡
- 図版14 1 4区古墳時代竪穴住居跡 SB402・405
2 4区古墳時代竪穴住居跡 SB402 土器出土状態
3 4区古墳時代竪穴住居跡 SB405 の炉跡
4 5区古墳時代竪穴住居跡 SB501
- 図版15 1 1区古墳時代1号周溝墓
2 2区古墳時代3号周溝墓
3 2区古墳時代3号周溝墓
- 図版16 3・4区奈良・平安時代～鎌倉時代遺構全景
- 図版17 3区奈良時代溝 SD305
- 図版18 1 3区奈良時代溝 SD305 土器出土状態
2 3区奈良時代溝 SD305 土器出土状態
3 3区奈良時代溝 SD305 土器出土状態
- 図版19 1 4区奈良時代掘立柱建物群、西から
2 4区奈良時代掘立柱建物 SH401
3 4区奈良時代掘立柱建物 SH401 柱穴
4 4区奈良時代掘立柱建物 SH401 柱穴
5 4区奈良時代掘立柱建物 SH401 柱穴
6 4区奈良時代掘立柱建物 SH401 柱穴
- 図版20 1 4区奈良時代掘立柱建物 SH402
2 4区奈良時代掘立柱建物 SH403・404
3 4区奈良時代掘立柱建物 SH405
- 図版21 5・6区平安時代末～鎌倉時代遺構全景、南から

- 図版22 1 3区平安時代末～鎌倉時代溝 SD301、北から
2 3区平安時代末～鎌倉時代溝
- 図版23 1 4区平安時代末～鎌倉時代溝 SD411・412
2 4区平安時代末～鎌倉時代溝 SD412 土器出土状態
- 図版24 1 5区平安時代末～鎌倉時代溝 SD501
2 5区平安時代末～鎌倉時代溝 SD518
3 6区平安時代末～鎌倉時代溝 SD608
- 図版25 3区平安時代末～鎌倉時代土坑群、東から
- 図版26 1 3区平安時代末～鎌倉時代土坑群、北から
2 3区平安時代末～鎌倉時代土坑 SF303 土層
3 3区平安時代末～鎌倉時代土坑 SF310 土器出土状態
- 図版27 1 1区鎌倉時代井戸 SE102
2 2区鎌倉時代井戸 SE203 土層
3 4区井戸 SE404 枠検出状況
- 図版28 1 5区鎌倉時代井戸 SE503
2 5区平安時代末井戸 SE506 土器出土状態
3 5区平安時代末井戸 SE509
- 図版29 1 5区近世墓 SF503
2 6区近世土坑 SF601 土器出土状態
- 図版30 1 5区平安時代末～鎌倉時代掘立柱建物 SH502
2 5区掘立柱建物 SH503
3 5区掘立柱建物 SH504
4 5区掘立柱建物 SH505
- 図版31 1・2・4区古墳時代遺構出土土器
- 図版32 4区古墳時代土坑出土土器
- 図版33 4区古墳時代土坑出土土器
- 図版34 4区古墳時代土坑出土土器
- 図版35 4区古墳時代土坑出土土器
- 図版36 4・5区古墳時代遺構出土土器
- 図版37 1・5区古墳時代遺構出土土器
- 図版38 1・2区平安時代～鎌倉時代遺構出土土器
- 図版39 1・2区平安時代～鎌倉時代遺構出土土器
- 図版40 1・2・3区奈良時代遺構出土土器
- 図版41 3区奈良時代溝 SD305 出土土器
- 図版42 3区奈良時代溝 SD305 出土土器
- 図版43 3区奈良時代溝 SD305 と平安時代末～鎌倉時代溝出土土器
- 図版44 3区奈良時代溝 SD305 出土土器
- 図版45 4区鎌倉時代溝出土土器と SD412 土器集合写真
- 図版46 4区鎌倉時代溝 SD412 出土土器
- 図版47 4区平安時代末～鎌倉時代溝・土坑出土土器
- 図版48 3・4区平安時代末～鎌倉時代土坑出土土器

- 図版49 5・6区平安時代末～鎌倉時代溝・土坑出土土器
図版50 2・5・6区井戸・ピット・遺構外出土土器
図版51 3・4・6区遺構外出土土器
図版52 各区出土平安時代末～鎌倉時代墨書土器
図版53 各区出土平安時代末～鎌倉時代墨書土器
図版54 各区出土青白磁・土製品・金属製品
図版55 3・4区出土布目瓦・獸足・手捏土器・木製品
図版56 各区出土木製品・石製品

第I章 位置と環境

第1節 位置と地理的環境

新堀遺跡は静岡県磐田郡浅羽町新堀に所在している。ここは静岡県西部、遠江地域の海岸に面した平野部の東端にあたり、小笠丘陵が目前に迫っている地域である。(図1)

遺跡は、現在では河川改修により太田川と合流するが、それ以前の旧原野谷川の形成した自然堤防上に立地している。この自然堤防は浅羽町の平野部中央の南北方向に位置し、北から踏井・馬場・浅名・豊住・新堀の集落が立地し、新堀遺跡はこれらの自然堤防の南端にあたる。ここから東は小笠郡大須賀町から遠州灘に注ぐ弁財天川の流域となり、両者の間にかけて大きなラグーンが存在したことが最近指摘されており、近世の絵図にもその名残の湖沼が表現されている。この地域は現在でも標高が低く、大雨の時には冠水する地域である。

浅羽町の平野部には、新堀遺跡の立地する中央部の自然堤防の他に、西寄りに太田川の形成した自然堤防もあり、八幡・長溝・浅岡等の集落が立地し、その旧流路は現在の地形図の水路等からも推定することができる。

以上述べたのは中小河川の営みによる平野部の形成であるが、一方この地域は海的作用によって形成された東西の砂堆列があり、それは大きく三列の砂堆列からなっている。最奥のそれは、大須賀町にいたる旧道の通る、初越・松原・梅山・松山等の集落を乗せ、中間の現在は現在国道150線が走り、一番手前は現在の海岸を形成する。

このように浅羽地域の沖積平野は、河川と海的作用により現在の景観が形成されており、その沖積化の特徴は、中小河川の形成する扇状地から海岸線までが長く、そのため土砂の運搬能力が極度に定価すること、しかし一方では暴れる大河として有名な天竜川の土砂で、海岸の砂堆列が活発に形成されていることにある。この結果、この地域では砂堆列が河川を塞ぎ止める結果となり、各地に湖沼や後背湿地・ラグーンを形成していった。まさにこの地域の平野は、河と海から骨格となる微高地が先に作られ、その後長い時間のなかで周囲の低地が陸地化したもので、これが現在でも広い豊かな耕地が広がる当地域の平野の生い立ちである。

第2節 歴史的環境

図1に周辺遺跡の分布図を掲げた。ここでは浅羽町の平野部にある遺跡を中心にしてこの地域の遺跡の在り方から新堀遺跡の歴史的環境を考えてみる。

遺跡の分布は、第1節で述べた中央部の自然堤防上と最奥の砂堆列、そして小笠丘陵にみられるが、浅羽町による調査の蓄積のなかで、埋没した微高地に乗る遺跡も確認されている。(柴田 1984)そして、地形の形成が後出であろうか、従来遺跡の存在が知られていなかった西の自然堤防上と、中間の砂堆列にもその存在が知られるようになった。これらのなかには確認された遺跡もあるが、その分布はきわめて希薄である。

この地域の平野部への人々の進出はいつ頃か。現状では、生活の跡を示す明確な遺構の発見はないが最奥の砂堆列の松山地区で縄文土器の出土が報告され、すでに縄文中期には最奥の砂堆と河川の自然堤防は形成されていたという。(柴田 1987)

弥生時代中期には、活発な人々の生活の跡が確認されるようになる。浅羽町の北端、袋井市をも含む団子塚遺跡(柴田 1992、永井 1992)では中期中葉～後半、嶺田～白式の土器を伴う大規模な方形



図1 遺跡位置図及び周辺遺跡分布図

No	遺跡名	時代	種別	遺構・遺物
1	新堀遺跡	古墳、奈良一鎌倉	集落	住居跡、土坑、溝、堀立柱建物
2	十二所遺跡	弥生、室町	散布地	土器、陶器
3	真名地遺跡	弥生、古墳	集落	弥生土器、住宅跡
4	古新田遺跡	古墳	散布地	集落跡、須恵器、土師器
5	真名地B古墳群	古墳	古墳	円墳、前方後円墳
6	五ヶ山古墳群	古墳	古墳	古墳
7	高道遺跡	弥生、室町	散布地	弥生土器、陶器
8	小林遺跡	弥生、室町	散布地	弥生土器、陶器
9	若宮遺跡	弥生、室町	散布地	弥生土器、陶器
10	馬伏塚城	戦国-桃山	城館	城館
11	麩黒院遺跡	中世、近世	祭祀	一石一字經、経筒
12	釜下遺跡	古墳、室町	散布地	土師器、陶器
13	常楽寺遺跡	弥生、室町	散布地	弥生土器、石蔵
14	居廻遺跡	弥生、室町	散布地	弥生土器
15	石原遺跡	奈良、室町	散布地	土師器、陶器
16	谷海戸遺跡	古墳	散布地	須恵器
17	井戸ヶ谷古墳群	古墳	古墳	円墳、須恵器、刀子
18	大畑遺跡	縄文古墳、中世、近世	集落	縄文土器、石蔵、中近世陶器
19	稲荷遺跡	弥生、古墳	集落	土師、石蔵、木器
20	岡崎城(八幡小古墳)	中世	城館	土器、空堀、土橋
21	五郎作遺跡	弥生、古墳	散布地	
22	大島遺跡	古墳	散布地	
23	大畑Ⅱ遺跡	縄文(中)、中世、近世	散布地	縄文土器、石器、中近世陶器
24	相馬遺跡	平安-室町	散布地	墨書土器、陶器
25	地蔵山古墳群	古墳	古墳	埴輪、円墳、須恵器
26	権現山遺跡	弥生、室町	集・墓	埴輪、陶器、井戸、墳墓、柱穴群
27	法音庵遺跡	古墳	古墳	円墳
28	馬場遺跡	古墳、室町	集落	柱穴群、土壇、溝
29	官西遺跡	縄文、室町	散、墓	威骨器、陶器
30	西立遺跡	鎌倉-室町	集落	井戸、陶器、青磁
31	野島遺跡	縄文、室町	散布地	土器、陶器
32	松山遺跡	弥生、室町	集、墓	土師、陶器、石斧
33	宮南遺跡	鎌倉-室町	散布地	陶器
34	三輪Ⅱ遺跡	古墳	散布地	
35	三輪古墳群	古墳	古墳	前方後円墳
36	新門坂古窯群	古墳	古窯	須恵器、須恵質埴輪

表1 周辺遺跡地名表

周溝墓群をもつ墓城が形成され、また浅羽町の調査した地区では方形周溝墓群と並行する時期でないが白岩式の新しい段階に開始される集落が発見されている。これらの遺跡は浅羽町の北端の丘陵上に営まれ、生産の母体となる地域は袋井市の南部の平野部と考えられ、海岸寄りの平野部でのこの時期の遺跡分布は薄い。

新堀遺跡が最初の繁栄期を迎えた古墳時代前期には、最奥の砂堆列まで遺跡が拡大し現地形の大半は人々の生活領域に組込まれたようである。中央部の自然堤防には北から十二所・小林・若宮・常楽寺・居廻・新堀・青木遺跡が立地し、最奥の砂堆列にも、権現山・松山といった遺跡が認められる。

新堀遺跡の南端、今回の調査区である5・6区のほど近い青木遺跡では土坑・溝・住居跡が発見され、土坑のなかには意図的に置かれた状態の土器群もあり注目される。この青木遺跡は一部の狭い範囲での調査が行なわれているのみであり、また同じ青木遺跡と称している東側の県道の調査(山本 1991)でも南北に長い範囲にわたって、この時期をも含む遺構・遺物が出土している。従ってこの新堀・青木遺跡の周辺は弥生時代後期から古墳時代前期にかけて、海岸に面した平野部に営まれた拠点的な集落といえよう。

この後、この地域に展開した古墳時代の社会は、小笠丘陵に5世紀の豪族居館跡である古新田遺跡(柴田 1992)を生じ、また輸入品といわれる金環を出土した五ヶ山B-1号墳(山本 1992)の首長クラスの支配者を出現させている。また砂堆列に立地する埴輪列を伴う地蔵山古墳(柴田 1987)の発見も、海岸に面した地域の古墳時代を考える上で重要な位置を占めている。

この周辺の古墳群はいくつか確認されているが、同じ地形の続く袋井・掛川市域程には集落も含めて明確になっていない。文献にみえる遠江地域の三国造（遠淡海・久努・素質）のうち久努・素質国造の本貫地は袋井・掛川市域に比定されており、この背景からも古墳時代中～後期にあっては社会的な生産力が弱く、後期古墳の在り方もそれを反映するものであろう。しかし、海岸に面した浅羽町の平野部の地域が国造級の首長を持たなかったとはいえ、一方ではこの地域の古墳時代の社会も、先の豪族居館である古新田遺跡・五ヶ山 B-1号墳の存在が示すような地域支配構造が確立していると推定される。いずれにしても、今後の調査等による解明がまたれる。

主として8世紀からのこの地域は遠江国においても、磐田市二之宮にその所在が確定的である遠江国府を中心とする律令的な地域支配体制を整えるうえで重要な位置を占めるようになる。小笠丘陵に営まれた清ヶ谷窯は遠江国の官窯として、国分寺瓦をはじめ各種の須恵器を生産し、またその後灰釉陶器の生産に転換され、湖西・浜北の窯跡群と並んで窯業製品生産センターの観を呈している。この清ヶ谷窯の製品がいかなる供給ルートによってか知る由もないが、遠江地域の官衙を中心とした消費地に運ばれたことは想像に難くない。

新堀遺跡の南で程近い、浅羽町権現山遺跡（柴田 1987）では、奈良時代の蔵骨器と土坑が発見されており、律令官人の墓の可能性も大きく注目される遺跡である。また同じ砂埋りに立地する宮西遺跡からも蔵骨器が二点発見されているという。

平安～鎌倉時代では、十二所・高道・小林・居廻・新堀等の自然堤防に立地する遺跡があり、その実態は不明確ではあるが、自然堤防の北、つけ根にあたる十二所遺跡（柴田 1989）は弥生～中世のかなり広範囲にわたる複合遺跡であるが、奈良～鎌倉時代が主体を占め、特に遺跡のなかにある心宗院を中心とした範囲は中世の居館の可能性が高いとの指摘がされている。また新堀遺跡の東側の青木遺跡からも多量の中国産青白磁が出土し遺跡の性格も注意を要する。そして浅羽町内には年代は明確ではないが、土塁の一部が最近まで残されていた「浅羽荘司館」と呼称される所もある。

文献には勸学院領浅羽荘の名があり、その成立はすくなくとも平安末期までは遡るといわれている。（湯之上 1983）袋井市史では、岡郷・芝村の名がみえることから浅羽町北部地域を荘域に比定している。この浅羽荘は勸学院領、15国32荘のなかでは最大の面積を有し、百六十九町三段六十歩である。当時の耕作可能な面積は推定のしようもないが、この数字を単純に実質の面積と理解するならば、現在の浅羽町の南まで含めたかなりの範囲が荘域となる。（註1）また、浅羽町北部の中心地である諸井は山名荘にその名があることから、浅羽荘の北限は現在の芝あたりではないかと思われる。

遠江地域は荘園のなかでも、伊勢神宮の御野が卓越しており、文献にも多く登場する蒲田御野は磐田市にあり、この平野の末端、舌状台地と接する位置で、かつ原野谷川を渡ると御野という地名も現存している。

「古新田遺跡Ⅰ—遺構編一」では、浅羽町南部と大須賀町の間に存在したラグーンとそれに注ぐ【宝水川】に関連させ、前者を太平洋に面した天然の良港と推定し、後者の流域に立地する古新田遺跡の先進性を指摘している。またこのラグーンの西岸にそって立地する青木・新堀遺跡の畿内との関連をも論じている。このように地理的な環境の推移のなかに歴史的事柄を当てはめてゆくと、古墳時代、4・5世紀の状況のみならず、「山名厨」の奈良時代、多量の山茶碗を伴う平安末～鎌倉時代の遺跡の理解も主として水上交通との関わりで問う視点が必要とされる。それは直接、遺構・遺物に反映されるものでなく、多くの資料の蓄積・遺跡の分析、時代ごとの自然環境変化の検討を必要とする。太平洋に面した地域の歴史のなかで、海及び平野部の中小河川の果たした役割を考える時、広域に流通する物資は海から川を経て消費地というルートと、平野単位の狭い流通圏なら河川を媒介にしたルート等の存在を積極的に地域史のなかに位置付ける必要を痛感する。

第Ⅱ章 調査の概要

第1節 調査の経過

新堀遺跡の調査は、平成元年の試掘調査から平成4年度の本報告書の刊行まで4年間の事業であった。以下に調査に至る経過からその概略をまとめてみたい。

調査に至る経過

新堀遺跡発掘調査は静岡県住宅供給公社の新堀団地造成事業に伴うもので、新堀の集落の東西と北側が対象となった。

平成元年度、浅羽町教育委員会は県文化課の依頼を受けこの範囲の試掘調査を行なった。試掘調査は新堀集落を囲むように北からA地点（浅羽町給食センターの前、本調査の1・2区）・C地点（本調査の3・4区）・B地点・D地点（本調査の5・6区）の4地点を設定して行なわれた。このうちA地点では、1988年の給食センター建設に伴う調査において遺跡が南にのびることが確認されており、またB地点は自然堤防に乗る現県道と新堀集落の間に位置し、開発に伴う地域は埋没河川であることから、試掘はC・D地点を対象に行なわれた。

試掘坑は、C地点12、D地点4箇所、その間にも3箇所、計19箇所設定され調査が行なわれた。その結果C地点では、溝・井戸状遺構を検出し、遺物では古墳時代前期、奈良時代と鎌倉時代の土器が出土した。D地点では、遺構は明確に確認されなかったが、土師器・須恵器を出土した。中間の3箇所の試掘坑では遺構・遺物ともに確認されなかった。この結果をふまえて、本調査の範囲が確定された。なお人為的なものでないが、噴砂もこの試掘で何ヶ所か確認されている。

本調査は、県教委文化課の指導により（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所が行なうこととなり、調査計画を作成するため、1990年2月8日、浅羽町教委との間に試掘調査の内容を検討する打ち合わせが行なわれた。その後、調査計画の検討に入り同年3月、新堀地区の調査にかかわる地元への事前説明会を行なった。

こうして、現地調査1年半、資料整理・報告事業も含めた、平成2年度～4年度の3ケ年にわたる全体計画が作成された。

なお、D地点とC・D区の間地点の試掘区の土層からプラントオパールが検出され、特にD地点で高い数値が得られたが、調査の結果水田遺構及びそれに伴う遺物は確認されなかった。

調査の経過

平成2年度

平成2年度、県住宅供給公社との委託契約が4月1日に締結された。発掘調査は造成工事計画との関連から、南の5・6区から調査を開始し、10月から北の1・2区に移行した。11月上旬には6区調査の終了に伴い、北地区への作業員棟の移転、駐車場造成をおこなった。

年が変わり1991年にはいと、北の1・2区の調査と並行して、3・4区の表土除去を開始し遺構検出作業を展開した。この段階で調査は1～4区までの面積を対象とし、最大規模に拡大した。これは春の農作業による作業員減が調査に影響することが予想されるため、あえて調査区を拡大したものである。その後、調査は2月上旬に1・2区を終了し、2・3月以降は3・4区の調査のみとなった。こうして平成2年度の調査は当初の計画にそって終了することができた。

平成2年度、5区の調査において、表土除去の結果遺構が北にもひろがり、当初計画の面積より拡大したことから、北地区の表土除去に先立って、5本のトレンチを設定し遺跡の広がりを再確認したが、

ここはほぼ当初計画と同じ範囲であった。

調査のなかでの注目すべき成果として、5区で鎌倉時代の屋敷地の区画を示す溝の確認、1・2区での古墳時代前期の方形周溝墓と竪穴住居跡及び完形の土器が埋設された祭祀土坑の発見があった。しかし特筆すべきは、3区の溝 SD305 から出土した「山名厨」と書かれた須恵器墨書土器の発見であった。この発見を契機として新堀遺跡に対する評価が高められたといえる。

このような成果をおさめて平成2年度の調査は終了したが、当研究所の公開・普及活動の一環として一般を対象とした現地調査説明会を3月16日(土)に開催した。これとあわせて事前に新聞各紙に対して資料提供を行い、翌日「山名厨」を中心とした新堀遺跡紹介の記事が新聞紙面を飾った。しかし一方では、この現地説明会において見学者が足を骨折するという事故が発生し、改めて安全管理の問題を問いなおす結果となった。調査の経過のなかでこれを明記し今後の戒めとしたい。

平成3年度

現地調査は3・4区で行なったが、主体は4区の調査であった。前年度の「山名厨」墨書土器の出土により、この遺跡が遠江国山名郡衛の可能性ももてたことから、特に奈良時代と思われる掘立柱建物を主とした遺構の検出に主力を注いだ。

遺構の検出面は同一面であるが、本遺跡も含めてこの平野部の調査では遺構覆土の認定が困難であり、それは僅かづつ掘り下げる過程で新たな遺構が発見されるという繰り返りであった。従って調査が遅れ気味であったこと、最終段階の10月に長雨に見舞われたため調査の終了は11月になっていた。しかし、当初計画の調査工程の範囲で終了することができた。

また昨年度調査のなかで確認されていた噴砂は平成3年度の調査でも検出され、遺構との切りあい等からその年代の根拠を求めたが、良好な例はみられなかった。調査した面積は当初計画では全体で12,440㎡であったが、最終的には15,753㎡を調査した。

現地調査と並行して各種の関連調査・分析も行なった。新堀遺跡の立地について自然堤防の形成の観点から静岡大学名誉教授・加藤芳朗先生のボーリング調査、須恵器の胎土分析からの産地同定を奈良教育大学・三辻利一先生に依頼し、通産省工業技術院地質調査所・寒川旭氏には噴砂について貴重な指導を頂いた。

現地調査終了に伴い、昨年と同様に一般対象の現地説明会を11月16日(土)に実施した。また12月8日(日)に行なわれた、静岡県教委・当研究所主催の「静岡の原像を探る」と題した遺跡調査発表会において本遺跡の成果を発表した。

現地終了後、資料整理に移行した。現地調査と並行して行なった土器水洗はすでに終了しており、注記・接合作業の一部を行なった。とりあえず遺構図の作業を先行させ、各区の全体図の作成、トレース、個々の遺構図トレース版下作成・トレース、写真図版組みを行なった。

また年の開けた1992年2月には浅羽町教委との共催により、浅羽町民会館で行なわれた奈良時代を中心とした遺跡のパネルと遺物の展示会にも参加した。

平成4年度

昨年度の資料整理作業である遺構の挿図作成・写真図版組みを継続し、本格的に遺物に関わる作業を開始した。年度前半は土器接合と遺構遺物のチェック、土器・木製品の実測を行い、後半で石製品・土製品・金属製品の実測及びこれらの版下組み・トレースと一連の作業を行なった。また報告書に掲載する遺構一覧表・土器観察表の作成も行い、年開けの1993年1月から原稿の執筆に入った。

年度最終段階で今後の活用・検索に備え、新堀遺跡の遺物を中心とした資料の収納作業を行い、年度内に予定の作業を終了した。

第2節 調査の方法

ここでは現地調査について述べる。

調査区は南北約550m、東西250mの間に各々離れており、北東に1・2区、北に3・4区、南西に5・6区が所在している。最初の問題点としてグリットをどう設定するかがあった。この範囲には小字として北ハサマ・新堀・屋敷通・黒清があり、従来の遺跡名の付し方から云うと、遺跡としては別々の名称で扱うところであるが、同一の自然堤防上に立地する遺跡群であり、どの地点も緊密な関連があるという点から、現在地名として使われている新堀の名を用いることになった。このことを受て、各々の調査区の位置関係の把握、今後の調査の中で活用される最良の方法として国土方眼を元にしたグリットを設定することになった。レベルの標高も国土方眼設定の業者委託の際、各々の基準杭に標高値の算出も含め、調査にあたってはこのレベルを活用した。

また試掘の結果及び浅羽町の調査経験から、遺構検出面は一面であること、遺構の検出が困難であることの指摘を受けたことから、しばしば現地で土層について教示を受けた。従って、時代ごとの調査でなく、少しづつ下げてゆくなかで検出された遺構を順番に調査することになった。遺構のなかで特にピットは時期の認定が困難であり、かつ遺構の重複もあり、全体写真はすべて完掘状態のものとならざるを得なかった。

図は縮尺1/20を原則とし、必要に応じて土器出土状態などは1/10で実測した。この他に遺構の全体の配置を検討するための1/200のような模式図を作成した。実測にあたっては、写真測量とかの方法は導入せず、すべて手作業で行なった。

写真は、白黒6×7版を主とし、35mmはメモ的な用途に用い、この他遺構・遺物のみならず、調査全般の記録として35mmカラーを大いに活用した。全体写真撮影は調査区が広いためローリングタワーは使用せず、5・6区と1・2区ではラジコンヘリでの撮影を委託し、3・4区ではヘリコプターからの撮影と、最高27mまで上昇するハイライダーを用いた。

現地と並行した内業では、雨の日に図面整理、常時の作業として遺物台帳登録・遺物の水洗・注記写真整理と若干の事務的な作業を行なった。

第3節 基本層序(図3)

新堀遺跡は、原野谷川の形成した自然堤防の縁辺に立地しており、調査区は、4区と5区では約300m離れているが、基本的な土層堆積は同一といえる。試掘調査で示された遺跡の範囲がほぼ遺構の広がりであり、かつ微地形からいえば自然堤防と湿地帯との境といえる。この状況は1・2区と5・6区の西側と、3・4区の東側に現われているが、埋没している旧河川の流路から推定して、前者は河川の攻撃斜面であり、後者は堆積が盛んに行なわれる緩斜面である。従って、前者は土層の区分が比較的明確で、基盤となるⅢ層に傾斜をもつが、逆に後者ではⅢ層でさえ微妙に異なり、基盤層の傾斜も140mという長い4区南壁土層では水平に近い堆積をしている。

基本層序のⅠ層は表土・6区東半をのぞいて水田の耕作土、Ⅲ層・遺構検出面・灰褐色シルト層で酸化鉄が発達し、下部にマンガンが少量形成され、下部になる程還元状態が強くなっている。当初Ⅱ層と呼称したのは5区であり、その後の各地区の調査のなかで、これは自然堤防を形成する土層でなく、その後の河川堆積物と考え、各調査区により異なる土層のため基本層序から除外した。従って他の地区ではⅡ層という呼称は用いず、Ⅰ・Ⅲ層以外はそれぞれに土層名を付した。



図2 グリット配置図

2 区南壁



4 区南壁

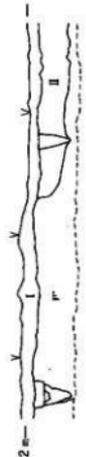


←→ 土層実測不可能

4 区南壁



5 区南壁



- I 水田耕土
- II 暗灰褐色粘土
- III 灰褐色シルト



図3 新堀遺跡2・4・5区土層模式図

各区の標高値はおおよそ、北西の4区で2.2m、北東の2区は1.8m、南の5区では2m付近であった。4区は現在でも集落の縁辺にあり標高が高く、攻撃斜面である2区は水田・畑にするため削平され、5区も以前の区画整理で東側が削られたという。しかし、地形の変化を受けてはいても、旧原野谷川の方角と流路を推定すれば、北西が高く、東と南はやや低いというのが、この周辺の微地形の在り方であろう。以下に調査区の土層を検討するが、2区の南壁で1・2区の土層を代表させ、同じく3・4区では4区の南壁、5・6区では5区の南壁をとりあげた。

基本層序が最も良好に認められる5区からみることにする。図示したのは調査区南壁の32m程の土層模式図である。土層はⅠ層・Ⅲ層と西に当初Ⅱ層と呼んだ暗灰色粘土層が認められる。先にもふれたが、水田として利用されていたことから、田床下のⅢ層には酸化鉄の集中とマンガン斑が多く認められ典型的な水田土層であった。

図3の土層図に溝SD506の位置が示されており、その手前4m東でⅢ層が下降する。この溝までが5区における平安～鎌倉時代の遺構分布範囲であり、古墳時代の遺構はそれより手前のⅢ層の下降する範囲に分布している。この5区のⅢ層は、シルト質ではあるが水分が少ない砂質土であり、他の地区と比較して検出作業は容易であった。

5・6区の調査以後、この土層認識で北地区の調査にはいったが、図示したとおりの土層堆積であり遺構検出面である、Ⅲ層は全体に粘性の強いシルト質であった。またⅢ層の上いくつかの分層が可能であり、盛土とか田床が確認された。この盛土は調査区の端が水田の畦であり、この畦を盛土として図示したことによる。従って調査対象としたのはこの下層からということになる。

北地区の全体的な様子は以上であるが、個々の地区の土層を検討してみると、4区ではⅢ層がA・Bの2層に分層された。ⅢA層は砂質の明褐色を呈し酸化が進み、ⅢB層は茶色味の強いシルト質でマンガン斑が発達するほぼ均一な土質であった。

遺構の分布とⅢ層の関係は2区では、Ⅲ層はほぼ水平であるが、西端手前6m程の位置からより粘質が強く、保水性が高く低地に移行する状況であった。このあたりが遺構の分布する境であろうと推定した。2区においては、Ⅲ層が下降しその上に河川堆積層が明確に認められた5区の状況とは異なり田床下のⅢ層のなかで、それが認められると推定したが、調査では確認できなかった。

この傾向は4区土層にも認められ、グリットの南北線であるJKの境付近でⅢB層が下降し以東ではⅢA層が連続している。また東に移行するに従い、2区と同じような傾向が認められ、水分が強く還元状態となり、MO付近では還元され青灰色を呈している。また静岡大学名誉教授の加藤芳朗先生の現地調査において、還元状態を確認する試薬を用いた結果、全長140mに及ぶ土層の中間付近から東に明確に還元状態を示す反応が認められた。

この土層と遺構分布は、ⅢB層の下降するあたり、奈良時代の遺構のみられる付近が境となり、平安～鎌倉時代の多くの遺構はそれ以東の還元状態の強い範囲に分布していることがいえる。これは5区における遺構の分布と同様、自然堤防形成後の河川堆積層を掘り込んで、平安時代～鎌倉時代の遺構が構築されていると現地調査のなかで確認した。従って、4区においては自然堤防本体のⅢ層とその後堆積した土層との区分は明確に確認できなかったが、土層観察のなかで、自然堤防上に古墳時代の遺構が分布し、周辺低地の湿地から陸地化の過程で遺構が構築される範囲も拡大していったと理解した。

この周辺のみならず、袋井市南部をも含めた沖積低地では、遺構検出面である基盤層と覆土が極めて類似していると指摘されている。これは、河川の運搬作用が弱く、海への出口を塞がれた状態で、長期間にわたって埋没していった平野の形成要因と大きな関連があるものと思われる。

第4節 3・4区発見の噴砂について

本遺跡の北地区、3・4区では地震によって生じた液状化を示す噴砂が確認された。これは、調査当初の段階から排水溝の断面で検出したもので、その後遺構検出作業に伴って、平面の分布状態が明らかになったものである。この噴砂については、加藤芳朗・寒川旭両先生の現地での教示を頂き、図を作成した。自然現象という性格から、Ⅲ章の遺構とは分離し、ここでその概略を述べることにする。

図4は、遺構検出の最終段階で作成したもので、噴砂の分布及びその幅を数字で示している。噴砂の検出レベルには高低差が認められ、特に東側は地表に近く、水田の床土を除去した段階で発見されている。噴砂は調査区全体に分布するが、大きく四列のまとまりをもち、東側に分布の集中が著しく、方向も一定の規則性があり、北東方向に走る傾向が認められる。しかし、この方向に直行する短く幅の狭い噴砂もみられ、それは中央部付近で顕著に発生している。

噴砂の幅は、大半が10cm未満であるが、大きいものでは、30cmに達している。最も狭い範囲に集中する、3区東南端のM-10グリッドでは、断面確認のトレンチを設定したところ、最大幅1.8mに達する箇所も確認された。このトレンチでは、噴砂の検出面から砂層までの深さは、約1.5mであった。

噴砂の方向は、埋没する旧河川の方向に平行するという教示を、加藤芳朗先生から頂いた。噴砂が発見された3・4区では、北と東側に埋没する河川が存在が試掘調査の段階で確認されており、その流路も推定されていた。加藤先生の指摘のとおり、噴砂と河川の方向は、ほぼ類似しているとおもわれる。

噴砂の年代については、遺構検出面が一面であること及び時代が確定する遺構との切り合い関係が把握できなかったことから、判断が不可能な状態であった。

以上、簡単ではあるが、現地での所見をふまえ噴砂についての概略を述べた。

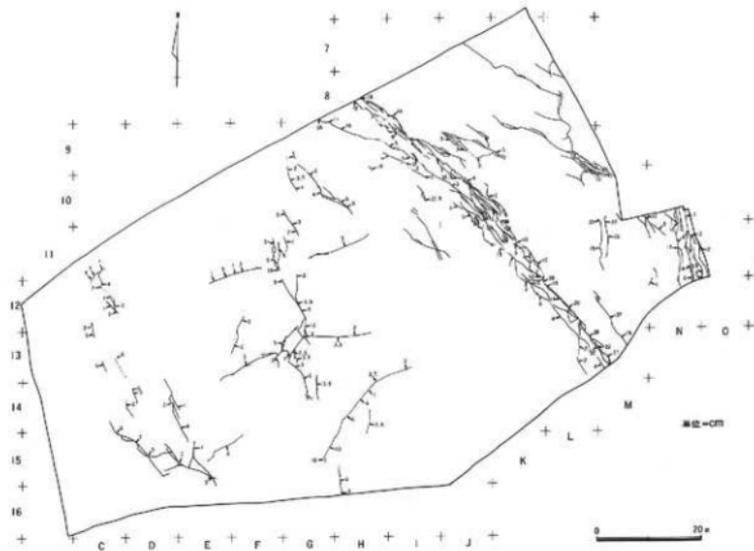


図4 3・4区噴砂分布図

第三章 各時代の遺構

新堀遺跡では遺構分布の粗密を伴うが、各区ともに共通して、古墳時代前期・平安時代～鎌倉時代の遺構が検出された。この他に4区で奈良時代、4・5区に近世の遺構が検出されている。そして単独の検出例として、4区に弥生後期菊川式の壺が出土した土坑、5区には樽を用いた近世と思われる墓がみられた。以下、時代ごとに各区の遺構を述べることにする。

記述にあたり、調査した遺構について、時期不明と近世の遺構は除き、時代ごとに一覧表を作成し、個々の遺構の形態、規模、特徴等を記し、各時代の主要な遺構については、個々の実測図を掲げた。また各区の遺構全体図で検出の状況を示すとともに、更に出土した土器の時期から判断して、時代別の全体図も作成した。従って、数の上では最も多いピットについては、出土遺物がほとんどないため、時代別の全体図からは除いた。

遺構記述は一般的に多く認められる順に、溝・土坑・井戸・住居跡・掘立柱建物・その他としてだが、最も数の多いピットについては、所属する時期が明確でないため必要に応じて説明を加える程度とした。また井戸と呼んだSEは、井戸枠・曲物等の施設を伴わず、底も湧水層に達していないが、深く掘り込まれているため便宜的に井戸として扱った。

新堀遺跡の全体的な傾向として、調査した地点は自然堤防の縁辺であり、田畑として利用されてきたことから、区画整理や造成に伴う削平を受け、形態からみて深く掘り込む一部の溝・土坑・井戸を除き、多くは検出面からごく浅い位置で底部とか床面が検出されており、かろうじて平面形態が確認される程度という遺存状況であった。従って、堅穴住居の床面のレベルから類推すれば、溝・土坑・井戸の構築時における本来の規模は、計測値よりかなり大きいといえる。

尚、図2のグリット配置図の調査区でみるように、互いに隣接する1・2、3・4、5・6区は農道・道路で区分されることから、調査工程上異なる名称を付したが、北地区の1～4区では調査後半で農道も除去したこともあって、本報告にあたっては隣接する地区を同一の調査区として扱った。

第1節 古墳時代の遺構 (表2)

古墳時代の遺構は、溝、土坑、井戸、堅穴住居跡、方形周溝墓と、4区において集落の縁辺の凹地に投棄した土器の集中箇所が認められ、鉄鎌も出土している。遺構の性格からいえば、1・2区は居住域と墓域、4区は居住域を中心とした集落の縁辺部、5・6区は集落域という様相を呈している。

これらのなかでも、特に土坑の様相は多様であり、3・4区の記述のなかで分類基準を示したが、配置と土器の多少、覆土の状態から、大きくA類・B類と2分類し、さらにA類を2種類に、B類を3種類に細分した。また祭祀との関連も指摘される土坑もあり、かつ深い大型のものを井戸としたが、厳密には祭祀土坑としての使用が推定される。しかし、これらの井戸は当初の段階から祭祀に用いるために深く掘られた施設との推定も可能であるが、周辺での類例もないことから、土坑としてでなくその形状から井戸として扱ったことをお断わりしておく。明確に井戸としないで、井戸状遺構というような意味で考えたい。

A 1・2区

本調査区では溝3条、土坑3基、井戸1基、堅穴住居跡4軒、方形周溝墓4基を調査した。先述したが、ここでの遺構の配置は、南に4軒の堅穴住居跡からなる居住域と、北に方形周溝墓4基の墓域が形

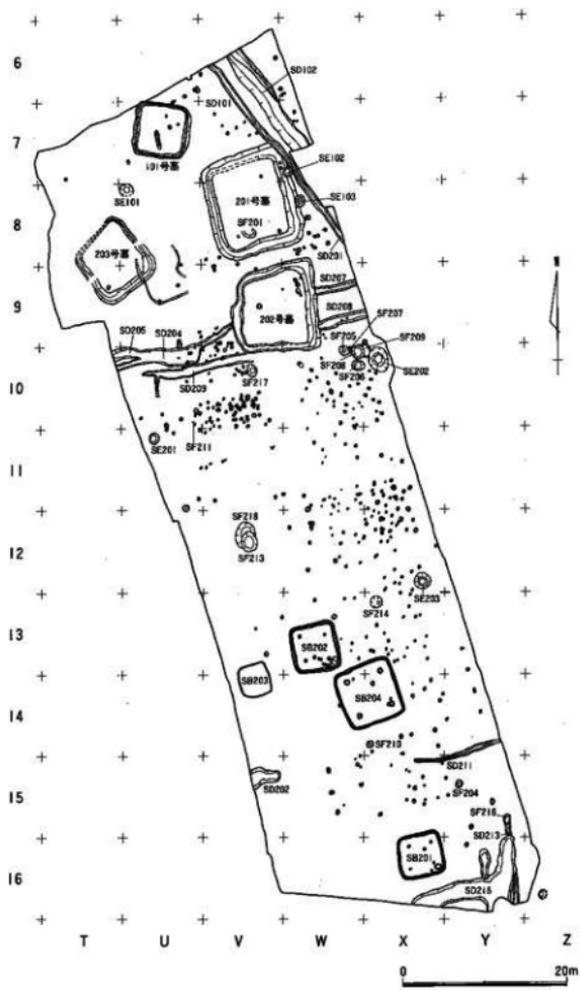


图5 1·2区遺構全体図

成されている。この間は約35m隔てられ、僅かに土坑 SF213・218 の2基が確認されたのみでその間には他の遺構はみられない。この両者は、明確な時期差が認められず、同時期に存在したことも推定される。これらの遺構は時期的に、古墳時代前期、4世紀～5世紀前半頃の段階である。また他の遺構相互にも明確な時期差はみられない。このことから、新堀遺跡においては、古墳時代前期の段階で居住域と墓域が分離されて営まれたと推定される。

なお、浅羽町教育委員会が学校給食センター建設に伴い1989年度に調査し、報告書(柴田 1991)が刊行されている北ハサマ遺跡は、この新堀遺跡1区の約30m北に位置している。調査は約600㎡の範囲であり、弥生時代後期の井戸状遺構1基、古墳時代前期の土坑1基、住居跡1軒、平安時代の溝1条等が検出されている。この調査結果を加味すれば、この地点は古墳時代前期では居住域と思われる、方形周溝墓を主体とする墓域はこの手前で終息するか、または異なる方向へ延びていると推定される。この墓域は限られた狭い範囲に分布するものと推定される。また平安時代の溝は、配置と方向、出土した土器からみて、それぞれ新堀遺跡1区のSD101とSD102に連続するものと考えられる。

個々の記述では、この北ハサマ遺跡と新堀遺跡1・2区との比較が散漫となるため、ここでその概略の比較検討を試みた。次に1・2区の古墳時代前期の遺構の概要を述べることにする。

溝

調査区南西端にSD202、2区2号周溝墓の東に接してSD207・208がある。前者は調査区外にも連続することから細長い形状を推定し溝としたものであるが、土坑のような可能性もある。後者の二本の溝は遺物をまったく出土せず、方形周溝墓の東溝に接していることから、これとの時期差はないと思われる。調査段階では位置関係からみて、周溝墓の張り出しとも推定したが、しかし互いに平行し、かつ東溝の南寄りであることから、方形周溝墓の付属施設でないと判断した。しかし、この二本の溝は方形周溝墓を意識して配置された可能性がある。

土坑(図6)

居住域と墓域の間、2号住居跡の北10mに位置するSF213・218と、2号住居跡の東5mにSF214が位置している。形態は三者ともに円または楕円を呈し、規模はSF218が大きく推定の長径3m、逆にSF214は小さく1.46mであった。

出土遺物は土器のみであり、どの土坑にもみられたが、SF213の覆土中には炭化物の層位的な堆積が認められ、かつ覆土の状態も色調等が一定ではなかった。この傾向は、SF213に切られるSF218でもみとめられた。SF214はきわめて浅く、覆土もほとんど消失している状態であった。3・4区の記述のなかで土坑の分類を行なっているが、この1・2区の土坑は、単独で存在し、土器を少量伴うB-2類の特徴をもったものである。

今回の調査では、1区から6区まで土坑が認められるが、特に4区には土坑A類とした密集し群を形成するのに対して、この1・2区の土坑の在り方は、5・6区の状況に類似した単独で散在するB類の土坑といえる。

井戸(図6)

1基のみ発見されたSE101は、U-8グリット北西端にあり、1区1号周溝墓と2区3号周溝墓の中間に位置している。1.6mの径をもつ円形で、検出面から1.4mと深く、断面はV字状を呈する。この底には図示したとおり、完形の壺と甕が埋納されており、その状態が明確に確認された良好な例である。なお、祭祀的性格と推定されるこの遺構は、4区で1基、5区で1基が発見されており、数の多い土坑

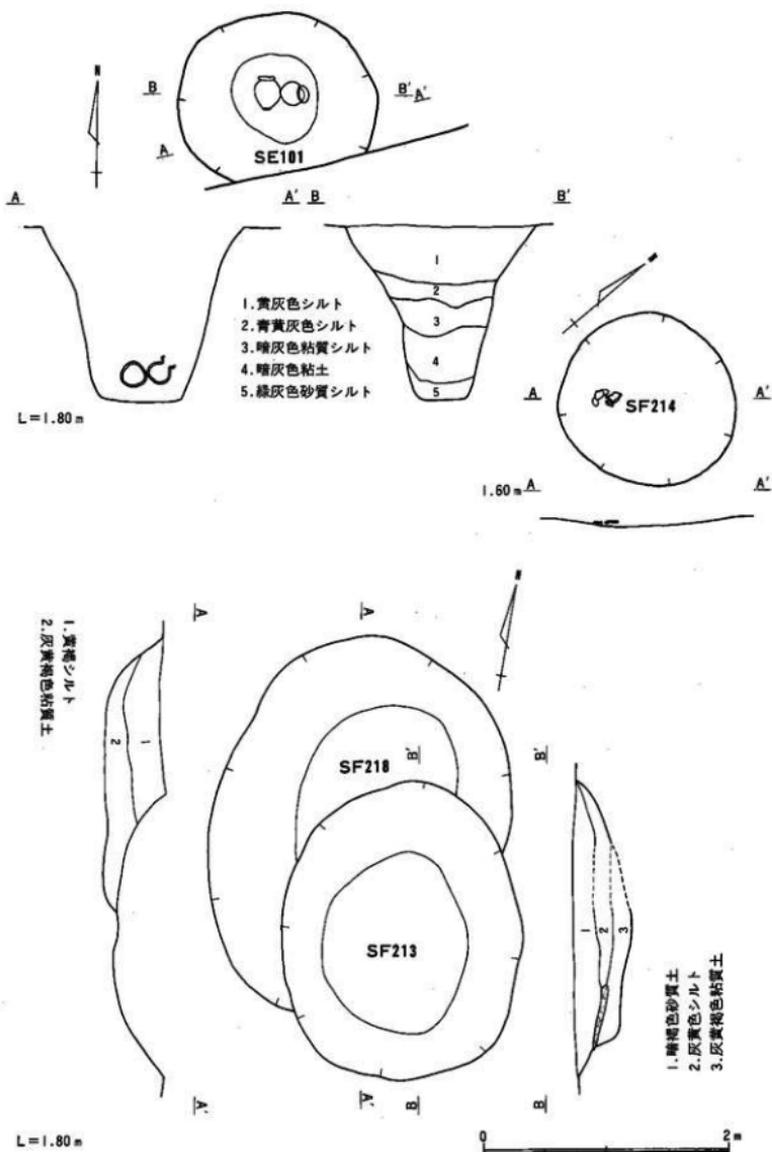


図6 1・2区古墳時代土坑・井戸実測図

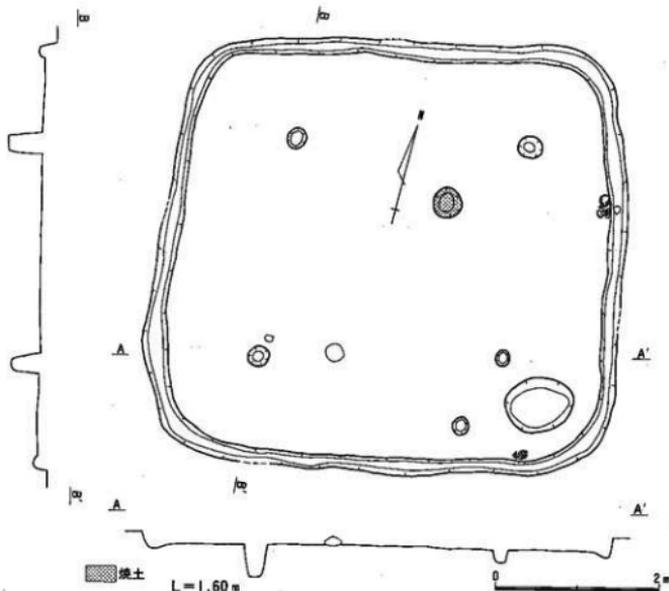


図7 2区古墳時代住居跡 SB201 実測図

が祭りごとに新たな施設を必要とするのに対し、この井戸状の遺構に対して行われた祭祀は、限定された特定の施設で継続的に行った形態であったとも推定される。

井戸に関しては、4区と5区をも含めて、最終の使用が祭祀的性格と指摘されるが、転用された施設の可能性もある。しかし、これらは井戸として実用的に使用されたとの判断は困難であり、あるいは早魃に対しての水溜めの可能性もある。水を汲み出す井戸でない根拠として、底部が透水層に達せず、粘土層中で掘り方が終息すること、水溜め用の設備及び側面の壁を保護する枠等もみられないといったことがあげられる。

周辺での類例に乏しい遺構であり、今後の調査例の増加にともなう検討が必要とされる遺構であるが、今回調査した所見では、古墳時代前期における集落内祭祀に伴う施設の一形態と推定した。

竪穴住居跡 (図7～9)

竪穴住居跡は調査区の南で4軒発見された。形態は縦横の比もほぼ同一で方形を呈し、規模は一辺約4m～7.5mである。住居跡の配置は3・2・4号住が近接し、4号住から南に15m離れて1号住がある。この配置からみて、2号住と4号住は互いの間隔が1mに満たないことから、同時に存在したとは思われない。また南北辺の中間値から計測した住居の主軸は1・2号住が近く、西に10°と8°振れており、3・4住ではそれぞれ16°と20°である。

住居跡はそれぞれコーナー付近に4本の柱と、中央北東寄りに炉、南東コーナー付近に貯蔵穴、四辺の床端に壁溝をもつ構造であると推定したが、3号住では柱穴・貯蔵穴・壁溝が、4号住では貯蔵穴が検出できなかった。

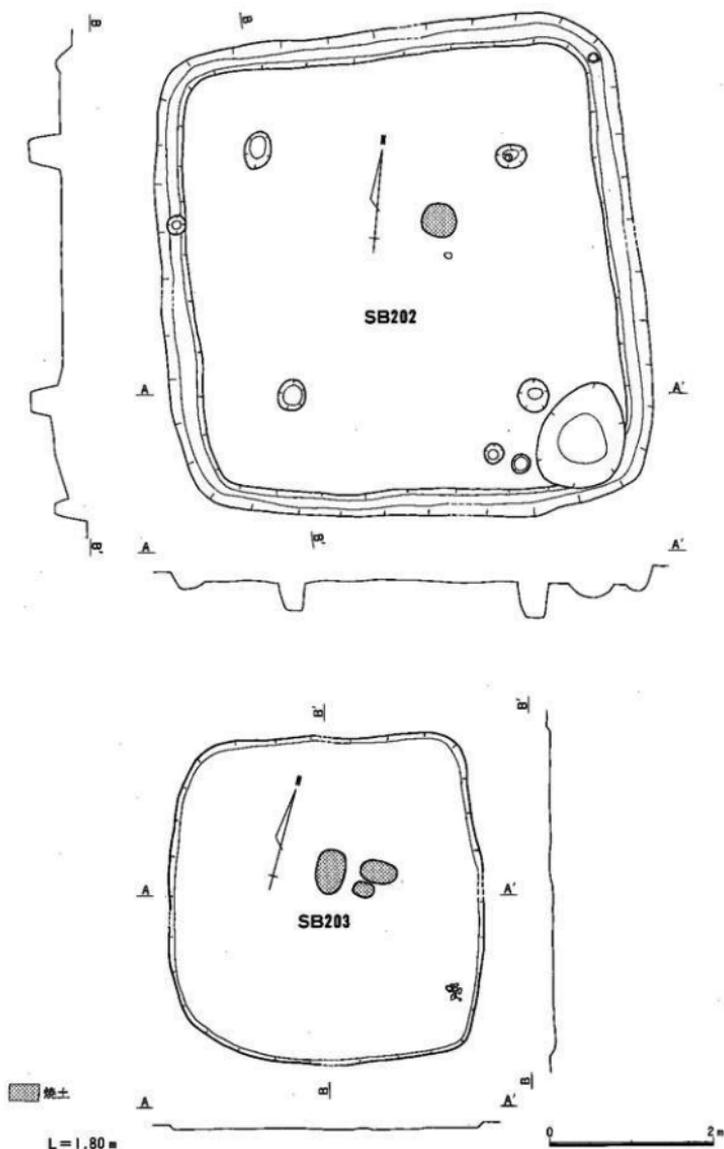


图8 2区古墳時代住居跡 SB202・203 実測図

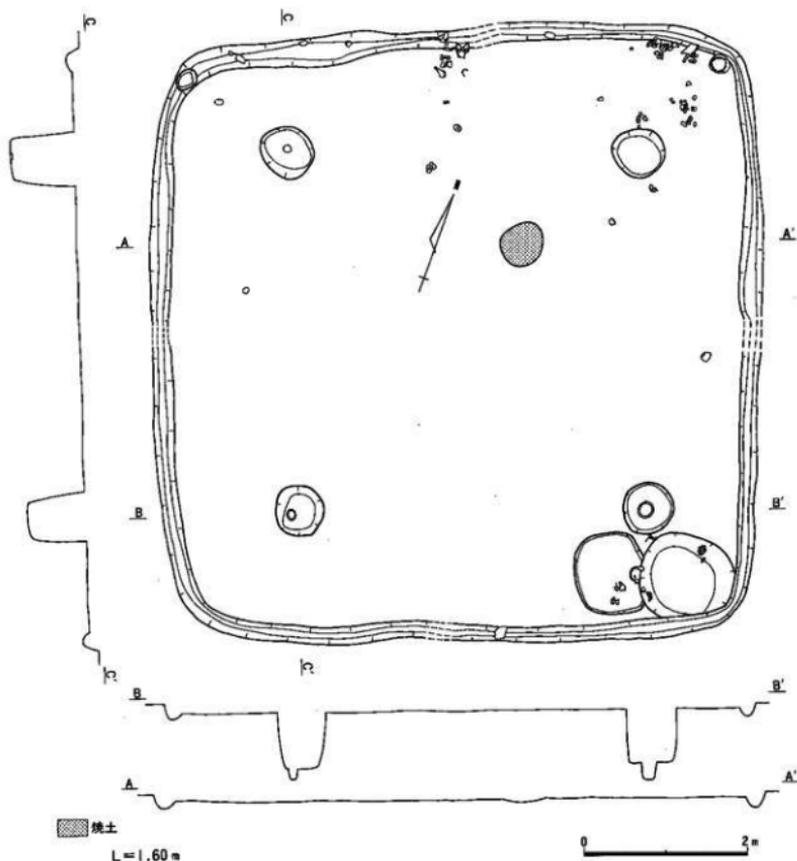


図9 2区古墳時代住居跡 SB204 実測図

図7、SB201は中間の規模であるが、これらの典型的な構造をそなえており、基本的には大小の規模による相違は認められない。図8のSB202も貯蔵穴周辺に小ピットがみられるが、さきのSB201と同じ構造といえる。

柱穴・貯蔵穴・壁溝の未検出であったSB203(図8)は、調査区の西にあるため遺構覆土の認定が困難を極めたが、調査の所見では、本来はこれらが備わっているものと理解した。またここでは、住居の面積の規制からか、炉の位置がほぼ中央付近にあり、かつ3箇所に焼土ブロックの集中が認められた。

最も大型のSB204(図9)は、貯蔵穴が二つあり、西側は床面からの掘り方は浅いものであった。またこの周辺の壁寄りの床には粒子状になった細かい炭化物が認められた。

これら4軒の住居跡の遺物は土器のみであり、特に出土状態で注目されるのがSB204であり、北東

コーナーに口縁部を下にしたS字口縁甕(図49-8)をはじめとして、壺・高坏・台付甕等が、北壁にそって中央部付近までの間の床面から出土した。また最も土器が集中した北東コーナー付近には、白色粘土ブロックも検出されている。以上のような状況と、遺構の遺存状況、つまり住居床面が水田耕作土直下ということをも勘案すると、少量出土の破片も、本来はS字口縁甕のように完形品の可能性が推定できる。北壁の土器群は住居空間の使い分けのために壁際に本来置かれていたものと推定される状況であった。これら4軒の住居跡の配置をみると、SB201は約15mと間隔を置いているが、SB202～204は近接している。このことからみて後者の3軒が一つの小単位であり、前者のSB201はさらに南側に存在する小単位に属するものであろうか。古墳時代の遺構は時期差が確認できないと指摘したが、配置からみるとSB202とSB204は間隔がなく、同時期に並行して存在したものではない。

竪穴住居の方向は、相互に類似しており、また方形周溝墓のうち2区1号墓と、2区2号墓の方向ともほぼ一致した方向を呈している。

方形周溝墓(図10～13、図版15)

方形周溝墓は調査区北に集中して4基発見された。形態は溝が全周するもので、主体部は検出されなかったが、1区1号墓(図10)は方形、2区1号墓(図11)と2区3号墓(図13)は南北辺が長い長方形を

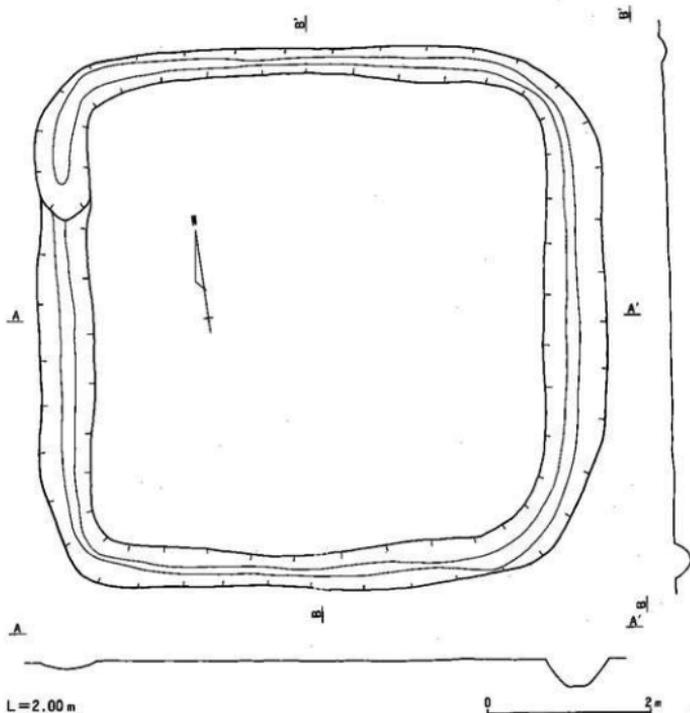


図10 1区古墳時代1号周溝墓実測図

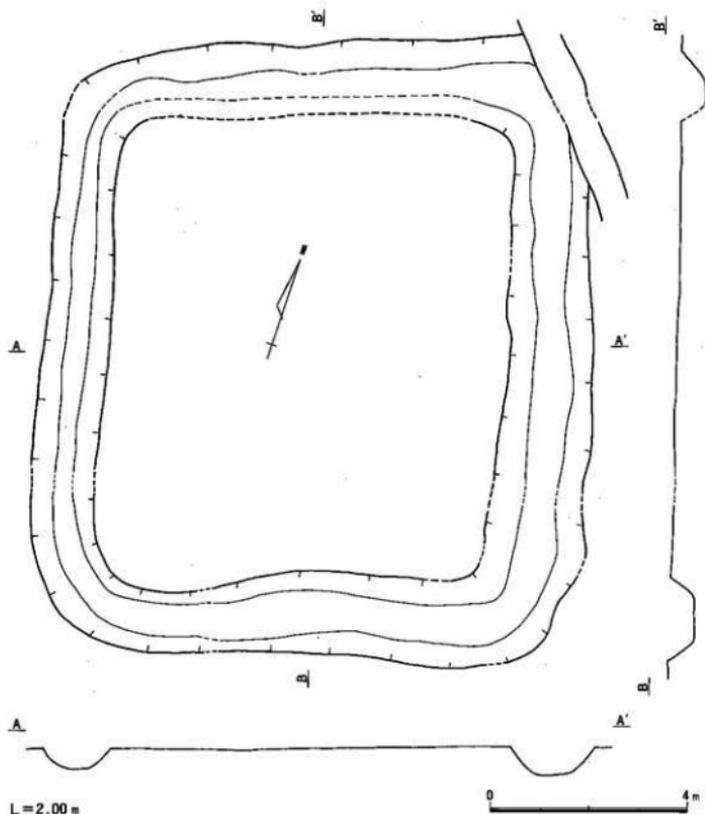


図11 2区1号周溝実測図

呈し、2区2号墓(図12)は東辺の長い台形状をしている。規模は2区1号墓が最大で13m、1区1号墓が小さく7m弱を測る。主体部が確認されないため主軸は不明であるが、南北軸と比較すると大略的には、東に少し振れる(1区1号墓)・西に少し振れる(2区1号墓と2区2号墓)・西に大きく振れる(2区3号墓)の、三種類の方向が認められる。

尚、平面形態が不規則な2区2号墓西溝の急激な張り出しは、この周辺が調査前に一段高い畑であり、従って遺構検出面レベルの相違により生じた現象であり、西溝本来の形態ではない。また2区3号墓の北西コーナー付近は、検出面が遺元状態のため覆土との区分は不可能であった。

これらの方形周溝墓に伴うのは土器のみであり、すべて溝からの出土である。1区1号墓と2区1号墓からの土器はごく少なく、2区2号墓北西コーナー付近に小型壺と埴(図50-1・2)、2区3号墓東溝に壺(図50-4)と南溝に大型の壺一軀体が出土した。この大型の壺は静岡県東中部に分布の中心をもつ大廓式と呼称される複合口縁が内側に大きく肥厚するもので、遺存が悪く水洗の段階で小破片に

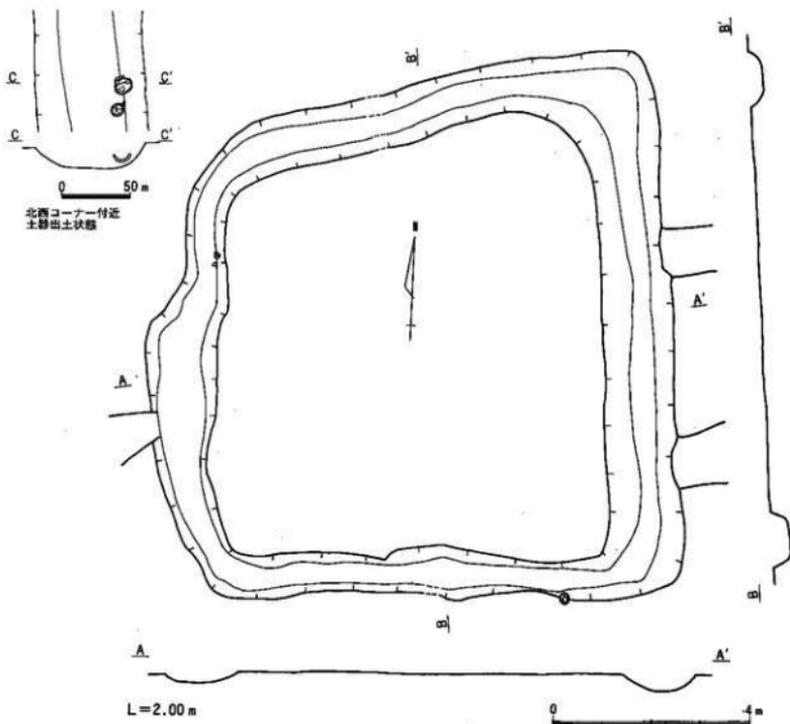


図12 2区2号周溝墓実測図

分解したため接合は不可能であった。また図13にみるように、土器片の散布範囲が広く、出土位置が底からも浮いていることから、本来この壺は墳丘に置かれていたものと推定した。

1・2区の方形周溝墓に供献されたと思われる土器は、2区2号墓の壺と埴、2区3号墓の壺であると判断される。

今回の調査では、この時期の墓域が発見されたのはこの1・2区のみであり、先に遺構の概略で触れたことであるが、墓域は堅穴住居のある居住域と一定の間隔をもって区分されている。これはこの集落の構成員が、住まいと墓の移動を必要としなかった程のごく短期間に営まれた結果と推定される。

図5の遺構全体図をみると、各方形周溝墓の台部に溝状のもの、ピットが図示されているが、調査の所見では個々の周溝墓の施設とか、この時期の墓域に伴う遺構との関連は認められなかった。

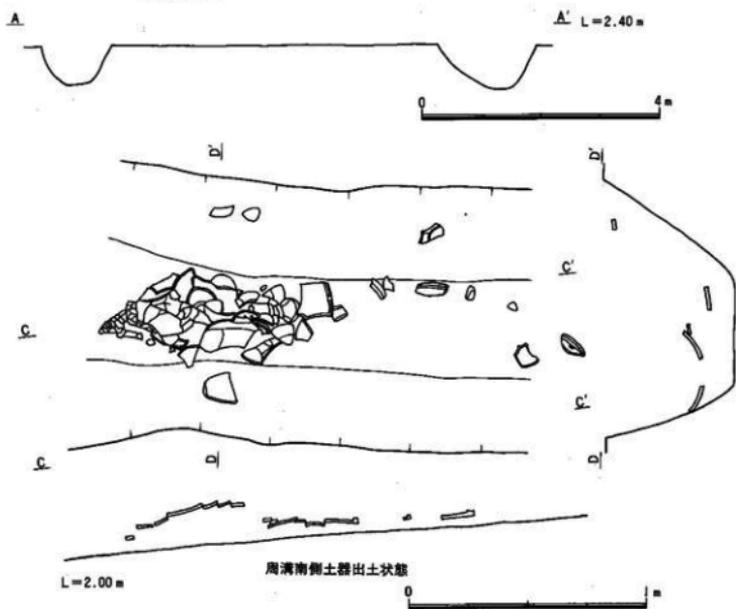
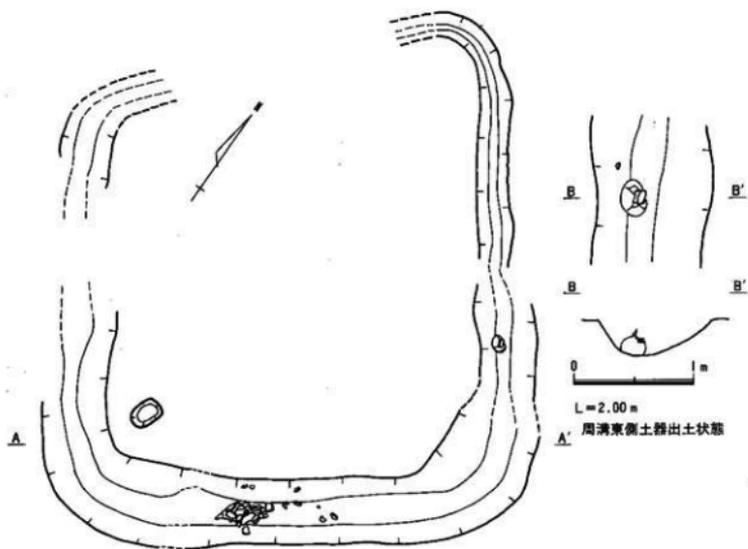


图13 2区3号周溝基实例图

B 3・4区 (図14・15)

3・4区の遺構は図14の遺構全体図でしめたが、この調査区は他と比較して、遺構の分布密度が高くまた、古墳時代前期・奈良時代・平安～鎌倉時代・近世という各時代のものが存在する。この状況から遺構全体図とは別に、同時代の遺構把握を容易とするため、古墳時代前期 (図15)と奈良時代の遺構全体図 (図31) を作成した。遺構年代の判断は主として土器の年代観によったが、土器出土量が少ないとか、無遺物の遺構では、形態・遺構相互の位置関係等の根拠で年代を推定した。この年代推定の根拠は個々の遺構記述のなかで示すこととする。年代検討の結果、所属時期を確定できない遺構もあらわれた、その代表的なのが、比較的小型で無遺物のピットであったが、ピットの多くは、他の調査区及び周辺地域での調査例から類推して、平安～鎌倉時代とおもわれる。以下に遺構の具体的な検討にはいることとする。

図14、3・4区遺構全体図と図15の3・4区古墳時代遺構全体図を比較すると、古墳時代の遺構分布がより鮮明となる。3・4区古墳時代の遺構は、土坑 SF316を除き4区西寄りに分布が集中している。この地点は新堀の集落が乗る自然堤防の北端であり、3区には殆ど遺構分布がないこと及び、この北側には埋没河川の存在が推定されていることから、この地点で自然堤防が急激に細くなっているものと理解した。この4区は、住居跡の東側に土器が多量に投棄される凹地があり、古墳時代の集落の縁辺と考えられる景観を呈していると推定した。これらの遺構群は、先の1・2区と同様で、個々に明確な時期差をもたず、近接した時期の集落の状況を示している。

遺構配置の傾向として、6軒の堅穴住居跡は、限られた範囲に位置し、その南の2箇所とSB401・405の西に土坑群が配置され、一方単独に配置される土坑もみられる。集落の東端と推定される位置には、SF427・466・431・451・435・463・459、西には住居跡SB403・404の北にSF419・420、南にSF429が認められる。溝は東にみられ、凹地の南に近接し、それと同じ方向をもつSD438・448が検出された。

SB402・405の東側が土器を多量に投棄する凹地であるが、傾斜が緩やかで、東側の緩い立ち上がりを確認した程度の検出状況であった。図15の全体図にその範囲を図示している。

この3・4区の状況が、古墳時代前期における当地域の、居住域と推定される集落縁辺の様相を、最も端的に表したものと見える。以下に個々の遺構ごとに説明を加える。表2のなかで触れている具体的な数値等は必要に応じて用いる程度としたい。

溝

溝は3条検出されており、古墳時代の新堀遺跡のなかでは、溝は主体的な遺構とは云えない。

SD438・448は集落の東縁に位置し、両者ともに同じような方向性をもっているが、SD438は二つの土坑SF431・438の間に3.5m程が検出された。SD448は東側の立ち上がりは明確に確認されたが、集落側の西では緩やかに下降するため溝との境は曖昧な状態であった。また北側は底が緩やかに上がり、全体が西に大きく曲がる状況が認められた。従って、このSD448は、本来の目的・機能は不明であるが、最終段階には、土器とか生活の不用品投棄にもちいられた溝という性格が推定される。この溝が土器・炭化物を多量に含むこともそれを示していると考えられる。

土坑 (図16～21、図版4～9)

3・4区の遺構のなかで際立って多いのが土坑である。詳細については表2の古墳時代遺構一覧表にかかけた。平面形・断面は変化に乏しく、以下でその分類と様相について検討する。

土坑は大きく配置からA・Bに二分類し、さらに土器出土量の多少、及び土器の出土状態から1～3に細分した。一部の土坑には、土器の他に、炭化物・焼土・白色粘土・礫等の混入物を伴うが、これは

土器量の多い土坑にみられる傾向であり、明確な分類の基準にはなりえない。分類の根拠を下記に示す。

A・狭い範囲に集中し群を形成するもの。

- 1・土器を多量に伴うもの。
- 2・土器は僅か、もしくは殆ど出土しないもの。

B・単独で存在するもの

- 1・土器を多量に伴うもの。
- 2・土器は僅か、もしくは少量伴うもの。
- 3・小型の土坑で個体として埋納されたと推定されるもの。

この分類をもとに、各々土坑を検討してみる。

A-1類

群を形成し多量の土器を伴うものであり、C-16グリット(図17)とE-14グリット(図20)の二つのグループが認められる。このうち後者のSF464・465は二基の土坑が重複したものであり、一基当りの規模も大きく、群として認定するか疑問も残るが、重複することを重視し群のなかに含めた。

C-16グリットの群は、SF411・412・413・421・422・423・424・425の8基からなり、それぞれ形態・規模は類似し、円または楕円形で、断面はU字・逆台形を呈する。調査段階で、個々の土坑の覆土が類似し検出が困難であり、平面形態の把握が精一杯の状態であった。このことから可能な限り土層断面図も作成したが、平面との齟齬が生じたため、メモ的な資料とした。この結果、グループ全体の図とし、個々の詳細図は省いた。従って図示してないが、特徴のある土坑をあけて説明にかえたい。

SF413

土器(図52)が最も集中して出土した土坑であり、SF411は底付近に板材が0.5mの方形に組まれている。他の土坑と比較して底が特に深いものでもなく、板材の遺存も悉く詳細については不明であるが、井戸としての機能は考えられない。またSF422は多量の土器、炭化物を含み、底は数cmの厚みで焼土層が認められ、火を受けている状況であった。

E-14グリットのSF464・465(図20)は径が4mを超える大型の土坑であり、多量の土器(図61・62)を出土した。覆土中には炭化物・焼土・西壁には白色粘土も検出されたが、遺物のなかには祭祀遺物である土製品の玉(図101-2)も含まれている。

A-2類

群を形成するが、土器はごく少ないか、または殆ど伴わないものである。また、A-1・B-1類に一般的にみられる、炭化物・焼土・粘土・礫等の混入物も殆ど含まない。出土土器もなく形状にも特徴をもたないため個々の図を示したのは僅かである。以下の3グループが認められる。

C-14グリットのグループ・SF416・417・418・455(図20)

住居跡SB401・405の西に近接し、4基認められる。形状は楕円、掘り方は浅く、規模は大きいもので1.5m前後で小型の土坑群といえる。土器は各々の土坑からわずかに出土している。

E-15グリットのグループ・SF439・440(図19)・449・456

形態は楕円で、小型の土坑の集まりであり、規模は1m~2m前後である。SF456から土器が僅かに出土している。南に2m程離れ、ほぼ並行するもう一つのE-16グループがある。範囲からみれば、きわめて近接し同じ方向をもつことから、同一のグループとも云える。



图14 3·4区道路全体图

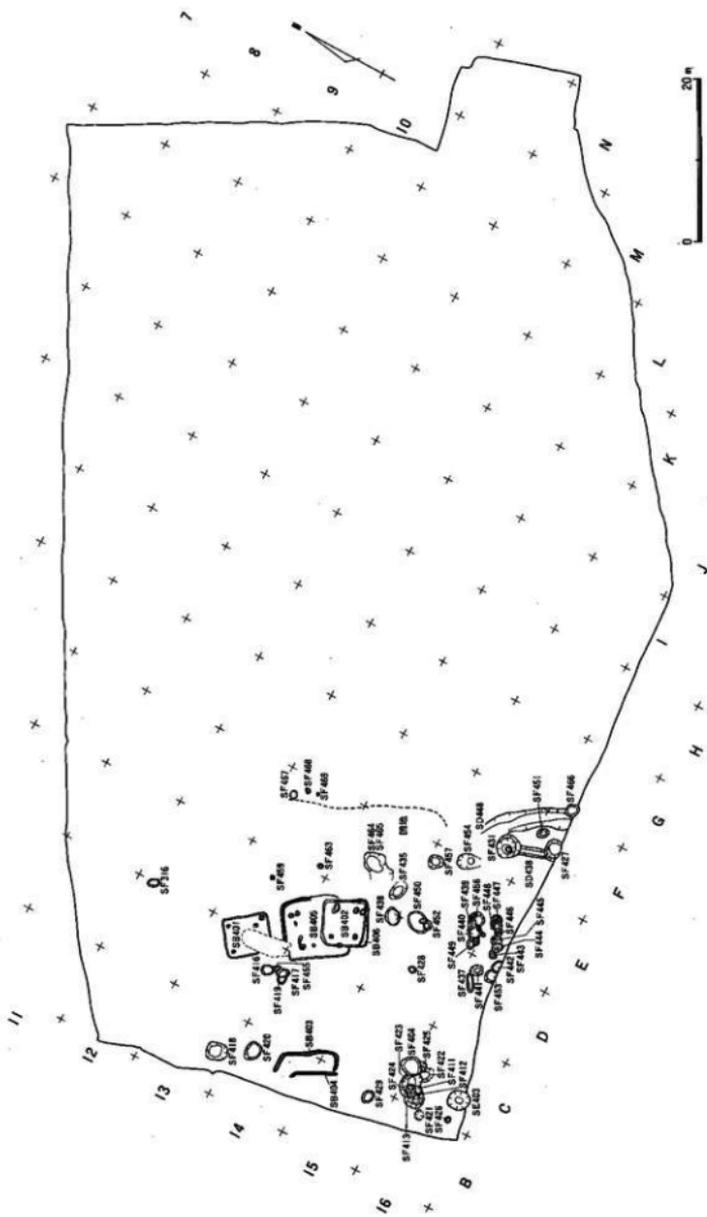


图15 3·4区古埃时代遗址总体图

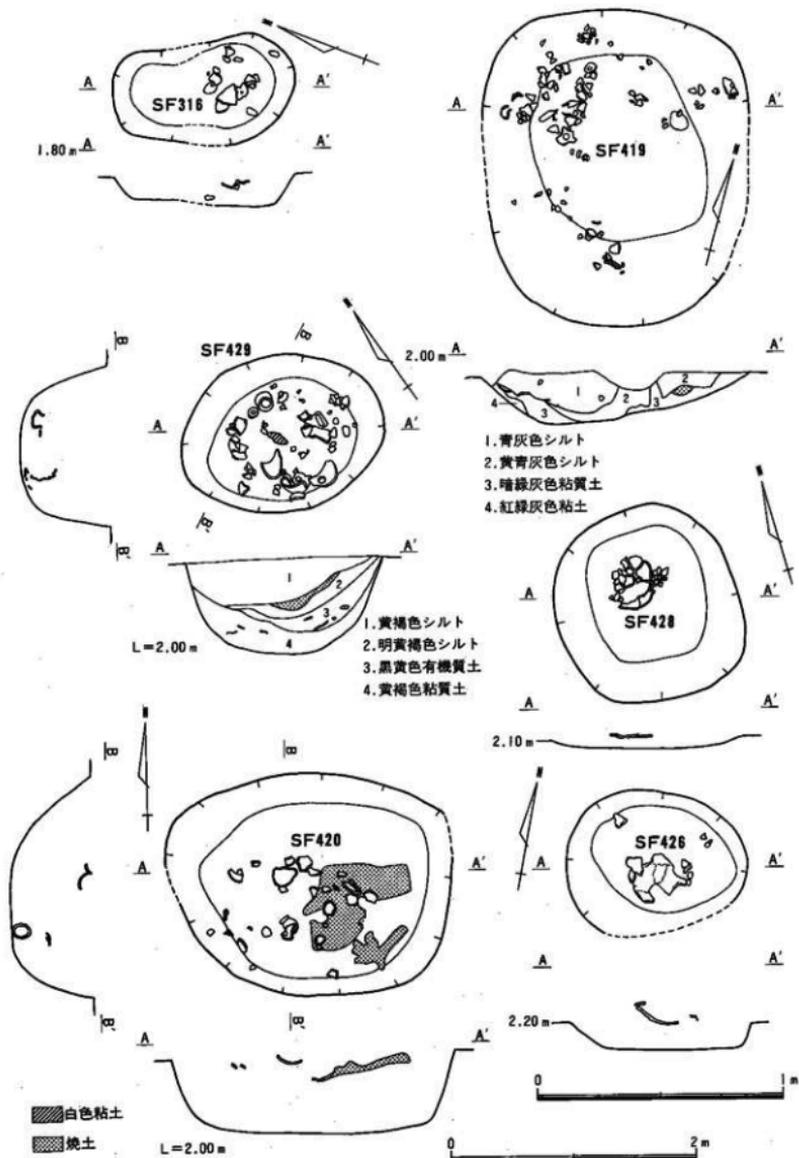


図16 3・4区古墳時代土坑実測図

E-16グリットのグループ・SF437・441・442・443・444・445(図19)・446・447・448・453 群としては最も多い10基がまとまっている。このうち SF437・441 は重複してはいるが、接している状態であるため、このグループに含めた。西に1.5m前後のやや大きい土坑、逆に東では1m前後の小型のものが集中する。このなかで、SF441・442・445(図19)・447・448・453 からわずかに土器の出土が認められた。

B-1類

単独で存在し、土器を多量に伴うものである。また炭化物・焼土・粘土・礫等を多く混入する傾向がある。SF419(図16)・420(図16)・427(図18)・429(図16)・431(図19)・438・457(図21)の7基をこのタイプとした。配置の特徴はなく土坑の分布する範囲に散らばっている。特徴のあるものに若干の説明を加える。

SF419 (図16、図版6)

西壁が急傾斜をもつ楕円状の断面を呈し、土器は北に集中して認められ、焼土ブロックも伴う。

SF420 (図16、図版6)

土器の出土は少ないが、図示したように覆土中で、焼土の平面的な広がりを確認した。これは一度に投棄されたような状況であった。

SF427 (図18、図版8)

調査した古墳時代の土坑のなかで、最も多くの土器(図55~57)を出土した土坑で、径2.64mを測る

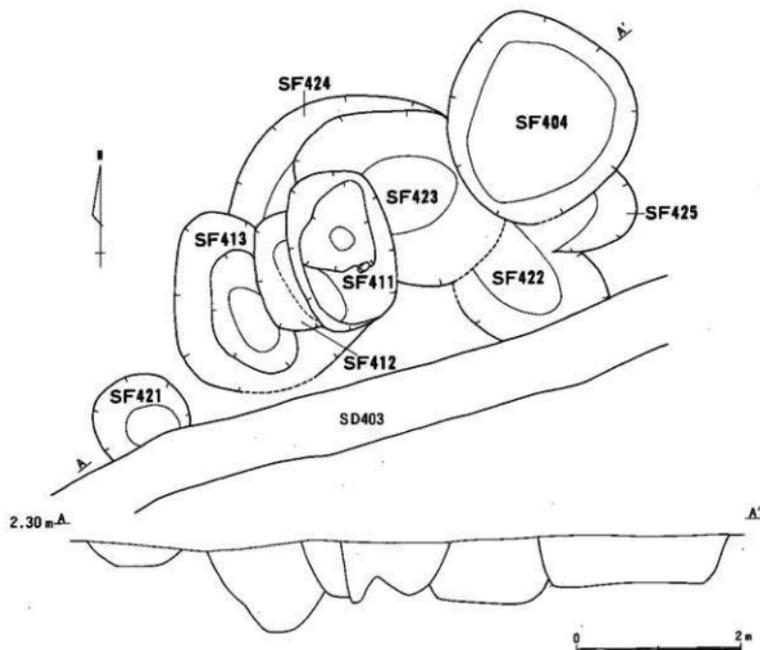


図17 4区古墳時代土坑実測図I

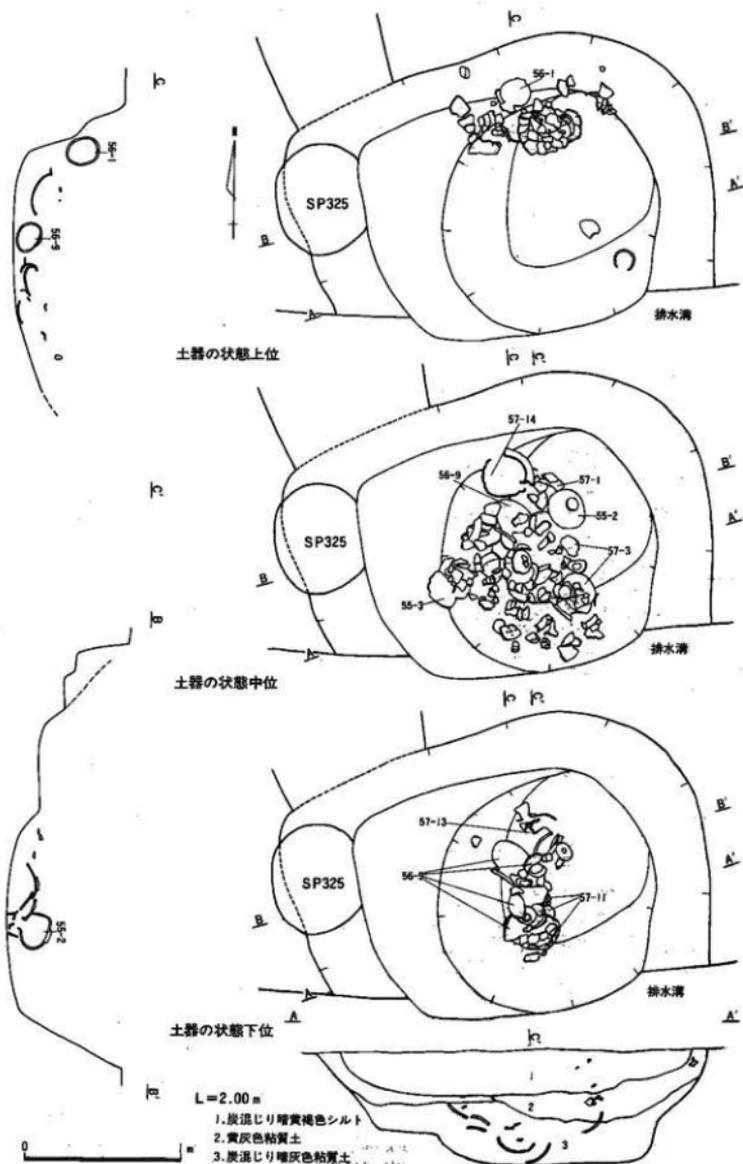


図18 4区古墳時代土坑実測図Ⅱ (SF427)

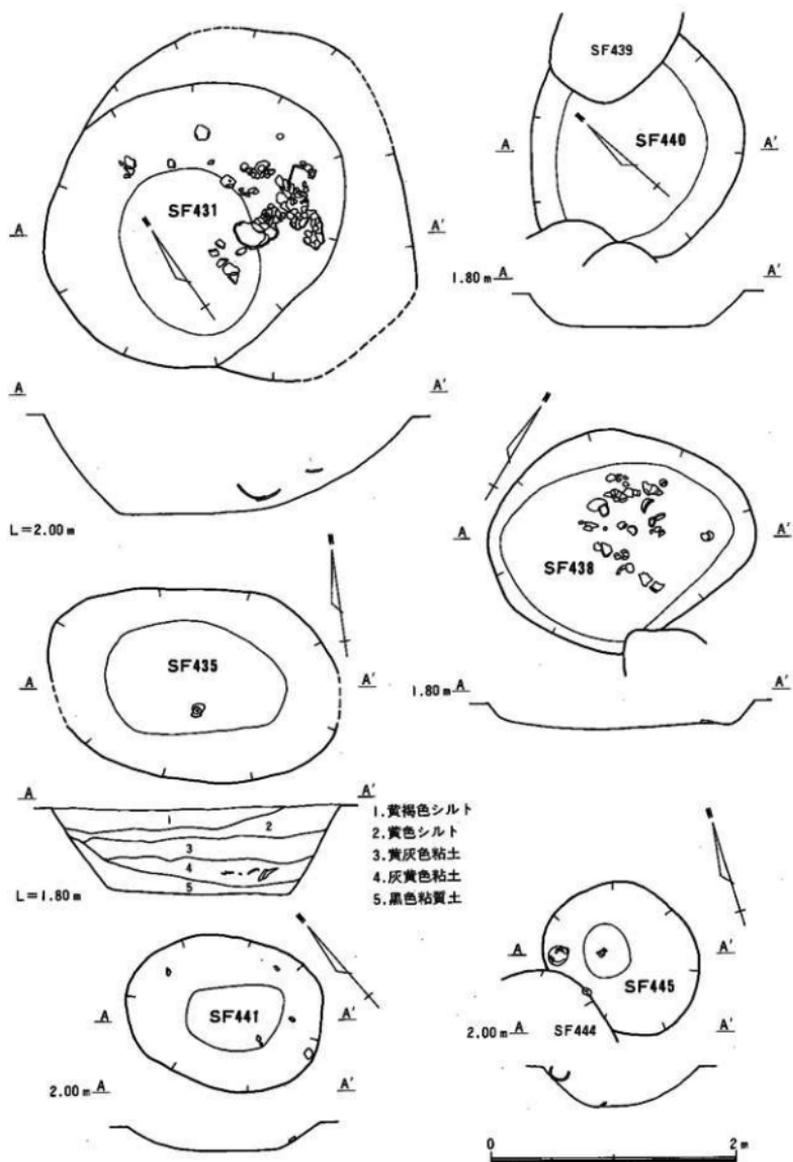


図19 4区古墳時代土坑実測図Ⅲ

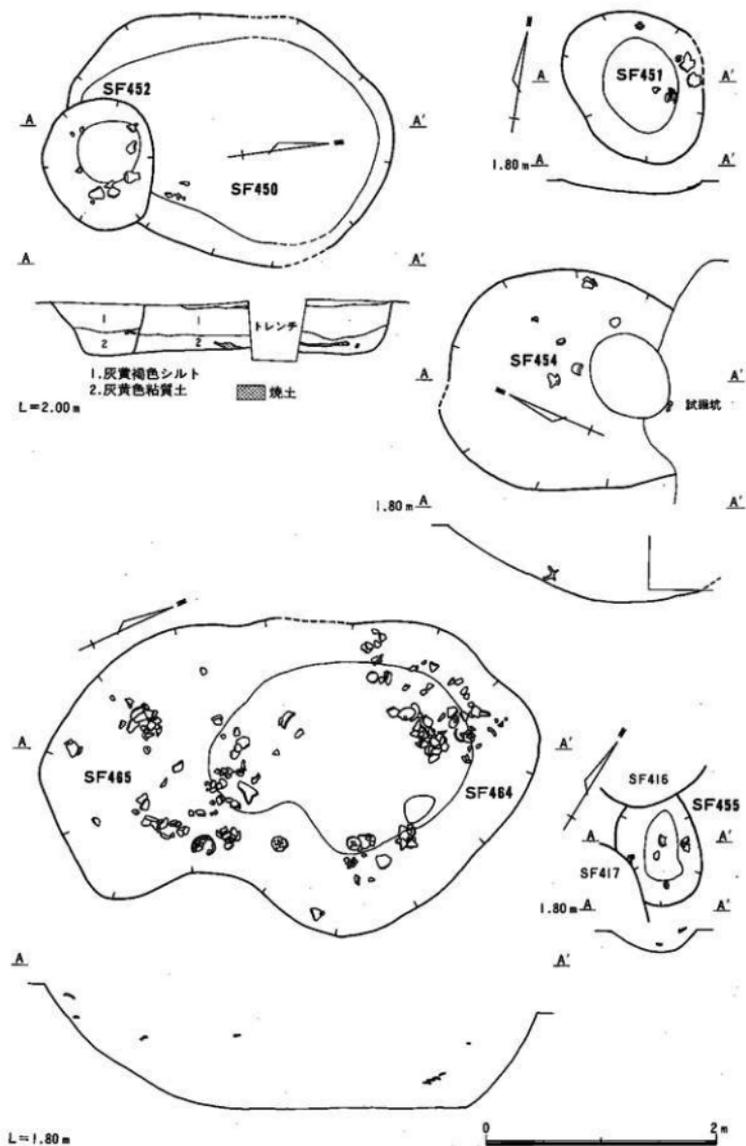


図20 4区古墳時代土坑実測図Ⅳ

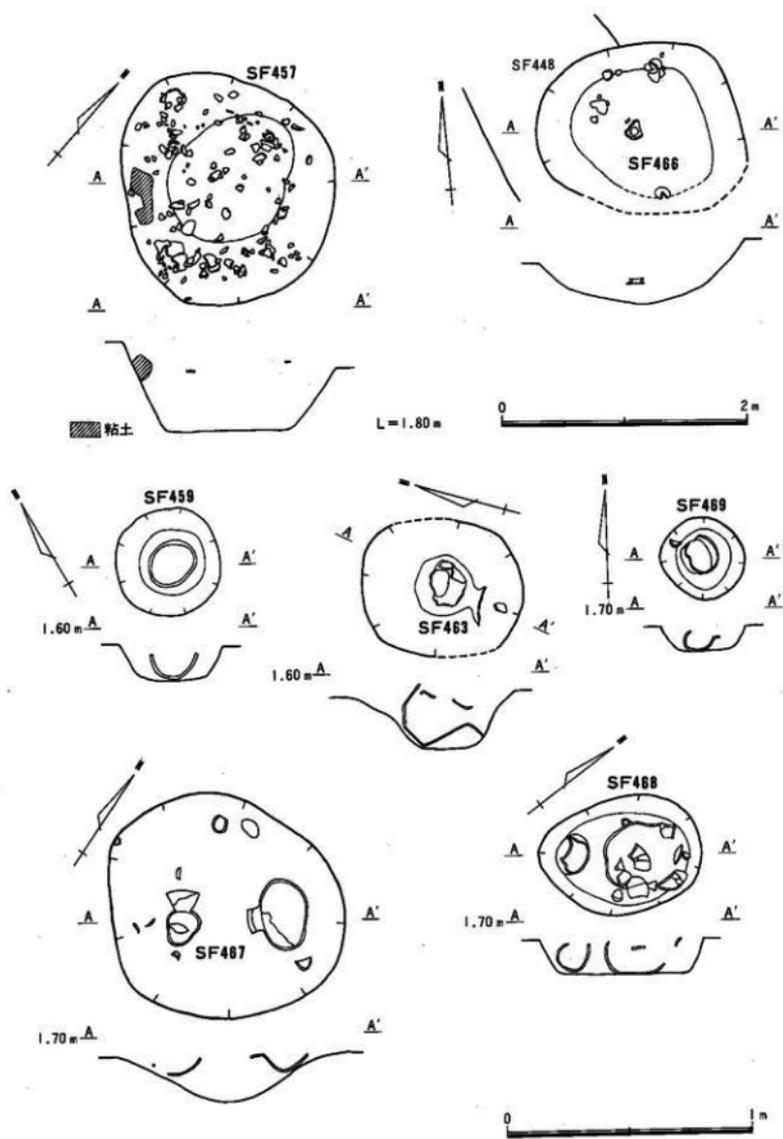


图21 4区古墳時代土坑実測図V

大型の土坑である。ここでは、多くの土器片とともに、完形またはそれに近い壺・甕・鉢等がみられ、その出土状態の特異性から、完形品を意図的に埋納した施設でないかと推定し、図18を作成した。図は土器の取り上げを行ないつつ、同一のレベルの土器配置を上から三段階に示したもので、土坑西壁の中間に段をもち土器の殆どはこれより下から出土していることが理解される。

また祭祀遺物である手握ね土器も2点（図101-3・4）も出土し、炭化物が多量に含まれていたのも特徴としてあげられる。

SF429（図16、図版9）

多くの土器・炭化物・粘土とともに、斜行する焼土が認められ平面的な広がりをもっていた。先述したSF420と同様な傾向が指摘される。

SF457（図21）

図示したとおり、粘土の大きなブロックが西壁に張り付いていた土坑である。土器は偏りがなく、ほぼ底部の前面にひろがっている。小破片が多く形状の判明するものは少ない（図60）。

B-2類

B-1・2類の区分は土器の多少であり明確なものではないが、遺構出土土器の検討段階で少量出土・僅かに出土としたものをここに含めた。そして、図示したなかにも土器以外に炭化物・焼土・粘土等を伴う土坑も存在し、この現象は土器が無いか、または僅か出土し、炭化物・焼土等をまったく含まないA-2類の土坑群の在り方とは異なる。土器の量が異なるのみで、このB-2類の土坑は本来、B-1類との差は無いのかもしれない。該当する土坑としては、SF426（図16）・428・430・450（図20）・451（図20）・452（図20）・454（図20）・459・466（図21）の10基である。

本類の土坑の形態は、円か楕円形を呈し、規模は大きいSF450が2.85m、その他は1.5m前後で土坑の規模としては小型のもが圧倒的に多い。大型のSF450（図20）では、底部よりやや上の北側周辺に焼土層が認められた。

B-3類

本類は数も少なく、規模も1m未満で、E-13グリット周辺約10mの範囲に集中していることが大きな特徴である。5基発見されており、図21に図示した。図でみるように、完形土器の1個体ないし数個を埋納した遺構であることが推察される。SF459は壺、SF463は壺（図60-14）を横位に、SF467は罎・甕・壺の組み合わせ、SF468

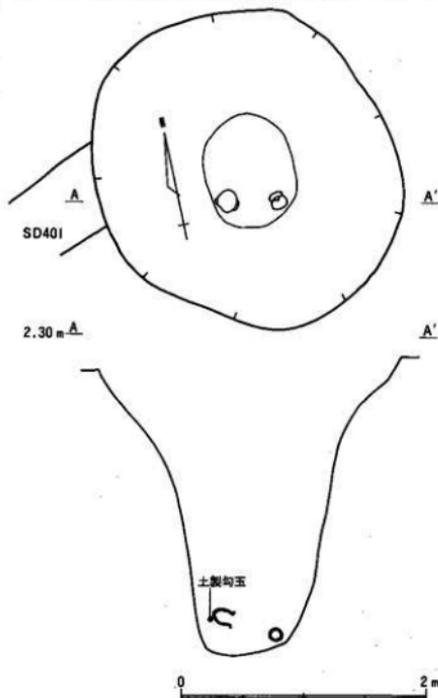


図22 4区古墳時代井戸実測図

は大小の壺、SF469は鉢(図60-16)を伴った。なかでもSF463は弥生後期の菊川式の壺であり、その出土状態は明らかに埋納されたものと判断された。これらの土坑は底部周辺から上は削平されており、土器の遺存は悪く、実測可能で図示されたものは少なかったが、他の器種とおもわれる破片はないことから、本来は完形であったと推定した。

井戸(図22、図版10)

SE403が1基発見された。円形で径2.68m、検出面からの深さ2.37mを測る。調査中での土層壁の崩壊により図示できなかったが、上層は黄褐色シルトを主体とし、中間は灰黄色シルト、最下層では暗褐色シルトであった。最上層に炭化物多量に含み、中間は色調も一定で混入物もなく、最下層付近で有機物を僅かに含んでいた。

この底には、小型丸底壺と甕(図63-1・2)及び、土製勾玉(図101-1)が出土し、その状態から埋納されたものと判断した。このSE403は、遺構の形状とか遺物の出土状態が、1区のSE101ときわめて類似する。

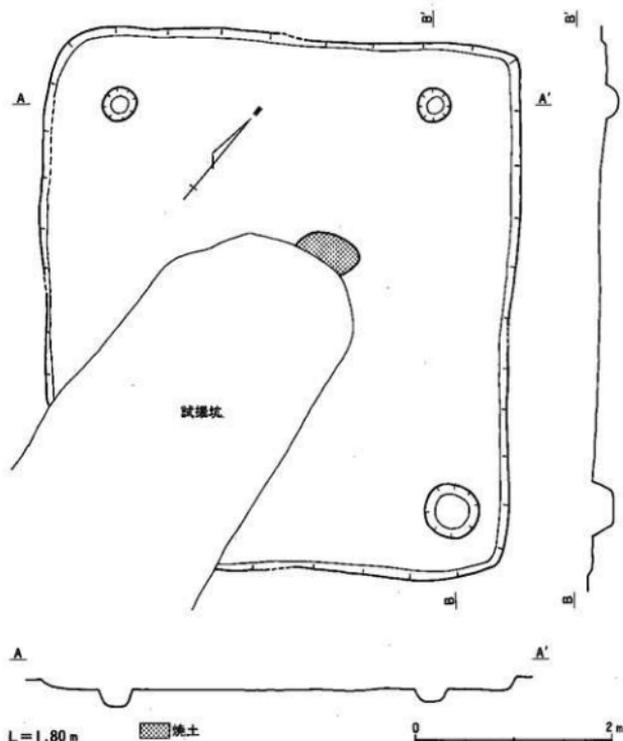


図23 4区古墳時代住居跡 SB401 実測図

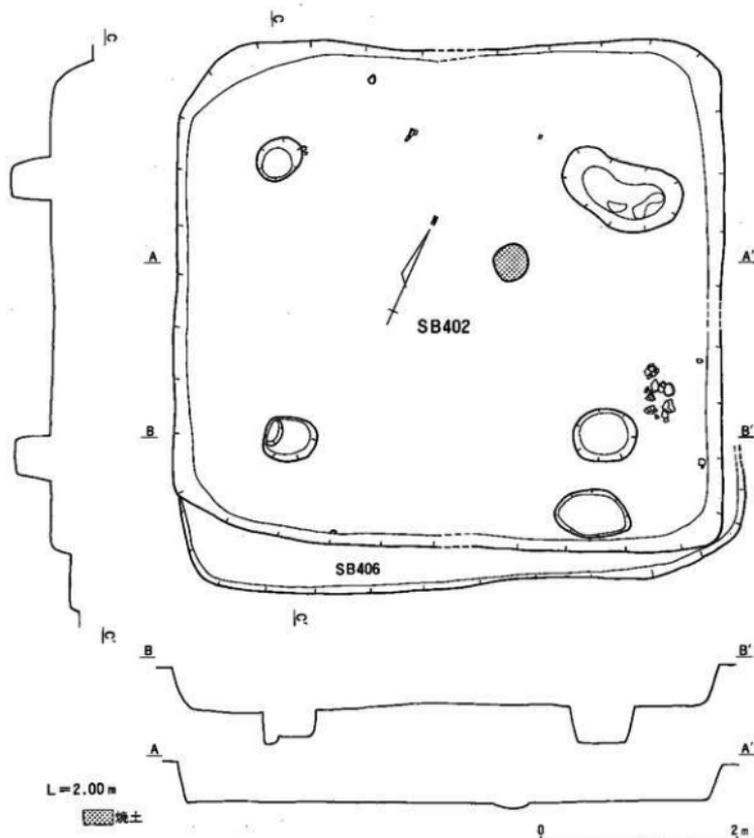


図24 4区古墳時代住居跡 SB402・406 実測図

竪穴住居跡 (図23～25、図版10～14)

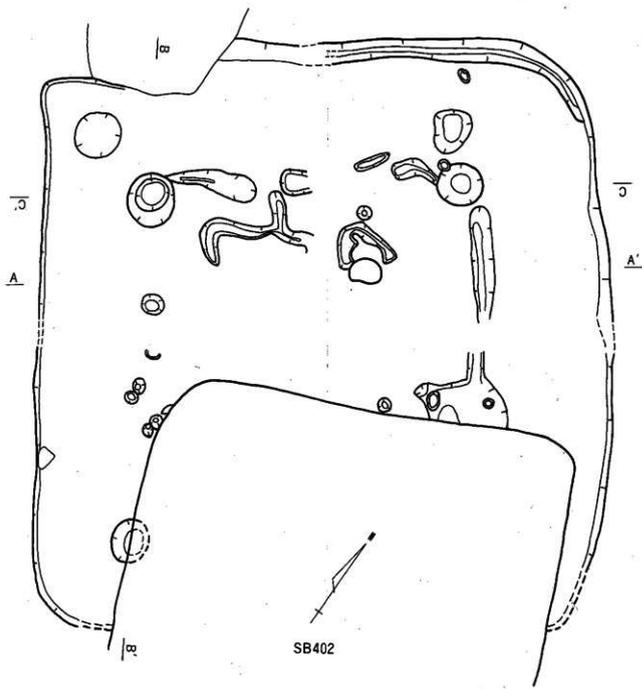
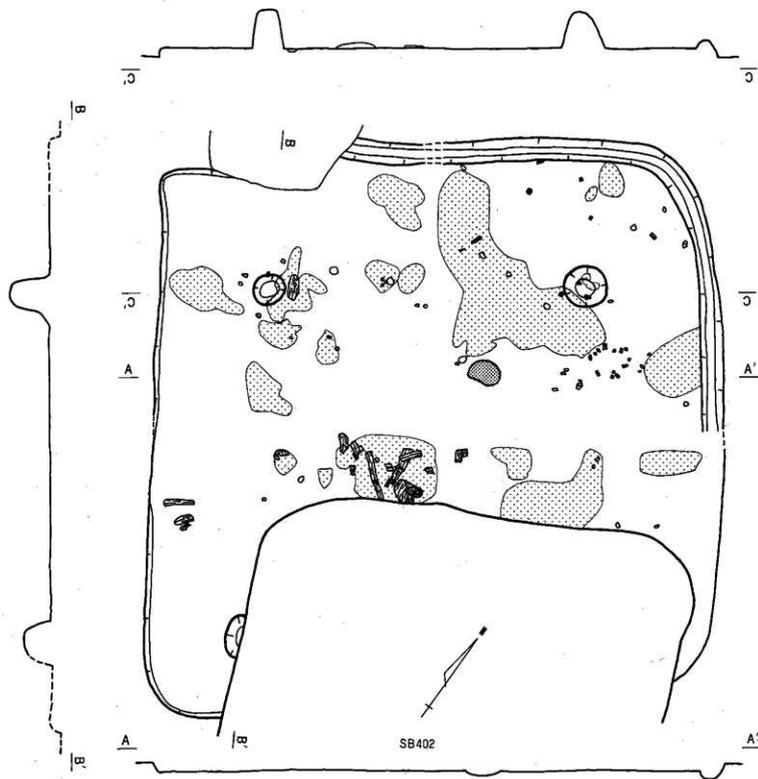
竪穴住居跡は、6軒発見されている。このうち SB403・404 は壁溝、そして SB406 は南壁が残るのみであったことから、説明については表2の遺構一覧表に譲ることとした。ここでは SB401・402・405 の3軒について述べることにする。

竪穴住居跡の配置は、二つのグループに大きく別れるようで、壁溝のみ検出された SB403・404 という西のグループと、SB401・402・405・406 の東グループである。このうち東では、SB405・402・406 が狭い範囲で重複している。若干距離のある SB401 との位置関係は、SB405 の間が1.5m、同じく SB402 とは6.5mの間隔をもっている。

形態は SB402・405 が方形、SB401 は長方形を呈し、規模は南北辺で SB401 が5.52mと小型で、大きいのが SB405 で7.4mを測る。SB402 は小型の規模であり、SB401 と同様な計測値をもっている。住居の方向は3軒とも主軸が西に20～30°振れており、ほぼ一定の方向を示し、2区でみられたような北に

検出状態

完撮状態



L=2.00 m

焼土・炭
 炉跡

0 2 m

图25 4区古墳時代住居跡 SB405 実測図

近いものとか、西に20°振れるというような変化は認められない。

住居の構造は基本的に同時期ということもあり、1・2区との差は認めらず、壁溝は本来設けられていたと推定されるが、調査においてはSB405の北側で検出されたのみであった。柱穴・炉の位置も同じように配置されるが、貯蔵穴は認められなかった。

以上述べたように全体的な特徴が指摘されるが、調査軒数が少ないこともあり、調査区でみられた傾向として指摘しておく。以下に住居跡ごとに特徴を述べてみる。

SB401 (図23)

試掘坑により南コーナーと柱穴の一つを消失する。基盤のⅢ層が北東に下降する位置にあり、他の住居跡と比較して検出が容易でなかった。他の調査区のものも含めて、長方形プランが顕著にみられる形態である。土器等の遺物は殆ど出土しなかった。

SB402 (図24、図版14)

隅丸方形でSB406を切っている。立て替えの住居跡とも推定される。東コーナーの西に柱穴よりやや大きいピットが検出され、土器は伴っていないが貯蔵穴ではないかと思われる。床面の東壁付近で土器片が集中していた。

SB405 (図25、図版14)

4区で調査したなかでは大型の住居跡であり、2区でも最大のSB204とほぼ同じ規模もっている。この住居はSB402により中央から南の大半を失う。柱穴は三本、炉は中央北寄りに発見されており、基本的な構造の変化は認められない。

この住居は火災にあっており、平面形の検出段階から一面に炭化物・焼土が認められた。従ってこの住居の実測図は、検出時の形態と床面の状態を左に、完掘状態を右に表示した。左図の状態では焼土・炭化物が粗密の差をもつがほぼ一面にひろがり、そのなかの密の部分を図示したものである。住居中央付近に炭化した建築材、焼土が数cmの厚みでトーンで示した位置に認められた。焼土の分布は柱穴を結んだ位置を中心としているように観察された。

またこの住居跡では図の右側に示したように、床面からの掘り方が確認された。これらは、各々東西南北の柱穴を結んだ位置にピット・細い溝状を呈し、この覆土には焼土・炭化物は認められなかった。調査段階での所見では住居の構造上の施設と類推したが、具体的には解明できなかった。

凹地

実測図には示していないが、図15に破線でおおよその位置をのせた。この破線は凹地の東側のやや立ち上がりのみられる範囲であり、西側は遺構から緩やかに下降するため境が確認できなかった。

土器分布範囲は北北西方向に約20m×8mであり、特にSB402の東側から南に集中し、北側は粗であった。土器は、量が多いが、小破片であり接合点数は少なく、単純に接合の割合から比較すれば、土坑接合土器の比率とは比較にならず低い。また図107の鉄録も1点出土している。図66に出土した土器を示している。

またこの周辺はトレンチでの土層確認及び、土器検出作業において、青灰色を呈しグライ化が進行する場所であった。

以上のように、土器の分布・土器破片の状態及び、土器以外の鉄録という遺物も含むことからみても、集落での不用品の廃棄場所であったと推定され、唯一削平されずに残された古墳時代の地形を残している場所と考えられる。

C 5・6区 (図26)

この調査区は、ほぼ南北130m、5区が東西38m、6区では45mの範囲であった。5区は以前畑であり、

水田とするため削平されたという。6区東半は以前屋敷があり、調査前はゲートボール場として利用され、一段下がった西側は水田であった。

古墳時代の遺構は図26でみるように、溝・土坑・井戸・竪穴住居跡が発見されたが、遺構分布は平安～鎌倉時代のそれとほぼ同一の範囲に散在し、数も少なく、北地区の様相とは異なっている。しかし、この現象は、古墳時代当時がこのようであったとするには大いに疑問が残る。それは以下に指摘する問題点として整理される。つまりそれは、掘り方が深い土坑・井戸を除き竪穴住居跡は床面直上で検出され、なかには造成段階で消滅している可能性があること、覆土と基盤層であるⅢ層との区分が不可能で、溝 SD520 のように検出にあたって、覆土の確認がされず、土器出土をもって溝とした例もあることからきている。従って、単純には相互の遺構分布・数の比較はできない状況であることを前提として記述をすすめたい。

この5・6区の遺構は、散在する傾向と指摘したが、一応遺構の分布のまとまりは認められるようである。それは全体図でみるように、比較的残りのよい深い土坑・井戸のような遺構のみられない範囲が2箇所認められ、これを基準にすれば大きく3つの遺構群が抽出できる。これらは、北からSR-41グリットのSE504・SF532周辺、QR-44・45グリットのSB501・SF505・506・534・535周辺、5区南端と6区北半のまとまりである。傾向として指摘する程度とし、遺構配置等の検討は控える。

表2でみるとおり、この5・6区で確認された遺構は、溝1条・土坑1基・井戸3基・竪穴住居跡2軒であった。この順序により概略を説明する。個々の遺構の詳細については表の記述をもって説明にかえる。

溝 (図27)

古墳時代の溝は1条のみでありSD520は5区の南端で検出したほぼ南北方向の溝である。先に問題点で指摘したとおり、遺構としての認識ができず土器の出土状態が長い帯状となることから溝と判断し、これらの土器は溝に投棄されたものであろうと推定した。

土器群は長さ7.35m、幅0.2m～0.6mが確認された。図でみるように底部の掘り方の検出に努めた結果土器が浮いたような状態を呈している。後世の削平で土器の大部分が消失すると推定されるが、土器出土状態からみて、図68のように、ほぼ一個体としてまとまる壺・甕等があることから、単に壊れた土器を投棄したような溝とは考えにくい。新堀遺跡での古墳時代の溝は数少なく、そのなかでもこのような出土状態を示すものはこのSD520のみである。

土坑 (図28)

3・4区で分類した基準にそって、この5・6区を検討してみる。この土坑は重複し群をなすA類は存在しない、すべて単独のB類である。その内訳は、土器多量に含み炭化物・焼土等の混入物も比較的多いB-1類として、SF532・610・612、少量またはごく少ないB-2類が多く、SF534・535・537・538・611である。従って4区SF427のような埋納土坑は存在しない。SF532を図示してみたが、土層・混入物等の様相は今まで述べた他地区における土坑との差はない。

井戸 (図28)

この井戸も他地区のものと同様、平面と断面の形状が類似することを除き、井戸の枠・曲物等の施設を伴わないもので、便宜的に井戸として扱った。

SE504が北端のグループ、SE513・516は5・6区端のグループに属し、そのうちSE504・516を図示した。

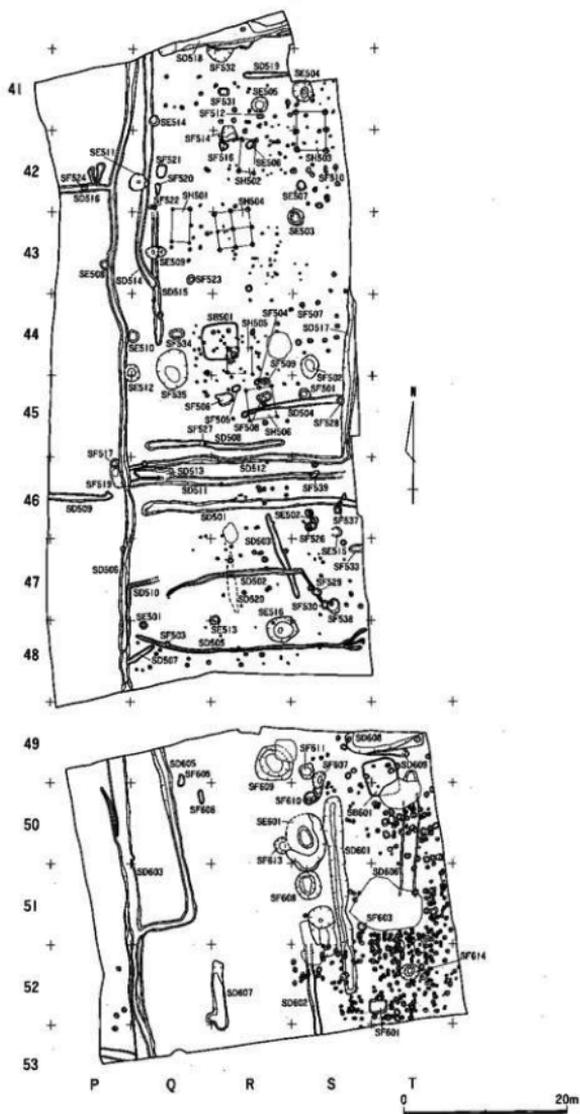


图26 5·6区遺構全体図

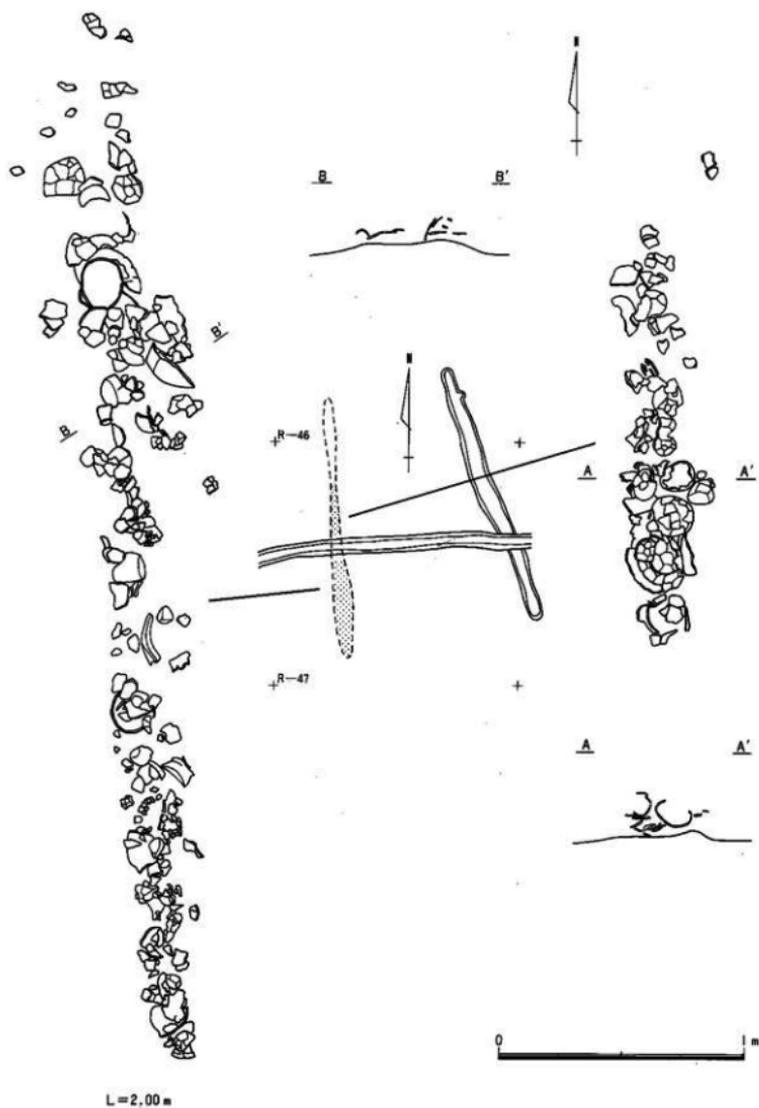


图27 5区古墳時代満 SD520 土器出土状態実測図

SE504

調査区の北東端、集水鉢の位置で検出されたもので、深い大型の井戸である。上部半分以上が削られている。土器の出土は少量程度であるが、炭化物・有機物が多く、底から瓢箪が出土した。この瓢箪は完形でなく、壊れたものが投棄されたものと判断した。

SE516 (図版10)

調査区の南端にあり、上部は試掘坑であったがほぼその平面・断面形態が確認された。推定の径4m、検出面からの深さ2.6mを測る大型の井戸である。土器は多量に出土し、底には完形の壺(図70-1)が納められていた。また炭化物も多く、層的な堆積も認められた。

これと同様な井戸は、1・4区のSE101・SE403であるが、覆土中での土器をはじめ混入物の多さは注意を要する。

この井戸と呼んだ大型の深い遺構は、本来の目的は明確ではないが、使用された最終段階では祭祀の対称として用いられている。底に土器・土製模造品等を納め、その後埋めるのか、穴のあいたままにし

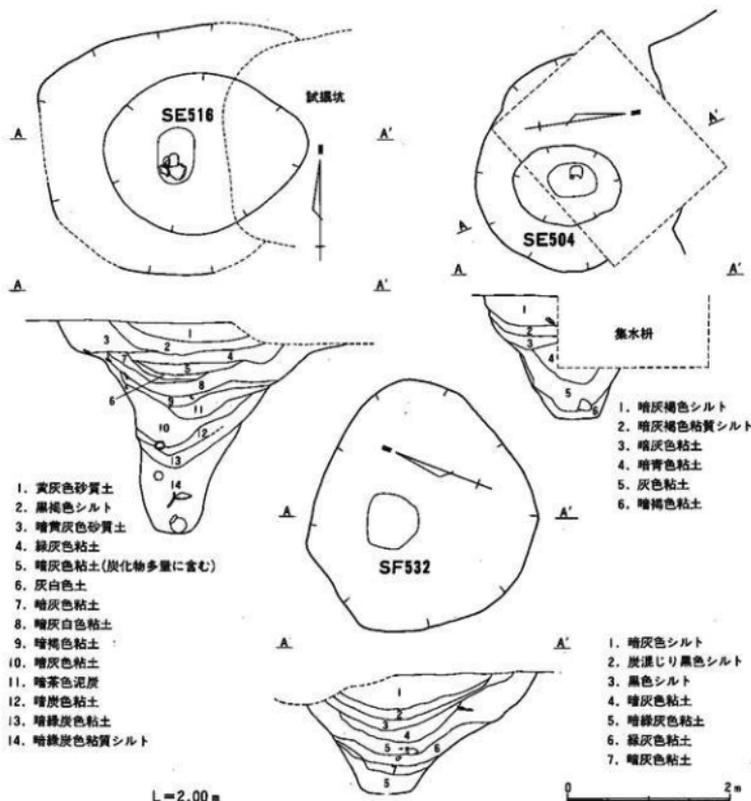


図28 5区古墳時代土坑・井戸実測図

ておくのか、この点が土層検討の際問題となった。これらの遺構の土層はグライ化し、そして下部は保水性がよく、SB403のように崩壊した土層もあり、結果的にはレンズ状堆積の土層認識になった。

竪穴住居跡

竪穴住居は2軒のみであり、ここでは気のついたことを個別に述べることにしたい。

SB501 (図29、図版14)

形態・規模ともに他地区の住居跡との差はなく、南北辺4.5mの小型の住居跡である。主柱穴4本とは別にピット、南東コーナーに貯蔵穴が認められる。主軸は西に僅か振れ、土器はごく少量破片が出土している。この住居跡は調査が最下面に達した段階で検出されたもので、床面は僅かの段差しかもたなかった。

SB601 (図30)

攪乱により南東を消失する。平面はやや北辺が長い長方形であり、規模は5区のSB501と類似し、比較的小型の住居跡である。他の住居跡と異なり、主柱穴が明確でなく、炉跡の痕跡も認められなかった。しかし、土器は小破片であるが多量に出土し、南西コーナー付近では建築材と思われる炭化材も出土したこともあり、住居跡と判断した。主軸は西に18°振れている。この住居跡も先のSB501と同様、検出面と床面のレベルは僅差であった。

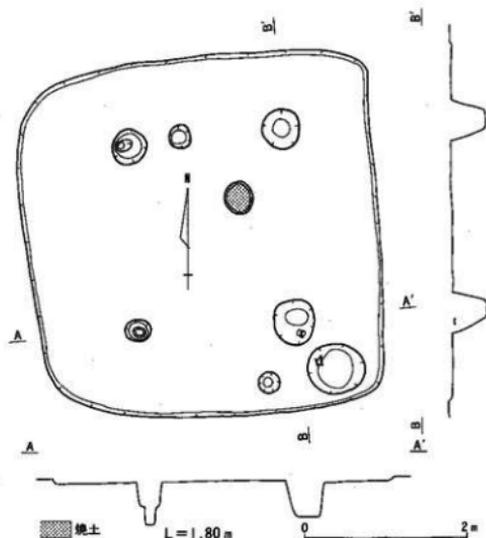


図29 5区古墳時代住居跡 SB501 実測図

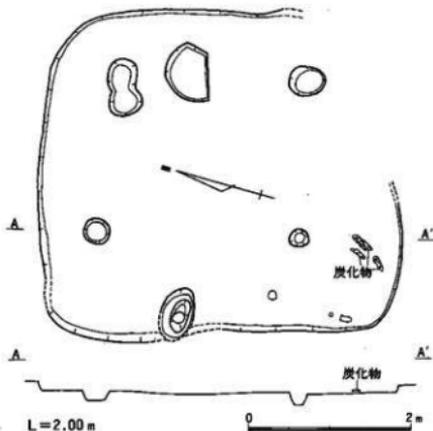


図30 6区古墳時代住居跡 SB601 実測図

表2 新堀遺跡古墳時代遺構一覧表(1)

区	遺構名	グリット名	形 態		規 模(m)			備 考
			平 面	断 面	長さ(長径)	巾(短径)	深さ	
1 ・ 2 区	SD202	V-15	不整形	U字	—	2.42	—	調査区西へのびる、炭層あり
	SD207	W-9	—	U字	—	0.95	0.19	2号墓の東溝に直交、遺物をなし
	SD208	W、X-9	—	U字	—	1.36	0.28	2号墓の東溝に直交、遺物をなし
	SF213	V-12	楕円	U字	2.4	1.96	0.49	炭層あり
	SF214	X-13	円	U字	1.46	—	0.05	土器片少量
	SF218	V-12	楕円	浅い皿状	—	2.4	0.45	SF213に切られる
	SE101	U-8	円	深いV字	1.6	—	1.4	2個体、埋納の土器
	SB201	X、Y-15、16	方形	—	5.35(南北)	5.65(東西)	—	柱穴、炉、貯蔵穴あり、東壁中央より土器集中、主軸西へ10度
	SB202	W-13	方形	—	6.3(南北)	5.95(東西)	0.2	柱穴、炉、貯蔵穴あり、土器少ない、主軸西へ8度
	SB203	V-13、14	隅丸方形	—	3.9(南北)	3.75(東西)	0.1	柱穴不明、南東コーナー付近土器集中、炉あり、主軸西へ16度
	SB204	W、X-13、14	方形	—	7.42(南北)	7.42(東西)	0.1	柱穴、炉、貯蔵穴あり、北東コーナーから中央にかけて土器多い、主軸西へ20度
	1-1号方形周溝墓	U-7	—	—	6.72(東西)	6.96(南北)	0.3	遺物は、土器小片わずか、南北軸東へ8度
	2-1号周溝墓	V、W-7、8	長方形	V字	12.9(南北)	10.09(東西)	0.45	長軸がやや西へ傾く、北端は、一部排水溝で深る、南北軸西へ17度
	2-2号周溝墓	V、W-8-10	台形状	V字	11.0(南北)	10.5(東西)	0.2	北西コーナー付近に、供献土器あり、南北軸西へ3度
2-3号周溝墓	T、U-8、9	長方形	V字	8.6(北西)	7.5(北東)	0.5	東コーナーの北と南に、供献土器あり、南北軸西へ35度	
3 ・ 4 区	SD438	F-15、16	直線	逆台形	3.5	1.16	0.58	SF431、SF427の周、土器少量出土
	SD448	F、G-15、16	ゆるやかな曲線	不整形	12.0	2.5	0.2	土器多量出土、北端は、底が立ちあがってきえる、南端は、調査区外へのびる
	SD449	F、G-13	直線	U字	5.0	0.6	0.24	土器少量出土
	SF411	C-16	隅丸方形	コの字	1.86	1.55	0.81	中央北よりに方形に組んだ板状残存(0.5mの方形)
	SF412	C-16	楕円	逆台形	1.7	—	0.79	SF411に切られ、SF413を隔り込む、土器少量出土
	SF413	B、C-16	不整形	U字	2.25	—	1.1	遺物、土器多量出土
	SF416	C-13	楕円	コの字	1.48	1.12	0.18	土器ごく少量出土
	SF417	C-14	楕円	逆台形	1.5	1.08	—	土器少量出土
	SF418	C-14	円	逆台形	1.25	—	—	SF417に切られる
	SF419	B-13	楕円	すり鉢状	2.6	2.12	0.83	炭層あり、土器多量出土
	SF420	B-14	楕円	U字	2.32	1.8	0.68	焼土ブロックあり、土器少量出土
	SF421	B、C-16	円	U字	1.16	—	0.33	土器少量、SD403に切られる
	SF422	C-16	楕円	コの字	—	—	0.6	土器多量出土、底に焼土層あり、SF425、SF423、SD403に切られる
	SF423	C-15、16	円	U字	2.5	—	0.43	土器少量出土、SF404、SF411に切られる
SF424	C-15、16	—	—	—	—	—	周囲のSFに切られる、一部残存、土器少量	

表2 新堀遺跡古墳時代遺構一覧表(2)

区	遺構名	グリット名	形態		規模(m)			備考
			平面	断面	長さ(長径)	巾(短径)	深さ	
3 4 区	SP425	C-16	—	—	—	—	—	周囲のSFに切られる、一部残存、土器ごく少量
	SP426	C-16	円	—	0.74	—	0.11	SD401に切られる、土器ごく少量
	SP427	F-16	隅丸方形	逆台形	2.64	—	0.7	西側に段をもつ、壺状土器、手捏ね土器出土
	SP428	D-15	楕円	逆台形	0.8	0.74	0.09	破片少量
	SP429	B-15	楕円	U字	1.66	1.23	0.76	土器少量出土、炭灰土、白色粘土混入
	SP430	C, D-15	楕円	逆台形	—	1.2	0.37	土器ごく少量、SD402に切られる
	SP431	F-15	円	U字	3.04	—	0.85	土器少量出土
	SP435	E-14	楕円	逆台形	2.72	1.6	0.75	土器少量、炭化物の層あり
	SP437	D-16	隅丸方形	逆台形	2.3	0.76	0.17	細長い土坑、遺物なし
	SP438	D, E-13, 14	円	コの字	1.32	—	0.22	土器少量出土
	SP439	E-15	楕円	V字	—	0.95	0.33	遺物なし
	SP440	E-15	—	コの字	—	1.75	0.32	
	SP441	D-16	楕円	U字	1.62	1.24	0.24	破片ごく少量出土
	SP442	D, E-16	—	コの字	—	1.52	0.3	土器ごく少量出土、調査区外へのびる
	SP443	E-16	不整形	V字	1.02	0.84	0.31	
	SP444	E-16	卵型	V字	1.46	1.1	0.22	
	SP445	E-16	楕円	U字	1.32	—	0.32	蓋、高坏、他少量出土、SF444に切られる
	SP446	E-16	円	V字	0.93	—	0.28	P527に切られる
	SP447	E-16	楕円	逆台形	1.58	—	0.67	断面中間に段あり、土器ごく少量出土
	SP448	E-16	—	—	—	0.85	0.3	土器ごく少量出土、P527に切られる
	SP449	E-15	楕円	逆台形	1.5	1.02	0.28	
	SP450	D, E-15	楕円	コの字	2.85	2.2	0.44	土器少量出土、灰層と焼土層発達
	SP451	F-16	楕円	U形	1.46	0.84	0.12	土器ごく少量出土
	SP452	D, E-15	円	逆台形	1.16	—	0.49	土器少量出土、炭化物層あり、SF550を覆り込む
	SP453	D-16	—	—	—	—	0.38	土器少量出土
	SP454	E, F-15	楕円	V字	—	1.95	0.71	土器少量出土、試験坑に切られる
	SP455	C-13, 14	楕円	逆台形	—	0.7	0.23	土器ごく少量出土、SF416, 417に切られる
	SP456	E-15	円	逆台形	1.83	—	0.28	土器ごく少量出土、SF439, 440に切られる
	SP457	E-15	不整形	U字	1.96	1.66	0.82	土器少量出土
	SP459	D-13	円	U字	0.44	—	0.13	壺破片

表2 新堀遺跡古墳時代遺構一覧表(3)

区	遺構名	グリット名	形態		規模(m)			備考
			平面	断面	長さ(長径)	巾(短径)	深さ	
3 ・ 4 区	SF463	E-13	楕円	すり鉢状	0.66	0.56	0.25	土器埋納土坑
	SF464, 465	E-14	不整形	逆台形	4.2	2.1	1.1	本床は、2つの土坑、土製玉模造品、土器少量出土
	SF466	G-16	円	U字	—	1.53	0.55	土器少量出土、南側を調査区排水溝で切られる
	SF467	E-13	円	すり鉢状	1.02	—	0.19	埴、壺、壺出土
	SF468	E-13	楕円	U字	0.69	0.48	0.14	大小の壺、埋納土坑少
	SF469	E-13	円	—	0.34	—	0.09	鉢一箇体出土
	SE403	C-16	円	深いV字	2.68	—	2.37	土器2個体と土製勾玉を埋納、崩壊のため土層厚なし
	SB401	C, D-13	長方形	—	5.52(南北)	4.9(東西)	—	柱穴、坑掘坑に切られる、主軸は、西へ37.5度
	SB402	D-14	隅丸方形	—	5.3(南北)	5.55(東西)	—	主軸は、西へ23.5度
	SB403	B, C-14, 15	—	—	—	—	—	壁跡のみ検出
	SB404	B-14, 15	—	—	—	—	—	壁跡のみ検出
	SB405	C, D-13, 14	隅丸方形	—	7.4(南北)	7.5(東西)	—	柱穴、炉検出、土器少量出土、火災住跡か、南側 SB402 に切られる、主軸は西へ36.5度
	SB406	D-14	—	—	5.8(東西)	—	—	大部分 SB402 に切られる
	凹地	D, E-13, 14, 15	—	—	—	—	—	SB402, SB405の東側、自然の凹地に放棄された多量の土器出土
5 ・ 6 区	SD520	R-47	直線	—	—	—	—	土器多量、割り方未検出
	SF505	R-45	楕円	—	1.08	0.7	0.14	土器ごくわずか出土、B-2
	SF506	R-45	不整形	—	2.02	1.47	0.16	土器ごくわずか出土、B-2
	SF526	S-46	不整形	U字	1.4	1.0	0.24	炭化物混入
	SF532	Q, R-40, 41	円	すり鉢状	3.2	—	1.5	上部に炭層あり、中間に炭化物ブロック混入、土器多量出土
	SF534	Q-44	楕円	逆台形	1.82	1.13	0.69	土器少量出土
	SF535	Q-44, 45	楕円	浅いU字	4.9	3.8	0.39	下部に、炭化物多量混入の層あり
	SF537	S-46	方形	逆台形	0.89	0.51	0.59	土器わずかに出土
	SF538	S-47	楕円	浅いU字	1.92	1.56	0.48	土器少量出土、中間と最下部に炭層あり
	SF610	S-50	円	—	1.93	1.56	0.2	土器多量出土
	SF611	S-49	円	U字	1.96	1.32	0.35	土器少量出土
	SF612	R, S-50	円	U字	1.65	1.05	0.45	土器多量出土、炭化物、焼土混入
	SE504	R, S-41	円	V字	2.56	—	1.75	下部よりひょうたん出土、土器少量出土、炭化物、有機質混入
	SE513	R-47, 48	円	コの字	1.03	—	0.43	土器少量出土
	SE516	R, S-47, 48	楕円	V字	4.0	3.4	2.6	土器多量出土、上層と下層に炭層あり
	SB501	Q, R-44	隅丸方形	—	4.5(南北)	4.35(東西)	0.02	柱穴、炉、土器ごく少量出土、主軸西へ4.5度
SB601	S, T-49, 50	長方形	—	4.45(南北)	3.9(東西)	—	柱穴あり、炉は未検出、南・西コーナー付近、炭化物あり、土器多量出土、主軸西へ18度	

第2節 奈良時代の遺構

奈良時代の遺構が発見されたのは3・4区のみである。しかし、この時期の土器は各区から少量出土しており、特に埋没河川に挟まれた対岸に位置する1・2区では平安時代末と推定される溝SD102からも多くの須恵器の出土が認められる。従って奈良時代においても、新堀の自然堤防全体が人々の活動する範囲であったことは推定されるが、遺構としてその痕跡が認められるのは北地区の3・4区のみと云える。

3区の調査において、溝SD305から「山名厨」と墨書された須恵器高台環を発見した。これは、古代の遠江国山名郡におかれた「山名厨」を表すもので、この発見以後、他の墨書土器の確認は勿論、遺構検出においても山名厨関連の施設・建物の調査に主力を注いだ。調査の結果、全体的な印象は、郡衙またはその関連施設とするには貧弱な内容であったが、一定の成果をあげることができた。

発見された遺構の種類と数は、土坑1基、長く深い掘り方をもつ「山名厨」墨書土器の出土した大型の溝1条（SD305）、細長く幅の狭い溝4条、掘立柱建物跡6棟、櫓列2本であった。

図14に他の時期をも含めた遺構全体図をあげたが、出土遺物及び遺構の形態・配置から奈良時代と認定されるものを抽出し、図31の3・4区奈良時代遺構全体図を作成し、個々の遺構のデータについては表3・奈良時代遺構一覧表にまとめた。また、この表では記述できない掘立柱建物跡については本文で補う。

個々の遺構説明の前に、図31により奈良時代の遺構配置を概観してみたい。表3に示したようにSD305は調査区の北西端をかすめるように走り、両端が調査区外に延びる。各掘立柱建物跡は4区に集中し、SD305と最も近いSH403の間隔は約30mの距離がある。またSH404を南北に横切り、細長い溝が認められ、その東、SH406付近にも細長い溝が走る。また土坑SF405は、1基のみ西に隔絶しており、ちなみにSH402とは約33m離れている。確認された距離は短い櫓列も2本あり、SH401とSH402の間、SH405の南6mの位置にそれと直交する方向で並ぶ。また掘立柱建物群は、顕著ではないが傾向として、東西が長いL字状の配置が認められる。各々の間隔は、おおよその距離でSH401・402が1.5m、SH402・405が2m、SH401・405が3m、SH402・403では6m、SH403・404は4m、SH404・406は3mを測る。

このように各々の遺構は掘立柱建物がある一定の範囲、東西40m南北25mにまとまっているが、広い調査区のなかでは遺構が少なく、貧弱な内容といえる。このことは、調査区外の東西に延びる区画溝と推定したSD305の広がりや考慮すれば、容易に首肯されるであろう。

主な遺構の方向は表3に示したが、建物跡・溝等に並行・直交の関係はなく、掘立柱建物が類似した方向をもっていることが指摘される程度である。

SD305（図32、図版17・18）

図32は、中央にこの溝の位置をトーンで示し、その上下に土器出土状態を表している。F-11グリットを境に上が東、下が西の状態を示し、両者は左端と右端が重なる。左に土層断面図を掲げた。溝は長さ60mを調査し、幅1m-1.5mを示し、一部幅の広狭もつが、ほぼ並行している。断面は逆台形で、底の凹凸もなく、ほぼ一定のレベルを示している。土層観察の結果、帯水・流水の痕跡はなく、自然堆積の土層を示していた。

この溝から出土した土器は須恵器（図72-74）、土師器（図75）であり、須恵器が圧倒的に多い。この溝全体から出土するが西半は僅かで、北半に集中し、特に図示した範囲に密集する状態であった。この土器群は土層図のみでみると、覆土中のほぼ同一のレベルで、底からは約0.4m-0.5m上にあり、従って、これらは溝がある程度埋没した段階に投棄された土器群といえる。土器には完形品はみられず、細片または破片で、接合された個体も多く認められた。以上のような出土状態からみて、この溝の土器群は投棄

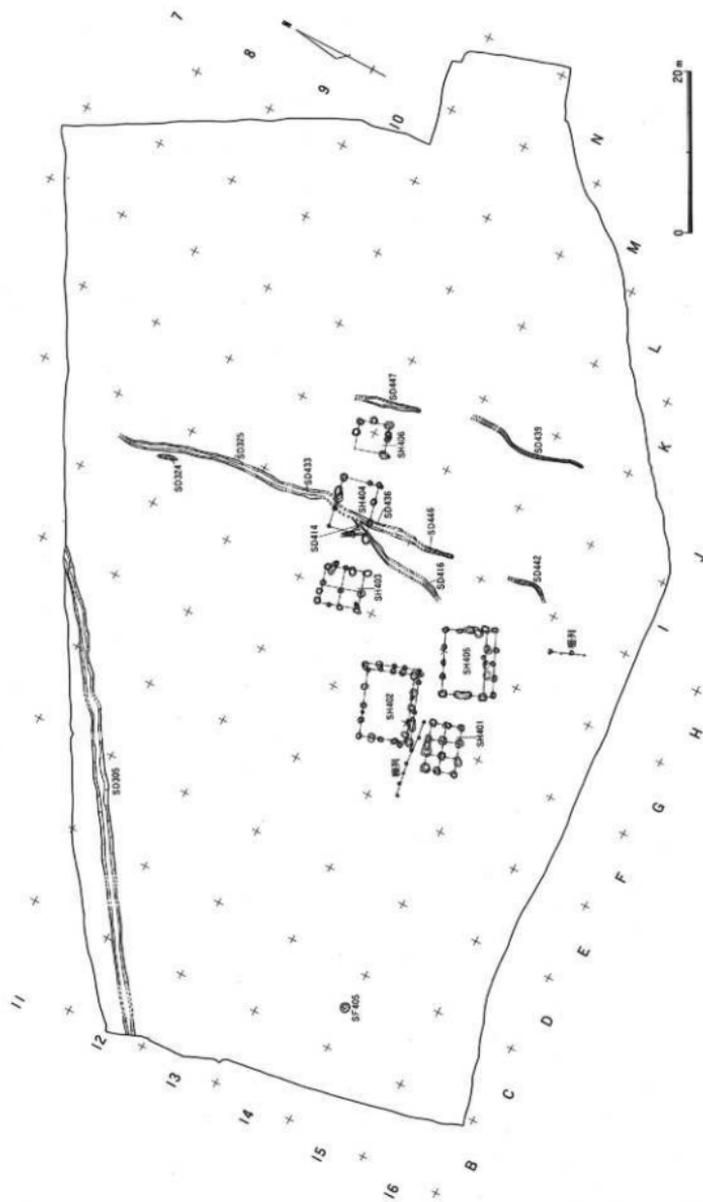


图31 3·4区新石器时代遗址全图

されたものであると判断した。かつ投棄の段階で、溝はある程度埋没し、おそらく遺存状態の悪い有機物等も少量みられることから、所謂ゴミ捨場のような機能をも考慮すれば、投棄された時期で溝が本来の目的を果たしていたか否かが、大きな検討課題であった。しかし、この溝の底からは土器の出土はなく、その規模・断面形態からみて区画溝であろうと推定するにとどまった。

なお、この溝の西側には、図82-19の灰軸陶器壺が単独で出土しており、中には火葬骨が納められていた。

SD324

SD325の北端西にある短く浅い溝で出土遺物と方向から奈良時代の溝と判断した。

SD325・433・436・446・414・416

全長約44mを測る細長い溝で、方向はおおよそ西に6°振れている。またSD436から西南に分岐したSD414・416も認められる。この溝は、南へ約8m離れたSD422とも方向が一致し、延長線上にもあることから同一の溝かもしれない。

遺物は、土器のみが僅かに、SD325・416・436から出土している。

同じ溝が異なる遺構名で煩雑であるのは、異なる調査区であること、農道の除去後新たな遺構名をつけたことによる。表3では個々に表記してある。

SD439・447

先述した溝と類似した形態・方向をもつ溝である。両者の溝は、約7mの間検出されていないが、基本的に同一の溝と考えられる。SD447から土器が僅か出土する。

掘立柱建物跡（図32～35、表3）

建物配置とか相互の関係等は略略で述べた。ここでは建物個々についての気付いた点をあげることとする。また出土遺物は殆どなく、柱穴に小破片がみられたが、時期を判断する資料にはならなかった。従って、この建物跡の年代については、主として形態・規模から奈良時代と推定したものである。

柱穴の検出にあたって、西寄りの3棟（SH401・402・405）は覆土の色調がやや黒かったが、逆に東寄りの3棟（SH403・404・406）の覆土は基盤のⅢ層と類似していた。わずかに黒い色調の覆土があり、それを根拠にして検出した。

また表3に示した東西南北の長さは、掘立柱建物各辺の断面図の交点で求めた数値であり、SH403以外の5棟は、各辺の柱穴が直線状に並び、かつ各辺が直行するという二つの前提を満たすことを条件に求めたものである。このような条件を設定し柱穴間の均等性を検討したが、総柱建物のSH401が比較的一定の数値に集中するのを除き、他は柱穴間の不均等さがあらわれた。4辺のうち、西辺と南辺に5本の柱根が残存していたSH405の検討においても、柱根間距離の均一性はある程度認められるが建物構造に問題を残した。また柱根は3種類の樹種が使用されるという結果が、山内文氏の同定により得られている。以下に各建物の説明をする。

SH401（図32）

南北2間、東西3間、総柱の建物で、各辺の長さは南北3.78m、東西5.77mを測り、今回発見された建物のなかでは柱穴の配置及び形態が最も規則的である。東西南北各辺の柱穴間を試算すると、西辺と東辺は3.78m、これを柱間で割ると平均値1.89mとなる。断面図の交点間は北半が1.89m、南半が2.0mで平均値に近い数値が得られる。同様に3間の北辺と南辺では全長5.77mを計測し、その柱間の平均距離は1.91mとなり、それぞれの柱間距離は、西から1.90m、1.83m、2.04mというように平均値からみて約0.1mの範囲に柱が配置されていたことが類推される。かなり等間隔に柱穴が掘られた建物であるといえる。

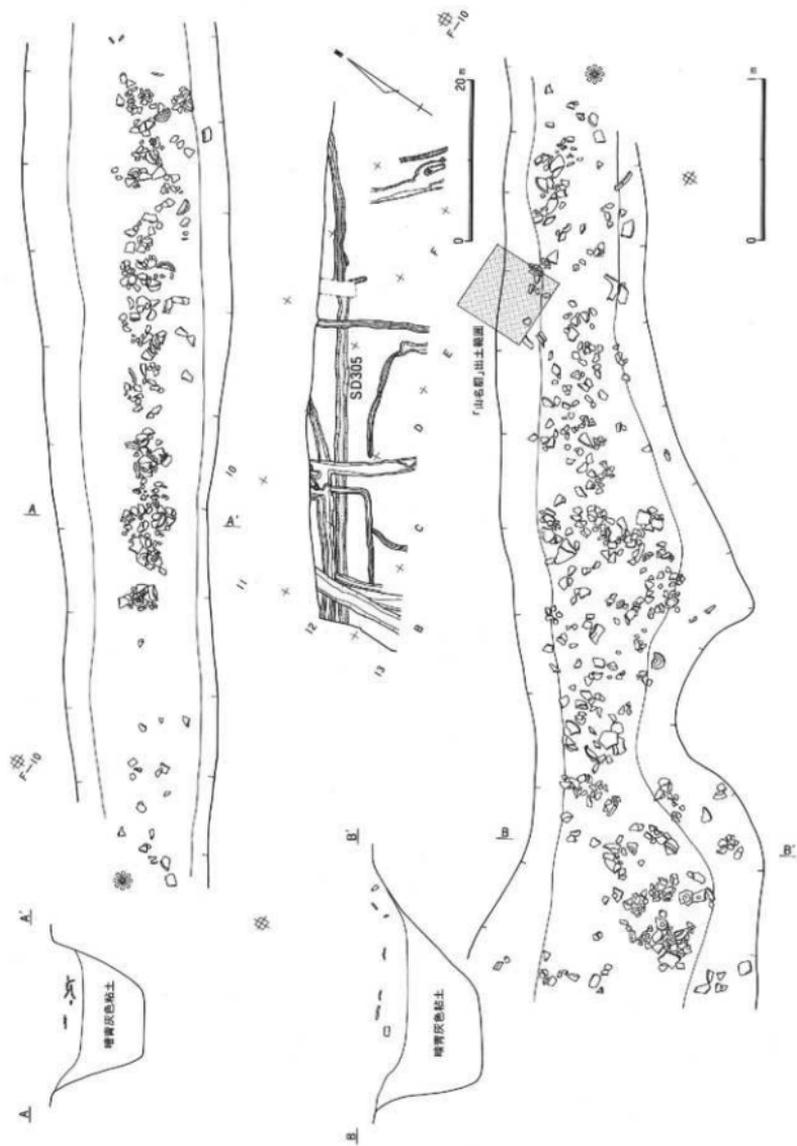


图32 3区奈良时代清SD305土器出土状图

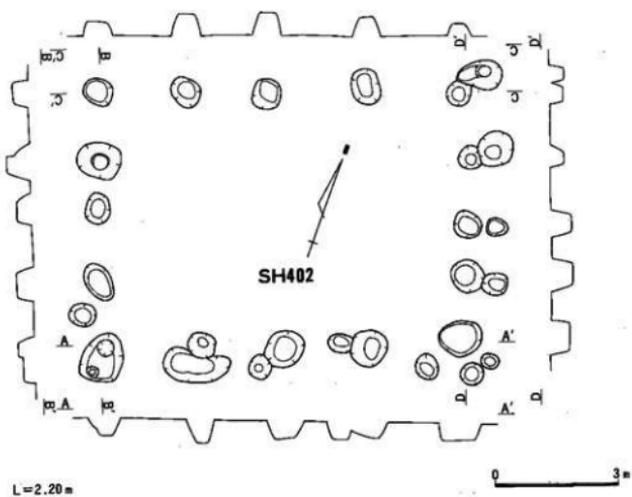
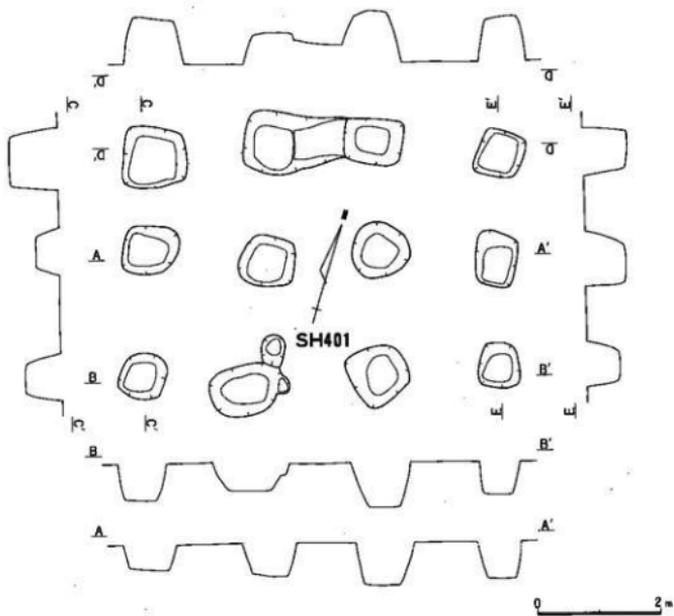


图33 4区奈良时代独立柱建物跡 SH401・402 实例图

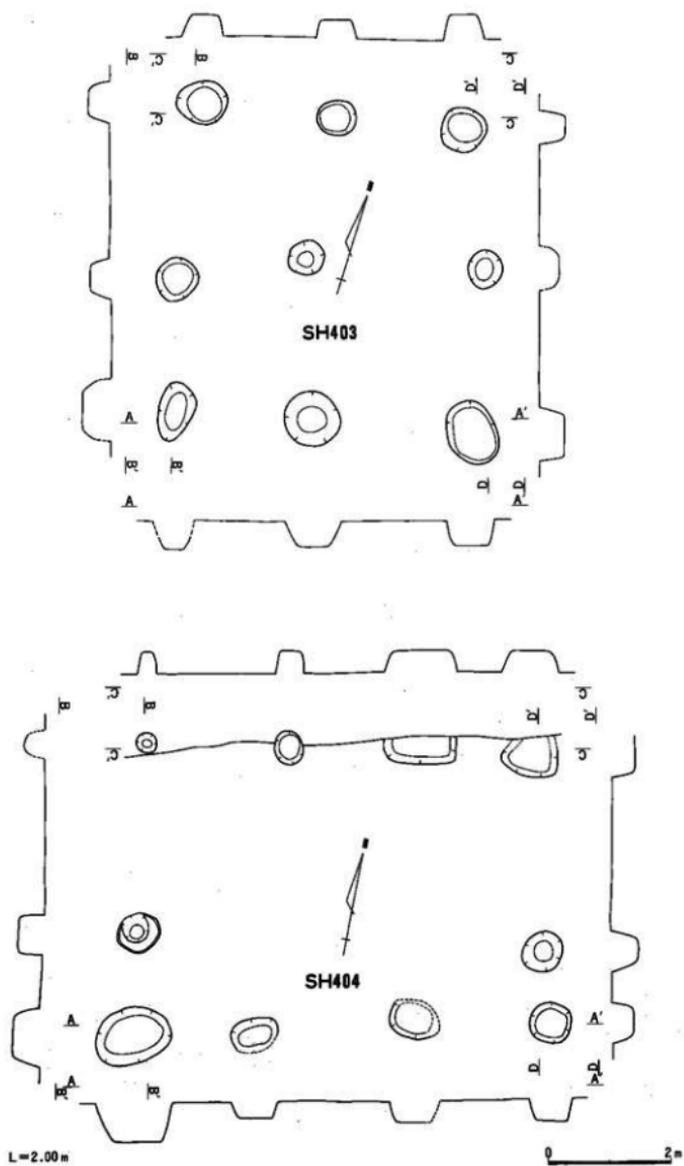


图34 4区奈良時代獨立柱建物跡 SH403・404 実測図

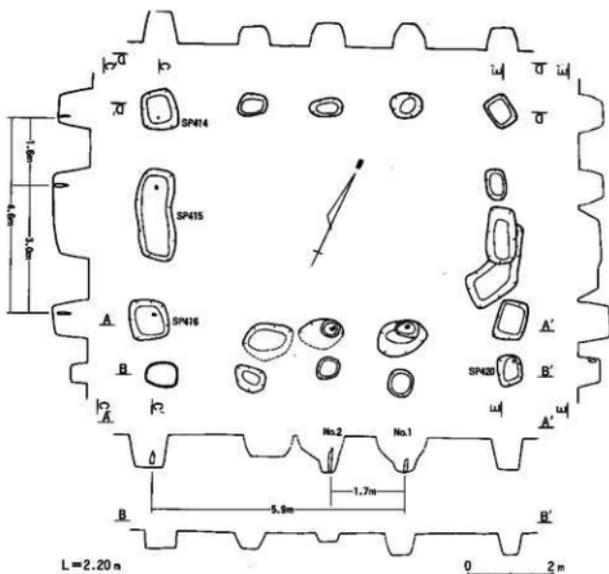


図35 4区奈良時代獨立柱建物跡 SH405 実測図

掘り方は正方形に近く、なかには隅丸方形や、楕円形に近く掘られているものもある。規模は一辺が1m前後であるが、南辺の両端の柱穴はやや小さく一辺が0.75m前後を計る。これらは、一定の形態と規模をもち、調査したなかでは最も整った建物といえる。この建物のみ土器が柱穴から出土している。

SH402 (図32)

南北3間、東西4間の建物であり、東辺と南辺に廂状の掘り方をもつ。西辺と東辺のそれぞれには4間分に相当する5個の柱穴が認められるが、中央の柱穴が西辺では北寄り、東辺では南寄りに位置し、それぞれが対応する位置にないことから中央のピットは除き、西辺と東辺は3間であろうと推定した。

この建物は本体を構成する柱穴の他に、東辺と南辺にそれらと平行していた廂状のピット列が認められたが、これらは本体の延長上にないため、建物本体の構造を検討する前提から除いた。このピット列は、本体と0.5m~0.6mと近接しており、位置関係からみてまったく無縁のものでなく、建物建築前後の事情により掘られたものと推定される。

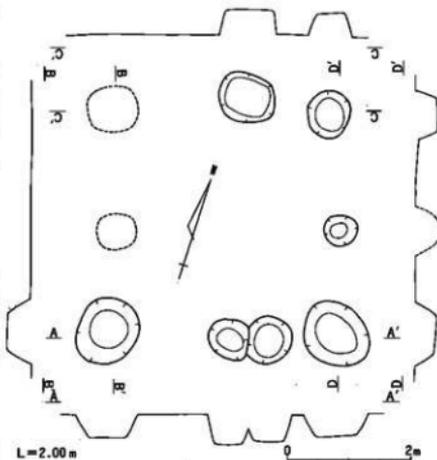


図36 4区奈良時代獨立柱建物跡 SH406 実測図

表3 新堀遺跡奈良時代遺構一覧表

区	遺構名	グリット名	形態		規模(m)			備考
			平面	断面	長さ(長径)	巾(短径)	深さ	
3 ・ 4 区	SD305	B-G-9-12	—	逆台形	60.0	1.55	0.77	東北東方向に東西、共にのびる、一括作業の痕跡器多量出土、東へ55.5度振れる
	SD324	H-9	—	コの字	2.5	0.49	0.04	土層ごく少量
	SD325	H-9,10,11	—	U字	44.0(全長)	1.04	0.29	長さは、SD446も含めた、黒鹿野、土層器出土
	SD414	H-12	直線	逆台形	16.0	0.81	0.16	SD446 分岐してSD416へ続く
	SD416	H-13	直線	逆台形	16.0	0.66	0.16	SD414と同じ溝、高坪出土
	SD433	I-11	—	U字	44.0(全長)	0.96	0.25	SD325と同じ溝
	SD436	H, I-12	—	逆台形	44.0(全長)	0.69	0.17	SD325, SD446と同じ溝、土層ごくわずか出土
	SD439	J-13	ゆるやかな曲線	U字	14.0	0.59	0.17	
	SD442	I-14	ゆるやかな曲線	U字	4.0	0.54	0.08	中央より南ゆるやかにカーブする
	SD446	H, I-13	直線	逆台形	44.0(全長)	0.54	0.07	SD436と同じ溝
	SD447	J-11, 12	直線	U字	7.0	0.95	0.35	土層ごくわずか出土
	SF405	W-14, 15	円	逆台形	1.18	—	0.63	須磨器少量出土、焼土炭火物出土
	SH401	F, G-14	2間×3間総柱	—	3.78(南北)	5.77(東西)	—	一部に柱痕残る。掘方は方形、西へ16.5度振れる
	SH402	F, G-13, 14	4間×4間 東と南に庇あり	—	5.78(南北)	8.4(東西)	—	掘方は円形にちかい、西へ19.5度振れる
	SH403	G, H-12	2間×2間総柱	—	4.92(南北)	—	—	掘方は円形、西へ13.5度振れる
	SH404	H, I-11, 12	3間×3間	—	4.52(南北)	6.44(東西)	—	柱穴の間隔不規則、柱穴の規模一定しない、西へ11.5度振れる
	SH405	G, H-13, 14	3間×4間	—	5.16(南北)	8.05(東西)	—	南に庇あり、掘方は方形、西へ22.5度振れる
	SH406	I, J-11, 12	2間×2間	—	3.67(南北)	3.64(東西)	—	掘方は円形、西へ17.5度振れる
	SA401	F, G-14	—	—	—	—	—	SH401, SH402の間
SA402	H-15	—	—	—	—	—	SH405の南側7m	

柱間の全長は南北5.78m、東西8.40mであり南北方向は西へ19.5°ふれている。規模では調査した6棟中最大の大きさである。個々の柱間は両辺ともに均一でなく、3間と推定した南北方向の西辺と東辺をみると、両端が1.50mに対し、中央は2.80mと長くなっている。また4間の東西方向では、西寄りの2間と東寄りの2間が異なる傾向にあり、西寄りには狭く1.95m程、東寄りは0.30m程広く2.30mを計測する。このようにSH402は東西・南北方向ともに柱穴間が均一でないという特徴が指摘される。

柱穴の規模・形態は、先述したSH401と比較すると小型で0.6mから0.7mのものが多く、楕円または円形に近い形態が最も多く認められる。

SH403 (図33)

これは、2間2間の総柱建物と推定したもので、規模は表3に述べたが、南北長4.92mに対し、東西長の北辺と南辺の長さが異なる。北辺は4.75m、南辺5.2mで、南辺が0.4mから0.5m長いことが観察される。この建物のみ断面図の交点が直行しない例である。また個々の柱穴間も一定の間隔でなく、柱穴の形態は円形に掘られており、規模は小さいもので0.7m、大きいものでは1mを計測し、各々の柱穴は一定の規模をもっていない。これは小型の簡易な建物でないかと推定される。

SH404 (図33)

北側を調査時の排水溝の設定により、北辺の柱穴の一部を消失する。また西辺と東辺でも未検出の柱

穴があったが、3間3間の建物と推定した。今回発見された建物では中規模の大きさをもっている。個々の柱穴間は等間隔でなく、柱穴の形態は円形、個々の規模は0.6m～1.1mで変化に富み、先のSH403と類似している。南北辺は西に11.5°振れている。

SH405 (図34)

比較的大型、南辺に廂のつく3間4間の建物で、南北辺5.16m、東西辺8.05mを測る。遺構の遺存状態も良好で、特に西辺と南辺及び廂の東端に計6本の柱根が残されていた。また西辺には布張り状に柱間が連続する掘り方、東辺には緩い「く」の字状の掘り方も認められた。南北辺の方向は、西に22.5°振れる。

柱穴間の距離を残存するものうち廂を除いた5本の柱根で検討してみた。南辺には南西コーナーのSP416を含む3本の柱根があり、ここから東端のNo1までが5.90m、No1からNo2が1.7mの間隔を計測した。この1.7mを柱穴間距離の一単位とし、南辺の間数(4間)を乗ずると6.8mとなる。しかし南辺は推定で8.05mを計測し、その平均柱間距離は2mということになる。一方の西辺ではどうか。西辺は南西コーナー SP416と北西コーナーのSP414を含め4本中3本が残存し、これから得られる西辺の長さは柱根の芯々で4.6mを計測する。柱間の一単位が判明する北西コーナーのSP414とSP415では、1.6m、その隣は残存していないが、南西コーナーのSP416とSP415は3.0mの間隔が認められる。以上のような検討により、西辺では柱間の一単位は1.5mから1.6mという数値が得られる。この数値は、柱根の距離を根拠にしたもので、かなり事実を反映しているといえる。しかし、西辺は3本の柱根が直線に並ぶのに反し、南辺の3本は直線上に位置しない。従って先述した南北辺と東西辺はこの柱根間を根拠として計測したものではないことをお断わりしておく。柱根間の数値はこの建物に限っての参考値として提出してみた。

柱根の樹種は表7のとおりイヌマキ2本、チョウジザクラ3本、マツ1本という多様な木材使用という結果が得られている。

掘り方の形態は方形を基本とし、一部に楕円に近いものもある。特に四隅の柱穴は整った方形を呈している。規模は0.7mから1.0m程度であり、傾向としてはSH401より小さく、SH402より大きい掘り方といえる。

なお廂の列と建物本来の南辺は推定で約1.3m程の間隔をもつようである。

SH406 (図35)

最も東に位置する2間2間の建物で、6棟のうちでは最小である。南北は3.67m、東西3.64mを測る。西辺の柱穴は覆土が基盤層と極めて類似するため未検出であった。

掘り方の形態は円形に近く、規模は0.8mから1.2mを計測する。この建物はSH403とはほぼ同じような構造の簡易な施設と推定される。南北辺の方向は西へ17.5°傾く。

棚列

棚列はSH401・SH402の間とSH405の南の2箇所で見出された。前者は、長さ9.5m、7つの柱穴からなり、その間隔は均一でなく、西の4つの柱間は1.2mから1.5m、東の4つの柱間は1.8mから2.0mであった。後者は長さ4.5mを測るが、これは棚列の一部であろうと推定される。両者ともに掘り方は円形で、径0.3mから0.5mと小さく、その規模からみて間仕切りのような機能を類推させる。

第3節 平安時代末～鎌倉時代の遺構

平安時代末から鎌倉時代の遺構は調査区の全体におよんでいるが、なかでも新堀集落のある自然堤防縁の3・4区と5・6区に遺構分布が集中する。とりわけ、5・6区では古墳時代・近世の遺構数と

比較してもこの時代が主体を占めている。

3・4区と比較して、埋没河川を挟んだ対岸に位置する1・2区は、ピットを除いた他の遺構分布は粗であり、遺構の把握は十分にできなかった。時期の認定については、遺構の分布状況から配置等で類推する根拠がないため、すべて出土した土器から判断し、無遺物の遺構は除外した。

この時期の遺構全体図は各区の古墳時代遺構で示したものをを用い、個々の遺構の詳細については表4遺構一覧表に譲ることとする。

平安時代末～鎌倉時代の遺構は、溝・土坑・井戸・掘立柱建物が発出された。以下に各区における遺構について、説明を加える。

A 1・2区 (図5)

この調査区の遺構の分布は希薄で、また広範囲に広がっている。まづ、溝は北東端の長い大型のもの2条 (SD101・102) と、2区2号周溝墓の西側に浅い不規則な溝 (SD204・205・206・209)、調査区南東端にSD213、単独の土坑・井戸もみられるが、中央よりやや北東に時期不明遺構も含まれた土坑・井戸群 (SF205・206・SE202)、ピットは粗密があるものの規則性は認められず全体に広がる。以下に溝・土坑・井戸について説明する。

溝

SD101・SD201

南のSD201に連続する溝で、調査した全長27m、幅が0.85mと狭いが、方向は東に近接するSD102と並行し、調査区外に延びる。溝の方向は西に36°ふれている。遺物は僅かに出土したのみである。

SD102

調査区のなかでは最も多量の土器 (図76) が出土した大型の溝で、1区東端で13m程を調査した。幅は2.5mと広く、断面は浅い「コ」の字状を呈する。

遺物はすべて土器であり、底に接した土器は少なく、多少浮いた状態であり、溝が埋没をはじめた段階から投棄されたと思われる出土状態であった。他地区でいえば、4区SD411・412と同じ状況といえる。このなかには奈良時代の須恵器、土師器、灰釉陶器を含み、むしろ山茶碗が少ないという状況であったが、最も下層の土器をもって鎌倉時代と考えた。

この溝の方向は、隣のSD101と並行であれば、この2条は3区SD305と直交の関係となる。両者の時期差は当然であるが、しかし、区画の溝とするなら長期間にわたって区画が維持されたことも推定される。3・4区の記述では触れなかったが、SD305の西端における灰釉陶器壺蔵骨器の発見はそれを暗示させるものかもしれない。平安時代末頃の時期まで区画の境としての認識がされていたことを示すのであろうか。

SD204・205・206

調査の段階では、分岐点・幅の変化で異なる名称を用いたが、検討の結果同一の溝と考えた。水田造成の削平を免れた部分であり、0.3m～0.4m程検出面が周囲より高く、SD101・201・102とは掘割された深さを異にする。

土器は投棄された状態で、SD204と呼んだ最も幅の広い溝に集中してみられ、山茶碗の他に古墳時代の土器を出土している。

SD209

SD204・205・206と並行し、ほぼ東西に走る溝で、規模・形態等状況は類似している。土器は小破片が少量出土したのみである。この検出面の高い台上の部分は、当初遺構の残りが良好と推定したが、結果ではたいした成果はなかった。

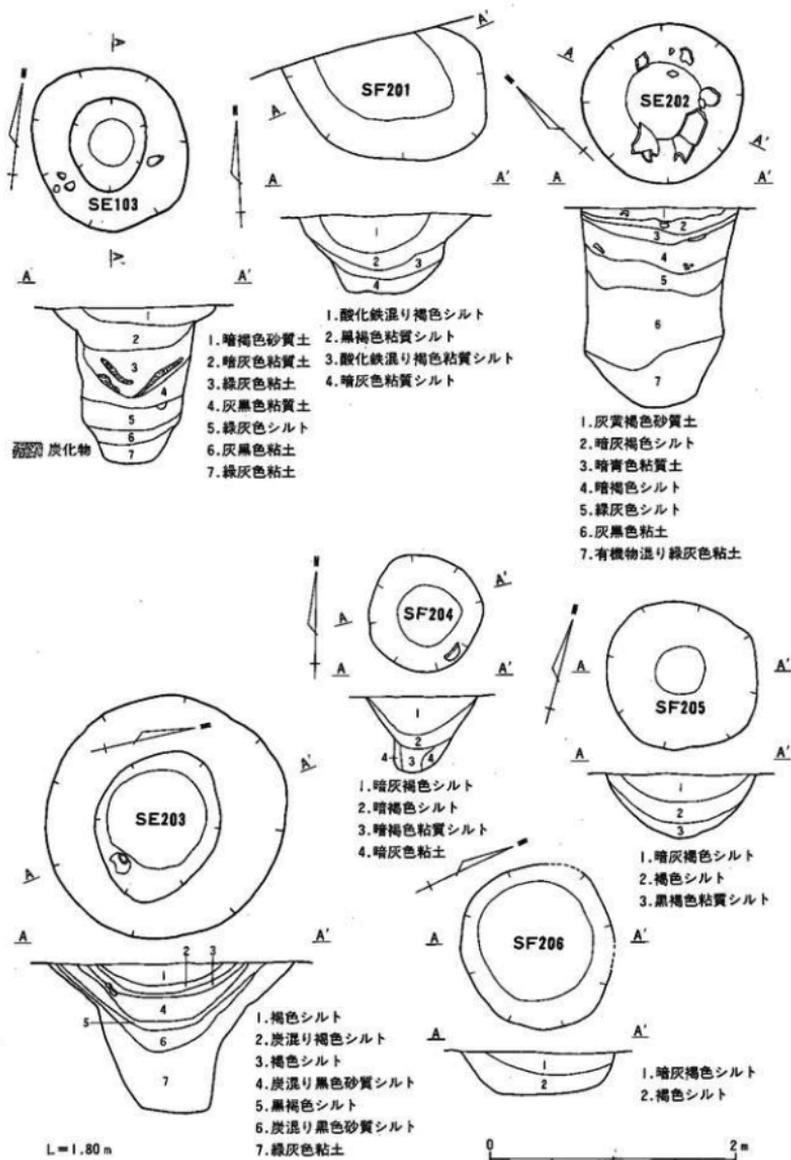


図37 1・2区平安時代末～鎌倉時代土坑・井戸実測図

土坑 (図37)

土坑は1・2区から5基が発見されている。このうち4基を図示した。これらの土坑は、SF205・206が井戸・無遺物の時期不明土坑とともに、W-10グリット北東に集中するのを除き、散在する状況であり、同時期の遺構も確認されていない。多くのピットは所属する時期が確定できないが、調査での所見ではこの時期にふくまれると推定した。しかし、このピットを遺構にふくめても尚、その分布は希薄である。SF203から小椀(図74)がまとまって出土する他は土器の出土は少なく、性格等は不明である。

井戸 (図37)

井戸は4基みられたが、調査区の東に偏り、SE102・103が約3m程離れてW-7・8区にあり、さらに南に20mにSE202、さらにSE203は26m南である。このように井戸も土坑と同様散在的な分布を示し、わずかにWX-10とSE101・103が集中化傾向にあることが認められる程度である。

これらの井戸は、土器を多量に伴うSE102・202とか、炭化物層が形成されるSE103、多量の炭が混入するSE203等があり、これら以外の有機物等も多く混入している。

深い井戸状の遺構ではあるが、枠等の施設はなく最下層が砂礫でもないため、明確な機能・用途は不明である。この遺構の使用後、二次的な用途として不要品を廃棄するために用いたといえるだろう。西の3区でも不用品を廃棄したとおもわれる土坑がある。しかし、井戸状を呈するものは認められなかった。

B 3・4区

平安末〜鎌倉時代の遺構はこの調査区の全域に広がっている。特に、3・4区の中央から東半は殆どこの時代の遺構である。

記述にあたって、表4に遺構個々にデーターをまとめ、図38にこの時代の遺構全体図をあげた。所属する時期の判断は溝については、出土土器及び配置・形状から、土坑は明確に土器を伴ったもののみとした。またピットは土器を伴ったりするものはなく、また柱根が残されていても、建物として認定する配置も認められず、明確な時期判断ができないことからここでは除外した。しかし、5区における掘立柱建物の存在や、覆土の類似点等からみて、おそらくこの時期に所属するものであろうと思われる。

個々の記述は表に譲り、主として遺構の配置に関する所見をまとめてみた。

溝は全体的な広がりをもつに対し、土坑は東に偏って配置されている。また先の1・2区でも述べたが井戸とした深い掘り方をもつ遺構はここでは検出されていない。

溝は調査において、分岐点・調査区ごと・直角に曲がる部分等で便宜的に個々の名称を付けた。従って煩雑とした状況を呈し、表4では46条もの溝に分けて記述されている。しかし、これらは大まかに三群の溝からなると推定される。以下にそれを整理してみる。

I群—SD406とそれにはほぼ直交する関係の西の溝群

北から、SD311・310・405からなり、SD403はそれらより北に振れて南で90°以上の曲がりをもって西に向かう。ちなみに、SD406の方向は西に28.5°傾く。

L-M-11・12グリットのSD425・429・431は、西の溝群との方向の類似が顕著であり、両者は約60m以上離れるが同一の関連する溝群と考えたい。

II群—中央の曲線を呈する溝群

これらは、調査区北西から南東方向に配置され、2箇所緩やかに大きく曲がる。北はSD306・309の二条であるが、E-12グリット付近かSD309が分岐し、三条の並行する溝となり、I-12グリットで直線を呈する溝群と接する。検出時の精査において、溝相互の切り合いの認識は困難を認めたため、曲ってきた溝が直線となり、南に延びるのか、または接した箇所で止まっているのかは判然としなかった。調査では一応曲ったこれら三条の溝群は、直線の溝群と接して止まるものと理解した。しかし、SD407

のように直線群とは交わらない溝も認められる。

Ⅲ群—東側の直線の溝群

全体的に西に60°傾く溝群であり、北端は検出できなかったが、南は調査区外に延びている。幅の広い部分 (SD301) とか、一条のみの部分 (SD323・428)、二条 (SD411・412) というように差をもつが、基本的には延長・接近して並行するため同一の溝群と理解した。そして、直交の関係もあり SD419・420 は西に向かい調査区外へ延びる。また北東側にも直交に近い溝 (SD302・426・315) が認められるが、幅が狭く、掘り方も浅い。主要な溝 (SD301・323・428・412・411・421) の方向は西への傾きが強く、約60°を計測する。

このように、配置・方向から三群の溝が抽出されたが、遺物は僅かづつ各溝に伴うが、特に多量に出土したのは東の直線群の南、SD412・411 からであった。しかし、これらは投棄された状態であり、付近にこれらを使用した施設等の存在をも類推され、本来これらの溝とか施設が機能していた段階以後投棄されたものと思われる。従って、溝の機能・用途の検討にあたっては、これらの土器は時期的な目安と位置付けられる程度である。

溝のなかで、特に大型で長期間機能するもの、たとえば用水路・排水溝・区画溝等は、自然の土砂の流入・埋没により、何回かの再掘削がされており、埋没の原因となる生活の不用品の溝への投棄は使用されていた段階では行なわれなものと理解したい。

この3・4区にみられる溝の配置は、ある一定の計画性が反映されたものであり、5区でみられるような屋敷等の区画とは性格を異にするものであろう。西と東の溝群は直角に近く曲がる傾向があり、かつ溝が幅広く大型であり、屋敷とは異なる施設の区画溝でないかと推定される。

一方、中央の緩やかに曲がる溝群は、地形の変化する位置に設けられており、一種の排水機能をもった溝と理解したい。SD406 あたりが、自然堤防の基盤層が下降する位置であり、それ以东はその後の河川堆積物とおもわれる土層がみられ、グライ化した地点にあたる。

土坑 (図39・40)

土坑は22基発見され、そのうち12基を図示した。形態は円・楕円・長方形等があり、断面形も「コ」の字・「U」字・逆台形というように変化に富む。また規模も多様で、最大径は SF315 で5m、最小径は SF305 の0.84mであった。規模の傾向としては2mを超える比較的大型のものが多い。

分布の特徴として、東への偏りが顕著であり、その在り方をみると、2基〜9基で構成される4つの群となっており、西からそのグループをみてゆくこと次のようになる。

I群—SF403・404(図40)

B・C-15・16グリッドにあり、SD403 が西に曲がるあたりに位置し、このうち SF404 は径2.38mの円で、古墳時代の土坑群を掘り込んでいる。南壁には焼土の塊が混入していた。土器は多量出土しており、炭化物も含んでいた。

SF403 は小型の土坑で、SF404 の約10m北に位置する。土器は少量出土し、4つの群のなかではⅡ群とともに、最も数が少なく、かつこの群は間隔が開いている。

Ⅱ群—SF406・407

G・H-13グリッド南側にあり、2基が近接し2m程離れている。この位置はⅡ群とした溝が緩やかに曲線を呈する地点で、SF407 が径1.9m、SF406 は1.06mでやや小型の土坑である。

Ⅲ群—SF301・303〜305・307〜310・313・314

H-J-8〜10グリッドにあり、東西南北20m程の範囲で10基が分布し、重複はみられない。形態・規模ともに変化に富み、円形を呈する SF301・307(図39)、長方形の SF303(図39)・SF314 や、規模では、長さ3.46mの SF303、小さいものでは1.0m前後の土坑まで様々である。

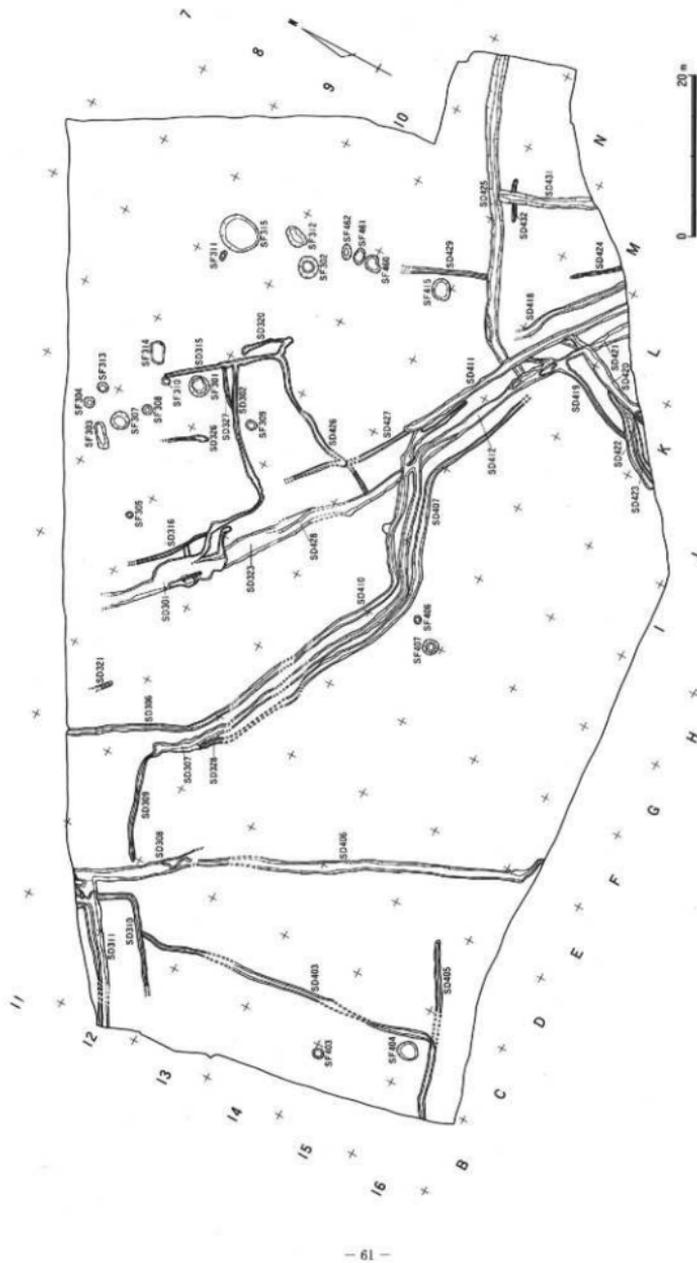


图38 3·4区平安时代末~鎌倉時代遺跡全体図

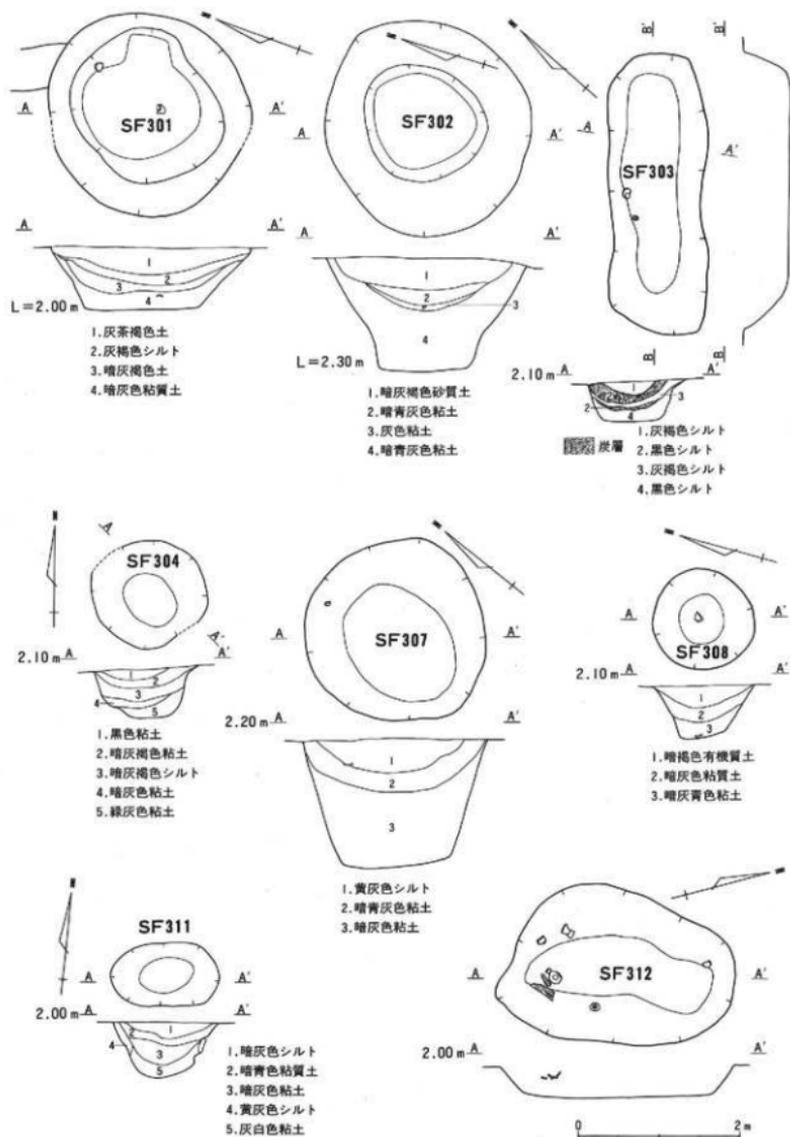


図39 3区平安時代末～鎌倉時代土坑実測図

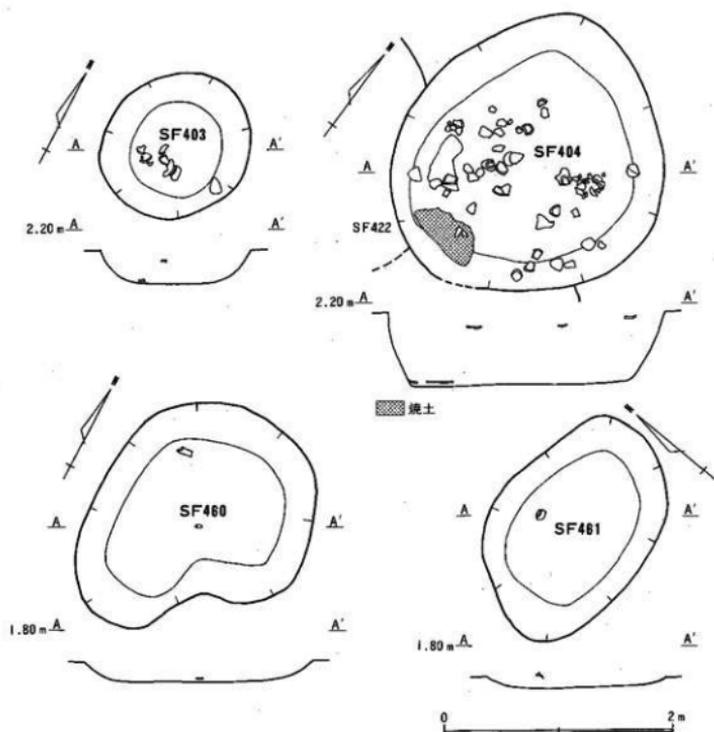


図4 4区平安時代末～鎌倉時代土坑実測図

Ⅲ群の配置は、SF305・309が西と南にやや離れ、他の8基は分布が密であり、南北15m・東西8mの範囲に集中している。またこれらの土坑は北北西方向に2列に並ぶようにも観察される。この方向はⅢ群の溝ともほぼ並行するものである。

個々の土坑は、土器の出土量の差はともなうが、多くに炭化物・有機物等の混入が認められる。図39に示した土坑でその状況を見る。

SF303は長方形を呈する土坑で、炭化層が2層認められ、特に上層は厚い。SF304は径が1.4mと比較的小型の土坑で、有機質物・炭化物・白色粘土を混入している。同じく、小型のSF308では炭化物の帯が土層中に確認された。このⅢ群の土坑の多くは土器片を含み、かつ混入物も伴っていた。

Ⅳ群—SF302・311・312・315・415・460～462

8基からなるⅣ群の大きな特徴は、円か楕円でほぼ同一な形態であること、直線状に配置されていることが指摘される。特に、SF460～462の3基は接近し等間隔で並ぶ。

最も大型のSF315は径4mの最大径の土坑であり、断面形は「コ」の字を呈し、底が砂層に達していたことから壁が崩壊し遺構図には図示してないが、多量の土器(図89)、木製品(図89-7～9)が出土し、植物遺体・炭化物等多くの混入物も認められた。

また、SF460～462は径が2m前後、深さ0.1m～0.2mでほぼ同規模のきわめて類似した土坑である。

図40に SF460・461 を図示した。

このように、3・4区の土坑は西に少なく、東に集中し、かつ東の土坑群が大型で覆土中に多様な遺物が含まれる。そして、土坑配置も東のⅢ・Ⅳ群では溝群との方向の類似性が指摘される。つまり、Ⅲ群が溝のⅢ群と、Ⅳ群が溝Ⅰ群及び、東端の SD425・429・431 と類似する点である。

3・4区の平安時代末～鎌倉時代の遺構の概略は以上であるが、これらを加味して全体的な様相を検討してみたい。ピットの多くは平安時代末～鎌倉時代に所属する可能性の高いことは先述したが、この前提でピットをこの時期に含めると、西側との差は明確になる。自然堤防である西側の様相は判然としないが、大きな区画の一部であろうと推定される。この範囲は溝Ⅰ群と土坑Ⅰ群で構成される。

東側の遺構群は次のようにまとめられる。溝Ⅲ群と土坑Ⅲ・Ⅳ群ではより水辺に近い環境が推定され、建物の認定はできなかったが、多くのピットと一部柱根を残すピットが集中すること、そして土坑には生活の不用品を破棄した様相があり、またそれらは溝の方向と類似し規則的に配置される。このような様相からして、頻繁に人が活動していた地域の可能性が考えられる。しかし、次に述べる5区の屋敷地と推定される遺構群との相違があり、それは祭祀を示す土坑及び、浅い土坑に食料としての貝等捨てた痕跡のないことである。従って、方形区画は後の削平により確認されないとしても、この東側は常時生活する地点でなく、例えば経済活動とくに利用された地域といえるであろうか。中間の溝Ⅱ群は西と東を区分する機能を持ち、かつ排水等の用途もあつたのでないかと類推される。

なお最後になったが、Ⅰ群の溝 SD460 は、調査区南にある現在の人家との境界に連続し、区画として長期間維持されている可能性も考えられる。しかし、他に根拠もなく気付いた事柄として指摘するに止める。

C 5・6区

5・6区は古墳時代をはじめ、近世をも含むが遺構の主体は平安時代末～鎌倉時代である。図41にこの時期の遺構全体図を示した。遺構は溝・土坑・井戸・掘立建物跡であり、表4でみるとその数は、溝23条、土坑15基、井戸11基、掘立建物跡6棟であった。溝は調査中、便宜的に個々に名称を付したので数が多くなっている。その後の検討の結果、同一の溝と認定したものがあつた、これらの見解をふまえて遺構の概略と性格・機能等について以下に述べる。

溝

溝は殆どが直線であり、方向は東西南北でそれぞれ並行・直交の関係にある。これらに該当しない溝は僅かであり、方向の異なる SD503、両端で曲がる SD502、先端が三つに分岐する SD505 等を認める程度である。各々の溝の配置からみてゆくこととする。

まず図41で注目されるのが、調査区外にも延長する南北溝 SD506・603がある。基本的には同一の溝と認識したもので、この溝以西には SD516・509・604 という3条の溝が検出されてはいるが、他の遺構分布からみて、平安時代末～鎌倉時代の遺構群の西端といえる位置である。検出した全長は130mに及び、南北方向を示す。これと近接して並行する SD514・515、及び6区では、直角に曲がり方向もやや異なるが SD605 も基本的には西端の境の溝と判断される。また、5区においては27m東、調査区東壁に SD517 という並行する南北溝も検出されている。

南北溝と直交の関係である東西方向の溝は数多く、北からみてゆくと、R・Q-40グリットに SD518、S・R-45・46グリットに SD504・508・512・513・511・501 が認められる。またより南に SD502・505 という並行する溝があるが、これらは幅が狭く浅い溝で、先に指摘したような相違点があり、なおかつ主体となる南北溝である SD506 には接していない。以上のことからみて、方向は類似するものの機能・用途等からみた遺構の性格は異なるものと推定した。

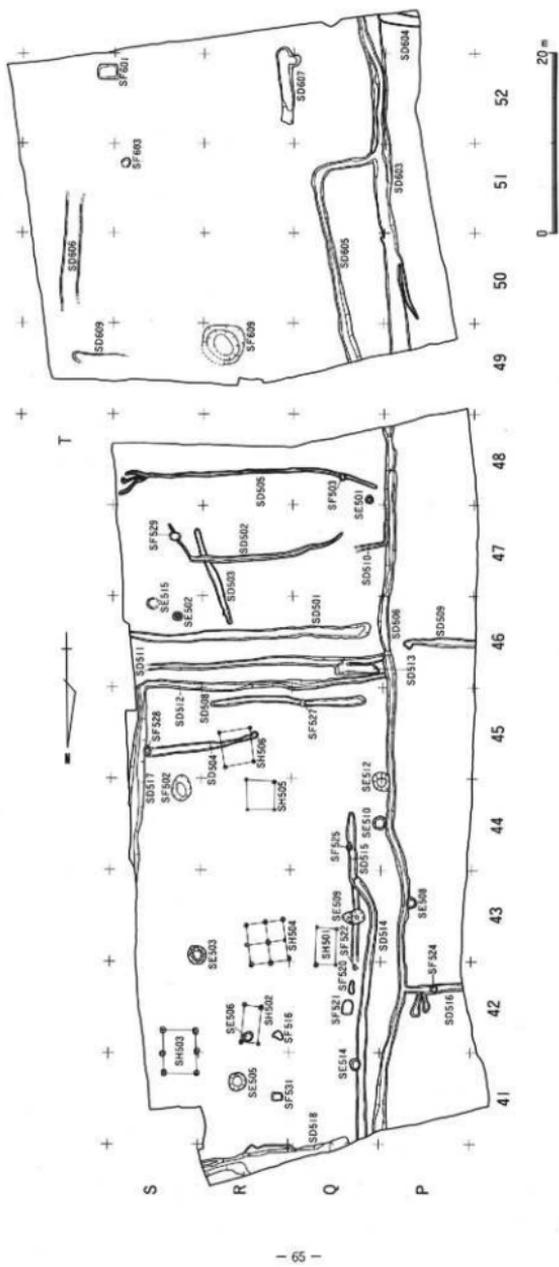


图41 5·6区平安时代末~鎌倉时代遺構全体图

この東西南北の溝からは、少量の土器が出土しており、一部底に接してはいるが大部分は多少浮いた状態であり、SD517には完形に近いものもみられたが、殆どが小破片であった。このことから溝の埋没直後に投棄された土器と判断した。

以上のことから、南北に長い溝はこの時期の遺構群の西端を区画する溝であり、この方向をもとに東西溝が配置され、特に顕著な5区では南北約50m、東西28mの長方形の区画が認められ、これは当時の屋敷地の一区画でないかと推定した。グリットの46列以南の溝については、東西溝が明確でなく、数も少ないためその機能・用途についての所見は得られなかった。

土坑 (図42)

土坑は15基が発見され、このうち6基を図示した。形態は円とか楕円を呈する定型化したものは少なく、長方形・隅丸台形・隅丸方形・不整形のような種々の形態があり、変化に富む。これらの特徴は他の地区ではみられない。断面も同様に、浅いもの・「U」字・「コ」の字・逆台形・「V」字状等の形状をもっている。

規模も長径で見ると、最大がSF609の5.2m、SF502でも2.79mを測り、逆に最小径はSF527の0.76mである。規模からいえば2m未満の比較的小型の土坑が多くみられる。

このように平面・断面形態・規模が変化に富むことが特徴としてあげられるが、次に土坑分布の状態

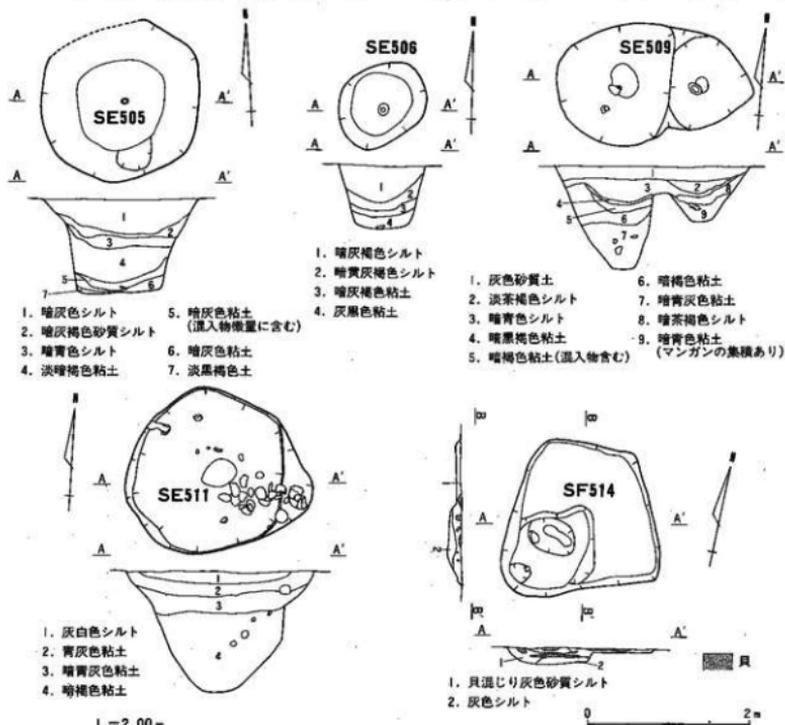


図42 5区平安時代末～鎌倉時代土坑・井戸実測図

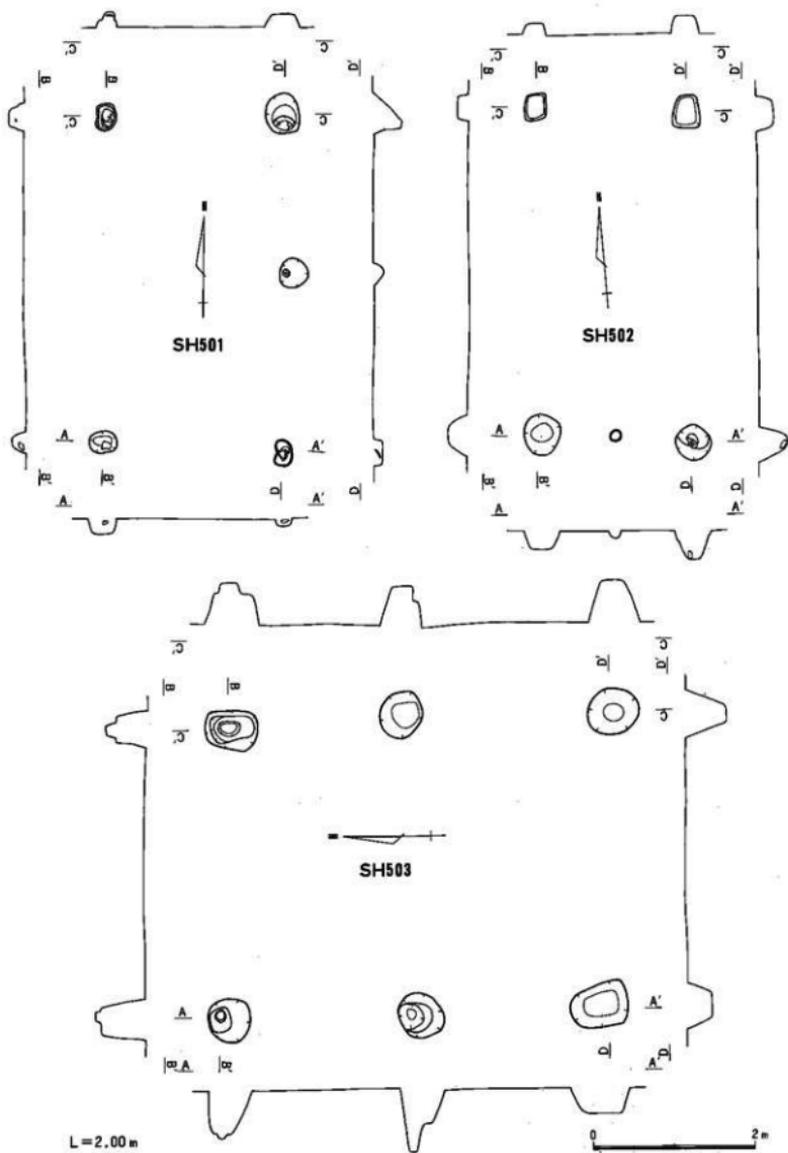


图43 5区平安时代末~鎌倉時代掘立柱建物跡 SH501~503 実測図

を検討してみる。

土坑は重複するものではなく、全体に散在的な分布をしている。しかし、屋敷地内では区画溝に添っている土坑と、内側に配置されるものが傾向として認められる。屋敷地外は数も少なく、分布の傾向も不明である。

屋敷地内における前者、区画溝に添うものは SF521・520・522・525 が南北溝、SF528 が東の南北溝、東西溝には SF527 が接している。また SF528 が西の調査区外に延びる SD516 と重複している。

後者は数が少なく、北から SF531・514・502 の3基である。これらの土坑は底が浅い位置で検出されており、土器の出土も限られ、混入物も少ないが、図42に示した後者に含まれる SF514 は注目された。

図42をみると、隅丸台形状の平面形で、断面は底の南西隅が一段低くなる。規模は2.24m×1.3mで検出の段階で多量のシジミと思われる貝が出土し、断面土層にも貝層及びブロックが認められた。他の有機物等は発見できなかったが、土器が少量出土している。おそらく日常生活に伴うゴミ穴のような機能用途が推定される土坑と考えられる。

以上述べたような屋敷地に分布する土坑は、貝を伴った SF514 のように一定の機能・用途を有していたと推定されるが、調査では明確にできなかった。

井戸 (図42)

井戸は11基発見された。ほぼ円または楕円を呈し、平面に比較して極端に深いものはみられない。規模は大きい SE509 が長径 2.45m、最小は 1 m 弱の SE501 であった。

井戸の分布も土坑と類似しており、屋敷地における二つの在り方が指摘される。前者の溝に添うものは、SE514・509・508・510・512 があり、すべて西の南北溝に集中する。後者の屋敷地内にみられるものは、SE505・506・503 で北半にまとまっている。

井戸のなかには用途を推定させるものが2例みられた。分布の区分からみると両者に1基づつということになる。図42に前者の例として SE509、後者の例として SE506 をあげた。

SE509 は Q-43 グリットに分布し、楕円状で、下部は二つの底をもっている。当初重複の井戸と推定した

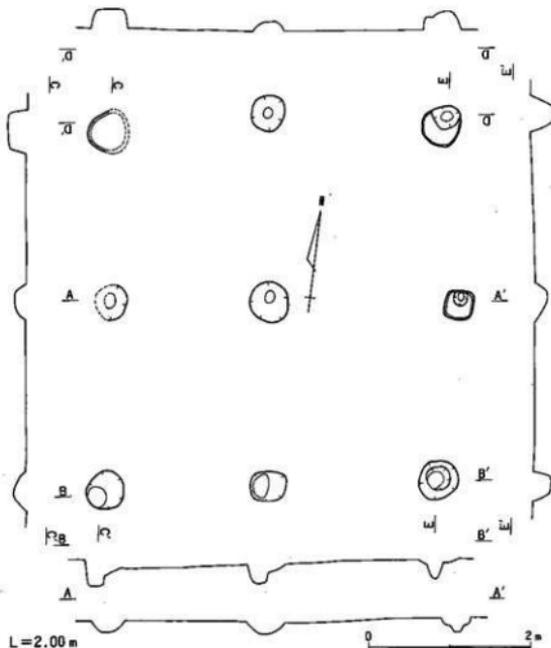


図44 5区平安時代末～鎌倉時代独立柱建物跡 SH504 実測図

が、土層上部に切り合いは認められず、同時に掘り込まれたものと理解した。長径2.45m、深さは1.63mを測る。二つの底からそれぞれ土器が出土したが、東側には「大」と墨書された山茶碗が出土した。覆土中には炭化物を多く含む層、炭化物が帯状となる部分、また底には木片も認められた。

後者の屋敷地内にある井戸として、SE506がある。この井戸も底から「大」と墨書された山茶碗が出土したもので、底の中央寄りに正位に置かれていた。円形で径が1m、深さ0.8m、断面は「U」字状を呈し覆土からは土器が少量出土し、混入物はみられなかった。

これらの「大」が何を意味するものか判然としないが、この2基の井戸は破棄される段階で祭祀に用いられた可能性が高いと推定した。またSE505もSE506の北、2.5mにあり土器も出土するが祭祀的な在り方は認められなかった。

掘立柱建物跡

屋敷地と思われる区画から6棟の建物跡を確認した。この5・6区のピットは土坑・井戸等の検出の際同一の面から、類似する覆土をもって発見されたもので、古墳時代の遺構とは若干検出レベルと覆土の相違があった。このことからピットの多くは平安時代末～鎌倉時代と判断し、建物の検討を行なった。

約1,400㎡の区画のなかで、図26遺構全体図のピットの分布から、幾つかの密集地点を認めることができる。これを根拠に三ヶ所・6棟からなる建物群を推定した。北(SH503・502)・中央(SH501・504)・南(SH505・506)の三者の建物群の間は、5m～10mと間隔はわずかであるが、ピットの存在しない空間があることから、長期間にわたって屋敷内における建物配置は変化していないと理解した。また掘立柱建物の配置は北・西・南にあり、東側と北西を空間として空けていることがわかる。特に土坑・井戸は西北の空間に多くみられるのも指摘される。

個々の柱穴は円を主体とし、径は0.4m～0.8mであった。以下、図に従って各建物について述べる。尚、表4に示した長さは建物の四隅の柱穴の芯々で計測している。

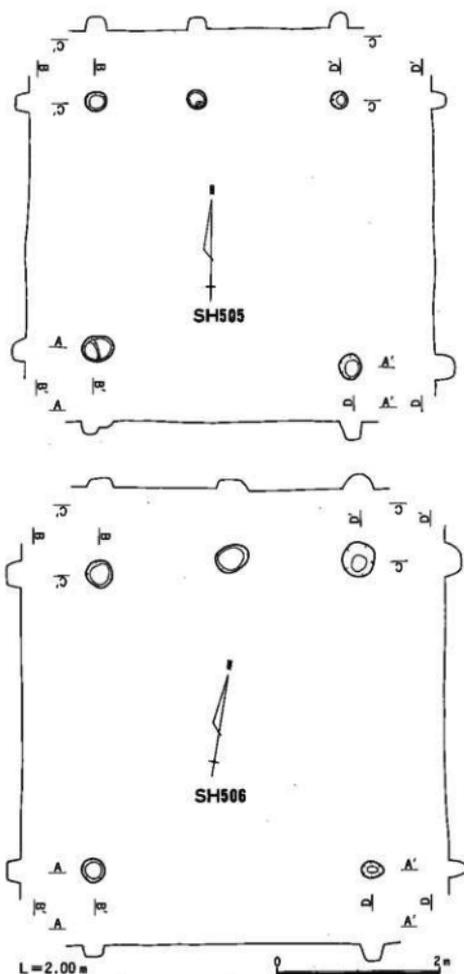


図45 5区平安時代末～鎌倉時代掘立柱建物跡 SH505・506 実測図

SH501 (図43)

屋敷地の中央西側、南北溝の2m程手前に位置している。南北4.1m、東西2.2mの2間1間の建物である。西辺の中央の柱穴は未検出であるが、東の状態からみて、2間1間の建物と判断した。建物の方向は区画溝と一致している。

SH502 (図43、図版30)

北に位置する建物、図で示したように南北に長い1間1間の形態である。規模は東西がやや小さいが、SH501に類似しているため、西と東辺の中央の柱穴の検出に努めたが発見できなかった。結果的には同じ間数でも極端に間口・奥行の長さが異なる建物となった。長辺の方向はやや東に振れている。

SH503 (図43、図版30)

北に位置し、最も東寄り、調査した区画溝から全体の屋敷地を推定すると、最も北東寄りに配置されたと考えられる。形態は2間1間で、規模は南北4.7m、東西3.7mを計り、南北長では最大の規模をもっている。個々の柱穴の掘り方も他と比較して、円及び方形で、径も大きいものでは0.8m程あり個々の差もあまりなく、より大型の建物が推定される。方向はやや西向きではあるが、ほぼ南北といえる。

SH504 (図44、図版30)

中央の2棟のうちの東にあるもので、僅かの差はあるがほぼ正方形で、2間2間の総柱建物である。SH503と並び大型の建物といえる。個々の柱穴は円が多く、0.4m~0.5mで、形態・大きさも類似している。西辺の一部を中央トレンチで消失する。南北方向は7.5°西に傾く。

SH505 (図45、図版30)

この建物とSH506が東南に位置し、SH505は、1間1間と判断された正方形の建物である。北辺に柱穴が認められるが、北西のコーナー寄りとなるため建物に伴うピットか否か疑わしい。結果としては、これを含めず1間1間と考えた。

柱規模は一辺が約3.2mで、柱穴は円形を呈するが小型で径0.2m~0.4m程度である。方向はほぼ東西南北に向いている。

SH506 (図45)

やや南北方向に長い1間1間の建物で、最も南に位置し、区画の溝SD508とは8m程離れている。北辺中央にピットが認められ図示しているが、直線には結ばれない。このことから形態を1間1間と考えた。個々の柱穴は円または楕円で小型の規模をもっている。

これらの6棟の建物は、屋敷地に設けられた施設という前提に立てば、当然母屋・納屋・小屋・倉庫等と呼ばれるものに該当する。しかし、規模の差・形態の差はなく、総柱の建物とて構造は異なるとしても同規模といえるものである。配置も東に空間をもつ一応の傾向は認められるが、規則性に欠ける。この5区の屋敷地の様相は、不明確な部分が多く、今後の検討が必要であるが、東西南北の区画・建物・ゴミ捨て穴・井戸状の深い遺構・祭祀等の傾向から、平安時代末~鎌倉時代の屋敷の様相を表したものと理解したい。

遺構記述の最後に、時期としては近世かとも思われる墓を調査したのでそれを紹介する。

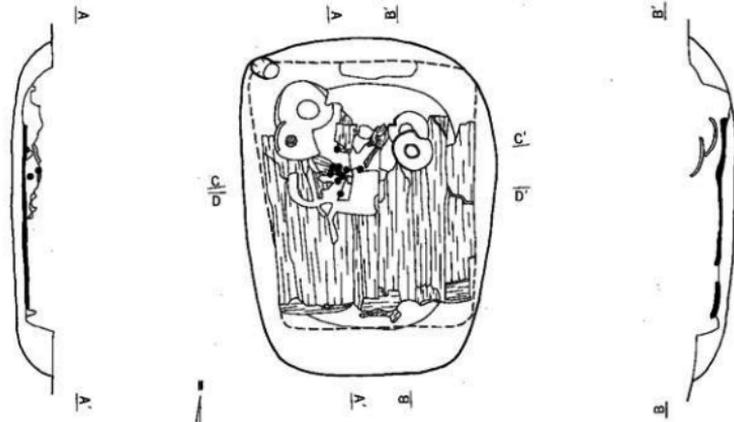
SF503 (図46)

これは5区SD502を切り構築された墓で、構造は椀を横にし遺体を入れ、かわらけが副葬品として納められ、被葬者の歯が遺存していた。

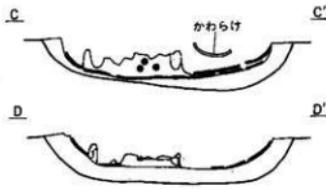
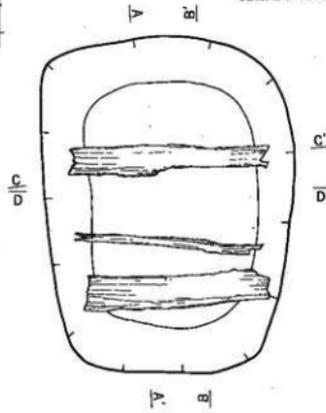
掘り方は椀の形を反映しており、底が狭く口がやや広くなる隅丸台形状を呈し、長さ0.69m、幅は0.51mと0.43mであった。底板は残されていたが、口の部分について、蓋の有無は確認できなかった。

この墓は多くの特徴があげられる。位置等からみて、周囲に墓はなく単独で存在すること、従って一定の墓域を形成する集団墓でないこと。主体部が椀という日常の容器で間に合わせのものであること。

樽と蓋、かわらけ出土状態



完掘とタガの状態



L=2.00 m

● 穴

0 50cm

図46 5区近世墓 SF503 実測図

表4 新潟道跡平安時代末～鎌倉時代遺構一覽表(1)

区	遺構名	グリット名	形 態		規 模(m)			備 考
			平 面	断 面	長さ(長径)	巾(短径)	深さ	
1 ・ 2 区	SD101	V-6, 7	—	浅いU字	—	0.85	—	SD201に続く全長27m、北西方向SD102と平行する、西へ36度振れる
	SD102	V-6, 7, W-7	—	浅いコの字	—	2.5	0.44	北西方向に向かう大型の溝、土器が少量出土
	SD201	W-8	—	—	—	0.74	—	SD101から続く溝
	SD204	U, V, T-9, 10	不整形	浅い直状	13.0	2.0	0.37	台上の高い部分に一部残されたもの、土器少量出土
	SD205	T, U-10	—	浅いコの字	—	1.23	0.28	SD204から分かれる同じ溝か、土器少量出土
	SD206	V, W-9, 10	—	—	—	1.8	0.45	SD204から続く溝か
	SD209	U, V-10	—	U字	13.0	1.3	0.27	土器少量、台上の高い部分に一部残されたもの
	SD213	Y-15, 16	—	U字	1.5	0.7	0.15	山茶碗、灰釉出土、SD215とSD216の間
	SF201	V-8	半円	U字	1.44	—	0.64	遺物わずか、北照、2区跡水溝で切られる
	SF203	Z-16	円	U字	1.06	—	0.6	小皿出土
	SF204	Y-15	円	浅いV字	0.98	—	0.6	灰釉出土
	SF205	W-10	円	半円上	1.24	—	0.42	山茶碗出土
	SF206	W, X-10	円	浅いU字	1.34	—	0.35	山茶碗出土
	SE102	W-7	円	深いU字	1.3	—	1.63	土器類少量出土
SE103	W-8	円	深いU字	1.39	—	1.27		
SE202	X-10	半円	深いV字	2.90	—	1.42	山茶碗少量出土	
SE203	X-12	円	深いV字	2	—	1.23	土器少量、炭層あり	
3 ・ 4 区	SD301	F, G-10, 11	—	コの字	—	1.66	0.27	灰釉、山茶碗、土器類少量、巾広く大型の溝 SD323に連続するものか
	SD302	G, I-10, H-11	L字	コの字	東へ17.0 西へ17.0	1.04	0.4	L字状に曲がる細長い区画溝か
	SD304	G, H-10, 11	—	—	—	0.86	0.14	SD301に付属する溝か
	SD306	E-10, 11, F-11, 12	—	U字	—	0.76	0.37	SD410, SD411に続く溝か、総延長約95m
	SD307	E-11, 12	—	U字	—	1.53	0.28	SD309, SD408, SD412, SD421に連がる溝か
	SD308	C-11, 12, D-12	—	コの字	60.0	1.68	0.48	SD406に連がり南北にのびる
	SD309	C, D, E-11	—	V字	13.0	0.58	0.25	SD307に続く
	SD310	B-12, C-11, 12	L字	逆台形	—	0.7	0.39	土器片わずか
	SD311	B, C-11, B-12	L字	コの字	15.0	1.94	0.67	北北東へ15mを横出し、直角に曲がる、灰釉、山茶碗少量出土、SD314に切られる
	SD315	I-9, 10, 11, J-10	—	逆台形	15.0	0.82	0.23	直角に曲がりSD426に続く、SD327, SD302と直交
	SD316	G-10	—	逆台形	17.0	0.46	0.2	直角に曲がりSD302に続く
	SD317	G-10	—	コの字	1.5	0.64	0.14	SD301, SD316の間溝
	SD318	C-12	—	U字	—	0.55	0.4	SD403に続き直角に曲がっている

表4 新堀遺跡平安時代末～鎌倉時代遺構一覧表(2)

区	遺構名	グリット名	形態		規模(m)			備考
			平面	断面	長さ(長径)	巾(短径)	深さ	
3 4 区	SD319	C-11, D-10, 11	—	U字	—	1.24	0.39	SD311から続く溝か
	SD320	J-10	—	コの字	6.5	0.8	0.16	南端で屈曲し、SD315に連がる
	SD321	E-10	—	U字	2.0	0.55	0.13	須磨器、灰胎
	SD323	G, H-11	—	コの字	—	2.48	0.19	SD301, SD428と連がる溝
	SD326	H-9, 10	—	コの字	5.0	0.68	0.09	SD325に切られる短い溝
	SD327	I-9, 10	—	コの字	5.0	0.48	0.11	SD302, SD315の間
	SD328	E-11, 12	—	V字	—	0.63	0.12	SD407に続く溝
	SD401	B, C-16	—	U字	3.7	0.64	0.2	長さは、横出長、SE403に切られて西へのびる
	SD403	C-12~16, B-16	L字	逆台形	38.0(南北)	10.0(東西)	0.23	土器少量出土、西は、調査区外へ続く
	SD405	D-15, 16	縦長い直線	逆台形	9.0	0.71	0.18	土器ごく少量出土
	SD406	D-13, 14, F-16 E-13, 14, 15, 16	直線	逆台形	57.0	1.44	0.37	SD308に続く調査区南北へのびる
	SD407	F~K-12, 13	—	逆台形	80.0(全長)	0.98	0.32	3か所でゆるやかに曲がる北西方向の溝、SD328, SD309に続く
	SD408	F~I-12, 13	くの字	逆台形	47.0(全長)	1.0	0.43	直線は、SD412、北側では、SD307に続くゆるやかな字、SD407, 408, 410の3本に平行する
	SD410	G~J-12, 13	—	逆台形	61.0(全長)	0.9	0.46	南側は、SD412、北側は、SD306に続く、2か所でゆるやかに曲がる
	SD411	J~L-12, 13	—	逆台形	31.0	1.3	0.53	土器少量出土、SD412, SD421と平行する、長さは、横出長
	SD412	I~K-12, 13	直線	逆台形	72.0(全長)	1.7	0.51	SD421, SD428, SD301に続く北西方向の溝、南は、調査区外へのびる
	SD417	J-12	—	逆台形	61.0(全長)	0.61	0.13	SD410の南端の溝、土器少量出土
	SD418	K~M-13	直線	逆台形	15.0(全長)	1.08	0.2	南は、調査区外へのびる
	SD419	K-13, 14	直線	逆台形	12.5(全長)	0.75	0.18	SD412と直交し、SD422と交わる
	SD420	K~L-13, 14	直線	コの字	12.0	1.3	0.5	SD412とSD421に直交、南端で2つに分岐、調査区外へのびる、土器ごく少量出土
	SD421	L-13, 14	直線	逆台形	6.0	1.7	0.4	SD412と同じ溝、調査区外へのびる、土器少量出土
	SD422	J-15, K-14, 15	ゆるやかに曲がる	逆台形	13.5(全長)	0.84	0.25	南側と北端で急に曲がる、調査区外へのびる、土器ごくわずか出土
	SD423	K-14, 15	ゆるやかに曲がる	逆台形	8.5(全長)	0.74	0.2	SD422と平行し、南端は調査区外へのびる、土器ごく少量出土
	SD424	L-13	直線	逆台形	6.5	0.48	0.3	南は、調査区外へのびる、土器少量出土
	SD425	K~N-11, 12	直線	逆台形	38.0(全長)	1.52	0.46	西端でSD411に直交、土器多量出土
	SD426	I-11	直線	逆台形	15.0	0.66	0.17	SD315, SD427に直交する同一の溝
	SD427	I-11, 12	直線	コの字	7.5(全長)	0.74	0.17	SD315, SD428と同じ溝、SD411に続く
	SD428	H-11(3区)	—	逆台形	—	1.44	0.32	SD301に続く溝、土器ごく少量出土
	SD429	K, L-11, 12	直線	逆台形	9.0(全長)	0.6	0.3	SD425に直交
	SD431	M-11, 12, 13	直線	逆台形	12.0(全長)	1.57	0.3	SD425に直交、南は、調査区外へのびる、土器ごくわずか出土

表4 新潟遺跡平安時代末～鎌倉時代遺構一覧表(3)

区	遺構名	グリット名	形 態		規 模(m)			備 考
			平 面	断 面	長さ(長径)	巾(短径)	深さ	
3 4 区	SD432	M-12	直線	逆台形	5.03(全長)	0.48	0.12	SD431と直交、十文字になる、土器ごく少量出土
	SD435	K-13	直線	逆台形	1.5(全長)	1.0	0.22	SD412、SD411を結ぶ溝、土器ごくわずか出土
	SD437	L-13	—	コの字	1.5	1.38	0.29	SD411、SD421をつなぐ溝、土器少量出土
	SF301	I-9	円	逆台形	2.45	—	0.78	山茶碗、大平鉢出土、土器少量出土
	SF302	K-10	円	深い逆台形	2.74	—	1.4	土器少量出土
	SF303	H-8, 9	隅丸長方形	コの字	3.46	1.16	0.54	土器少量出土、中に炭層あり
	SF304	H-8	円	U字	1.4	—	0.67	伊勢型埴、輪花碗出土、有機物、炭化物、白色粘土混入
	SF305	G-9	隅丸方形	コの字	0.84	—	0.62	土器片わずか出土
	SF307	H-9	円	深い逆台形	2.28	—	1.64	山茶碗、灰輪少量出土
	SF308	I-9	円	逆台形	1.28	—	0.66	炭化物の帯あり
	SF310	I-9	円	底が丸い台形	1.03	—	0.43	土器ごく少量出土
	SF311	K-9	楕円	U字	1.32	0.76	0.62	噴砂により土層乱れる
	SF312	K-9, 10	楕円	V字	2.72	1.94	0.42	山茶碗、灰輪少量出土、木片出土
	SF313	H-8	円	不整形	1.3	—	0.55	山茶碗、灰輪ごく少量、底は、砂層に通している
	SF314	I-9	隅丸方形	コの字	2.66	1.54	0.23	小破片のみごく少量
	SF315	K-9	楕円	コの字	5.0	4.16	1.04	山茶碗、鉢、白磁器、土師器遺物多量
	SF316	C, D-12	楕円	U字	1.51	0.84	0.25	高坏、壺出土少量
	SF403	B-14, 15	円	逆台形	1.34	—	0.27	須恵器、山茶碗少量出土
	SF404	C-15, 16	円	コの字	2.38	—	0.67	古墳時代の土塊を埋り込む、須恵器、灰輪、山茶碗多量出土
	SF406	H-13	円	深いコの字	1.06	—	0.6	灰輪わずか出土
SF407	H, G-13	円	逆台形	1.9	—	0.88	断面は、途中で段をもつ、炭層あり	
SF415	K-11, 12, L-11	円	U字	2.47	—	0.67		
SF450	K-10, 11	不整形	コの字	2.25	1.88	0.18	山茶碗、中皿陶器、甕ごく少量出土	
SF461	K-10	楕円	—	2.07	1.4	0.11	山茶碗出土	
SF461	K-10	卵型	U字	1.9	1.2	0.23		
5 6 区	SD501	Q, R, S-46	直線	コの字	26.0	1.2	0.3	SD511, SD512, SD508と平行、SD506に直交、土器少量出土、東は、調査区外へのびる
	SD502	Q, R, S-47	くの字	U字	22.0	0.64	0.25	土器少量出土
	SD503	R, S-47	直線	—	11.0	0.9	0.14	土器少量出土
	SD504	R, S-45	直線	—	13.0	1.0	0.16	
	SD505	Q, R, S-48	直線	—	28.1	0.49	0.17	土器ごくわずか出土

表4 新堀遺跡平安時代末～鎌倉時代遺構一覧表(4)

区	遺構名	グリット名	形 態		規 模 (m)			備 考
			平 面	断 面	長さ(長径)	巾(短径)	深さ	
5 ・ 6 区	SD506	P-41-48	直線	逆台形	76.0	0.8	0.5	南は、SD603に続く、北は調査区外にのびる、南北方向、土器少量出土
	SD507	P、Q-48	直線	—	4.0	0.02	0.15	SD506に続く
	SD508	Q、R-45	直線	コの字	17.0	0.99	0.33	SD512、SD511、SD501と平行、土器わずか出土
	SD509	O、P-46	直線	コの字	8.0	0.88	0.33	SD501、SD511と平行、南は、調査区外へのびる、土器ごく少量出土
	SD510	P、Q-47	L字	逆台形	5.5	0.51	0.23	東側SD506と平行して接する
	SD511	P、Q、R、S-46	直線	コの字	26.0	1.04	0.36	SD508、SD512と平行、南は、SD506に直交、東西方向、土器少量出土
	SD512	P、Q、R、S-45、46	直線	コの字	27.0	0.9	0.23	SD506と直交、SD517に続く、土器少量出土
	SD513	Q-45	直線	台形	5.0	1.03	0.36	SD512、SD511の間、SD506に直交
	SD514	Q-41, 42, 43	直線	—	35.0	1.05	0.14	SD515に接する
	SD515	Q-43, 44	直線	コの字	16.0	0.72	0.19	SD514と接する
	SD516	P-42	直線	逆台形	6.0	1.0	0.27	北側で2つに分れる
	SD517	S-44, 45	直線	V字	22.0	1.0	0.8	SD512から直角に曲がる溝、深く掘り込む、土器多量出土
	SD518	Q-40, 41, R-40	直線、不整形	—	16.5	1.8	0.3	土器多量含む、SD514と直交にちかい方向、断面の形状不明
	SD603	P-49-52 Q-50-53	直線	コの字	37.0	2.2	0.7	南北端、共に調査区外へのびる、SD506と関連する溝、ほぼ南北方向、土器少量出土
	SD604	P、Q-53	—	コの字	5.0	1.2	0.18	調査区南西のコーナー、一部突出、土器少量出土
	SD605	Q-49, 50, 51	L字	コの字	13.5	1.4	0.46	北北西方向から直角に曲がりSD603に連がる、土器多量出土
	SD606	T-50, 51	直線	コの字	11.0	1.8	0.23	南北端を横断される、土器少量出土
	SD607	Q-52, 53	直線	コの字	8.5	1.5	0.2	西端、張りだしあり、土器ごく少量出土
	SD609	S、T-49	—	—	5.0	1.05	1.4	大部分SD608に切られる
	SF502	S-44	楕円	逆台形	2.79	2.16	0.85	土器少量出土
	SF514	R-41, 42	隅丸台形	コの字	2.24	1.3	0.27	貝類あり、炭化物少量混入、ゴミ穴か
	SF520	Q-42	不整形	—	1.43	0.67	0.08	SD515と関連する溝か
	SF521	Q-42	隅丸方形	—	1.57	1.1	0.11	SD515と関連する溝か
	SF522	Q-42	長方形	U字	0.9	0.48	0.32	中央が凹む、炭化物多量混入
	SF524	P-42	円	U字	0.82	—	0.48	
	SF525	Q-44	不整形	逆台形	0.86	0.6	0.83	土器ごくわずか出土
	SF527	Q-45	不整形	V字	0.76	0.82	0.53	SD508におさまる
	SF528	S-45	楕円	逆台形	1.1	0.82	0.49	土器ごくわずか出土
	SF529	S-47	隅丸方形	コの字	1.1	0.48	0.51	土器少量出土
	SF531	R-41	隅丸方形	—	1.21	0.79	0.14	

表4 新潟遺跡平安時代末～鎌倉時代遺構一覧表(5)

区	遺構名	グリット名	形 態		規 模(m)			備 考
			平 面	断 面	長さ(長径)	巾(短径)	深さ	
5 ・ 6 区	SF601	S, T-52	隅丸方形	コの字	2.04	1.9	0.55	
	SF603	S-51	楕円	コの字	—	1.0	0.65	土器ごくわずか出土
	SF604	T-50, 51	不整形	—	1.68	1.6	0.2	土器わずか出土
	SF609	R, S-48	円	U字	5.2	2.46	1.35	土器少量出土、東西に丸太材を組んだ痕跡あり
	SE501	Q-48	円	逆台形	0.91	—	0.74	最下部に有機物多い
	SE502	S-46	円	逆台形	1.06	—	1.71	土器わずか出土
	SE503	R, S-42, 43	円	逆台形	2.16	—	1.09	
	SE505	R-41	円	逆台形	2.11	—	1.14	土器少量出土
	SE506	R-42	円	U字	1.0	—	0.8	土器ごくわずか出土、「大」黒書土器出土
	SE508	P-43	円	コの字	1.18	0.88	1.6	下部に植物遺体を多く含む
	SE509	Q-43	楕円	V字	2.45	1.28	1.63	東西に穴を掘る、西が深くて東が浅い、西側「+」黒書土器出土
	SE510	P, Q-44	円	コの字	1.5	—	1.7	最下部に有機物多い
	SE512	P, Q-44, 45	円	U字	2.13	—	1.05	覆土類似
	SE514	Q-41	円	U字	1.28	—	0.62	覆土類似
	SE515	S-46	円	コの字	0.64	—	0.69	土器ごくわずか出土
	SH501	Q-42, 43	2間×1間	—	4.1(南北)	2.2(東西)	—	東中央の柱穴未検出
	SH502	R-42	2間×1間	—	4.05(南北)	1.85(東西)	—	東と西の中央の穴未検出
	SH503	S-41, 42	2間×1間	—	4.7(南北)	3.7(東西)	—	
	SH504	R-42, 43	2間×2間 総柱	—	4.5(南北)	4.1(東西)	—	中央排水溝で知られる
	SH505	R-44	1間×1間	—	3.2(南北)	3.1(東西)	—	
SH506	R-45	1間×1間	—	3.7(南北)	3.3(東西)	—		

主体部である椽を、座箱のように正位置でなく横にして用いていること。蓋の有無等、この周辺でも初めての調査例であり、紹介に止めておくが、民俗例では子供に対する葬法であるとの教示を、現地調査の際、年配の発掘参加者から得ることができた。

第Ⅳ章 出土遺物

新堀遺跡から出土した遺物は、土器が圧倒的に多く、それ以外は種類・量ともに貧弱であった。土器の他に、祭祀遺物・土錘・布目瓦等の土製品、柱根等の木製品、石製品として紡錘車・砥石、金属製品は鎌・鍬等が出土した。

本章の記述にあたり、大多数を占める土器については、遺構ごとにまとめ、時代ごとに分け、ついで各区ごと、図47～100に示した。また図の順序と同様、表5・6に土器観察表を掲げすべての個々の土器を記述した。しかし、図67は4区土器拓影図のため図示したのみである。

以上のことから本章では、個々の土器及び、遺構ごとの土器の在り方は必要に応じて述べることにして、主として各時代ごとの土器様相について記述する。

尚、遺構に伴って、近世の陶磁器も主として6区から少量出土しているが、図・表ともに必要なものに限って扱い、殆どは今回の記述から省いた。

また土器以外の遺物は、少量のこともあり、2節以下で個々に述べてゆく。

第1節 土器

土器の記述は各時代ごとにA・古墳時代、B・奈良時代、C・平安時代末～鎌倉時代にわけて行なう。またDでは、出土した墨書土器について若干の検討を加えたい。

細節に入る前に、A～Cの時代に属さない土器を挿図の順序に従ってあげてみると以下のようなものがある。

弥生時代後期の土器

壺

図52-6は、SF413から出土しているもので、口縁部が大きく開き、口縁は折り返しとなり端部には刻み目が付けられる。肩部が有段となり、その上下に刺突の擬似羽状文をもつ菊川式の壺である。

図56-6は壺の口縁部であり、開き弱く弓状となり、折り返し口縁をもつ、口唇には櫛による山形の刺突がみられる。

図59-3は肩から口縁部にかけての破片であり、内外に櫛による連続した刺突が施される。SF431から出土している。

図60-14は肩が有段で櫛による羽状を施す。最も形態の明確な大型の壺である。これは、埋納土坑と呼んだなかのひとつで、SF463から単独で出土している。菊川式の壺である。

図97-1は2区の遺構外からの出土であるが、肩部に段があり、二段の擬似羽状文がみられる胴部上半から頸部の破片である。

弥生時代後期の壺については、実測図のなかで図示したのは以上であるが、図67の拓影図のなかにもこの時期に属する破片が認められる。

高坏

図47-1は摩滅しており細部の観察不能であるが、端部の開き弱く高い脚をもつ。SD101から出土している。後期前半の形態を示す高坏である。同図2は、後期後半に比定される欠山期の高坏である。

図59-8は深い坏部の破片で、脚を欠損する。坏部下端に稜をもつものは幾つもあるが他のものとは比較して坏の深さが顕著であることから時期差として考えた。

図98-1は3・4区遺構外出土の菊川式の高坏脚である。摩滅が激しいがその特徴を良く残している。

高坏は脚部の破片が殆どである。

甕

甕は口縁に刻み目を施す、SF426 出土の図54-14が弥生後期の手法を残すものである他は、平底球胴甕とS字状口縁甕である。

鉢

台と脚のついた鉢が出土している。弥生後期に主体的なものと思われるが幾つかの種類がみられ、かつ古墳時代前期にも継続していると思われることから後に述べることとする。

埴形甕(須恵器)

図98-6は、1・2区と3・4区の間、新堀集落の東側、人家と水田の境で、工事中に偶然発見されたものである。胴部が1/2強残るが、頸部から上を欠損している。胴部には波状の櫛描文、側面は中央で交差する三方向からの直線の櫛描文が施される。TK217 類似した形態と手法をもち、6世紀の前半と考えられる。

坏(須恵器)

図99-2は、6区遺構外からの出土で、推定口径9.3cm、小破片のため器高不明であるが、いくぶん扁平な形態を示している。図94-11は、6区 SF609 から出土したもので、完形の坏蓋で、直径9.8cm、器高3.9cmを計測する。いずれも7世紀後半と思われる。

段皿(灰釉陶器)

82-7は2区、遺構外から出土したもので、口径18.1cm、高台径9.0cm、器高2.8cmを示す。形態は、底部が低く、高台との高さの差をもたない。方形高台であるが、やや雑な調整をしている。施釉は内面のみ、薄緑色に発色し、トチンの痕跡が認められる。体部下半に回転ヘラ削りが認められる。黒笹14号窯式期の段皿である。

新堀遺跡では、黒笹14・90号窯式期の灰釉陶器はこれ以外は発見されていない。

中近世の土器

ここでいう中近世とは、鎌倉時代以降をいうが、具体的には近世に偏った時期である。尚、表と本文中にある中世陶器はこの時期より古く、山茶碗・小皿と並行する鎌倉時代のものと理解している。この時期に属するもので図示したのは極少なく、図94-1・2は土坑墓 SF503 の副葬品である「かわらけ」である。図95-22は6区 SF601 出土の水注、図100にも「かわらけ」を図示したが时期的な判断を控えたものである。

これから各時代の土器についての様相を述べることとする。

A 古墳時代の土器

古墳時代の土器は埴田47-71と遺構に伴わないものは97・98・99に示した。個々の具体的な記述は土器観察表に譲り、出土した古墳時代前期の土器について概略を述べる。

土器の分類

古墳時代前期の土器を次のように分類してみた(図109)。土器観察表にこの基準により個々の土器の分類を表記した。

器種

器種は壺・甕・高坏・鉢・器台・埴であり、このなかで、鉢と甕には平底と台付の両者が認められる。量的には壺・甕が最も多く、高坏・鉢・器台となり、形態の類似するものはあるが、丸底の埴にいたっては1点のみである。以下、器種ごとに説明する。

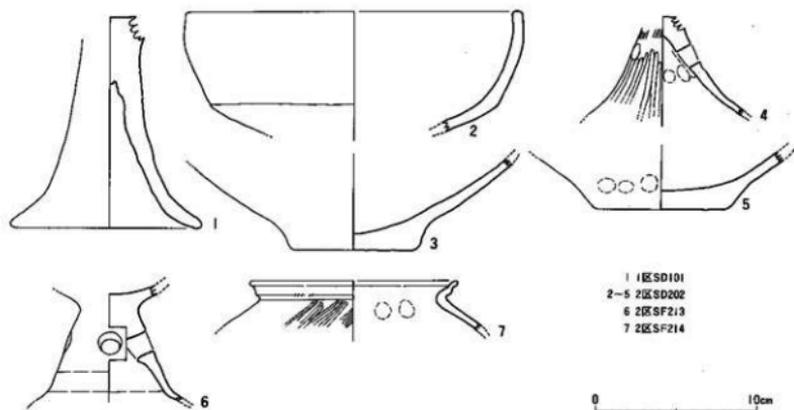


図47 1・2区古墳時代溝・土坑出土土器実測図

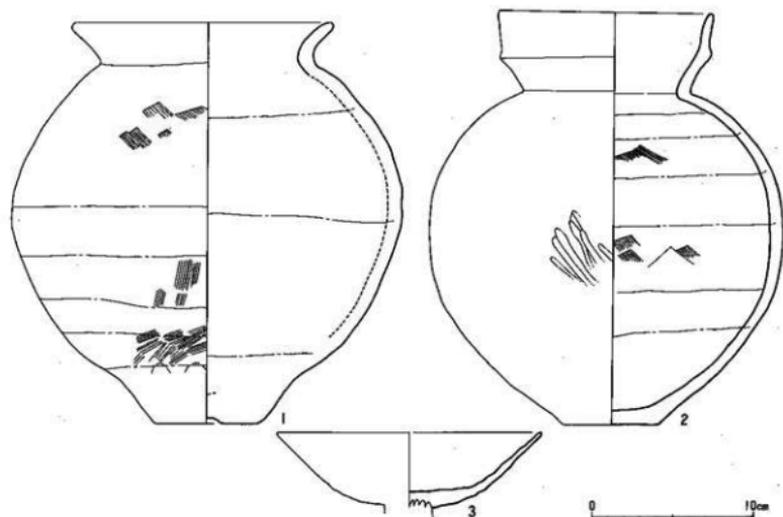


図48 1区井戸 SE101 出土土器実測図

壺

壺は口縁部形態から次のように分類してみた。

壺A——単純口縁

- 1・口縁の開き大きく、弧を呈するもの。
- 2・口縁の開き弱く、弓状となるもの。
- 3・口縁の開きは一定しないが、直線となるもの。

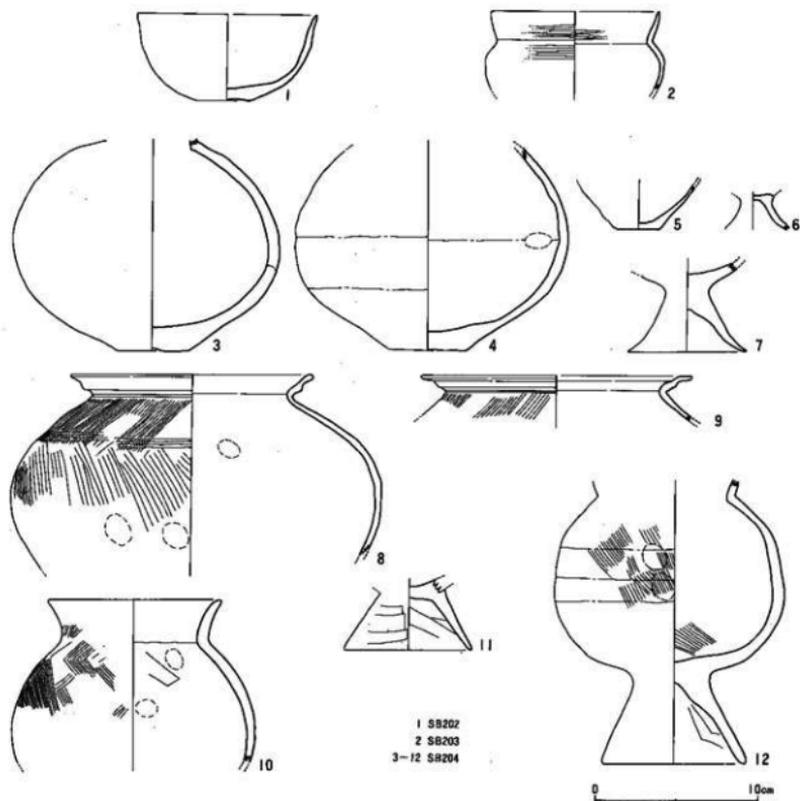


図49 2区古墳時代住居跡出土土器実測図

壺B——折り返し口縁

- 1・口縁の開き大きく、弧を呈するもの。
- 2・口縁の開き弱く、弓状となるもの。
- 3・口縁の開きは一定しないが、直線となるもの。
- 4・口縁大きく開き、端部が上下に肥厚するもの。

壺C——複合口縁

- 1・口縁部上半が直立するもの。
- 2・口縁部上半がやや開くもの。

壺D——二重口縁

口縁上半部の傾き等で細分の可能性もあるが、一応ひとつの形態とした。またこの類は、頸部が円筒状であることも大きな特徴である。

小型壺・口縁の残るものは少なく、分類には適さない。口縁形態では2・3とした開きの弱いものと直

線となる形態が認められる。

壺は以上のように多様な形態があり、各分類ごとに代表的なものを提示すると以下ようになる。

壺A 1 (図56-2・図65-1・図68-1)

2 (図56-1・3、図61-1)

3 (図50-4・図51-1・図56-4・5・図59-1)

壺B 1 (図51-4・図60-15・図66-1・図70-1)

2 (図53-1・図54-2・図56-6)

3 (図61-2)

4 (図58-2)、この形態は図示したものの1点のみ。

壺C 1 (図53-7・図61-4)

2 (図48-2)、この形態はこれ1点のみ。山陰系の壺

壺D (図55-4・図56-7~9・図61-3・図70-2・図71-3)

壺E 図示していないが、口縁部の内側に粘土帯を追加し、極端に厚くなった比較的大型の壺。壺は、5形態10分類された。これらのなかで、細分の根拠となった口縁の状態、弧とか弓という形態は、壺C・D類を除き、A・B類に共通する口縁部の形態である。しかし、分類にあたっては大きく開き弧となる1類と、直線の3類の区分は容易であるが、中間の弓状の口縁とした2類はそれらの中間の形態である。この分類は便宜的なものであり、頸部下半の形態でみると、強い屈曲のあるものと、緩やかなもののが認められる。この点は1類には該当しないが、2・3類の両者に指摘される特徴である。このように、壺A・B形態の2・3類は極近い特徴をもっているものと理解される。

壺Bとした折り返し口縁であるが、外に折り返す幅の広狭があり、壺B 2類に多く認められ、図53-1と図56-6の顕著な傾向となっている。

壺Dとした二重口縁壺は、本来口縁上半が大きく開き、端部が水平に近い形態を呈すると思われるが、なかには図61-3のように、やや開く程度のものもある。また口縁部が欠損する図55-4では胴下半に極ゆるい屈曲があるが、球よりさらに横長の胴部をもっている。

壺Eとした形態は、静岡県中東部に分布の中心をもつ、大廓式といわれる壺であり、2区3号周溝墓

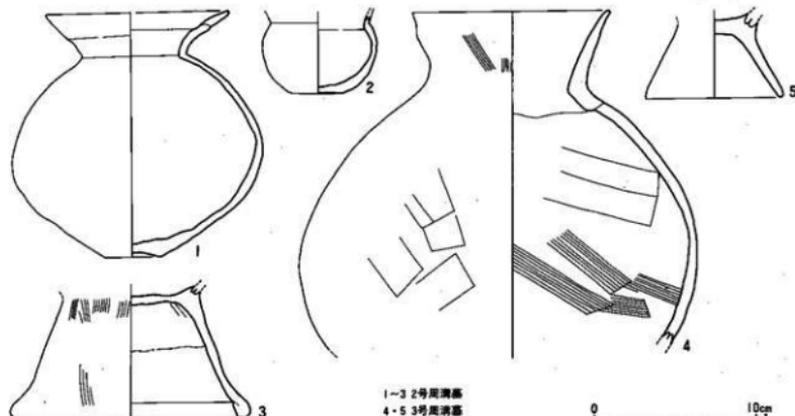


図50 2区古墳時代方形周溝墓出土土器実測図

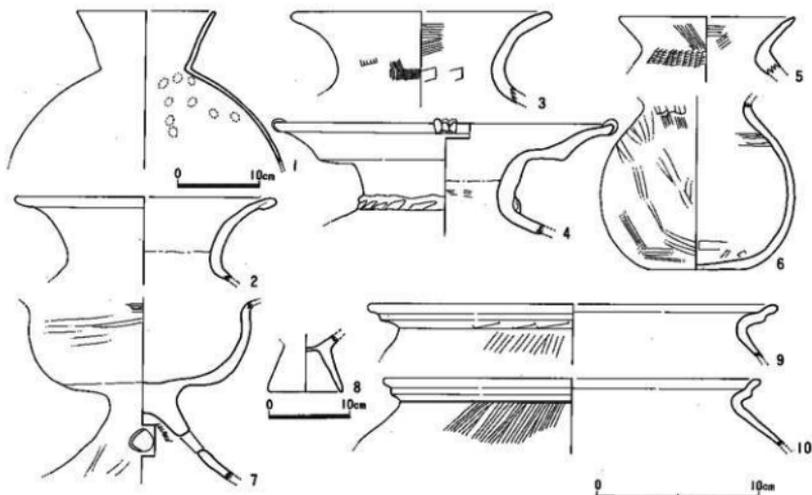


図51 4区古墳時代溝 SD448 出土土器実測図

の溝から出土しているが、それ以外ではみられない形態である。

壺の胴部形態は、その殆どが球または僅かに楕円形であり、下半に屈曲をもつ形態は極まれである。底部との接合痕も丁寧にナダられており、天竜川以西の土器の影響を強く受けている壺である。

小型壺は数少なく、分類するに至らなかった。口縁部形態はAであり、2・3類の形態を呈するものと推定される。なお、図50-1は2区2号周溝墓に伴ったものであるが、一見したところ単純口縁風であるが、細部の観察では上半を追加している。大型の壺にはみられない形態で、二重口縁と類似しているが、頸部は壺A・Bと同一の形態である。小型の壺では、底の径が大きい図50-2・図51-6も認められ、平底で口縁部を欠損するが、胴部が横に大きく張り、口縁部の付け根が太いことから全体の形態では埴のようなものかもしれない。

文様・粘土帯の突起・棒状の貼りつけのような、装飾的要素をもつ壺は極僅かであり、A1・A3・B1・B2・C1・D類にみられる。しかし、全体的にみても文様等は退化しており、飾る壺の系譜が辛うじて認められるのみである。このなかで点数こそ少ないが菊川式の壺は目立つ存在である。

鉢

鉢は、図109でみるように、平底・丸底・台付・脚付がある。この四種類に大きく分け、口縁部形態で細分した。以下のように四種類で、6分類される。

鉢A・平底

- 1・擬似口縁で、小型壺の胴下半部をそのまま用いたものである。(図49-1・図57-6~8)
- 2・屈曲部があり、直線にわずかに開くもの。(図60-16)

鉢B・丸底で口縁部が直線で僅かに開く。口縁ではA2類との差はない。(図70-3)

台付鉢A・成形・調整手法からみて壺に類似するが、器高が低く、平底のものとの形態が類似することから一応、鉢に含めた。

- 1・擬似口縁をもつもの。(図59-16)
- 2・屈曲部があり、直線に僅かに開くもの。(図49-12・図60-5・10)

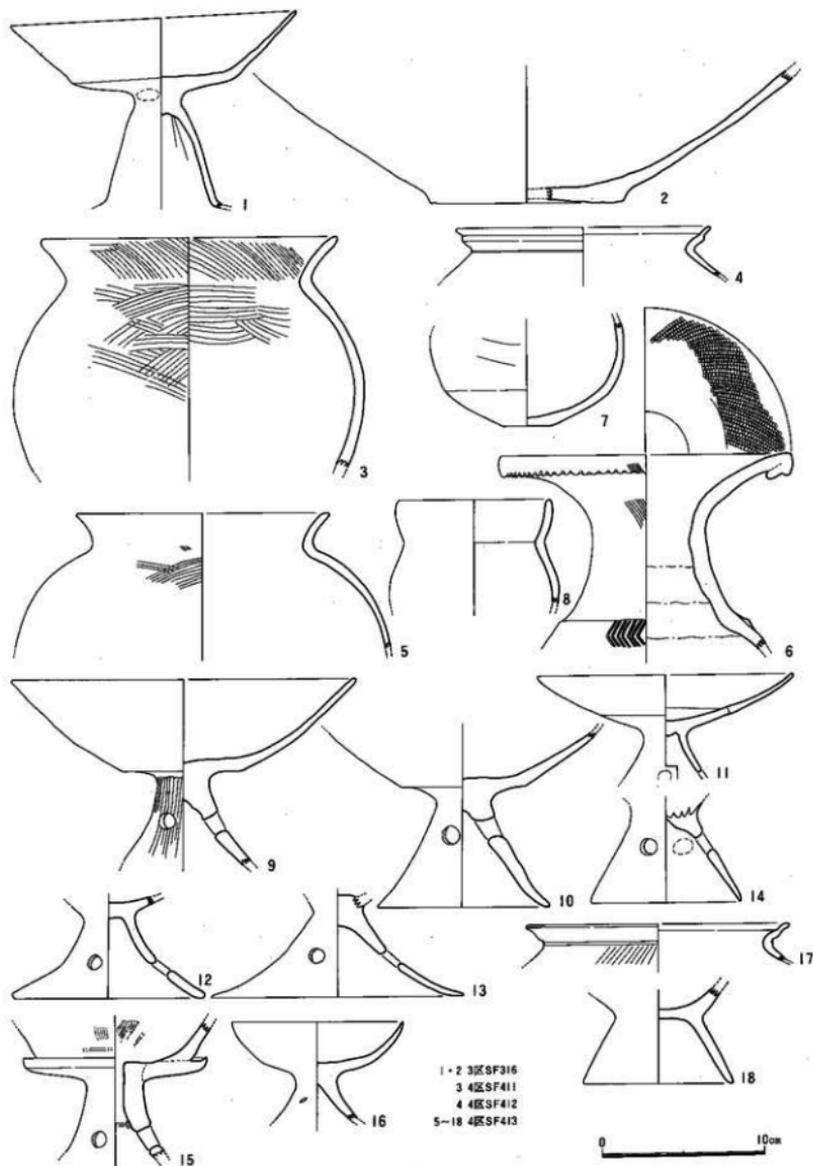
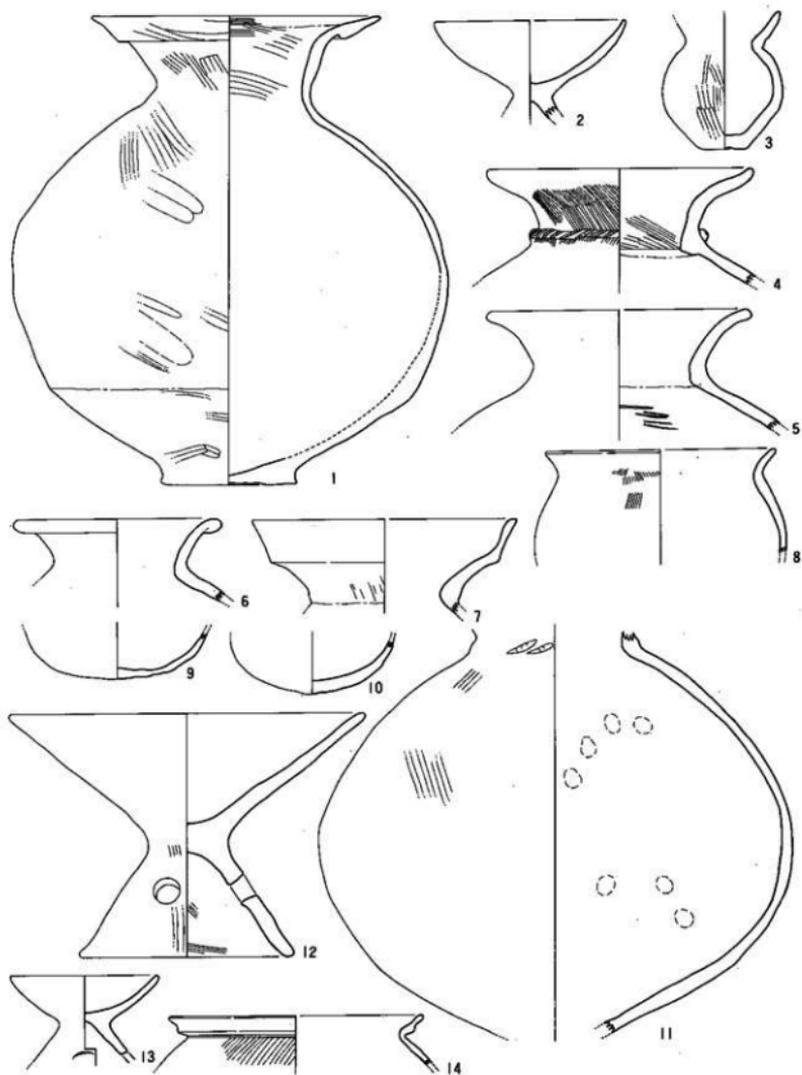


图52 3·4区古墳時代土坑出土土器実測図



1 SF417
2 SF418
3-14 SF419

0 10cm

图53 4区古墳時代土坑出土土器実測図I

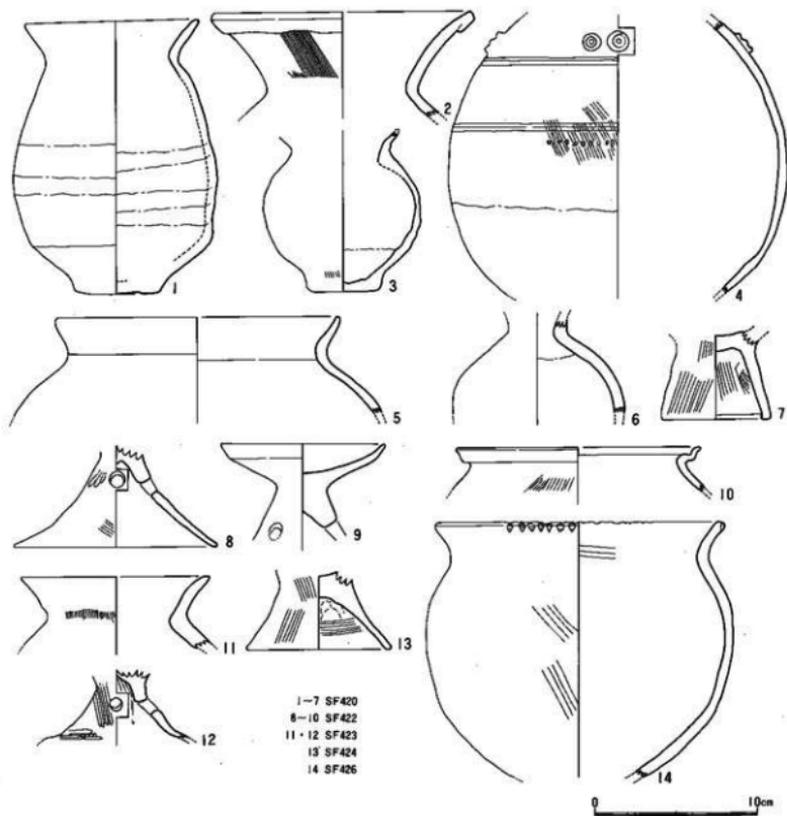


図54 4区古墳時代土坑出土土器実測図Ⅱ

脚付鉢・丸い窓のあいた脚を伴う。1点を図示した、類例は極めて少ない。(図51-7)

胴上半以上の破片では丸底か平底かの区分は不可能のため分類には含めていないが、口縁端部が垂直に近く受口状となる鉢も認められる(図49-2・図52-8・図59-7)。特にSF431出土の図59-7は大型の口縁をもち34.6cmを測る。

これらの鉢は調整手法をみると、丸底の鉢Bと脚付鉢はヘラミガキがされ丁寧につくられるが、他のものは、粗雑であり、刷毛目を多く残している。鉢のなかにも丁寧に作る手法と粗雑な手法の二者があり、それぞれに器種系譜の異なる壺と甕から派生した形態であることをうかがわせる。

高坏

高坏は、大型と小型の形態がある。大型は数少なく、かつ形態変化に富んでいる。坏端部が稜をもち比較的浅く大きく、脚は「八」の字に開く形態が幾つか認められるが、他は個々に異なった形態を伴っている。このような状態なので、あえて分類しないで個々の形態について述べることにする。

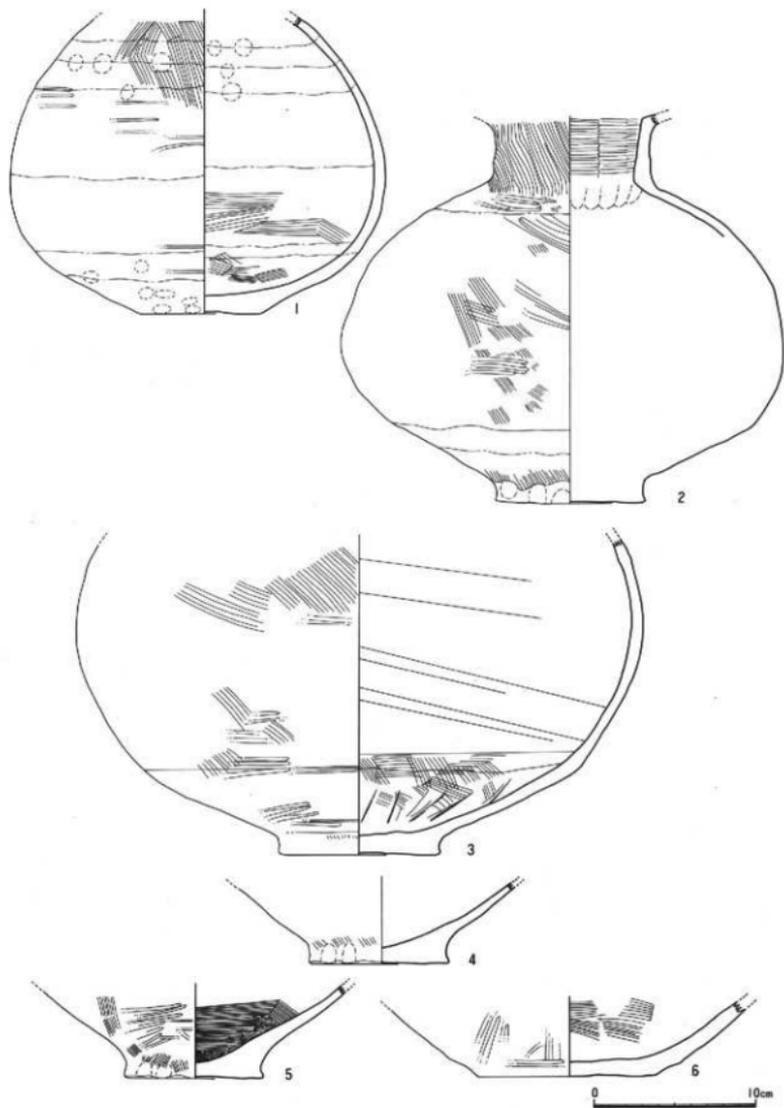


图55 4区古墳時代土坑(SF427)出土土器実測図Ⅲ

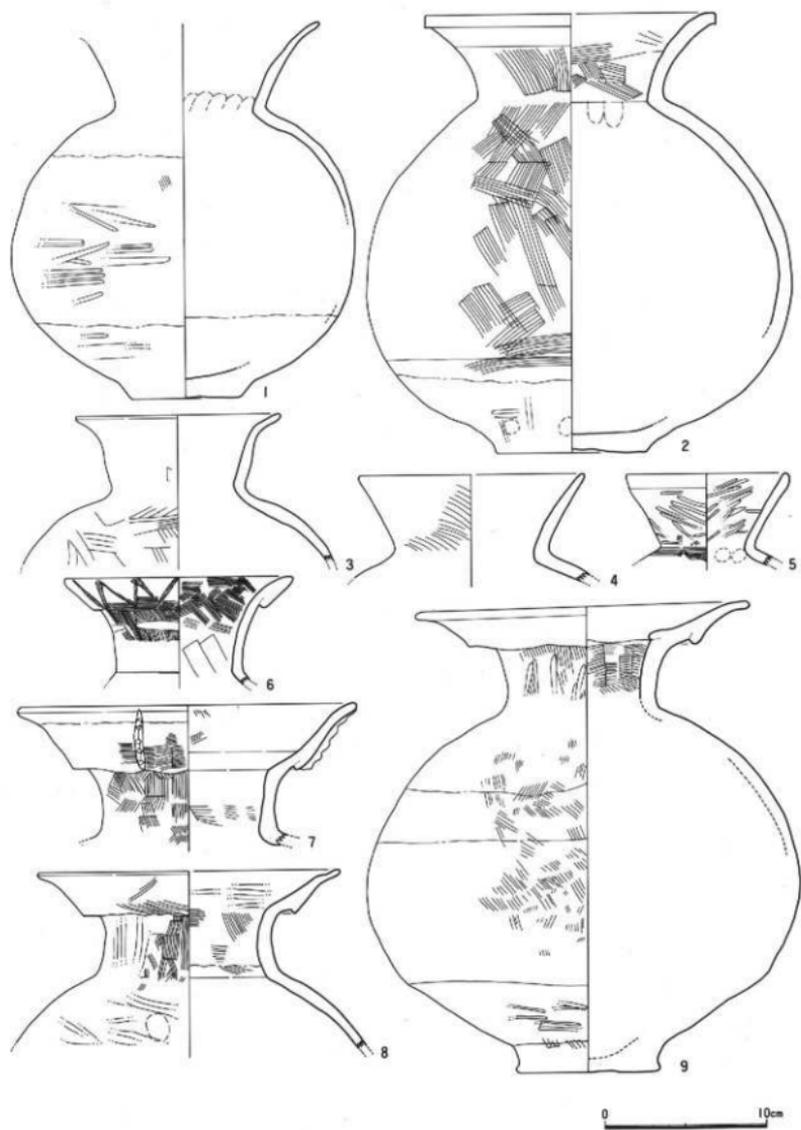


图56 4区古墳時代土坑(SF427)出土土器実測図Ⅳ

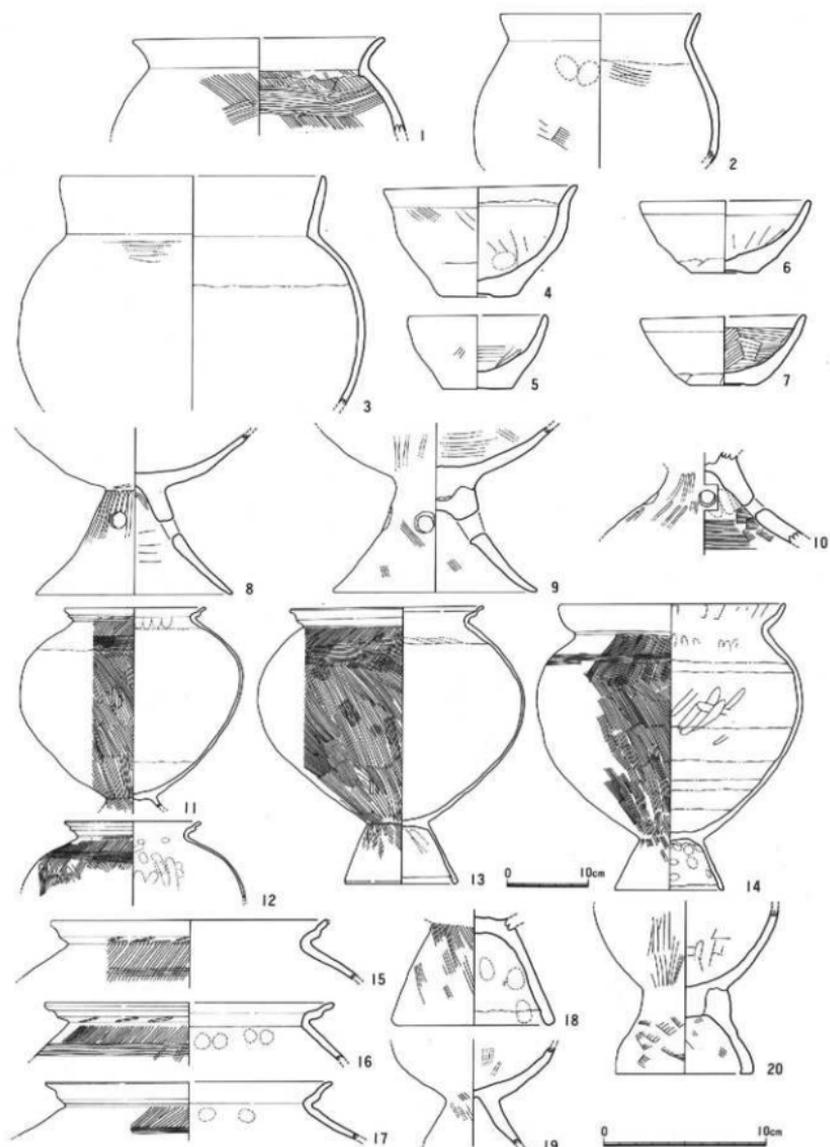


图57 4区古墳時代土坑(SF427)出土土器実測図V

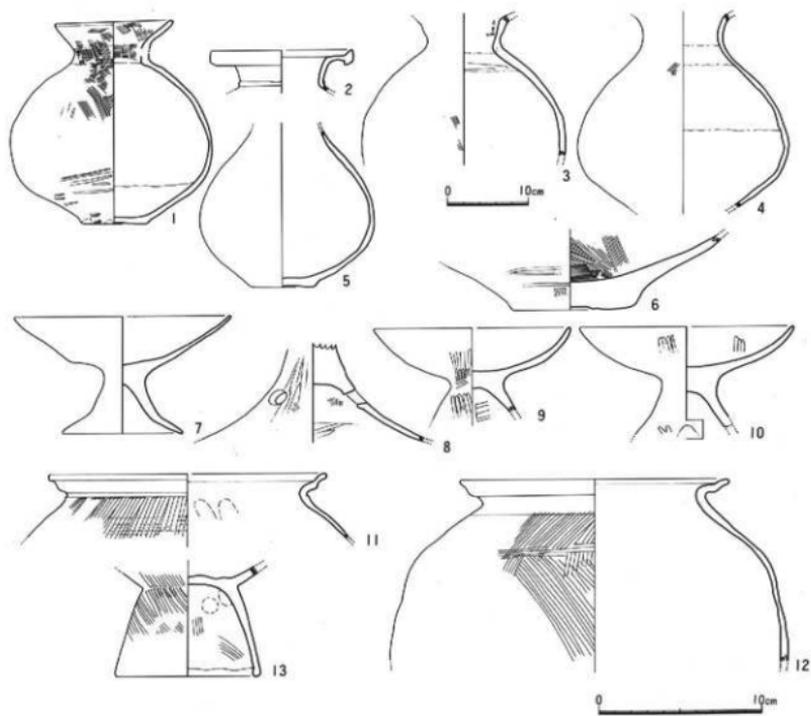


图58 4区古墳時代土坑(SF429)出土土器実測図Ⅵ

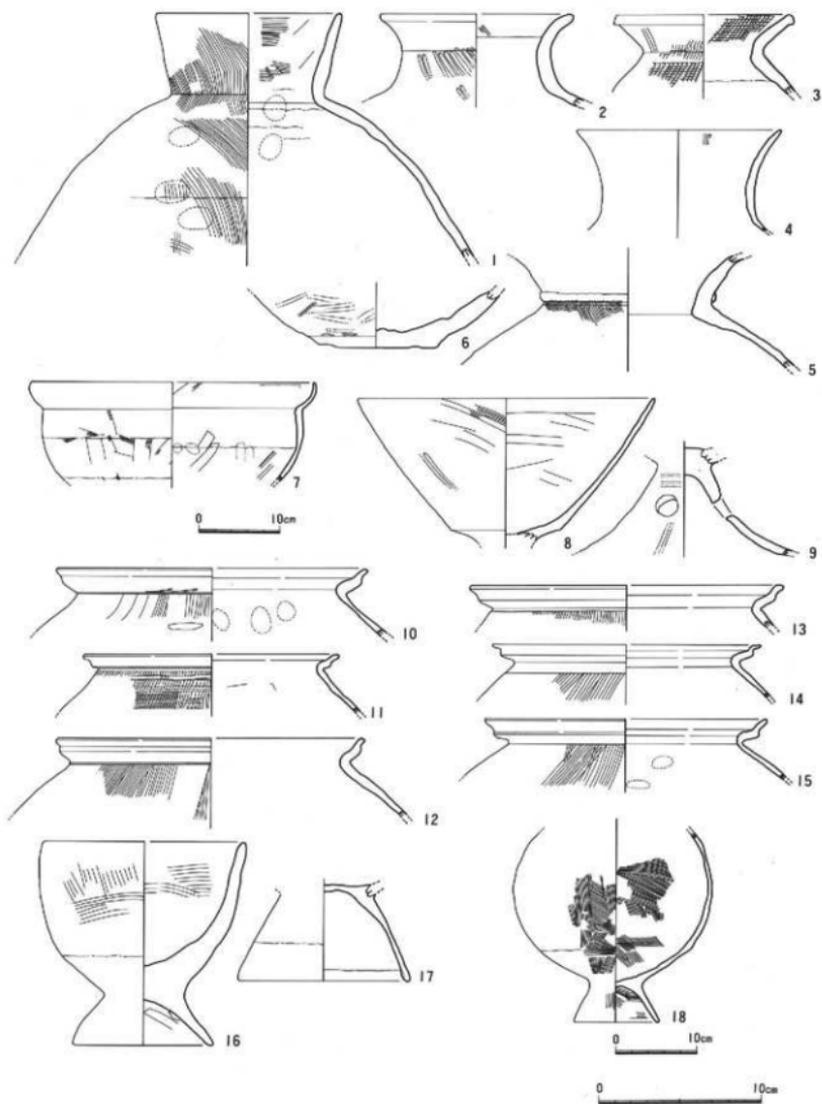


图59 4区古墳時代土坑(SF431)出土土器実測図Ⅵ

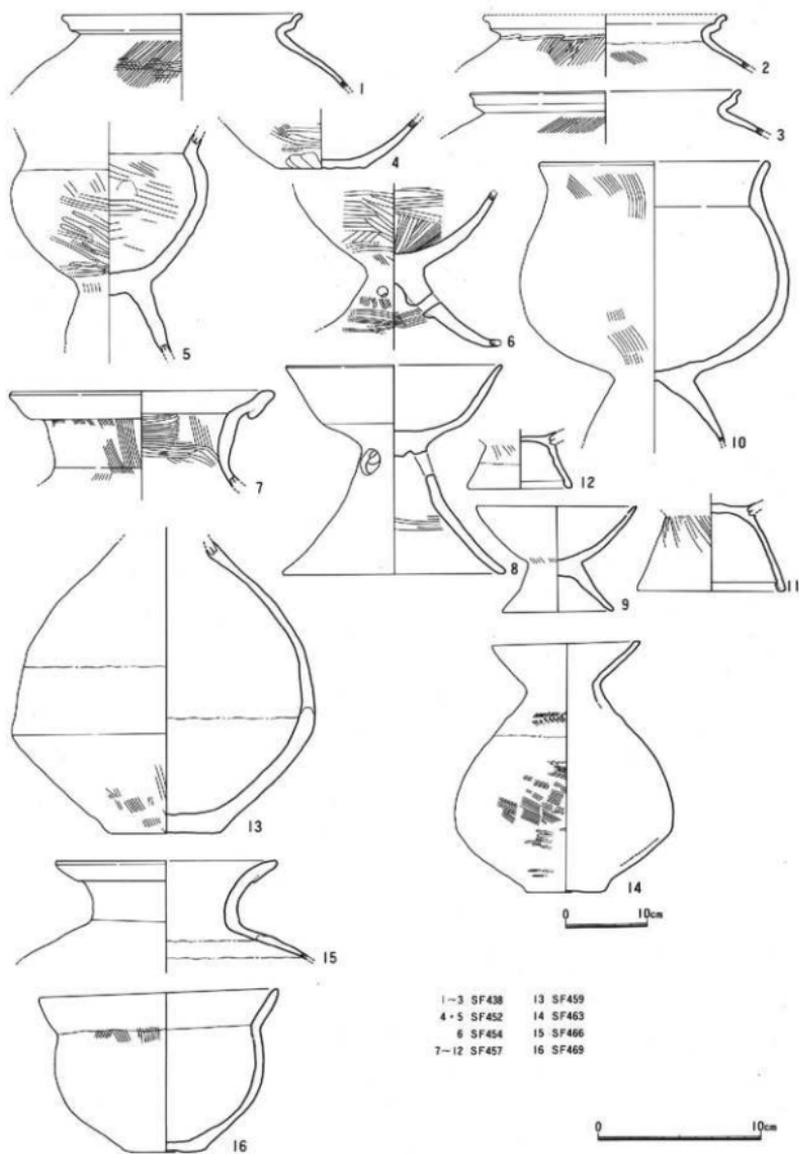


图60 4区古墳時代土坑出土土器実測図Ⅵ

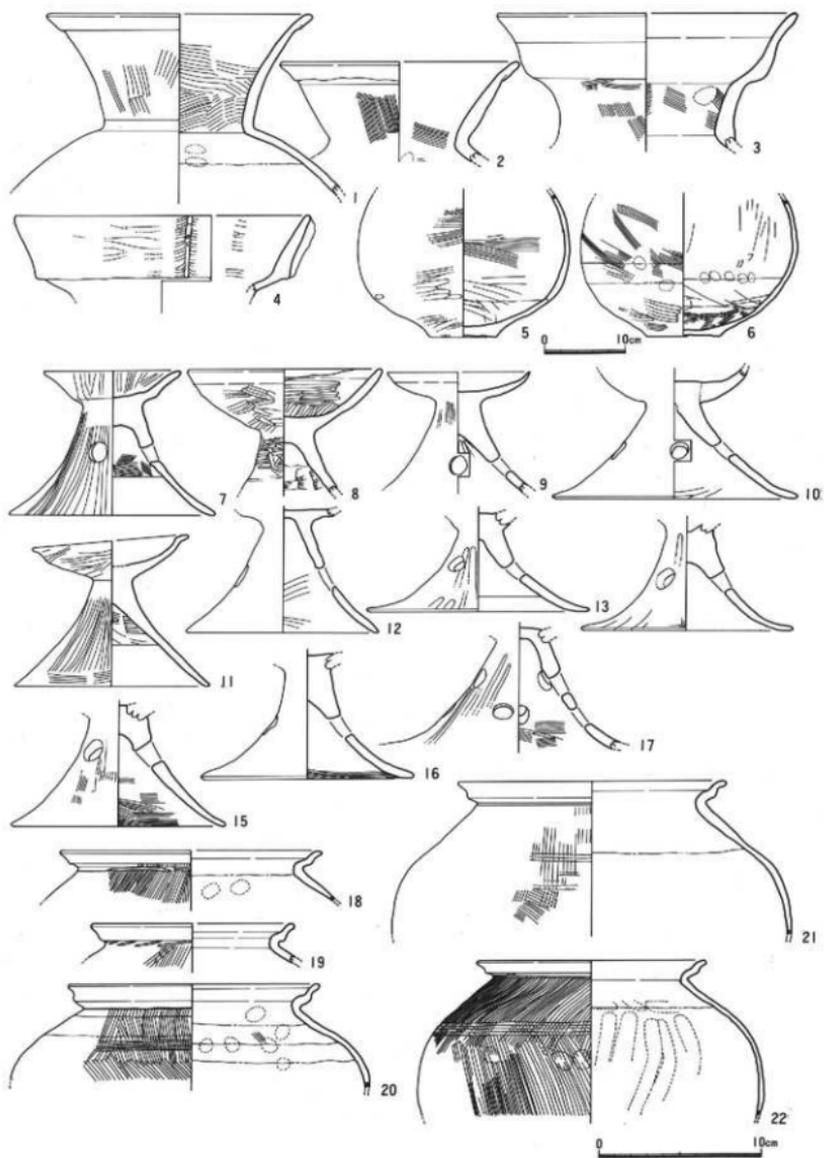


图61 4区古墳時代土坑(SF464・465)出土土器実測図区

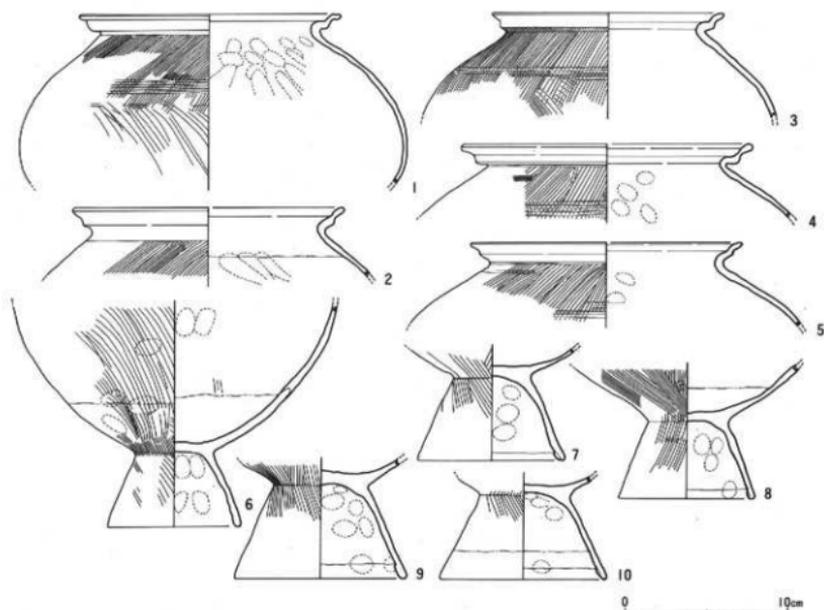


図62 4区古墳時代土坑 (SF464・465) 出土土器実測図X

小型の高坏は、A・Bの二者が認められた。出土量も大型のものより多く、大型を縮小したような相似形もあるが、むしろ小型独特の形態を示すものが多く出土している。このなかでは冒頭で説明したので弥生後期の高坏は省く。

大型高坏

坏部は稜をもち、大きく開くため比較的浅い。脚は「八」の字に開く。(図52-9・10、図69-2) 図66-2は4区凹地から出土したもので、他に類例がみられないものであり、坏部は直立に近い「コ」の字を呈し、脚は途中で更に大きく開き、端部では水平に近くなる。

4区 SF457 出土の図60-8は、坏部に鉢状の形態をもち、脚は高いが広がりが少ない。全体に摩滅するが、調整は丁寧でなく、雑な作りの高坏といえる。

SF316 出土の図52-1は古墳時代の古式土師器のなかでは最も下る土器であり、坏部の変化はあまりみられないが、脚は太い筒状で中央が膨らみ、端部は更に大きく広がるようである。この形態で図示できたのはこの1点のみである。

図53-12は極めて特異な形態であり、坏部・脚部ともに直線に広がり、全体に「X」字状を呈する。摩滅が激しく細部の観察は不能であるが、胎土・色調ともに多くのものとは異なる。

小型高坏

A・大型の相似形の高坏であり、坏部は大きく開き、稜をもつ。(図52-11・図58-7)

B・坏部が丸みをもち、比較的深い形態。脚は大きく開くもの(図60-6・図61-10)と、直線的なもの(図69-1)とが認められる。量的には前者の大きく開く脚が圧倒的に多い。細部では、坏部の口唇部が面取りされる例(図69-3・4)がある。

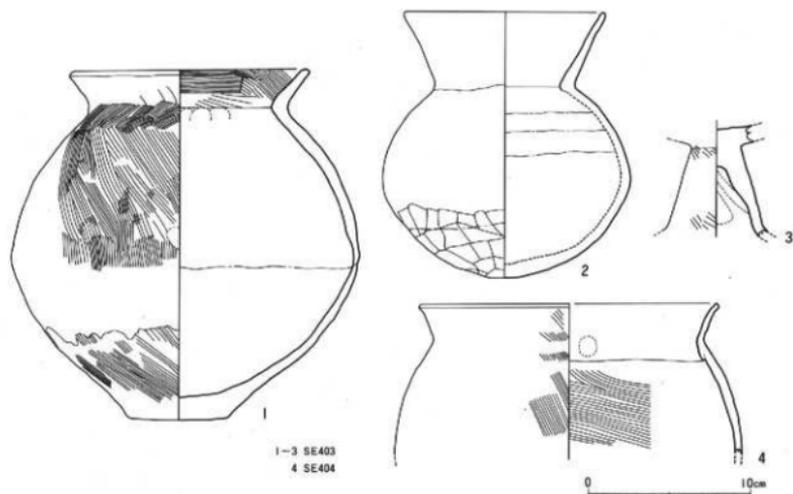


図63 4区古墳時代井戸出土土器実測図

器台

器台には中央に穴の開くものと、穴のないものがある。後者の脚部は小型高環との形態的に類似するが、確実に器台と判断される前者の受部と同様な手法をもつ形態及び、台の径より小さい受部という形態で判断した。以下の2形態3類に分けられる。

A・穴の開くもので、さらに2種類に分けられる。

1・台に器本体が伴うものであり、大型の器台にみられる形態である。(図52-15)

2・受部は直線に開き、脚は「八」の字を呈する(図66-6)。受部の端部が尖るような調整がみられる。

B・穴の無いものであり、数量ではこの形態が多くみられる。

受部端部が尖るもの(図54-9・図61-9)、端部を水平に近く引き出すもの(図61-11)等の手法がみられる。調整・手法ともに小型高環との明確な差はみられない。

甕

甕は平底球胴甕と台付甕がある。図109に示したように平底球胴甕は形態変化に乏しく、口縁部の屈曲の形状が直線的に開くものと、弓状に開くという程度の差であることから、あえて分類せず、大小の甕とした。

大型甕

図63-1・図48-1が典型的な形態であり、刷毛目を多く残し、接合痕も観察できる。大型の甕・図48-1は1区SE101出土の完形品であり、煤も附着している。

小型甕

出土量からすると大型甕より少ない。全体の形態が確認されるのは、図示したものの図68-5のみ

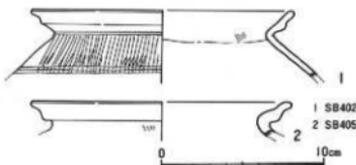


図64 4区古墳時代住居跡出土土器実測図

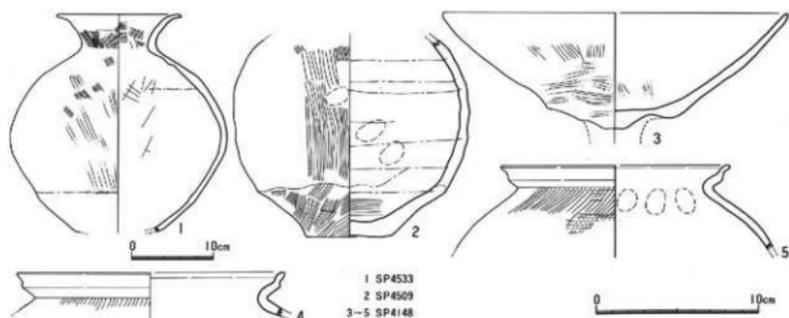


図65 4区古墳時代ピット出土土器実測図

である。形態・手法等の差はなく、大型甕の縮小されたものといえる。

台付甕

大きく三類にわけ、C類のS字状口縁甕を4分類した。以下にその根拠を示す。

A類・図68-6のみ図示できた形態で、出土例に乏しく類例のない形態である。台部を欠損するが、その痕跡が認められる。口縁は「く」の字に屈曲し、胴部の張り弱く弓状の曲線を呈し台部にいたる。最大径は口縁部にある。調整は刷毛目を多用し、C類を除く他の甕との差はないが、色調は暗く焼成は軟質で胎土も異なる。

B類・図57-15の甕がこの形態であり、先のA類同様類例に乏しく、この地域ではみられない甕である。口縁部形態が異なる他は、大きさ・形態・手法・胎土・色調までS字状口縁甕と同一である。口縁は緩く屈曲し、端部付近で内側に曲がる受け口状を呈している。胴部上半に最大径をもち、強く張り出し急激に縮まり台部にいたる。台部内側は折り返している。調整は均一な深く食い込む刷毛目調整で、肩に横位の刷毛目を施す。

胎土・色調は明るく白味が強いことから搬入された甕という推定がされる。

C類・S字状口縁部をもつ甕で、屈曲部の工具による沈線とナデ手法の差により4類に細分される。しかし、分類の根拠とした点を除き、これらの四者間の形態・手法等の差は認められない。

1・屈曲部に全周する沈線を施す。C類の主体を占める形態、図49-8・図57-14・図61-22が典型

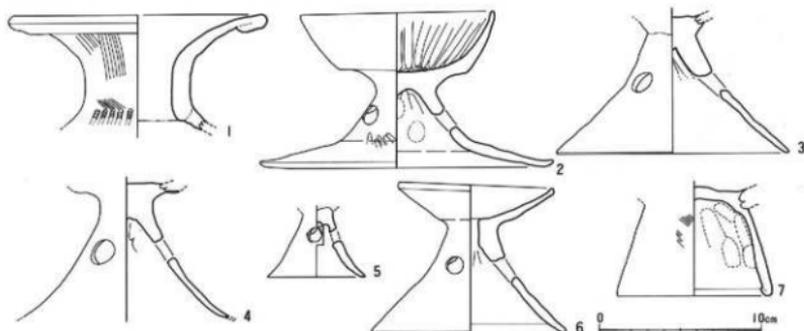


図66 4区古墳時代凹地出土土器実測図

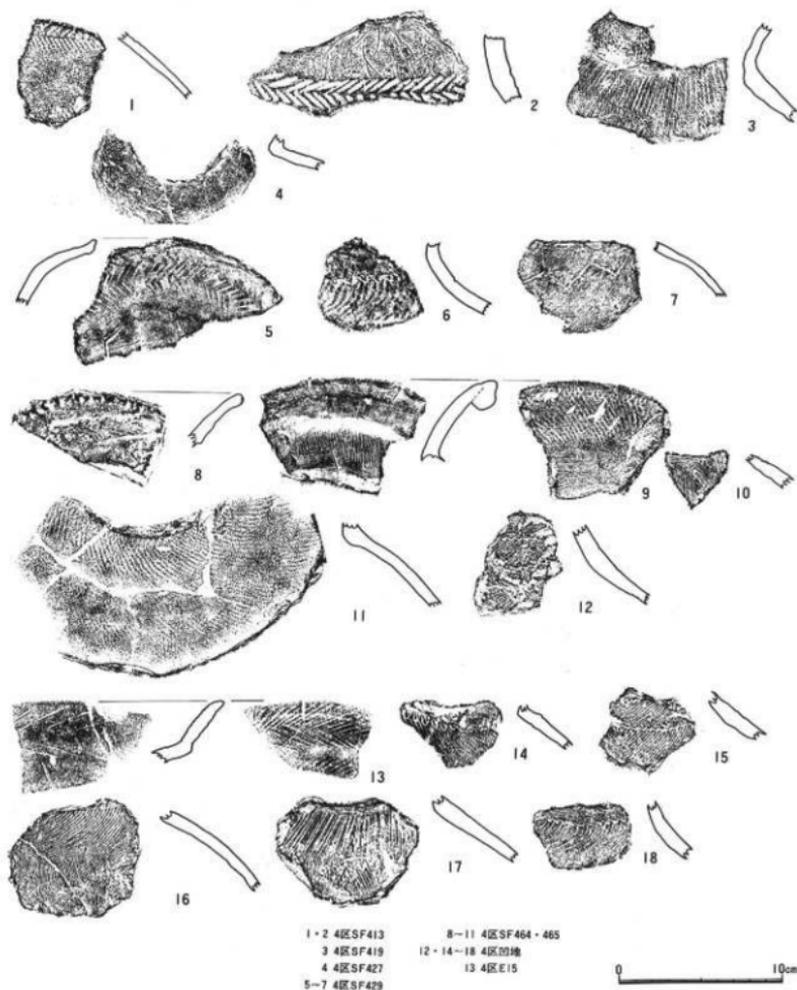


図67 4区出土土器拓影図

的な形態である。

- 2・先のC-1類の手法に加え、口縁部下半に斜位の工具による沈線を施すもの。図57-12・図69-5がこの類に含まれる。相対的な出土量は少ない。
- 3・S字状口縁部の下半に斜位の沈線を施すもので、C-2類の全周する沈線の欠落した形態である。口縁部破片のみで全体の形態は不明である。図57-16・17がこの類である。出土量は最も少ない。
- 4・屈曲部から口縁部にかけて回転によるナデのみ施される形態。ナデの範囲は個々差をもっている

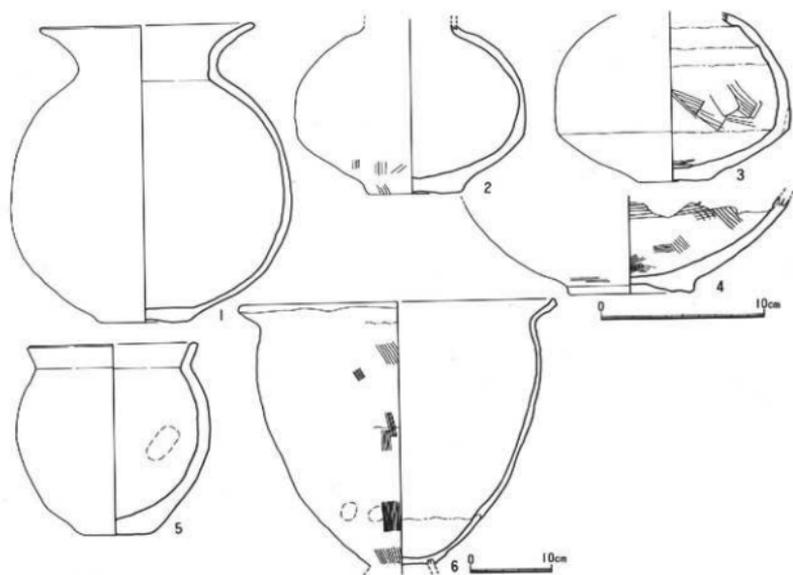


图68 5区古墳時代溝 (SD520) 出土土器実測図

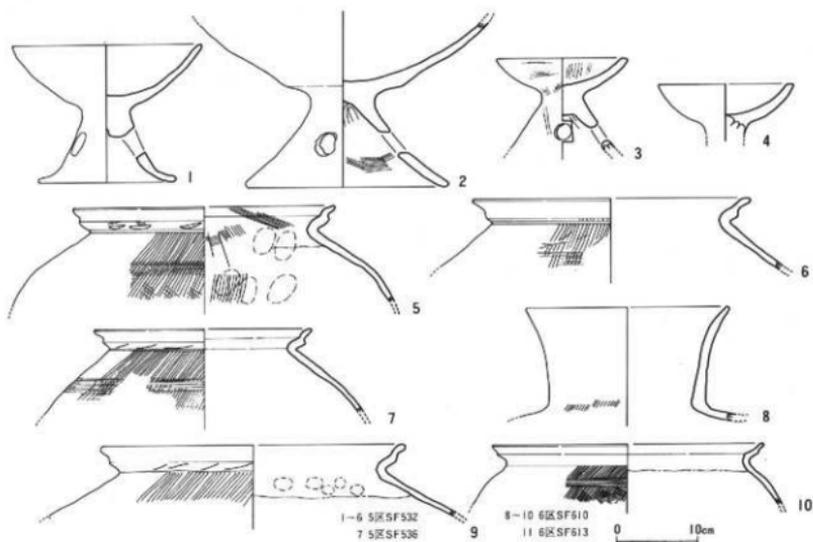


图69 5区古墳時代土坑出土土器実測図

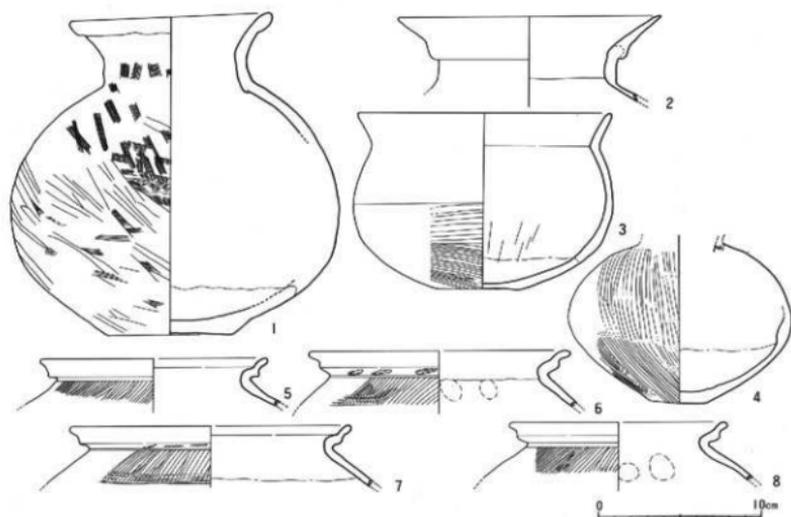


图70 5区古墳時代井戸 (SE516) 出土土器実測図

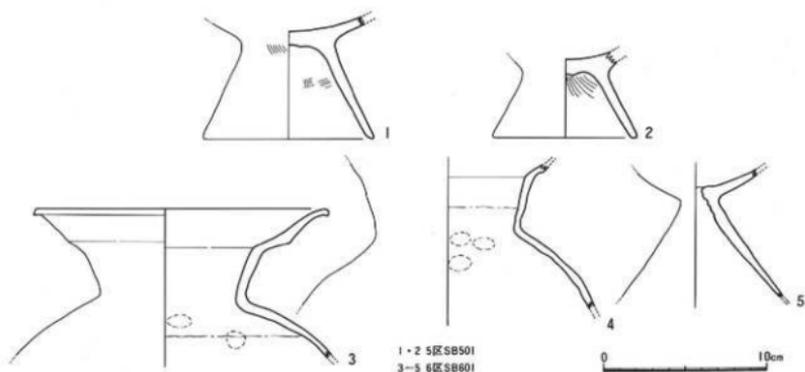


图71 5・6区古墳時代住居跡出土土器実測図

表5 新羅遺跡出土古墳時代土器観察表(1)

押印 No.	器種 器形 分類	口径cm 器高 底径 (高さ)	形盤の特徴	手法の特徴	胎土		備考
					焼成	色	
47-1	高坏	(11.7cm)	脚部長くひらき弱い 透しの穴みられず	器面割離	やや粗、長石砂粒、小礫	SD101 No.104-3	底面1/3、脚部残存、割離 の為観察不能
					やや軟 橙色		
-2	高坏、鉢?	(20.6cm)	口唇丸い 环部丸みをもつ	内、外側とも丁寧なミガキ 調整 やや軟 外側接合痕あり	やや粗、長石砂粒、小礫	SD302 No.079-1	口唇部1/4残存、残存状態 が悪い為単位がとれない
					灰白色		
-4	高坏	---	三方達し 脚部「八」の字に開く	外側ミガキ調整 内側指頭痕あり	やや粗、長石砂粒、小礫	SD302 No.079-4	脚部一部残存
					浅黄色		
-6	高坏	---	四方達し 脚部唇部から更に大きく開く	器面割離	やや粗、砂粒、	SF213 No.101-2	脚部1/2残存
					やや硬 浅黄色		
-7	壺 C 4	(12.6cm)	S字口縁、立ち上がりが強い	内側指頭痕あり、口縁部横 ナデ	やや粗、長石砂粒	SF214 No.102-1	体部一部、口縁2/3残存、 摩滅の為観察不能
					やや硬		
48-1	壺 A	15.5cm 24.7cm 6.2cm	「く」の字単純口縁 鉄網を呈し、小さい平底	口縁部横ナデ調整、胴外面 ハケ調整、内側輪指頭痕 外面スス付着、胴中央周辺 と口縁	やや粗、小礫、礫	SK101 No.055-1	ほぼ完形
					硬 橙色		
-2	壺 C 2	13.1cm 25.5cm 5.8cm	接合口縁、追加した口縁直 立、胴部小さい 平底	内側接合痕、輪指痕あり 外面磨滅あり、ミガキ少し 残る、脚部欠損	やや粗、小礫、礫	SE101 No.054-1	完形
					軟 橙色		
-3	高坏	(16.2cm)	环部外に大きく広がる	---	やや密、小礫、礫	SE101 No.123-4	口縁部2/3残存 割離の為観察不能
					軟 橙色		
49-1	鉢 A 1	(11.0cm) 5.3cm 3.3cm	擬似口縁、先端を尖らせる 丸味もつ体部から小さい平 面につづく	摩滅の為観察不能	やや粗、礫、小礫	SB202 No.078	体部の2/3残存 摩滅の為観察不能
					硬 橙色		
-2	増	(10.4cm)	胴部丸みをもつ 口縁立ち上がり強く、胴球 状を呈する	内外ともにヘウミガキ調整	青、長石砂粒、礫	SB203 No.077	口縁部一部残存 割離の為観察不能
					硬 明褐色		
-3	壺	4.4cm	胴部球形、小さい底部、中 央が凹む	底部粘土貼り付け 胴部外面付塗り 接合痕を境には横ヘウミ ガキ、下は横ナデ調整	---	SB204 No.001-1	脚部残存 摩滅の為観察不能
					硬		
-4	壺	4.7cm	胴部球形、平底	内、外側ともに輪指痕あり 摩滅はげしい為、観察不能	密、炭分の吹き出し、砂粒、小礫	SB204 No.051-1	脚部残存 摩滅の為観察不能
					硬 にぶい黄褐色		
-5	小型壺	2.7cm	底部から胴部立ち上がりき つい 平底	摩滅の為観察不能	やや粗、炭分の吹き出し、小礫、	SB204 No.052-1	底面残存 摩滅の為観察不能
					硬 橙色		
-6	小型高坏	---	---	---	やや粗、炭分の吹き出し、小礫	SB204 No.052-2	脚部一部残存 摩滅の為観察不能
					硬 橙色		
-7	高坏	---	脚部「八」の字に開く 小型のもの	脚部内面付け根未調整 外面摩滅の為観察不能 肩に横位の帯筋き	やや粗、長石砂粒、炭分の吹き出し、小礫、	SB204 No.052-3	脚部一部残存 摩滅の為観察不能
					硬 橙色		
-8	壺 C 1	14.6cm	S字口縁、口縁の立ち上が り強い	口縁付け根全周する横ナデ 沈堀 肩に横位の帯筋き 胴部下の方、指頭痕あり	密、長石砂粒、炭分の吹き出し、小礫	SB204 No.051-2	全体の1/2残存
					硬 赤色		
-9	壺 C 1	(16.4cm)	S字口縁、口縁の立ち上が り弱い	口縁部横ナデ調整 + 付け根全周する工具ナデ調整	青、長石砂粒、炭分の吹き出し、	SB204 No.052-4	口縁部一部残存
					硬 にぶい黄褐色		
-10	壺 B	10.3cm	口縁部外反する 胴部丸みをもつ	口縁部回転横ナデ調整、一 部ナデ後に刷毛目調整 内側ミガキ調整あり 接合痕	密、小礫、礫	SB204 No.090-2	体部口縁一部残存
					硬 にぶい黄褐色		

※ () は推定値

表5 新堀遺跡出土古墳時代土器観察表(2)

洋図 No.	器種 器形 分類	口径cm 器高 底径 (高台値)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土		備 考
					焼 成	色 調	
49-12	台付鉢	8.6cm	歪あり 胴部丸い 台部「ハ」の字に直線的に 開く	外面輪痕、指痕あり 台部内側横位故ナゲ 外側ハケ調整	密、長石の小礫	SB204 No.09-1 全体の3/4残存	
	B	—	—	—	硬 にぶい黄褐色	—	
50-1	小皿壺	(11.1cm) 15.1cm 3.4cm	複合口縁 口縁大きく開く 胴部中央がやや張り出す球状 底部上げ底風	摩滅はげしい為観察不能	やや粗、長石小礫、漂、砂粒	3区2号墓 No.127-3 全体の2/3残存 摩滅の為観察不能	
	—	—	—	—	軟 にぶい黄褐色	—	
—2	罎	3.05cm	腰部丸味をおびる 底部へこみあり 底部の境不明確	2/3高さあり	やや粗、長石砂粒、雲母	2区2号墓 No.127-3 全体の2/3残存 摩滅の為観察不能 高さあり	
	—	—	—	—	軟 褐色	—	
—4	壺	12.1cm	口縁外反する 歪み大きい 胴部球状を呈する	内側板ナゲ調整 外側板ノギキ調整	やや粗、長石砂粒、小礫	2区3号墓 No.300-1 口縁部残存 高さあり	
	A3	—	—	—	硬 褐色	—	
51-1	壺	(16.3cm)	口縁直立する 胴部丸味をおびる	内側指痕残る 外側磨面摩滅	粗、長石砂粒、小礫、石英砂粒、小礫	SD448 No.182-1 口縁2/3残存、腰部わずかな 摩滅の為観察不能	
	A3	—	—	—	軟 灰黄色	—	
—2	壺	(15.6)cm	湾曲し大きく外反する 折り返し口縁	磨面摩滅	粗、長石砂粒、小礫、漂	SD448 No.213-2 口縁1/4残存 摩滅の為観察不能	
	B1	—	—	—	軟 褐色	—	
—3	壺	(15.4cm)	単純口縁 口唇丸味 口縁部湾曲し大きく開く	口縁部内外側毛調整後横ナゲ	密、長石砂粒、小礫、漂	SD448 No.212-2 口縁1/2残存	
	A1	—	—	—	軟	—	
—4	壺	22.5cm	複合口縁 口縁部2段になり外反する	口唇部に棒状浮文(3本4ヶ 所) 頸部に粘土帯、その上を工 具で斜位の押圧	やや粗、長石礫、小礫、砂粒	SD448 No.212-1 口縁残存	
	D	—	—	—	軟 浅黄褐色	—	
—5	壺	(10.5cm)	単純口縁「く」の字で直線的 に開く	口縁部ハケ調整 胴部横押し引きによる連続 剥突	やや粗、長石小礫、漂	SD448 No.213-5 L線1/4残存	
	—	—	—	—	軟 にぶい黄褐色	—	
—6	小皿壺	—	胴部球状、平底	外面刷毛調整後ヘラミガキ 内面刷毛調整後ナゲ	密、長石砂粒、小礫、漂	SD448 No.212-3 底面、腰部1/3残存	
	—	—	—	—	軟 灰黄色	—	
—7	肩付鉢	—	口縁大きく外反する 下部下半丸い 肩部は大きく「ハ」の字に 広がる	三方透し 下部内外横ヘラミガキ 肩部外側タテのヘラミガキ 胴部内側ハケ調整	やや粗、長石砂粒、小礫	SD448 No.212-4 ほぼ残存	
	—	—	—	—	軟 にぶい黄褐色	—	
—9	壺	(24.6cm)	S字口縁 口縁立ち上がり強い	口縁部下半何らかの工具で 斜位の押圧、くびれ部に工 具による金盦の沈線入る 口縁全体に横ナゲ	密、長石砂粒、小礫、雲母	SD448 No.213-5 L線1/4残存	
	C1	—	—	—	軟 にぶい黄褐色	—	
—10	壺	22.8cm	S字口縁 口縁立ち上がり強い	—	密、長石砂粒、小礫、雲母	SD448 No.213-4 口縁1/3残存	
	C1	—	—	—	軟 にぶい黄褐色	—	
52-1	高杯	(17.5cm)	口唇薄く尖がる、歪み大きい 杯部は底から直線的に大き く開く、脚はふくらみ、下 半で更に大きく開く	杯部と脚部の貼り付位置指 痕あり 脚部内側しぼり痕 頂部は未調整	やや粗、雲母、漂、小礫、砂粒	SF316 No. 219-1 杯部、脚部3/5残存	
	—	—	—	—	軟 褐色	—	
—3	壺	(18.0cm)	口縁部外反、肩部丸く先細 り 胴部球状を呈する	ハケ調整 4/cm本	粗、小礫	SP411 SF413 No.272-1 L線全体一部残存	
	A	—	—	—	硬 淡褐色	—	
—4	壺	(15.5cm)	S字口縁、口縁の立ち上が りかなり強い	口縁くびれに全周する横沈 線入る	粗、長石砂粒、石英、小礫、雲母	SP412 No.272-1 口縁1/4残存 磨面摩滅の為観察不能	
	—	—	—	—	軟	—	
—5	壺	(15.4cm)	口縁部外反する、弱い湾曲 あり 胴部上半丸味をもつ	口縁部横ナゲ調整 胴部ハケ調整	粗、長石砂粒、小礫、漂	SP413 No.189-1 L線一部残存 磨面摩滅の為観察不能	
	A	—	—	—	軟 灰黄色	—	
—6	壺	(17.8cm)	折り返し口縁 頸部から口縁湾曲し大きく 外反する 頸部凸帯の為有説	口縁内側磨面より4cmの周縁 文、外側口縁部V字状の工具に よる押圧、凸帯、凸帯の上下にク シによる浪状の連続する剥突	粗、浪状の吹き出し、小礫	SP415 No.182-1 L線部残存	
	B1	—	—	—	軟 浅黄褐色	—	

※ () は推定値

表5 新堀遺跡出土古墳時代土器観察表(3)

押田 No.	器種 器形 分類	口径cm 器高 器径 (備考性)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土		備 考
					焼 成 色 調		
52-7	壺	3.0cm	胴部丸みをもつ 底部小さく、球脚を呈する	全面、内外ともにヘラミガキ	やや粗、長石砂粒、小礫	SF413 No.190-2	全体1残存
					灰 褐色		
-8	広口壺	(9.2cm)	口縁部、わずかに内湾する 屈曲弱く、脚の張りも少ない	ヘラミガキ調整か?	粗、小礫	SF413 No.190-3	L1線1/3、胴部一部残存
					灰 褐色		
-9	高坪	(20.9cm)	三方透し、脚は「八」の字に 開く 坏部底小さく、弱い稜から 直線的に大きく開く	全面ヘラミガキ 脚部内側天井部丁寧に調整	粗、長石砂粒、小礫	SF413 No.190-1	全体の1残存
					灰 褐色		
-10	高坪	(10.6cm)	三方透し、坏部底弱い稜 直線的に脚部大きく開く、 「八」の字は開くが開き弱い	器面摩滅	粗、長石砂粒、小礫、礫	SF413 No.192-3	脚部、作部一部残存 摩滅の為観察不能
					灰 黄褐色		
-11	高坪 A	(15.6cm)	坏部皿状に大きく開く	坏部縁角強あり 透し強あり 脚部天井部に接合時の粘土 未調整	粗、小礫	SF413 No.189-4	L1線1/3残存 作部わずか
					灰 褐色		
-12	高坪	(11.5cm)	脚部丸みをもつ 脚低く、大きく「八」の字に 広がる 三方透し	器面摩滅	粗、小礫	SF413 No.191-2	脚部1/3残存 摩滅の為観察不能
					灰 黄褐色		
-13	高坪	(15.4cm)	脚部低く「八」の字に大きく 開く 三方透し	器面摩滅	粗、小礫、礫	SF413 No.192-2	脚部1/3残存 摩滅の為観察不能
					灰 黄褐色		
-14	高坪	(9.2cm)	脚部直線的、開き弱い 臺の台の形態に類似 三方透し	脚部内側指原痕		SF413 No.189-3	脚部1/3残存 摩滅の為観察不能
-15	器台 A 1	(10.4cm)	器と台部が同一個体として 成形される 台部の端尖る 台部三方の透し	全体ヘラミガキ、脚部内面 緩斜めのヘラミガキ 器部台部の接合部分、工具 で強く押さえ調整している	やや粗、小礫	SF413 No.191-3	脚部1/2、台部2/3残存
					灰 灰黄色		
-16	高坪	(10.4cm)	坏部球状 先端尖る	脚部、天井部無調整	粗、長石砂粒、小礫	SF413 No.189-2	L1線1/5残存 作部、脚部一部残存 摩滅の為観察不能
					灰 黄褐色		
-17	壺 C 1	(18cm)	S字口縁 口縁立ち上がりやや弱い	口縁のくびれ、全周する沈 線	密、長石砂粒、小礫	SF413 No.191-4	L1線一部残存
					灰 淡黄色		
53-1	壺 B 2	17.6cm 28.8cm 8.2cm	折り返し口縁 口縁外反する 脚部球状を呈する 底部突出する	ハケ調整後ミガキ 底部形成時の粘土丁寧にナ デである	やや粗、長石砂粒、小礫、礫	SF417 No.200-1	14ヶ窪形
					灰 褐色		
-2	高坪 B	11.6cm	坏部、半球を呈する 口唇丸い	丹彩か?	密、長石砂粒	SF418 No.216-2	L1線1/5残存 胴部の為観察不能
					灰 淡褐色		
-3	壺	2.7cm	口縁「く」の字に外反する 広口壺 脚部球状を呈する	胴部縦ミガキ(上下2段か)	やや粗、長石砂粒、小礫	SF419 No.089-3	底部から作部残存
					硬 にぶい黄色		
-4	壺 A 1	16.0cm	口縁「く」の字に外反して大 きく開く 口唇部は丸味をもち、わず かに立ち上がる	胴部に粘土を帯状に貼り付 け、その上にハケ工具によ る斜位の押圧、口縁部ハケ 調整、口唇部回転ナデ	やや粗、長石小礫、小礫	SF419 No.186-1	L1線2/3残存
					灰 淡褐色		
-5	壺 A 1	15.6cm	口縁「く」の字に外反し、大 きく開く	摩滅の為観察不能	やや粗、小礫	SF419 No.185-4	口縁1/3残存
					灰 淡黄色		
-6	壺 B 1	12.2cm	折り返し口縁 口縁「く」の字に外反する	内外ともナデ調整	やや粗、小礫	SF419 No.185-2	L1線完形
					灰 灰褐色		
-7	壺 C 1	16.2cm	複合口縁 口唇部水平	口唇部弱い面取り 口縁と胴部の接合痕、明 瞭に残る	やや粗、長石小礫	SF419 No.185-3	L1線1/3残存 黒面あり
					灰 にぶい黄色		

※ () は推定値

表5 新編遺跡出土古墳時代土器観察表(4)

神国 No.	器種 器形 分類	口径cm 器高 底径 (高台)	形態の特徴	手法の特徴	胎土		備考
					焼成 色調	備考	
53-8	壺 B	(11.0cm)	口縁「く」の字に外反 1層丸味、張り出しの弱い 写状の丸味あり	口縁回転積ナゲ調整 胴部ハケ調整 1cm/6本 丹彩か?	やや粗、砂粒	SF419 No.182-2 口縁1/2残存 摩滅の高観察不能	
					軟		
-11	壺	---	胴部球状を呈する	胴部擦削突あり 内側折痕あり 外面わずかにミガキが残る	やや粗、長石砂粒、砂粒、小礫	SF419 No.183-1 底部残存 摩滅の高観察不能	
					硬		
-12	高坪	21.8cm 15.0cm 13.2cm	口唇やや丸味あり、折、直線的に開く、開きは弱く、深い杯部、胴中央わずかにふくらむ、胴三方通し	ハケ調整後ミガキ三方通し	やや粗、砂粒	SF419 No.184-1 全体の1/2残存	
					軟		
-13	高坪 B	---	折部わずかに丸味を持って開く 解通し1ヶ所残る	丁寧なヘラミガキ	やや粗、砂粒	SF419 No.186-5 口縁から基部1/2残存	
					硬		
-14	壺 C1	(15.5cm)	S字口縁、立ち上がり強い	胴部に全周する沈線入る	やや粗、長石砂粒	SF419 No.185-1 口縁1/7残存	
					硬		
54-1	小型壺	(11.5cm) 16.9cm 5.2cm	口縁部「く」の字に外反する、開き弱い、単純口縁 胴部太い、口唇は丸く尖る 胴部は丸味弱く、裾長の形態	内側底部から体部ほどハケ調整 胴部に輪痕残る	やや粗、砂粒、小礫、礫	SF420 No.000-1 1/12残存	
					軟		
-2	壺 B2	(15.7cm)	折り返し口縁 口縁部「く」の字に外反する	ハケ調整直	やや粗、砂粒、小礫	SF420 No.193-1 口縁1/2残存	
					硬		
-3	小型壺	4.1cm	胴部球状を呈する 底部突出する	内側に胴部と底部との接合痕あり 底部ハケ調整残る 胴部はナゲ調整している	やや粗、小礫	SF420 No.069-2 底部から体部残存	
					硬		
-4	壺	---	胴部球状を呈する	肩部にボクタン状の浮文、円形工具の刺突 胴中央に、一列の工具による刺突あり	粗、小礫、石英	SF420 No.194-4 胴部一部残存	
					軟		
-5	広口壺 A	(17.3cm)	単純口縁、口縁部わずかに外反する	口縁内側に強い回転ナゲ押し	粗、磨多数	SF420 No.194-1 口縁1/3残存	
					軟		
-6	壺	---	頸部が細く、胴部球状を呈する	内面に輪痕残る	粗、砂粒、礫	SF420 No.241-2 底部1/2残存 磨滅の高観察不能	
					軟		
-8	高坪	13.4cm	腹大きく「八」の字に開く三方通し	ハケ調整後ミガキ、胴部内側に回転の横ナゲあり	粗、礫、小礫	SF420 No.241-1 胴部3/4残存	
					軟		
-9	部台 B	10.0cm	折部は立ち上がり弱く大きく開き、口縁で立ち上がりや強くなる、口唇先磨い、三方通しと思われる、口縁弱い腹を持つ	摩滅はげしい	粗、長石砂粒、小礫	SF422 No.243-2 折部、基部一部残存 摩滅の高観察不能	
					軟		
-10	S字 C4	(14.8cm)	S字口縁、立ち上がり強い 口縁内側にへこみがきつい	口縁を回転積ナゲする 内側ナゲ調整	やや粗、長石砂粒、小礫	SF422 No.243-3 口縁1/5残存	
					硬		
-11	壺 A3	11.4cm	口縁単純口縁「く」の字に外反する 口唇先磨い	ハケ調整後、ミガキ 口縁部内外回転ナゲ調整	やや粗、長石小礫、砂粒	SF423 No.180-1 口縁残存	
					硬		
-12	高坪	---	「八」の字に大きく開き、裾部がさらに大きく広がる三方通し	胴内側ナゲ調整 内側とほり痕あり 外面光沢の出る丁寧なヘラミガキ	粗、小礫、礫	SF423 No.180-2 胴部3/3残存	
					軟		
-14	壺 A	(17.7cm)	口縁わずかに外反する 胴部丸味をおびる	口唇外面に工具によるキザみあり 外面ハケ調整	粗、長石礫、砂粒	SF426 No.242-1 口縁1/4、胴部1/3残存	
					軟		
55-1	壺	7.3cm	胴部球状下半がやや膨らむ	ハケ調整後ミガキ、胴上半部毛目よく残る、胴中央部に丁寧なヘラミガキ、全体に輪痕付粘土接合痕、指痕残る	粗、小礫、砂粒、磨多数あり	SF427 No.245-1 胴部、底部残存	
					硬		
					にぶい黄褐色		
					淡黄褐色		

実()は推定値

表5 新堀遺跡出土古墳時代土器観察表(5)

押戻 No.	器種 器形 分類	口径cm 器高 底径 (高台様)	形器の特徴	手法の特徴	胎土		備考
					焼成 色調		
55-2	壺	7.0cm	胴部下部の接合部わずかに 屈曲する	ハケ調整、外面ヘラミガキ 内面底部ハケ調整工具によ るナゲ、輪痕底部との接 合直線	やや粗、礫、小礫、砂粒	SP427 No.243-1	胴部、 内外、一部スス
		9.7cm	横長の絞割を呈する胴部 底部突出	ハケ調整後ミガキ、内面ハ ケ調整後ナゲ 粘土接合痕有、底部ナゲ、 工具で突いた痕あり	やや粗、礫、小礫、多数含有 砂粒	SP427 No.233-1	胴部、 胴部一部残存 胴部ハケス
-4	壺 D	9.1cm	円筒形の胴部、急激に開く 口縁部か	外面ハケ調整後ヘラミガキ、 輪痕、胴部は内外共ハケ調 整がはつきりしている、外面 に底部と胴部の接合直線	やや粗、礫、雲母、石英含有 砂粒	SP427 No.282-1	胴部から底部残存 色黄白はく在地と異なる
		---	単純口縁	内、外面共雲母の為厚相不明で あるが、外面ハケ調整後ヘラミガキ、 輪痕、底部と胴部との接合痕あり、 木葉痕、胴部内面指ナゲ	粗、礫、小礫、砂粒	SP427 No.293-1	口縁部一部残存 胴部、底部残存
56-1	土師器 壺 A 2	17.7cm 23.0cm 6.4cm	単純口縁 口縁「く」の字に外反する 胴部球状を呈する 突出する底部	ハケ調整後ミガキ、口縁部 面取あり、口縁上半回転横ナゲ、 胴部下部より底部に黒 斑あり、外面に接合痕あり	密、礫、小礫、砂粒	SP427 No.246-1	口縁部1/2残存 胴部、底部残存
		A 1	単純口縁、口縁部大きく外 反する、口唇直立する、胴 部球状を呈する、底部やや 突出	口縁7.7cm	やや粗、礫、小礫	SP427 No.248-1	口縁、胴部一部残存
-3	土師器 壺 A 2	12.3cm	単純口縁、口縁さらに大き く外反する、内面アゴコ している、上半さらに大き くやや唇が張る形態か	口縁7.7cm	やや粗、礫、小礫	SP427 No.248-1	口縁、胴部一部残存
		土師器 壺 A 3	13.7cm	先細りの単純口縁 直線的に開く	器面摩滅はげしい	やや粗、礫、多数含有 砂粒	SP427 No.249-1
-5	土師器 壺 A 3	9.9cm	口縁部端部直立 直線的に開く。単純口縁	口縁下半、斜め横のヘラミ ガキ 胴部下に波状の横積まり 口縁部内面横ヘラミガキ	やや密、小礫多数含有 砂粒	SP427 No.287-2	口縁残存
		土師器 壺 B 2	13.8cm	湾曲して折り返し口縁	折り返し部、外面に刷毛工具 による山形の刺突と回転横 ナゲを施す、黒斑あり、胴部 のくびれ部に沈積物入る	やや密、小礫、砂粒、雲母含有 砂粒	SP427 No.245-2
-7	土師器 壺 D	20.6cm	複合口縁、口唇部でさらに 開く 胴部円筒状	口縁部外面棒状浮文 ハケ調整	やや密、小礫	SP427 No.223-1	口縁残存
		土師器 壺 D	18.1cm	大きく開く複合口縁 胴部は円筒状、ゆるやかに 肩部へつづく 球状の胴部か	胴部は刷毛目多く残る 胴部は斜め横ミガキ 内面ハケ調整後線ナゲ 輪痕あり	密、礫、小礫	SP427 No.248-2
-9	土師器 壺 D	20.0cm 28.9cm 8.0cm	大きく開く複合口縁、口唇 部でさらに開き、水平に近 くなる、胴部円筒状、底部 突出はげしい	胴部から胴部、ハケ調整後 ミガキ、輪痕、胴部と底 部との接合痕あり、内面、 口縁はナゲ、胴部ハケ調整	やや粗、礫、小礫、砂粒 多数含有	SP427 No.259-1	口縁、 胴部一部残存 はく定形 胴部、底縁立ちスス
		土師器 広口壺 B	11.7cm	口縁やや湾曲して外反する 胴部丸味をおびる	口縁、内・外ナゲ回転調整 胴部ハケ調整	やや密、長石、石英、雲母、砂粒、小礫	SP427 No.289-1
-2	土師器 広口壺 A	15.8cm	口縁「く」の字湾曲して外反 する 胴部やや丸味をおびる	口縁部回転横ナゲ 胴部内面接合時の粘土末施 理の上にハケ目	密、長石、雲母、礫	SP427 No.259-2	L線1/8、 体部わずかに残存 スス付
		土師器 広口壺 B	12.2cm	口縁、直線に立ち上り 胴部球状を呈する	外側指痕横ハケ目みられる	密、小礫、礫	SP427 No.247-1
-4	土師器 広口壺	16.1cm	口縁、直線に立ち上り 胴部わずかに丸味を呈する	輪痕痕 ヘラミガキがわずかに残る	粗、長石砂粒、小礫、小礫 多数含有	SP427 No.259-3	L線1/7、 体部一部残存
		土師器 鉢 A 1	11.7cm 6.5cm	口唇部先細り、口縁わずかに 外反する 胴部上半やや丸味あり 底部凹み	口縁部回転の横ナゲ 胴下半、指痕のナゲ 底部内面に強い指痕押圧 ヘラミガキ	密、長石砂粒、小礫、礫	SP427 No.249-4
-6	土師器 鉢 A 1	8.6cm 4.5cm 4.2cm	口唇部、丸味をもつ、体部 わずかにくみを持ち、 口縁で直立する	内面にハケ目、ヘラミガキ がはつきり 器面刺れる	粗、小礫、礫	SP427 No.289-4	全体の1/2残存 刺れる為、観察不能

注()は測定値

表5 新潟県出土古墳時代土器観察表(6)

神国 No.	器種 器形 分類	口径cm		形態の特徴	手法の特徴	胎土		備考
		器高 底径 (適合)	口径			焼成 色調	備考	
57-7	鉢 A 1	10.4cm	—	口縁丸味 胴部丸味を持ち、口縁へつ 大きく開く、三方返し 底面凹みあり	口縁部回転模ナゲ、内側工 具による調整痕あり、底部 内側強い指痕へ、胴部下平、 手持の痕ヘラケズリ	密、長石の砂粒、砂粒、小礫	SP427 No.288-1 全体の2/3残存 黒底	
		4.4cm 4.0cm	—	—	—	灰 灰黄色	—	
-8	鉢	10.1cm	—	口縁わずかに尖る 体部わずかに丸味あり 底部へこみあり	口縁回転模ナゲ、内側板ナ ゲ、内側底部工具と指による 跡々あり、体部下平、手持 ちヘラケズリ	粗、長石の砂粒、小礫、 灰	SP427 No.288-2 ほぼ残存 黒底	
		4.3cm 4.0cm	—	—	—	灰 灰黄色	—	
-9	高杯	—	—	杯部わずかに丸味をもって 大きく開く、三方返し	基部にヘラミガキ残る 返し部分内側、縁調整痕	密、長石砂粒、雲母	SP427 No.247-4 全体の1/2残存	
		12.0cm	—	杯部「八」の字に開く、脚先 揃わずかに尖る	—	灰 灰色	—	
-10	高杯	—	—	杯部丸味あり 脚の基部が大きく「八」の字に 広がる、先揃わずかに尖る、 四方返し	杯部と脚部の接合明瞭 接合の位置で割離している	やや粗、小礫、霰母	SP427 No.249-2 全体の1/3残存	
		12.4cm	—	—	—	灰 灰色	—	
-11	高杯	—	—	四方返し(裾部にもう一段 欠があったかもしれない) 脚底の開き大きい	脚部内側指痕押圧痕 ハケ調整後ミガキ	密、長石の砂粒、小礫、 霰	SP427 No.287-1 脚部はほぼ残存	
		—	—	—	—	淡黄色	—	
-12	壺 C 2	17.0cm	—	S字口縁、口縁立ち上がり 強い 胴部最大径は上半にあり	口縁丁寧な調整 胴部横沈線と規則的な斜め 沈線 指痕痕あり	密、長石・石英の砂粒、小礫、 霰母	SP427 No.279-1 口縁、脚部残存 スス付着	
		—	—	—	—	灰 淡黄色	—	
-13	壺 C 1	16.6cm	—	S字口縁、口縁立ち上がり 強い 胴部球状を呈する	口縁、頸部に工具によるケ ズリあり 頸部沈線全周する	密、石英・長石の風、小礫、霰母	SP427 No.244-1 口縁1/4、胴部一部残存 スス付着	
		—	—	—	—	灰 淡黄色	—	
-14	壺 C 1	23.8cm 34.1cm 13.8cm	—	S字口縁、口縁立ち上がり 強い、胴部球状を呈する。 胴部最大径中位、台端部粘 土を内側に折り返している	口縁丁寧調整 頸部に全周する沈線 輪模痕の後に指痕	密、長石の砂粒、霰母	SP427 No.072-1 ほぼ残存 スス付着	
		—	—	—	—	黄褐色	—	
-15	壺 B	27.3cm 35.4cm 13.0cm	—	口縁部、内側して立ち上がる。 胴上部は球状を呈し、胴部最 大径は上半にあり、台端部は 内側に折り返している	口縁部内側に板ナゲ痕あり 胴内側、排によるナゲ 肩部に横筋付き全周する 内側輪模痕あり	やや粗、砂粒、小礫、霰母	SP427 No.056-1 ほぼ残存 スス付着	
		—	—	—	—	淡黄色	—	
-16	壺 C 3	16.9cm	—	S字口縁、口縁立ち上がり 強い	頸部に斜めの沈線等間隔に 連続して入る	粗、長石の砂粒、霰母	SP427 No.280-4 口縁残存 霰母の為観察不能	
		—	—	—	—	灰 淡黄色	—	
-17	壺 C 3	17.5cm	—	S字口縁、口縁立ち上がり やや弱い	頸部に斜の沈線等間隔に連 続して入る 口縁ナゲ調整 内側指痕痕あり	密、長石・石英の砂粒、霰母	SP427 No.287-3 口縁1/6残存	
		—	—	—	—	灰 灰黄色	—	
-18	壺 C 1	17.4cm	—	S字口縁、口縁立ち上がり 強い 口唇部薄い	頸部に全周する沈線入る 口縁ナゲ調整 胴部縦・横の磨き	密、長石の砂粒、霰母	SP427 No.287-4 口縁1/5残存 スス付着	
		—	—	—	—	灰 灰黄色	—	
-20	壺 B	—	—	杯部丸味を呈する 脚部やや「八」の字に開く	ミガキあり	密、小礫、霰 灰	SP427 No.247-2 杯部、脚部はほぼ残存 スス付着	
		—	—	—	—	橙 橙色	—	
-21	壺 A	—	—	杯部丸味を呈す、全体に器壁厚く輪 溝つくり、杯部が胴部に差し込んで あるつゆ太い、器壁は中層まで開く が、基部で直立ちかくなる	脚部外部粘土処理跡 杯部外部タケのヘラミガキ	密、長石の小礫、霰母	SP427 No.247-3 全体の2/3残存	
		8.3cm	—	—	—	灰 橙色	—	
58-1	壺 A 3	14.4cm 24.8cm 7.8cm	—	口縁部大きく外反する、頸 部短い円筒状 胴部球状下半は屈曲し、直 線的に底部にいたる	口縁は回転模ナゲ、胴部ハケ調整後ミ ガキ、胴部下平ヘラミガキ、着目 胴下半と胴部内側に接合痕あり、内側 ハケ調整後ナゲ、外面中央黒灰あり	やや密、小礫多数	SP420 No.287-1 ほぼ完形	
		—	—	—	—	灰 淡黄色	—	
-2	壺 B 4	17.0cm	—	口縁部は水平で口縁部肥厚し 直立する。 頸部は短い円筒状	頸部・胴部の境、粘土を帯 状にはり付けてある 内外共ナゲ	粗、小礫	SP420 No.251-3 口縁残存 霰母のどく詳細不明	
		—	—	—	—	灰 橙色	—	
-3	壺	—	—	頸部やや開く円筒状 胴部縦長の球状か	外面ハケ調整後ヘラミガキ 内側頸部ハケ調整、胴部に 板ナゲあり、輪模痕あり	やや粗、霰、砂粒 灰 にぶい黄褐色	SP430 No.278-1 胴部1/2、胴部一部残存 脚部あり、外面一部スス	
		—	—	—	—	灰 橙色	—	
-4	壺	—	—	無花束状の胴部、口縁部は 胴部からゆるやかに大きく 開く、胴部最大径は胴下半 ゆるい屈曲	外面わずかにハケ目残る 内側輪模痕あり	粗、霰、小礫、砂粒多数含有	SP420 No.277-1 胴部・脚部1/3残存 胴部、調整不明	
		—	—	—	—	灰 橙色	—	

注()は推定値

表5 新堀遺跡出土古墳時代土器観察表(7)

押図 No.	器種 器形 分類	口径cm 器高 底径 (高台性)	形態の特徴	手法の特徴	胎土		備考
					焼成 色調		
58-5	壺	—	胴部最大径は下半、胴全体丸味 底部外面凹んでいる	器面摩滅	粗、礫	SF429 No.290-1 底筋・体筋1/2残存 内外共成摩滅不明	
		(7.6cm)			にぶい橙黄色		
-7	高坏 A	(13.2cm)	肩部はほぼ直線的に高く、 弱い稜あり 胴部下半さらに聞き強くなる。 肩部突出	内外共、ハケ調整後ミガキナ 器面摩滅	粗、礫、小礫、砂粒	SF429 No.196-2 肩部1/2、胴部残存 底筋の為、詳細不明	
		7.2cm 7.4cm			やや軟		
-8	高坏	—	三方逢し 胴「八」の字に大きく開く	全体に比較的丁寧につくられている。 外面、ハケ調整後ヘラミガキ。 ハケ、胴内底天井はナデ、中央はハケ、 蓋はヘラミガキ	やや粗、礫、小礫、砂粒	SF429 No.278-2 胴部一部残存	
		—			やや軟		
-9	高坏 B	(12.0cm)	丸味のある球状の肩部 胴部通しありか?	肩部外面、二段の縦ヘラミガキ 胴部内面、ハケ調整あり	粗、礫、小礫、砂粒	SF429 No.196-3 胴筋1/2、体筋1/2残存 底筋の為詳細不明	
		—			軟		
-10	高坏 A	(13.0cm)	肩部丸味あり 胴部通しあり(個数不明)	内外共にヘラミガキ	粗、礫、小礫、砂粒	SF429 No.196-4 体筋1/3、胴筋1/2残存 底筋の為詳細不明	
		—			軟		
-11	壺 C1	(16.8cm)	S字口縁、口縁立ち上がり強い	胴部全周する横沈線 口縁ナデ、外面縦指き 内面傾度あり	やや粗、礫、小礫、雲母含有	SF429 No.278-3 口縁1/4、胴筋一部残存 内外全体S字付き 底筋の為詳細不明	
		—			軟		
-12	壺 C4	16.1cm	S字口縁、口縁立ち上がり弱い 胴上半部肩がやや張る	口縁ナデ、胴部横ナデ	やや粗、礫、小礫、砂粒、雲母	SF429 No.291-2 口縁・胴筋1/2残存 底筋あり	
		—			軟		
59-1	壺 A3	(11.2cm)	単純口縁、口縁直立にちかく 口唇丸い、口縁から強く 屈曲し、胴部いたる 胴部まで肩	全面刷毛調整 指押圧調整、指頭内内外共に 多数あり	密、礫、小礫、雲母含有	SF431 No.284-1 口縁・胴筋一部残存 胎土混入物少なく白っぽい。 施元でない	
		—			軟		
-2	壺 A1	(11.8cm)	単純口縁太い 胴部からゆるやかに外反し 口縁にいたる、口縁の厚き 弱い	口縁回転横ナデ ヘラミガキ後横ナデ	やや粗、礫、小礫多数含有	SF431 No.333-2 口縁1/2残存 内面刷毛の為詳細不明	
		—			軟		
-3	壺 A3	(10.4cm)	頸部の屈曲強く、口縁部は 直線的に外反する 肩の張り弱い	口唇面取り、口縁回転ナデ、肩部 刷毛工具による連続的剝削、内 面口縁刷毛による連続した剥 削、全体ヘラミガキなし	密、礫、小礫、混入物多い	SF431 No.284-3 口縁1/2残存	
		—			軟		
-4	壺 A2	12.4cm	太い胴で口縁部ゆるやかに 外反する 聞きは弱い、口唇尖る	器面摩滅 器壁強い	粗、礫、小礫多数含有	SF431 No.285-1 口縁・胴筋残存 全体剝削の為詳細不明	
		—			軟		
-5	壺	—	口縁外に広がる 屈曲の強い頸部、口縁はゆる やかに外反する	口縁回転横ナデ 胴部粘土粒(約0.7cm)を一 周貼りつけている 胴部刷毛調整後ヘラミガキ	やや粗、礫、小礫多数含有	SF431 No.333-1 口縁一部胴筋一部残存 全体剝削する	
		—			軟		
-7	鉢	(94.6cm)	口縁丸味をもち、口唇部で 直立する 胴部上半丸味をもつ、器高 の低いものか	口縁内外共同回転ナデ 胴部、ハケ調整輪積復あり	粗、礫、小礫	SF431 No.333-1 口縁・胴筋一部残存	
		—			軟		
-8	高坏	(18.0cm)	直線的で聞きが弱く、深い 肩部下に稜あり 口唇はやや尖る	ハケ調整後ミガキ	やや粗、礫、小礫	SF431 No.333-1 肩部1/2残存	
		—			軟		
-9	高坏(脚筋)	—	胴部大きく「八」の字に開く 三方逢し	外周ミガキ 内面ナデ、胴天井部きれい に指ナデ	やや粗、礫、小礫	SF431 No.333-1 胴筋1/2残存 底筋の為	
		—			軟		
-10	壺 C2	—	S字口縁立ち上がり強い S字の形態がくずれる	全周する横沈線、その上に 斜めの等間隔沈線 口縁ナデ、内面指押へのへ こみあり、器面摩滅	やや粗、礫、小礫	SF431 No.333-2 口縁1/4、胴筋一部残存 底筋の為	
		—			軟		
-11	壺 C1	(15.4cm)	S字口縁、立ち上がり強い 肩の傾斜強い	口縁回転横ナデ 全周する横沈線 胴部外面全周する斜な板ナ	密、小礫、砂粒、雲母含有	SF431 No.285-3 口縁・胴筋1/4残存	
		—			軟		
-12	壺 C1	(18.4cm)	S字口縁、口縁立ち上がり きわめて強い S字形態がくずれる	口縁回転横ナデ 胴部全周する横沈線 器面摩滅	やや粗、礫、小礫、雲母含有	SF431 No.333-1 口縁・胴筋一部残存 底筋の為	
		—			軟		

項()は測定値

表5 新堀遺跡出土古墳時代土器観察表(9)

神田 No.	器種 器形 分類	口径cm 器高 底径 (高台径)	形態の特徴	手法の特徴	胎土		備考
					焼成 色調		
59-13	甕 C 1	(19.0cm) — —	S字口縁、口縁立ち上がり強い	口縁回転横ナデ 頸部全周する横沈線	密、小礫、砂粒、雲母含有 軟	SP451 No.205-4 口縁・胴部一部残存 内面磨滅している	
	— C 4	(16.2cm) — —	S字口縁、口縁立ち上がり強い	口縁から頸部回転横ナデ	密、礫、小礫、雲母含有 軟	SP451 No.205-4 口縁・胴部一部残存	
—14	S字甕 C 4	(17.1cm) — —	S字口縁、口縁立ち上がり強い	口縁から頸部回転横ナデ	密、小礫、砂粒 軟	SP451 No.205-3 口縁・胴部一部残存	
	— C 4	— — —	— — —	— — —	— — —	— — —	
—16	鉢 A	12.2cm 12.0cm (8.3cm)	鉢部上半直立、下半丸味口等丸い 台部は直線で低い	内面ハケ調整、ナデ、押えあり 台部内面直ナデ 器面磨滅	やや粗糲、小礫、長石、雲母含有 軟	SP451 No.202-4 ほぼ残存 磨滅でデコボコ	
	— A	— — —	— — —	— — —	— — —	— — —	
—18	甕 —	— — —	球状の胴部、台部直線的にやや大きく開く	全体ハケ調整、輪積痕底部と胴部との接合痕あり 台部内面ハケ調整、天井部指押圧痕あり	密、礫、小礫、砂粒、雲母多数 軟	SP451 No.203-1 胴部一部、台部残存 磨滅でデコボコ	
	— —	10.4cm — —	— — —	— — —	— — —	— — —	
60-1	甕 C 4	14.4cm — —	S字口縁、口縁立ち上がり強い	口縁ヘラナデ	密、雲母、長石 硬	SP458 No.215-1 口縁1/4残存	
	— C 4	— — —	— — —	— — —	— — —	— — —	
—2	甕 C 3	— — —	S字口縁、口縁立ち上がり強い	頸部にヘラの模様入る、分割して縁に引く	密、雲母、長石砂粒 硬	SP458 No.215-3 口縁1/4残存	
	— C 3	— — —	— — —	— — —	— — —	— — —	
—3	甕 C 4	16.6cm — —	S字口縁、口縁立ち上がり強い	頸部～口縁回転横ナデ 内側、輪積痕か?	密、雲母、長石砂粒 硬	SP458 No.215-3 口縁1/4残存	
	— C 4	— — —	— — —	— — —	— — —	— — —	
—5	台付鉢 B	— — —	口縁部ゆるい、「く」の字胴上半丸味をもち、最大径となる、台部は直線に開く、開き弱い	口縁部回転横ナデ、体部内側ハケ調整後ナデ、体部外側ハケ調整後斜位の寬いヘラミガキ、2次焼成を受けた痕跡あり	密、砂粒 やや硬	SP452 No.069-4 スス付物 一部残存	
	— B	— — —	— — —	— — —	— — —	— — —	
—6	高坪 B	— — —	円形球状 脚部「八」の字に大きく開く二方返し	外側内・外側共にヘラミガキ 脚部内側ハケ調整後ナデ 外側ヘラミガキ	密、長石砂粒 硬	SP454 No.210-3 口縁1/2残存	
	— B	— — —	— — —	— — —	— — —	— — —	
—7	甕 D	(15.7cm) — —	巾の広い、折り返し口縁 腹が大きい	頸部内・外側共にハケ調整	やや粗、長石砂粒、雲母 軟	SP457 No.198-1 口縁～胴部1/4残存	
	— D	— — —	— — —	— — —	— — —	— — —	
—8	高坪 —	(13.1cm) 12.9cm —	円部弱い壁をもち、直線的に開く開く、口唇少し尖る、脚部「八」の字に開き弱い、三方返し、器高の高い坪	内・外側共にナデ 内側・脚部ハケ目残る 坪部との接合未調整	やや粗、礫多数 軟	SP457 No.197-1 全体の1/2残存	
	— —	(14.2cm) 9.8cm 6.6cm (6.8cm)	— 口唇尖る、円部丸味をもつ 脚部やや「八」の字に開き弱い — 器高低い、小型のタイプ	— 丁寧なつくり ハケ目調整残る	— やや粗、礫 軟	— SP457 No.198-2 口縁3/4、胴部一部残存	
—9	高坪 B	— — —	— 器高低い、小型のタイプ	— 丁寧なつくり ハケ目調整残る	— やや粗、礫 軟	— SP457 No.198-2 口縁3/4、胴部一部残存	
	— B	— — —	— 器高低い、小型のタイプ	— 丁寧なつくり ハケ目調整残る	— やや粗、礫 軟	— SP457 No.198-2 口縁3/4、胴部一部残存	
—10	台付甕 B	13.9cm — —	口縁部わずかに外反する 胴部下半丸味をもつ 台部やや外側に張る	外側ハケ調整残る	やや粗、礫、小礫、長石砂粒 軟	SP457 No.223-1 全体の1/2残存	
	— B	— — —	— 胴部下半丸味をもつ 台部やや外側に張る	— 外側ハケ調整残る	— やや粗、礫、小礫、長石砂粒 軟	— SP457 No.223-1 全体の1/2残存	
—13	甕 —	— — —	胴下半が強く前曲し、上半は丸味 下半は直線的に底部につづく	輪積痕、底部との接合痕あり 外側ハケ目少し残る	粗、長石砂粒、礫 軟	SP459 No.199-1 底縁・胴部1/2残存 スス付物	
	— —	6.9cm — —	— 胴下半が強く前曲し、上半は丸味 下半は直線的に底部につづく	— 輪積痕、底部との接合痕あり 外側ハケ目少し残る	— 粗、長石砂粒、礫 軟	— SP459 No.199-1 底縁・胴部1/2残存 スス付物	
—14	甕 A 1	(18cm) 30.8cm 9.4cm	口縁部、直線的に大きく開く 底部突出する	肩部、羽状の刺突文の押圧残る、胴部上半に一部結節 焼文、ハケ目、ミガキ残る 底部木炭痕	粗、長石砂粒、礫、小礫 やや軟	SP463 No.057-1 口縁1/2、胴部3/4、底部残存	
	— A 1	— — —	— 口縁部、直線的に大きく開く 底部突出する	— 肩部、羽状の刺突文の押圧残る、胴部上半に一部結節 焼文、ハケ目、ミガキ残る 底部木炭痕	— 粗、長石砂粒、礫、小礫 やや軟	— SP463 No.057-1 口縁1/2、胴部3/4、底部残存	
—15	甕 B 1	13.3cm — —	折り返し口縁 口唇尖る 頸部太く、口縁開き弱い	輪積痕、胴部との接合痕あり	粗、長石砂粒、小礫、礫 軟	SP466 No.200-1 口縁1/2残存 胴部一部	
	— B 1	— — —	— 折り返し口縁 口唇尖る 頸部太く、口縁開き弱い	— 輪積痕、胴部との接合痕あり	— 粗、長石砂粒、小礫、礫 軟	— SP466 No.200-1 口縁1/2残存 胴部一部	
—16	鉢 A 2	14.4cm 9.6cm 4.6cm	口縁部直線ややや外反する 体部中位丸味をもつ 底部凹む	ナデ調整 器面磨滅	やや粗、長石砂粒 やや軟	SP469 No.067-3 全体の3/4残存	
	— A 2	— — —	— 口縁部直線ややや外反する 体部中位丸味をもつ 底部凹む	— ナデ調整 器面磨滅	— やや粗、長石砂粒 やや軟	— SP469 No.067-3 全体の3/4残存	

※ () は推定値

表5 新堀遺跡出土古墳時代土器観察表(9)

押図 No.	器種 器形 分類	口径cm 器高 底径 (高台様)	形態の特徴	手法の特徴	胎土		備考
					焼成 色調	色調	
61-1	壺 A 2	(15.8cm)	折り返し口縁 母口に開く口縁で、頸部下 の屈曲強い	頸部内・外刷毛調整 頸部・胴部の境、全周する 横ナデ	やや粗、濃、小礫	褐色	SF 4、64・65 No.296-2 口縁1/2、胴一部残存 一部破滅あり
		(14.4cm)	折り返し口縁 口縁直線に開く 頸部の屈曲強い	折り返し部分回転ナデ調整、頸 部ハケ調整後ナデ、ミガキはほ んど見られず、内面はハケ調 整後、握り痕あり、指頭痕あり	密、濃、小礫、雲母	褐色	SF 4、64・65 No.290-4 口縁1/2残存
-2	壺 B 3	(18.1cm)	口縁部外反するが、開き弱 い	口唇回転横ナデ、頸部外面 ハケ調整後ナデ	やや粗、濃、小礫、砂粒、雲母	褐色	SF 4、64・65 No.290-1 口縁1/2、胴部残存 全身破滅あり
		(17.9cm)	接合口縁 直線わずかに外反する	頸部内面ハケ調整後ナデ、 指頭痕あり	密、濃、小礫	褐色	SF 4、64・65 No.291-1 口縁1/2残存 胎土は灰色味強く、他と異 なる
-3	壺 D	(17.9cm)	接合口縁 直線わずかに外反する	口縁に棒状浮文 口縁外面ハケ調整後、ヘラ ミガキ、内面ナデ	密、濃、小礫	褐色	SF 4、64・65 No.291-1 口縁1/2残存 胎土は灰色味強く、他と異 なる
		(8.2cm)	胴部球状、底部突出	胴部外面ハケ調整後ミガキ(横ヘラミ ガキ)、内面ナデ、中央部ハケ、下半部 ナデ、指頭痕あり、底径との配合あり、底 部水磨痕あり、下半部底面に黒斑	やや粗、濃、小礫、雲母	褐色	SF 4、64・65 No.299-2 底面・胴部1/2残存 内面スス
-4	壺 C 1	(8.2cm)	胴部球状	胴部外面上半は刷毛目多く残 す、下半は横ヘラミガキ、内面 ハケ調整、内外共同横痕、内面 下半部ナデ、底部水磨痕	やや粗、濃、小礫、砂粒	褐色	SF 4、64・65 No.228-3 底面・胴部1/2残 存胎土は灰色味強く、他と異 なる
		(8.4cm)	受部に強い隆、やや丸く外 反し大きく開く 脚部「八」の字 三方達し	外面全体ハケ調整後、横ヘ ラミガキ、脚部・天井部丁 家ナデ、中央細い刷毛、 密、回転横ナデ、黒斑	密、小礫、砂粒、雲母	褐色	SF 4、64・65 No.290-1 外底・脚部一部残存
-5	壺 B	(11.7cm)	口縁横ナデ、外面全体手持 柄ヘラミガキ、内面内面ハ ケ調整、輪横ナデ	密、小礫、雲母	褐色	SF 4、64・65 No.290-1 外底・脚部一部残存	
		(8.6cm)	受部部の低い皿状、丸味を もつ 口唇は尖る、脚「八」の字に 開く、三方達し	外面全体ヘラミガキ 脚部内面ハケ調整後ナデ、 天井に横り痕あり	密、小礫、砂粒	褐色	SF 4、64・65 No.290-3 外底・脚部一部残存
-6	壺 B	(14.8cm)	受部丸味をもつ 脚部大きく「八」の字に開く 三方達し	器面磨滅 脚部内面ナデ、輪部周辺回 転横ナデ	密、鉄分の吹き出し、雲母	褐色	SF 4、64・65 No.297-2 外底・脚部1/4残存 全身破滅
		(9.2cm)	全体に空む、口唇部やや外反、そ の下面いぼあり、受部弱い隆を もつ皿状、口唇部水平面をつくる 、脚部「八」の字に開く	受部から脚部上半まで、外面不規則 な横ヘラミガキ、脚部中央から下半 までヘラミガキ、指は横ヘラミガキ、 脚部内面半ハケ調整、下半部回転ナデ	密、小礫、雲母	褐色	SF 4、64・65 No.298-3 脚部1/2残存 一部破滅あり
-7	壺 B	(11.5cm)	脚部「八」の字に広がる 透し一ヶ所残る	脚部外面、上半回転横ナデ、 器面磨滅 天井縁はていねいに指ナデ している	やや粗、濃、小礫	褐色	SF 4、64・65 No.297-3 脚部1/2残存 全身破滅詳細不明
		(13.3cm)	脚部端部が水平になる 脚部「八」の字に大きく開く 三方達し	脚部外面ミガキあり、内面 天井きれいに指ナデ、脚部 部面回転横ナデ、全面丹塗り、 特に外面が甘立つ	密、砂粒、鉄分の吹き出し、雲母	褐色	SF 4、64・65 No.297-3 脚部1/2残存 全身破滅あり
-8	壺 B	(12.6cm)	脚部下半で大きく「八」の字 に開く 脚部端部やや水平 三方達し	外面ハケ調整後ミガキ、内 面天井丁家ナデ調整 内面ナデ、脚部端部指ナデ	密、鉄分の吹き出し、雲母	褐色	SF 4、64・65 No.297-3 脚部1/2残存 全身破滅あり
		(12.8cm)	三方達し 脚部「八」の字に広がる	外面ハケ調整後ミガキ(刷毛 を一部残す端ミガキ)、内 面上半は、工具によるナデが、 中央から下半はハケ調整	密、濃、小礫、砂粒	褐色	SF 4、64・65 No.297-1 脚部1/2残存 胎土は白く、他と異なる
-9	壺 B	(12.6cm)	透し一ヶ所残 脚部「八」の字に広がる	内面ハケ調整後ナデ、上半 は比較的きれ い、手持り横ナデ	密、鉄分の吹き出し、雲母	褐色	SF 4、64・65 No.297-1 脚部1/4残存 外面磨滅詳細不明
		(15.6cm)	脚下半で大きく「八」の字に 広がる	外面ミガキあり、内面ハケ 調整後ナデ、天井は丁家 ナデ調整、頸部分割した 横沈槽、長さ不規則	密、濃、小礫、砂粒、雲母	褐色	SF 4、64・65 No.296-1 脚部端のせき残存 全身破滅あり
-10	壺 C 1	(15.6cm)	S字口縁、口縁立ち上がり やや弱い	内面指ナデ、輪横痕、指頭 痕あり	密、砂粒、鉄分の吹き出し、雲母	褐色	SF 4、64・65 No.227-1 口縁1/2残存
		(15.6cm)	S字口縁、口縁立ち上がり やや弱い	内面指ナデ、輪横痕、指頭 痕あり	密、砂粒、鉄分の吹き出し、雲母	褐色	SF 4、64・65 No.227-1 口縁1/2残存

※ () は推定値

表5 新堀遺跡出土古墳時代土器観察表(1)

神宮 No.	器種 器形 分類	口径cm 器高 底径 (高台径)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土		備 考
					色	調 成	
61-19	壺 C 3	13.2cm ---	S字口縁、形態が変化した S字	口縁横ナゲ、頸部分割した 横沈溝	密、礫、小礫、砂粒	SP 4、64、65 No.239-2 口縁1/2残存 素焼あり	
	壺 C 4	15.2cm ---	S字口縁、立ち上がり強い 胴部が張る	口縁横ナゲ、頸部全周する 横沈線入る 内面は、ハツ調整後ナゲ 輪積痕、指頭痕あり	粗、小礫、砂粒 軟	SP 4、64、65 No.239-5 口縁・胴部一部残存 スス付着、素焼あり	
-20	壺 C 1	16.3cm ---	S字口縁、口縁立ち上がり 強い	口縁ナゲ、頸部全周する横 沈溝	密、礫、小礫、砂粒、雲母	SP 4、64、65 No.239-3 口縁3/4、胴一部残存 外面頸部からスス	
	壺 C 1	13.7cm ---	S字口縁、口縁立ち上がり やや弱い	口縁丁寧なナゲ、頸部全周 する横沈溝、内面指ナゲ上 から下へ、輪積痕、指頭痕多 数あり	密、小礫、砂粒、雲母	SP 4、64、65 No.239-1 口縁3/4、胴部一部残存 全体内外、スス付着	
62-1	壺 C 4	15.9cm ---	S字口縁、口縁の立ち上がり 弱い	口縁丁寧な横ナゲ 内面ナゲ、指頭痕多数あり	密、小礫、砂粒、雲母	SP 4、64、65 No.239-2 口縁・胴部一部残存 内・外共にスス	
	壺 C 4	16.3cm ---	S字口縁、口縁立ち上がり 強い	口縁横ナゲ 内面ナゲ、指頭痕あり	密、小礫、砂粒、雲母	SP 4、64、65 No.239-1 口縁3/4、胴部一部残存	
-2	壺 C 4	14.0cm ---	S字口縁、口縁立ち上がり 強い	口縁横ナゲ 内面ナゲ	密、小礫、砂粒、雲母	SP 4、64、65 No.239-1 口縁・胴部3/4残存 全体スス	
	壺 C 4	17.3cm ---	S字口縁、口縁立ち上がり 弱く、大きく開く	口縁横ナゲ 内面指ナゲ、指頭痕あり	密、砂粒、炭分吹き出し、雲母	SP 4、64、65 No.239-3 口縁2/3、胴部一部残存	
-3	壺 C 4	14.0cm ---	S字口縁、口縁立ち上がり 強い	口縁横ナゲ 内面ナゲ	密、小礫、砂粒、雲母	SP 4、64、65 No.239-1 口縁・胴部3/4残存 全体スス	
	壺 C 4	17.3cm ---	S字口縁、口縁立ち上がり 弱く、大きく開く	口縁横ナゲ 内面指ナゲ、指頭痕あり	密、砂粒、炭分吹き出し、雲母	SP 4、64、65 No.239-3 口縁2/3、胴部一部残存	
-4	壺 C 4	16.4cm ---	S字口縁、口縁立ち上がり 強い	口縁横ナゲ 内面指ナゲ、指頭痕あり	密、砂粒、炭分吹き出し、雲母	SP 4、64、65 No.239-3 口縁2/3、胴部一部残存	
	壺 C 1	8.0cm ---	S字のカーブが直線的になる	内面ナゲ、内・外共に輪積 痕あり、上部外面指ナゲ後 ナゲ、内面ナゲ指押え指頭 痕、底部との接合痕あり	密、礫、小礫、砂粒、雲母	SP 4、64、65 No.251-4 胴部・外面 素焼あり、台外面スス	
63-1	壺 A	14.6cm 21.55cm 6.0cm	口縁「く」の字に外反する 胴部縦長の球状を呈する	口縁部丁寧な回転ナゲ調整、 内・外ハケ調整、輪積痕あり 、体部下外面に底部との 接合のナゲの痕跡あり	やや粗、小礫	SE 403 No.179-1 ほぼ全部 スス付着	
	壺 A	12.0cm 16.5cm	口縁高く直口する 胴部球状を呈する 底部は丸底	口縁部横ナゲ 底部から胴部にかけて、手持 ヘツ削り 輪積痕あり	やや粗、礫、小礫、砂粒	SE 403 No.098-1 ほぼ全部 スス付着	
-2	壺 A	18.3cm ---	口縁「く」の字に外反、立ち 上がり強く、直立にちかい	口唇部面取り 口と調を接合する時の残粘土 未処理上から指押え 内面ハケ調整	やや粗、小礫、砂粒、小礫	SE 404 No.178-1 口縁1/3残存	
	壺 C 1	16cm ---	S字口縁、口縁立ち上がり 強い	口縁横ナゲ 全周する横沈溝 内面輪積痕あり	粗、小礫、砂粒	SB 402 No.275-1 口縁・胴部一部残存 内外スス	
64-1	壺 C 1	15.9cm ---	S字口縁、口縁立ち上がり 弱い	口縁横ナゲ	密、砂粒	SB 405 No.177-1 口縁1/4残存 胴部不明	
	壺 C 4	15.2cm ---	S字口縁、口縁立ち上がり 弱い	口縁横ナゲ	密、砂粒	SB 405 No.177-1 口縁1/4残存 胴部不明	
65-1	壺 A 1	15.2cm ---	口縁部大きく湾曲して外反 する 胴部の屈曲強い 胴部球状を呈する	口縁部回転のナゲ、内側木 口蓋、輪積痕、ハケ調整後ナ ゲ、外側ハケ調整、ミガキ痕 あり、唇部厚減	やや粗、長石の小礫、小礫	P 433 No.209-1 体部2/3、口部一部残存	
	壺 A 1	5.3cm ---	胴部丸味、下半屈曲強く内 湾して底部にいたる	底部と胴部接合痕ははっきり している ハケ調整、輪積痕を指で押 え調整した痕あり	やや粗、小礫、礫	P 450 No.209-1 底部・胴部一部残存	

※ () は推定値

表5 新堀遺跡出土古墳時代土器観察表(1)

押出 No.	器種 器形 分類	口径cm 器高 器底 器径 (高台部)	形態の特徴	手法の特徴	胎土		備考
					焼成 色調		
65-3	高坏	(21.0cm)	坏部大型で直線に大きく開く、口唇わずかに尖る 坏の下部が屈曲する、弱い 胎あり	外側歯毛多く残る 縁へヘラミガキ 器面磨減	密、長石の小礫、雲母	P4148 No.308-3 1/坏部1/2残存 黒底	
		(16.3cm)	S字口縁、口縁立ち上がり 強い	ハケ調整 口縁部ナゲ調整	密、長石の小礫、小礫、雲母、黒雲母	P4148 No.308-1 口縁1/4残存	
-4	罍 C 4	(14.0cm)	S字口縁、口縁立ち上がり 強い	口縁部ナゲ 内側指痕あり	密、小礫、雲母、黒雲母	P4148 No.308-3 口縁1/4残存	
		(15.1cm)	折り返し口縁、湾曲して大 きく開く	内側指痕 外側ハケ目 唇部、縦毛工具による砥 目の剥落あり	やや粗、小礫、長石の砂粒	4区、庫地 No.296-4 口縁から胴部1/4残存 磨減の為、観察不能	
66-1	壺 B 1	(11.9cm)	三方透し、口唇やや尖る 坏部平底立ち上がり強い、 胴部下平「八」の字に大きく 広がり、肩部水平となる	坏部内側底と坏部二段階の ヘラミガキ、胴部内側、しぼ り痕、指痕、脚部外面ヘ ラミガキみられる	やや粗、礫	4区、庫地 No.084-1 1/坏部3/4残存	
		(17.8cm)	肩部部尖る 脚部「八」の字に開く、開き 弱い	脚部内側、ヘラ工具による 調整痕あり 脚部の内・外共にヘラミガ キあり	密、長石の砂粒、小礫、雲母、 黒雲母	4区、庫地 No.295-1 脚部残存 割破の為、観察不能	
-2	高坏	(14.1cm)	三方透し 脚部「八」の字に開く、開き 弱い	脚部内側工具ナゲ痕あり 器面割線	密、砂粒、礫、雲母	4区、庫地 No.295-2 脚部は残存	
		(6.0cm)	三方透し 脚上半は直線的、下半わず かに開く 肩部尖る	器面割線	密、長石の砂粒、雲母	4区、庫地 No.296-2 脚部残存 割破の為、観察不能	
-5	高坏	(9.3cm)	体部直線的に開き、口唇先 端尖る、ゆるやかに開く 「八」の字の脚	内側口縁ナゲ、両端部砥 目のナゲ調整	密、長石、砂粒	4区、庫地 No.296-3 全体の1/2残存	
		(12.0cm)	脚部部尖る、底から脚中空	口縁部内側指痕あり 器面磨減	密、長石の砂粒、雲母	SD520 No.247-3 全体の3/4残存 磨減の為、観察不能	
68-1	壺	(13.0cm)	口縁部湾曲して外反する 胴部球状平底	口縁部内側指痕あり 器面磨減	やや粗、礫、長石砂粒	SD520 No.247-3 全体の3/4残存 磨減の為、観察不能	
		(5.65cm)	胴部下半部湾強く、直線的 に底部へつづく 胴部全体が横長の球状	外側、輪縁ははっきり残る 底部から胴部にかけて少し ハケ目残る	やや粗、小礫、長石砂粒	SD520 No.245-1 全体の3/4残存 黒底	
-2	壺	(4.0cm)	胴部上半球状接合痕より下 部湾強い 直線的に底部へつづく 胴部横長	内側指痕あり、ハケ目調 整 外側わずかにミガキ残る?	やや密、長石砂粒、小礫	SD520 No.245-2 全体の3/4残存	
		(10.3cm)	口縁部やや外反する 胴部全体に縦長の丸味	内側指痕あり 器面割線	密、長石砂粒	SD520 No.247-1 全体の3/4残存	
-5	壺 B	(11.8cm)	口縁部湾曲して外反する 胴部全体に縦長の丸味	内側指痕あり 器面割線	密、長石砂粒、雲母、小礫、黒 雲母	SD520 No.305-1 全体の1/4残存	
		(4.2cm)	口縁部湾曲して外反する 胴部全体に縦長の丸味、 台部欠損か?	内側指痕ナゲ調整 内側接合痕あり、外側指痕 痕あり、ハケ調整	密、長石の砂粒、雲母、小礫、黒 雲母	SD520 No.305-1 全体の1/4残存	
69-1	高坏	(37.8cm)	口縁部湾曲して外反する、口唇 内側少し凹む、斜位の面取 り、胴部全体にゆるやかな 丸味、台部欠損か?	内側指痕ナゲ調整 内側接合痕あり、外側指痕 痕あり、ハケ調整	密、長石の砂粒、雲母、小礫、黒 雲母	SD520 No.305-1 全体の1/4残存	
		(11.5cm)	坏部わずかに丸味、開き弱 く深い、三方透しか? 脚部直線的に広がる肩部で さらに大きく開く	全体ヘラミガキ、内側は丁 字 脚内側、ナゲ調整	やや粗、礫	SF532 No.010-1 全体の1/2残存	
-2	高坏	(8.5cm)	坏部直線的に大きく開く 坏下部深い屈曲あり	全体ヘラミガキ	密、長石の砂粒、小礫、雲母	SF532 No.365-1 坏部一部、脚部残存 磨減の為、観察不能	
		(8.4cm)	脚部直線的に大きく開く、三方 透し	脚部内側しぼり痕	密、長石の砂粒、小礫、雲母	SF532 No.365-2 脚部・台部一部残存	
-3	罍 B	(12.5cm)	受部丸味をもち大きく開く 口唇面取り 脚部直線的に開く 三方透し	全体ヘラミガキ	密、長石の砂粒、雲母	SF532 No.365-2 脚部・台部一部残存	
		(8.1cm)	受部丸味をもち大きく開く、 口唇面取り 脚部直線的に開く 三方透し	器面磨減	密、長石の砂粒、小礫、雲母	SF532 No.365-3 器部2/3残存 磨減の為、観察不能	
-4	罍 B	(8.3cm)	受部丸味をもって開く、口 唇面取り	器面磨減	密、長石の砂粒、小礫、雲母	SF532 No.365-3 器部2/3残存 磨減の為、観察不能	
		(8.3cm)	受部丸味をもって開く、口 唇面取り	器面磨減	密、長石の砂粒、小礫、雲母	SF532 No.365-3 器部2/3残存 磨減の為、観察不能	

注()は推定値

表5 新羅遺跡出土古墳時代土器観察表(1)

押図 No.	器種 器形 分類	口径cm 器高 底径 (高さ)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土		備 考
					焼 色	成 調	
69-5	甕	(15.8cm)	S字口縁、口縁立ち上がり	内側、ハケ調整、指頭直 頸部に全周する沈線と不規則な斜位の沈線あり	密、長石の砂粒、小礫、雲母	SP532 No.365-1 口縁1/4残存 スス付着	
	C 2	---	---	---	軟 灰黄色	---	
-6	甕	(16.8cm)	S字口縁、口縁立ち上がり強い	頸部全周する沈線	密、長石の砂粒、小礫、雲母	SP532 No.365-4 口縁1/2残存 摩滅の為、観察不能	
	C 1	---	---	---	軟 灰黄色	---	
-7	甕	13.3cm	S字口縁、口縁立ち上がり強い	口縁ナゲ調整 頸部全周する横沈線と斜位の沈線	やや粗 軟	SP536 No.351-1 口縁3/4、母体一部残存 スス付着	
	C 2	---	---	---	淡黄色	---	
-8	甕	(12.5cm)	口縁わずかに弓状を呈し、 外反する 頸部下の屈曲強い	ハケ調整、わずかに残る	粗、砂粒、小礫多数 硬	SP710 No.359-3 口縁一部残存 斜縁の為、観察不能	
	A 2	---	---	---	黄褐色	---	
-9	甕	(18.6cm)	S字口縁、口縁の立ち上がり強い	口縁、ナゲ調整 頸部全周する横沈線と斜位の沈線 内側輪積直、指頭直あり	粗、長石の砂粒、小礫、雲母 硬	SP710 No.359-1 口縁1/2残存 斜縁の為、観察不能	
	C 2	---	---	---	淡黄色	---	
-10	甕	(32.9cm)	S字口縁、口縁立ち上がり強い S字退化、内側は直線的になる	口縁ナゲ調整 頸部口縁部転積ナゲ 輪積直	粗、長石・石英砂粒、雲母 硬	SP710 No.359-2 口縁1/5残存	
	C 4	---	---	---	にぶい黄褐色	---	
-11	甕	14.0cm	口縁直縁「く」の字に外反する	器面割縁	やや密、砂粒、小礫 硬	SP711 No.360-1 口縁は沈線存 斜縁の為、観察不能	
	A 3	---	---	---	褐色	---	
70-1	甕	12.4cm 19.7cm 7.5cm	折り返し口縁、口縁弱く外反する 頸部筒形 体部球状を呈する	口縁回転ナゲ調整 頸部斜めのヘラミガキ	やや密、砂粒、小礫、雲母 やや軟	P 3、SE516 No.011-1 実形品	
	B 1	---	---	---	淡褐色	---	
-2	甕	16.0cm	複合口縁 口縁直線的に大きく外反する 頸部短い筒状を呈する	ナゲ調整 ハケ調整	やや粗、砂粒、小礫 軟	SE516 No.354-1 口縁4/5残存 斜縁の為、観察不能	
	D	---	---	---	褐色	---	
-3	鉢	15.3cm 10.9cm 4.8cm	口縁やや外反する 胴部横長の球状を呈し丸底	口縁・胴部中央迄横ナゲ 底部へ方削り 胴下半ミガキ調整 内側に木口色	密、長石の砂粒、砂粒 硬	SE518 No.353-1 全体の口縁4/5残存 スス付着	
	B	---	---	---	にぶい褐色	---	
-4	甕	---	胴部横長の球状を呈する	内側ハケ調整、輪積直 外側ヘラミガキ	密、砂粒、 硬	SE516 No.070-1 体部残存 スス付着	
	C 1	3.3cm	---	---	黄灰色、一部淡褐色	---	
-5	甕	(13.6cm)	S字口縁	頸部回転ナゲ 口縁ナゲ調整	密、長石 硬	SE516 No.353-2 口縁1/4残存 スス付着	
	C 4	---	---	---	灰白色	---	
-6	甕	(15.8cm)	S字口縁、立ち上がり強い	頸部全周する沈線と斜位の沈線入り 口縁ナゲ調整	密、長石 硬	SE516 No.353-3 口縁1/2残存	
	C 2	---	---	---	淡黄灰色	---	
-7	甕	(17.0cm)	S字口縁、口縁立ち上がり強い	頸部に全周する沈線と斜位の沈線入り 口縁ナゲ調整 輪積直	密、長石 硬	SE516 No.353-4 口縁1/4残存 スス付着	
	C 2	---	---	---	黄灰色	---	
-8	甕	(13.0cm)	S字口縁	頸部全周する横沈線 口縁ナゲ調整 指頭直	やや粗、長石 硬	SE516 No.353-5 口縁1/3残存	
	C 1	---	---	---	にぶい黄色	---	
71-3	甕	17.8cm	複合口縁、口縁直立する 口縁の中間に横あり 頸部から胴部は強く屈曲する	口唇部面取り 口縁ナゲ押し、輪積直、指ナゲ 指頭直あり	密、長石の砂粒、小礫、雲母 硬	SP601 No.313-3 口縁残存	
	D	---	---	---	褐色	---	
-4	甕	---	折り返し口縁か？ 体部丸味をおびる	輪積直、指頭直あり	密、長石の砂粒・小礫、雲母、雲母 軟	SP601 No.313-2 口縁は沈線存 摩滅の為、観察不能	
	C 1	---	---	---	褐色	---	
-5	器台	---	受部はわずかに丸味をもって開く、中空のタイプ 脚は直線的で開きの弱い「八」の字	受部に脚を接合する 器面磨滅	密、長石の砂粒・小礫、雲母、雲母 軟	SP601 No.313-1 全体の1/2残存 斜縁の為、観察不能	
	A 2	---	---	---	褐色	---	

■ () は測定値

表5 新堀遺跡出土古墳時代土器観察表(1)

持頭 No.	器種 器形 分類	口径cm 器高 底径 (括弧内)	形態の特徴	手法の特徴	胎 土		備 考
					焼 成	色 調	
77-1	蓋口	13.5cm	口縁部くゞの字に外反する 頸部厚く、口唇に向って先 細い	器面刺離	粗、長石の砂粒、小礫、礫	淡黄色	SD204 No.110-1 口縁・頸部残存 摩滅の為、観察不能
		---	---	---	硯	にぶい橙色	---
-2	蓋	16.6cm	S字口縁、口縁立ち上がり 強い	口縁横ナデ	やや粗、長石の砂粒、石の小礫	硯	SD204 No.080-2 口縁部1/4残存 摩滅の為、観察不能
		---	---	---	硯	にぶい橙色	---
-3	蓋	16.8cm	S字口縁、口縁立ち上がり 直立	口縁横ナデ	やや粗、長石の砂粒、小礫	硯	SD204 No.080-3 口縁部一部残存
		---	---	---	黒褐色	---	---
-4	蓋	16cm	折り返し口縁 ゆるく滑曲する口縁	器面刺離	やや粗、長石の砂粒、小礫	硯	SD204 No.080-4 口縁部1/6残存 摩滅の為、観察不能
		---	---	---	にぶい橙色、灰赤色	---	---
-5	高弁 B	11.6cm	口唇はうすく尖っている、 灯部は半球形状 脚上半は直線的に開く 三方達し	脚部内側しぼり痕あり	密、石英、雲母、小礫、砂粒	硯	SD204 No.109-1 全体約3/4残存 摩滅の為、観察不能
		---	---	---	にぶい黄褐色	---	---
97-1	蓋	---	脚の張り弱く、短い頸部	頸部の付け根に凸帯 頸部から下4cmの間、槽に よる擬似羽状文と横列一帯の 割突文を施す	やや粗	硯	V211 No.310-5 全体約3/4残存 摩滅の為、観察不能
		---	---	---	内面:灰色、外面:淡黄色、灰色	---	---
-2	蓋	16.0cm	単純口縁でやや外反する	頸部内・外指頸圧痕あり	粗、長石の砂粒、小礫、礫	硯	V2-9-5 No.310-2 口縁部残存 摩滅の為、観察不能
		---	---	---	淡黄褐色	---	---
98-1	高弁	---	ゆるやかに裾が開き、頸部 で段をもつ	内側に指頸痕多数あり 脚上部凸帯に擬似羽状文を 施す	粗、小礫	硯	B415 No.287-2 脚部しぼり残存 菊川式
		11.2cm	---	---	淡黄褐色	---	---
-2	蓋	8.1cm	口縁直線的に開く 脚部球状を呈する 底部小さく丸底にちかい	摩滅の為、調整不明	粗、砂粒	硯	4区、試掘坑 No.227-1 1216号形 摩滅の為、観察不能
		14.5cm			硯	硯	---
		3.2cm			硯	橙色	---
-3	蓋	16.9cm	口縁直立する 脚部球状を呈する	口縁、ハケ工具による刻目 あり 内・外ハケ調整 脚部内側指頸痕あり	粗、長石の砂粒、砂粒多数	硯	4区、包含物 No.271-1 口縁・体部一部残存
		---	---	---	淡黄褐色	---	---
-4	S字蓋	18.6cm	S字口縁、口縁の立ち上がり 強い	口縁部回転横ナデ 脚上部に二列の回転横ナデ 書付き	密、雲母、長石の砂粒	硯	F414 No.270-2 口縁1/2残存 スス付着
		---	---	---	にぶい黄褐色	---	---
-5	蓋	18.0cm	口縁のS字形態がくずれ、 段が鋭い 立ち上がり強い	脚上部から口縁に回転横ナ デ	密、石英、雲母、長石の砂粒	硯	F414、1号トレンヂ No.270-1 口縁1/4残存 スス付着
		---	---	---	淡黄色	---	---
-6	楕形蓋	---	脚が大きく張る形態	ナデ調整 帯付き波状文(8本単位 か?) 側面に磨き交差あり	密、砂粒、鉄分吹き出し	硯	東表館 No.316-2 体部1/2残存
		---	---	---	青灰色	---	---
99-1	高弁	---	器厚が全体にうすい、三方 達し	灯部と脚部の付け根、工具 による強いナデ	粗、長石砂粒、石英、小礫、礫	硯	6区3層、S50 No.239-4 全体3/4残存
		12.0cm	灯部立ち上がりなだらかな 脚部わずかに丸みおびる	---	硯	明赤褐色	---

※ () は算定値

ようである。図58-12はナデの範囲が脣部まで下るもの。図62-3は口縁下半から始まる狭い範囲のナデの例である。

以上、甕について分類してみたが、問題点を指摘したい。それは、出土する多くの破片のなかに、明らかに折り返しのない台部が出土することであり、可能性としては鉢の台部との推定もされるが、甕の台部の可能性も残されている。図でみると、図50-5・図71-1の比較的大きな台部である。台付鉢との区別も明確にできないことから、指摘するに止める。

また脣部から口縁部破片であるが、球胴を呈する甕で、口縁が直立に近いもの（図57-4）とか、口脣部に刻みを施すもの（図54-14）も僅かであるが出土している。

B 奈良時代の土器

奈良時代の土器は須恵器が殆どであり、少量の土師器が伴っている。出土位置も限定されその多くは3区の大型の溝、SD305である。図108に分類と器種をあげた。

須恵器の種類は、坏蓋・壺・無台坏・高台坏・皿・鉢・高坏・壺蓋・短頸壺・長頸壺・広口壺・甕・甕・水注・図示できなかったが平瓶の破片・高台坏の転用硯等がある。

尚、表6の観察表に個々の分類・法量・出土位置等を示しているの、個々の土器の記述については必要に応じて扱う程度とする。ここでは主として、出土した須恵器を中心に分類と器種構成について調べてみる。

分類

須恵器は坏蓋と坏が圧倒的に多く、他は一器種・一形態という状況であった。このことから、分類が可能である坏について検討した。

坏は図108で明示したように、無高台の坏Aと有高台の坏Bとに大きく別れ、さらに坏Aは2分類に坏Bは3分類される。以下その根拠を示す。

坏A・無高台坏

- 1・古墳時代からの系譜の形態であり、丸底風で体部が大きく開くもの。
- 2・律令期に成立する箱坏で、法量分化し大・中・小に分けられる。
 - I・最も口径の大きいもので、15cm以上のもの（図73-29-31）。
 - II・中型の最も数の多いタイプで、口径12cm-14cmのもの。
 - III・小型で口径12cm以下、僅か数点図示された（図74-1・2、図99-7）。

坏B・有高台坏

- 1・高台より底部が突出、または同じレベルとなるもの（図73-3-5、図99-4・5）。
- 2・金属器模倣の形態で、高台は底部端でなくやや中央寄りに付けられ、体部立ち上がり丸く、口縁はやや外反し、口脣部は面取りされる。他の坏類と比較して、胎土は精選され、色調は白く、調整は非常に丁寧である。ここでの出土例は極少ない（図72-29-31、図90-6）。
- 3・全体に器高が低く、口径が大きい形態で、体部下半の稜が明確なものと、丸味をもつものがある。口径分布は13cm-14cmに密集しているが、僅かにそれより大きいものと小さい口径が認められるため、一応三者に細分した。
 - I・口径が16cm以上で、II・III類より深い器高をもっている（図73-1）。
 - II・殆どがこのタイプに含められ、極めて近似する13cm-14cmの口径をもつ。
 - III・口径12cm以下のものであるが、図98-9、3区遺構外出土の1点のみであり、極めて類例に乏しい形態である。

皿

皿は出土例が少なく、図74-4・図98-12・図99-9の3点出土した。やや大小はあるものの、形態的な変化に乏しいが、口唇部の処理に差が認められるため、一応二つに分類してみた。

I・口唇部が尖る形態で、断面三角形を呈し、端部は水平に面取りされる（図74-4・図98-12）。

II・口唇部が方形で面取りされる（図99-9）

高坏

図108に示した形態は、半円の坏部に脚の付くものであり、坏部の一部と脚を欠損している。図74-3は口縁端を立ち上げており、これは盤状の本体に脚をつける形態の高坏でないかと考えた。

以上、分類可能なものも含めて器種ごとのバラエティーをみてきた。

須恵器は以上のように、量的には多くないが供膳・貯蔵形態ともに比較的器種が豊富であり、かつ坏A2類の法量分化は特筆すべき事柄である。しかし、一方の高台坏である坏Bでは金属器模倣のB2類を除き、逆に法量の集中化が認められる。

土師器

土師器は少量出土したのみであり、その種類は供膳形態として、坏・皿・金属器模倣の高台のつく坏と盤があり、煮沸形態としての水平口縁の甕が出土する。坏は三形態がみとめられるが、他は数と器種が貧弱なことから、分類は行なわず器種ごとに説明する程度とする。

坏は三形態としたが、そのなかの二つの形態はそれぞれ一個体しか図示できなかつた。またそれと同じ破片も殆どみられなかつた。

1類（図75-1～7、図98-14、図99-12）

土師器のなかでも多くみられるのが図示した7点であり、体部が全体的に丸く立ち上がり、口縁は垂直に近くなる平底の坏であり、成形・調整ともに指で行なわれ、一部に指頭痕が残る。全体的に小破片であり、かつ摩擦激しく細部の観察は容易でないが、この形態の坏は丹塗りがされていたようであり、僅かに付着が認められた。法量は、大きいもので口径19cm、小さいので12cmであるが、大小は少なくとも13cm～15cmの口径に集中する。器高はほぼ3cmの中に納まる程度である。

2類（図75-17）

17は、小型で底が小さく体部は直線に大きくひろく。指による成形・調整を行い、体部に粘土巻きあげ痕と指頭痕を残している。これと同じ形態の破片は幾つかあるが量としては圧倒的に少ない。律令期において地域ごとに個性をもった土師器が成立する段階で遠江地域に一般的に分布する小型坏の形態を示している。

3類（図75-18）

須恵器を模倣した土師器であり、成形・調整は須恵器坏と同一で、焼成のみ土師器の手法をもっている。時期的には須恵器坏と同じ段階と推定している。

皿（図75-8～13、図99-11）

7点を図示した。法量、口縁端部の細部形態等に差はあるが、基本的に同一形態の皿である。器面の摩擦が激しく細部の観察は不能であるが、指による成形・調整を施す。図75-8には粘土の巻きあげ成形の調整痕が認められる。坏1類と同じように丹塗りを施すのが一般的な手法であり、わずかにその痕跡を残している。法量は、口径14cm～18cm、器高2cm～3cmを測る。

高台皿（図75-13、図84-4）

SD305出土の図82-13は口縁部を欠損するが、比較的形態・法量の判明する例である。高台径11.2cm、器面は剝落が激しい。

図84-4は高台径16.8cmと大型のものであり、高台部周辺が図示できた。

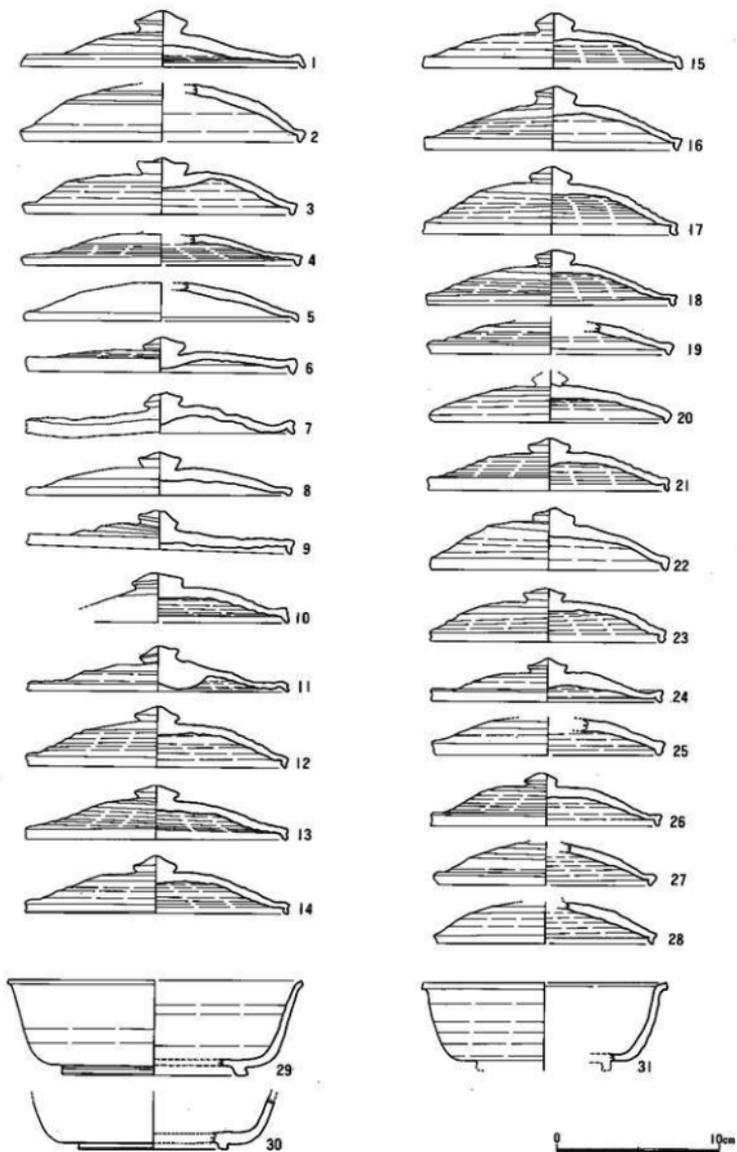


图72 3区奈良时代沟(SD305)出土土器实测图I

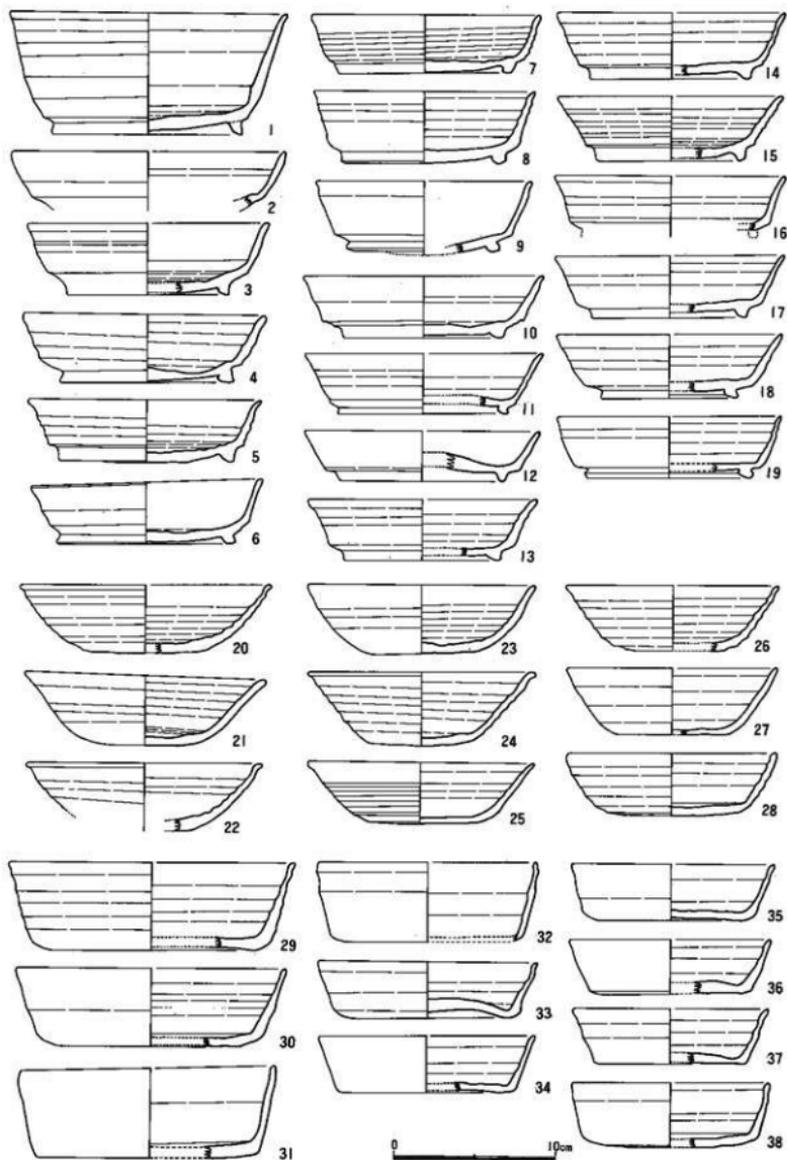


图73 3区奈良时代清(SD305)出土土器实测图Ⅱ

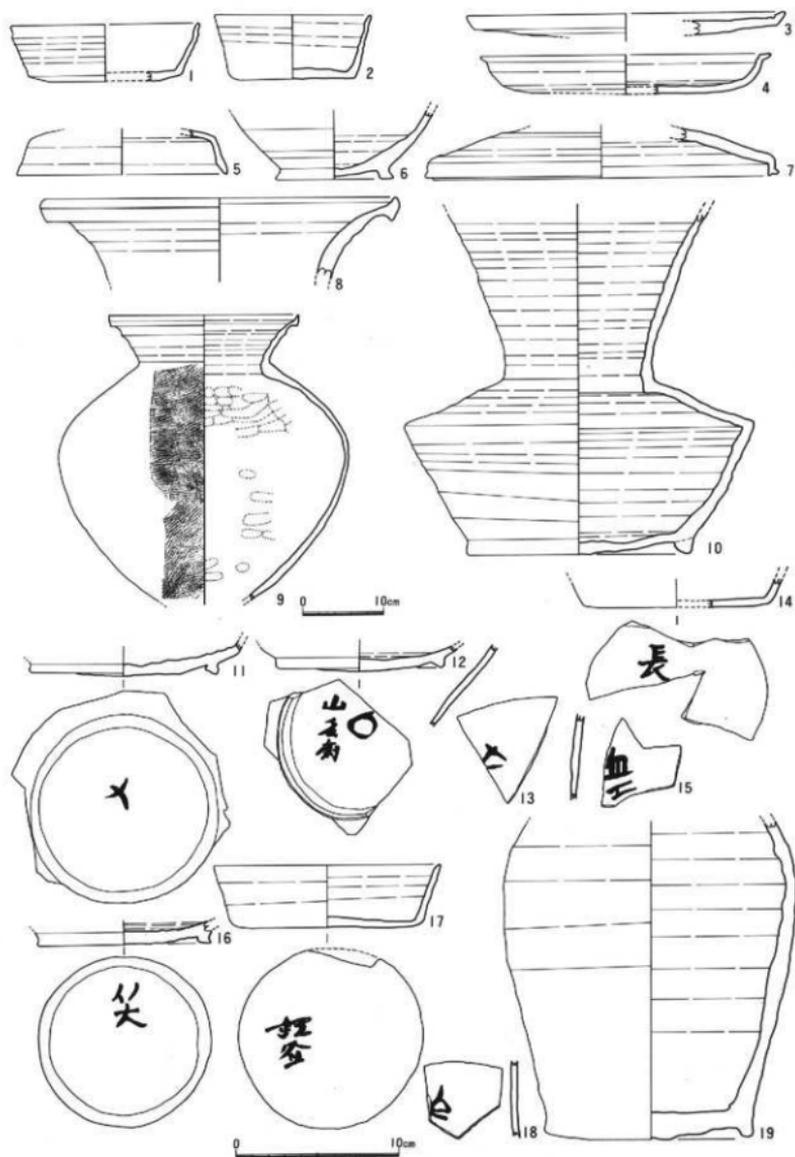


图74 3区奈良時代溝(SD305)出土土器実測図Ⅱ

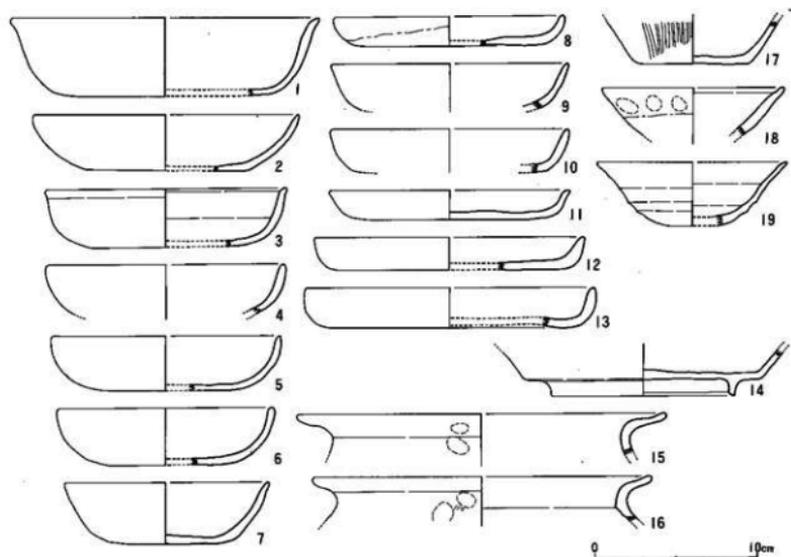


図75 3区奈良時代溝 (SD305) 出土土器実測図Ⅳ

この高台皿は摩滅が激しく細部の観察はできないが、指による成形であり、底部の調整に多少の凹凸が認められる。高台の形状等から金属器の模倣形態といえる。土師器のなかでも数少ない形態であり、破片でも極少量出土するのみである。

壺

遠江地方で一般的にみられる壺であり、口縁部と底部の破片が出土する。

土師器は以上のように、少量であり検討するにも不適であるが、環2とした形態は奈良時代後半以降平安時代まで継続する在来系の環であり、この1点のみ他の土師器とは時期が異なる。

ここにみられる土師器は供膳形態が圧倒的で、煮沸形態の貧弱さは注目される。

奈良時代の土器群は遠江地域の一般的な在り方、須恵器主体で土師器は従という様相を顕著に表している。そして貧弱な土師器群のなかでも煮沸形態の少なさは「山名厨」との関連からみて注目に値する現象である。

C 平安時代末～鎌倉時代の土器

ここで述べる時期は、出土した土器の年代観から、11世紀から13世紀とした。以下に土器の概略を説明してゆく。個々の説明は表6の観察表に譲る。またこの表では、形態・手法等、類似点が多いことから省略し、法量を主とした内容にした。

灰釉陶器

碗

量からいえば極少ないが、清ヶ谷白山窯の深碗が出土している。これは尾張での東山72号窯式と並行期に位置付けられる。SF404 出土の図90-12がその典型的な形態であり、器高が深く、口縁部は外反し、高台は「ハ」の字で高い。細部の変化をみると、図94-6は口径が大きくやや器高が浅い、図78-12には輪花がみられ、他に図87-18、図99-1・13等がある。

また形態は、器高が低く、高台が三角に変化する図76-9、図90-13も同じ東遠江産、おそらく清ヶ谷窯の製品であり、最終末の灰釉陶器碗と推定される。

小碗

大きい碗形態と同様な形態をもった小碗(図76-15・20、図90-4)も見いだされ、図76-20が最も深碗形態に類似し、図76-15では輪花手法の痕跡であろうか、口縁部に縦のナデが認められる。

手付瓶(図76-17)

1区大型溝SD102から出土している。小型で頸部以上を欠損し、把手の基部のみ残る。施釉が明瞭に残され胎土は碗からみれば白く上質である。

壺(図74-19、図90-3)

体部下半と底部が出土した。それぞれ3区溝・SD305と4区土坑・SF403からの出土である。特に、肩部付近までである前者は蔵骨器として利用されていたもので、火葬骨が納められていた。その位置は奈良時代の大型区画溝と推定されるSD305の覆土を掘り込んでいた。両者ともに同一の形態・胎土・色調をもっている。

甕(図88-15)

緩く開く短い口縁部をもち、輪積み成形回転ナデ調整をそのまま残す粗雑な甕であり、清ヶ谷窯で生産されたものと判断することが可能な個性の強い甕である。

山茶碗・小碗・小皿

山茶碗は同時期の小碗・小皿と並んで今回報告する土器のなかでは主体となる遺物である。山茶碗・小碗・小皿の順に概観してゆく。

器種ごとの説明に先立ち、大きくこれらを生産地の相違によりⅠ・Ⅱ群に二分しているのでその根拠を示しておく。

Ⅰ群は渥美・湖西窯跡群及びそれより以西とおもわれる窯の製品であり、分量の差は認められないが体部弓状または直線的で、高台は方形・台形を呈し、胎土に長石等を含み、色調は白味強く明るい。特に初期の山茶碗は輪花・澁掛し施釉されており、Ⅱ群との区分は容易である。従って、それ以降のものも形態変化を勘案しながら分類していった。

Ⅰ群は山茶碗がA～Eの5類に、小碗をA・Bの2類に、皿もA・Bの2類に分けられる。

Ⅱ群は在来の窯、東遠江産といわれる製品である。形態は見込みから体部内側に境がなく半球状を呈し、高台は指で両側から挟んだような細い三角である。また、体部がⅠ群と比較して薄く、色調も青色味が強い。それ以前の灰釉陶器との類似点を多くもっている一群といえる。

Ⅱ群は形態からみて次のように分類した。山茶碗はA～C類、小碗はA～C類に、皿は一形態のみであった。

この分類は両者ともに、胎土分析等の検討をおこなった結果でないが、肉眼の観察においても分離は大過なく行える。また底部切り離し痕跡については、回転糸・静止糸・切り離し後のナデで不明なもの等とめられるが、分類等の基準には成り得ないので省略する。以下、各種類ごとに記述してゆく。

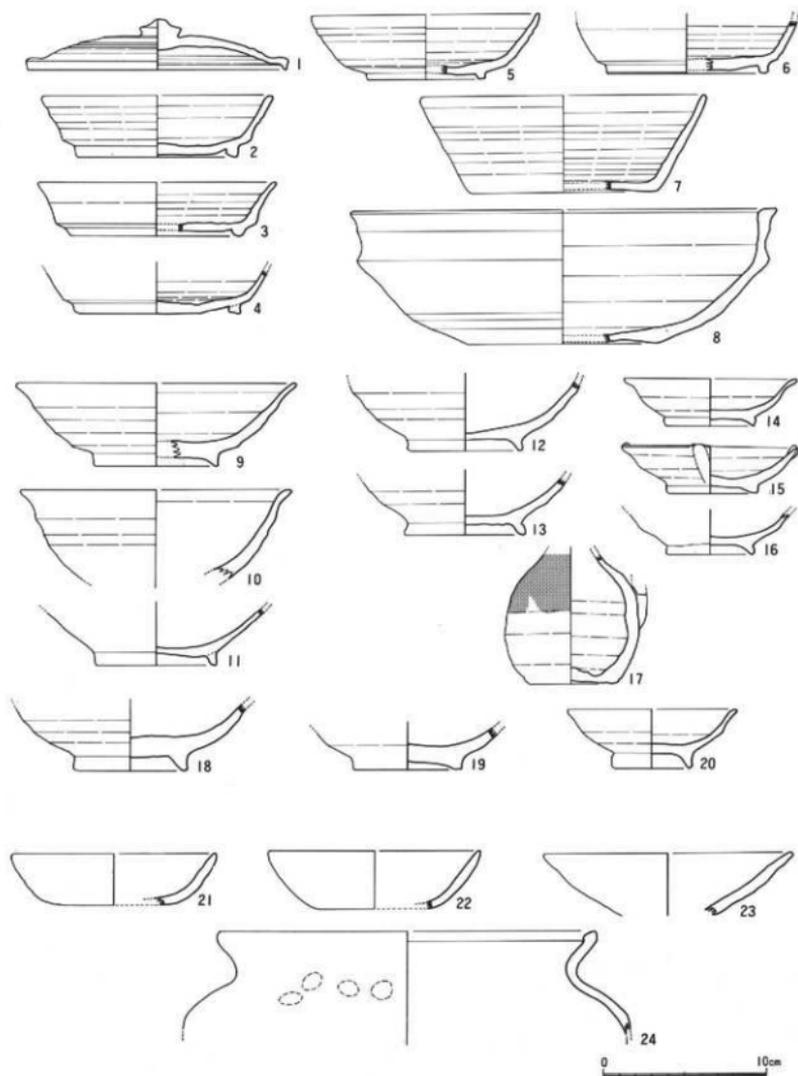


图76 1区平安時代末~鎌倉時代末 (SD102) 出土土器実測図

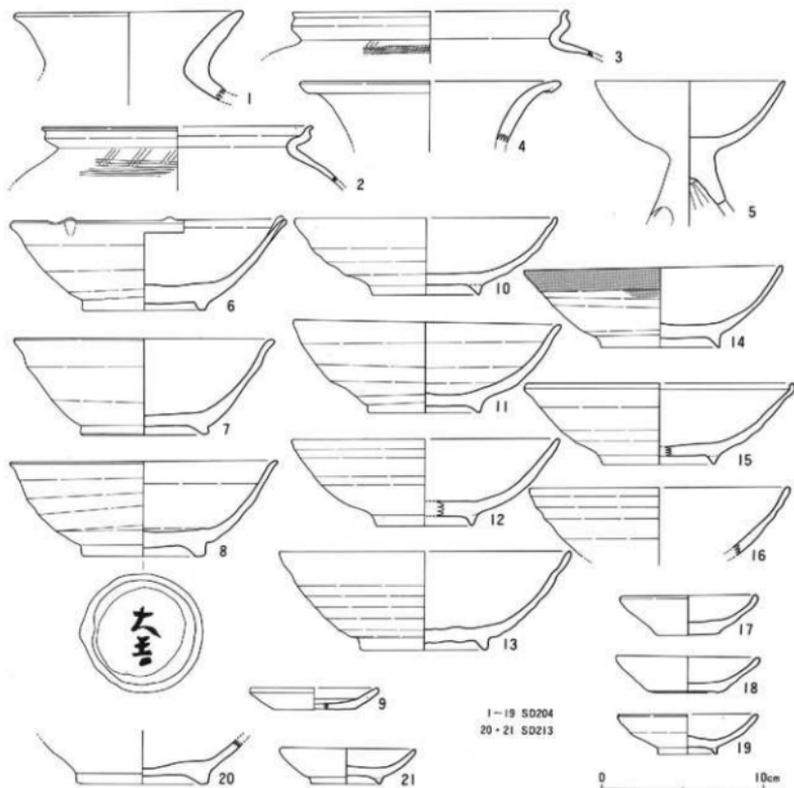


図77 2区平安時代末～鎌倉時代溝出土土器実測図

山茶碗

山茶碗は先に述べたようにⅠ群が多くⅡ群は少ない。Ⅰ群をA～Eに5分類し、Ⅱ群はA～Cに3分類した。

Ⅰ群A類

灰釉陶器の手法を残すもので、輪花・施釉が大きな特徴である。形態は器高深く、体部は弓状に立ち上がり口縁を外反させる。高台は方形・台形の堅固なもので、ほぼ定型化している。図80-1・81-2・87-4などが典型的な形態を示している。口径16cm～16.9cmの中に集中し、器高5cm～5.5cmを測る。

細部では体部の立ち上がりが曲線の強いもの(図83-12)、直線的なもの(図84-15・85-8)、見込みと体部との境を強く押し込んでいるもの(図77-6・81-3)等が認められる。高台も含めて、底部には靫の圧痕とか砂の付着する例が多くみられる。

Ⅰ群B類

A群との形態の差はないが、輪花・施釉のみられないものであり、細部では体部の直線的傾向が強く

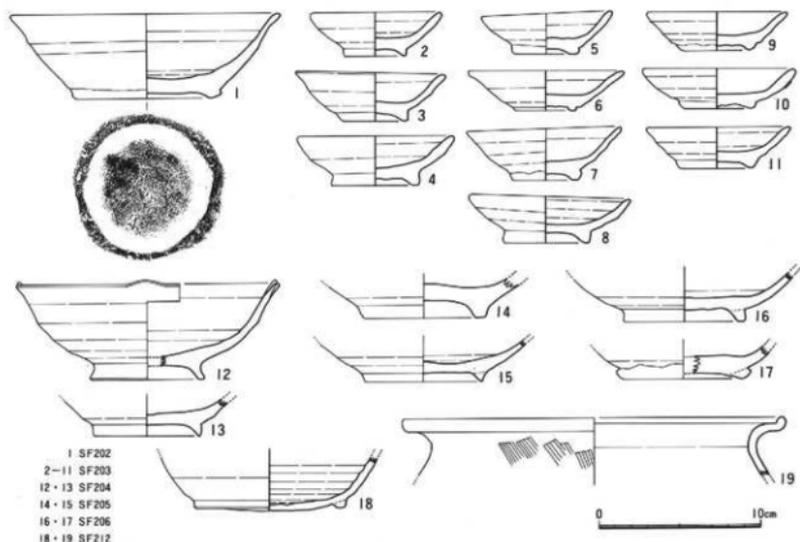


図78 2区平安時代末～鎌倉時代土坑出土土器実測図

なり、高台の形状がやや崩れてくる。それは、図99-20のような三角形形状、図85-21のような低いもの、図94-4のような外傾する台形高台というような高台の変化である。口径は16cm前後の1cmに集中し、器高は5.5cm～6cmである。

I群C類

A・B類との大きな変化は、口径が17cmをこえる大きなものが出現することと、逆に縮小するものがある。器高もやや低くなり、5cm～5.5cmのものが主体となる。このため視覚的には浅くなったような印象をうける。形態では体部直線が主体となり、台形の高台も低く、三角形高台が多くなる。図79-2・3、95-11が典型的な形態として提示される。

口径・形態にA・B類の特徴を残しながら、一方で法量の縮小化、高台に主としてみられる形態の多様化、調整手法の粗雑化がみられる段階である。

I群D類

この類は体部直線、口唇部が玉縁状等の形状を呈し肥厚すること、高台の退化形態であり低いことと三角形に変化することがあげられる。先のA～C類とは顕著な相違となっている。全体的な調整手法をみても高台処理が雑であり、高台部の剝離した個体数も増加している。口唇部の斜位の面取りナデもこの類の一般的な手法である。

口径は大きなものは14cm～16cmで拡散し、器高は5cm前後の1cmに集まる。このように、多少の器高の縮小化がみられる。後述するE類とともに、渥美窯では生産されない形態であり、更に西の地域に産地が求められる群である。

I群E類

図99-28に示した墨書土器がこれに該当する。この1点のみであり、破片等でも確認できなかった。無高台の山茶碗であり、形態はD類と共通している。

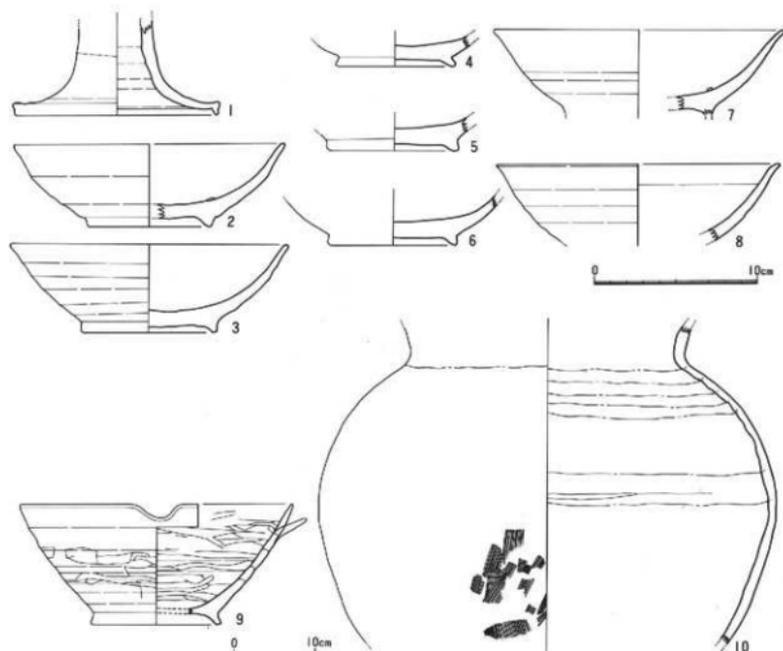


図79 Ⅰ区平安時代末～鎌倉時代井戸 (SE102) 出土土器実測図

以上Ⅰ群の山茶碗をみてきたが、A・B類は輪花・施釉の有無のみで、大きな差は認められない。C類で形態変化・法量の中が生じ、D類では一定の形態に定型化し、E類では高台が消失する。このように各類をまとめることができる。

Ⅱ群の山茶碗は、形態・法量・手法等の変化に乏しく、一括でかつ多量に出土する例が少ないことから分類や形態変化が明確にされていない群である。特に、手法・胎土・色調はまったく各類での差は認められない。Ⅰ群との全体的な傾向の差は法量にも現われており、口径は大きいので18cm、小さいのは16cmを測り、この2cmの間に分布するが、多くは17cm前後に集中している。器高は5cm～6cmに分布している。このように法量ではⅡ群がⅠ群より1cm～2cm大きい口径をもっていることを指摘しておく。

従ってここでは、形態からみた分類を行い、大まかな特徴の指摘に止める程度とする。

各類ごとの出土量は図示した個体数を比較すると、およそその比率で、A類が3・B類が2・C類が2の割合となる。

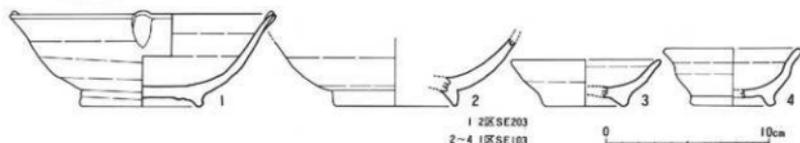


図80 Ⅰ区平安時代末～鎌倉時代井戸 (SE103) 出土土器実測図

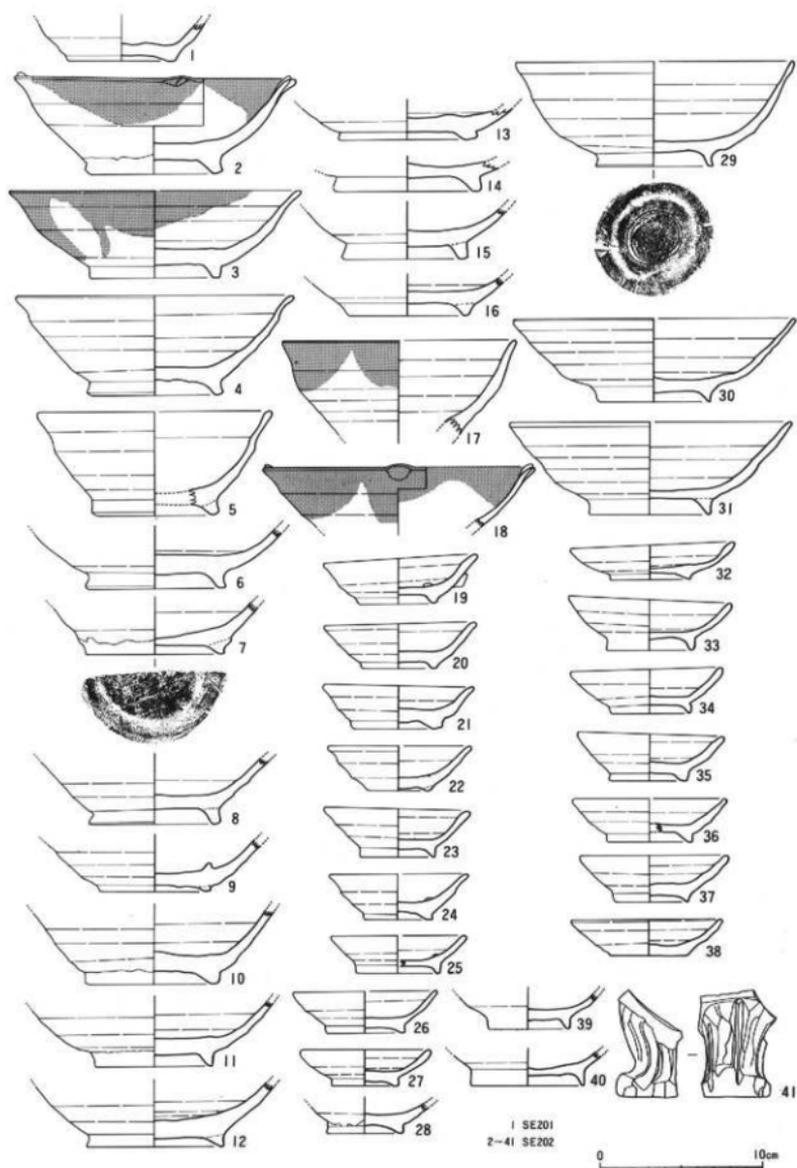


图81 2区平安時代末～鎌倉時代井戸出土土器実測図

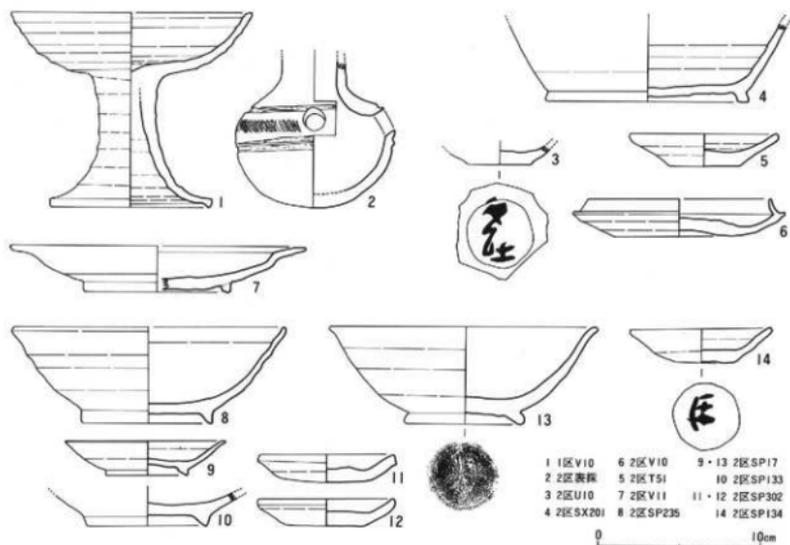


図82 2区ビット・遺構外出土器実測図

II群A類

II群の形態である、見込みから体部半球状、小さい定型化した高台をもつという特徴が良好に反映されているのがこのII群A類である。細部でみると口唇部形態に差があり、尖るもの(図81-29、図86-10・11、図99-24)、丸いもの(図84-25、図87-6)、外反するもの(図83-10)、端部を面取りするもの(図86-7)等の変化がある。

II群B類

口縁部のナデ処理に特徴があり、内側から強く押さえており、口縁が外反するような形態である(図77-13、図86-3)。一部には口唇部の内側をさらに工具で強くナデており、球状を呈するものもある(図77-15、図86-1)。形態はII群A類より体部上半の球状化が弱くなっていることが指摘される。

II群C類

体部下半の半球状傾向はみとめられるが、口縁部は直線化する。図81-31、図86-8がその形態をもっている。しかし、B類との分離は明確でなく、口唇部形態では類似点が多く、口縁部内側にも強い回転ナデ押さえがみられる。本来はB・C類ともにひとつの形態といえるものだろう。

以上、山茶碗をみてきたが、I・II群は相違点を多くもちその分離も容易といえる。しかし、類似点も僅かに認められ、それは体部が曲線の深い碗状から、直線的に開く形態に変化することである。産地・技術系譜の異なる両者ではあるが、碗形態の変化は同様な傾向を示している。

小碗

小碗は灰陶陶器の段階から成立する大小の碗形態のセットであり、それが無釉陶器群である山茶碗に継続されている。従って、基本的には山茶碗と呼ぶ大きな碗の縮小された形態が小碗であり、高台を欠落するのが小皿である。この系譜からみても、これから述べる小碗・小皿、特に小碗は山茶碗との類似

点が多いことを前提にして、以下の記述では山茶碗との重複した表現は省略し、必要な事柄を中心として抜くこととする。

I群A類

この形態は山茶碗I群A類と同一であり、体部弓状、高台方形・台形を呈し、深碗の縮小されたものである。成形・調整手法ともに山茶碗との相違はみられない。

法量は、口径は8cm～10cmであり、9cmを越えるものは少ないようである。器高は2cm台に集中し、3cmを越えるものは極少ない。

I群B類

山茶碗I群C類の縮小形態で、体部直線的で、高台は三角が主体で台形も認められる。法量の変化も少なく、ほぼA類と同じである。

山茶碗の形態を反映するのはこの段階で終息する。

II群A類

体部下半から見込みにかけては、半球状の形態ではあるが、体部弓状か直線的となる。高台は三角形が

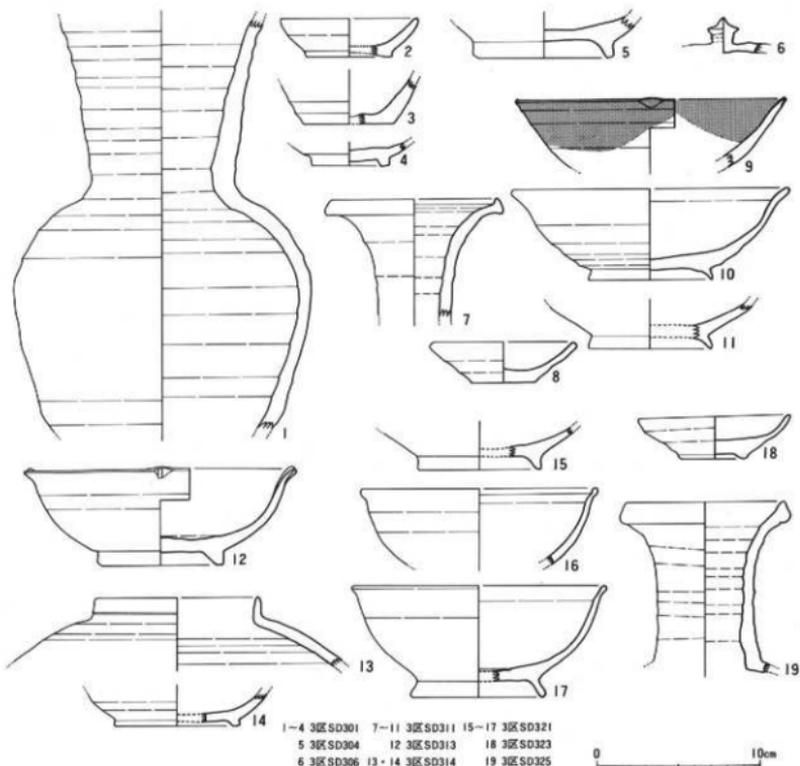


図83 3区平安時代末～鎌倉時代満出土器実測図

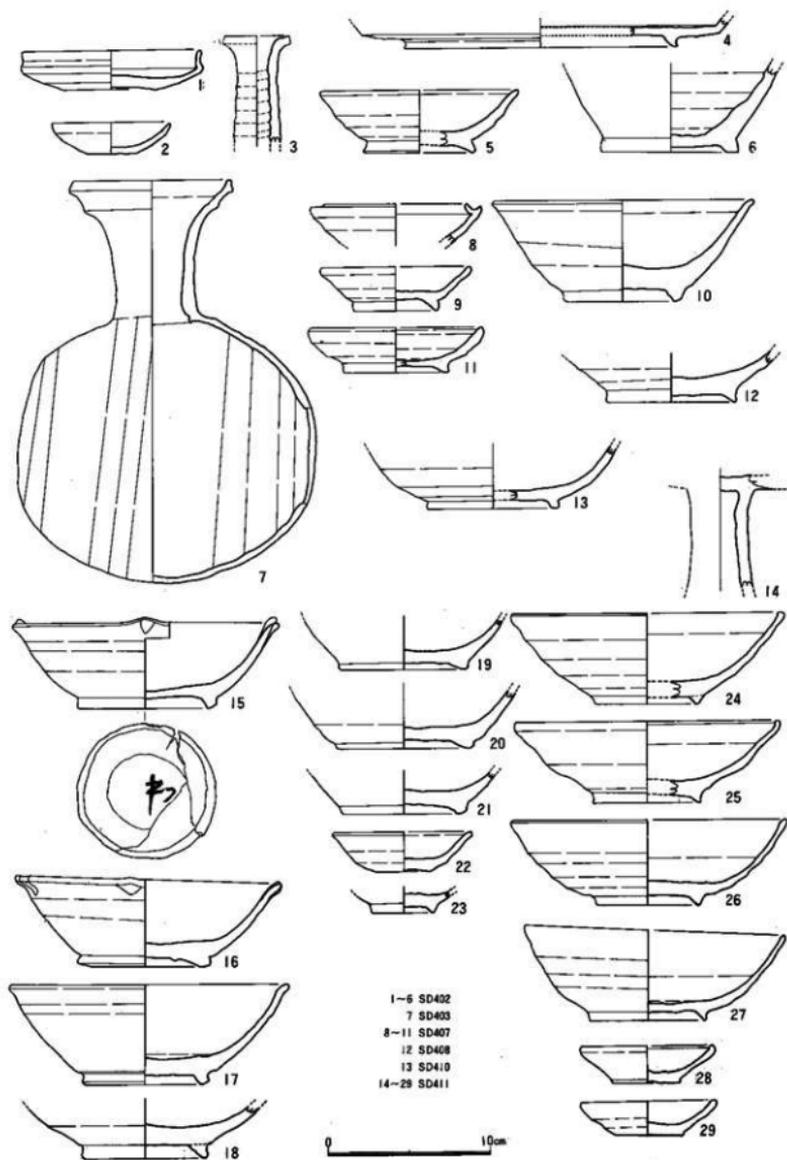


图84 4区平安时代末~鎌倉時代清出土土器実測图 I

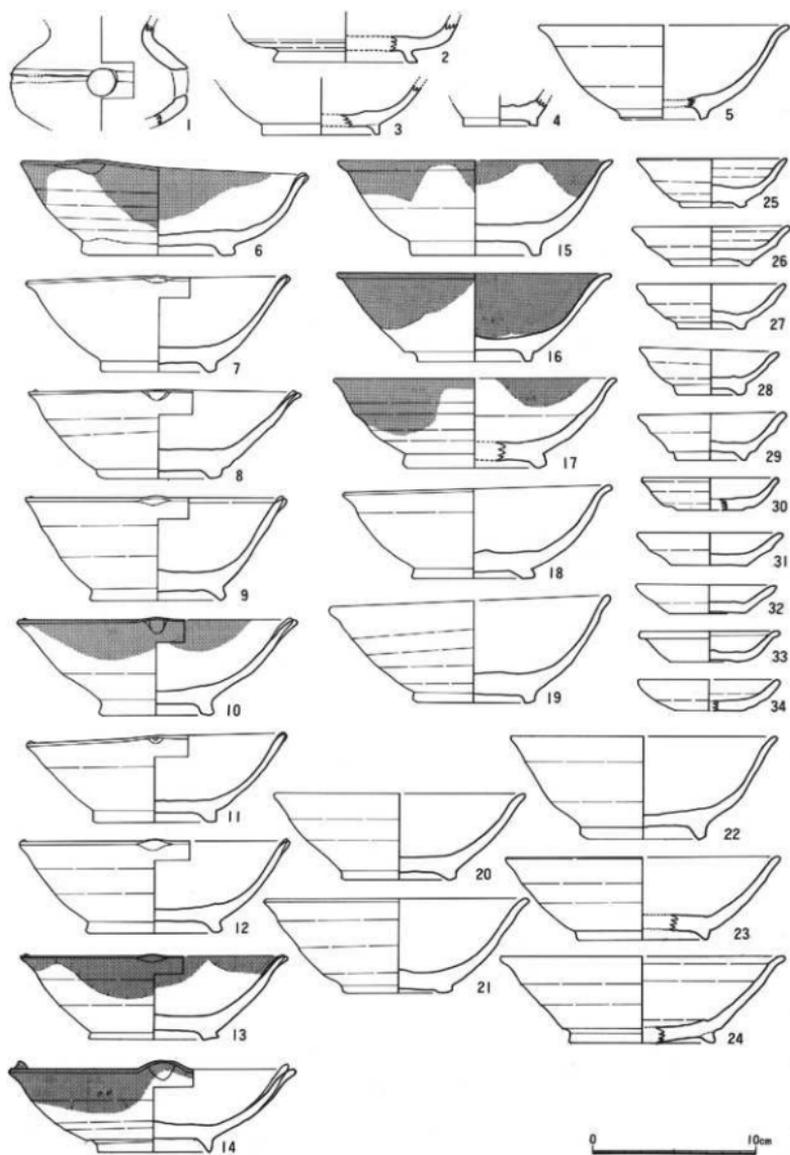


图85 4区平安時代末～鎌倉時代満 (SD412) 出土土器実測図Ⅱ

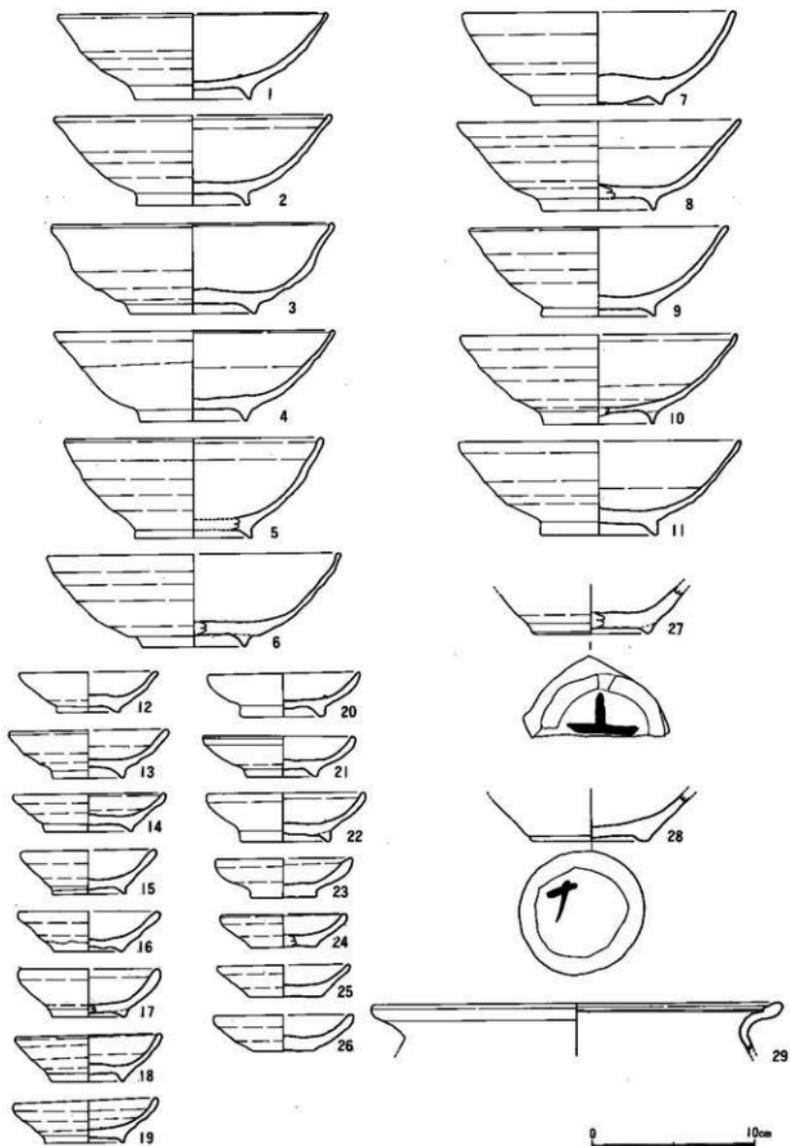
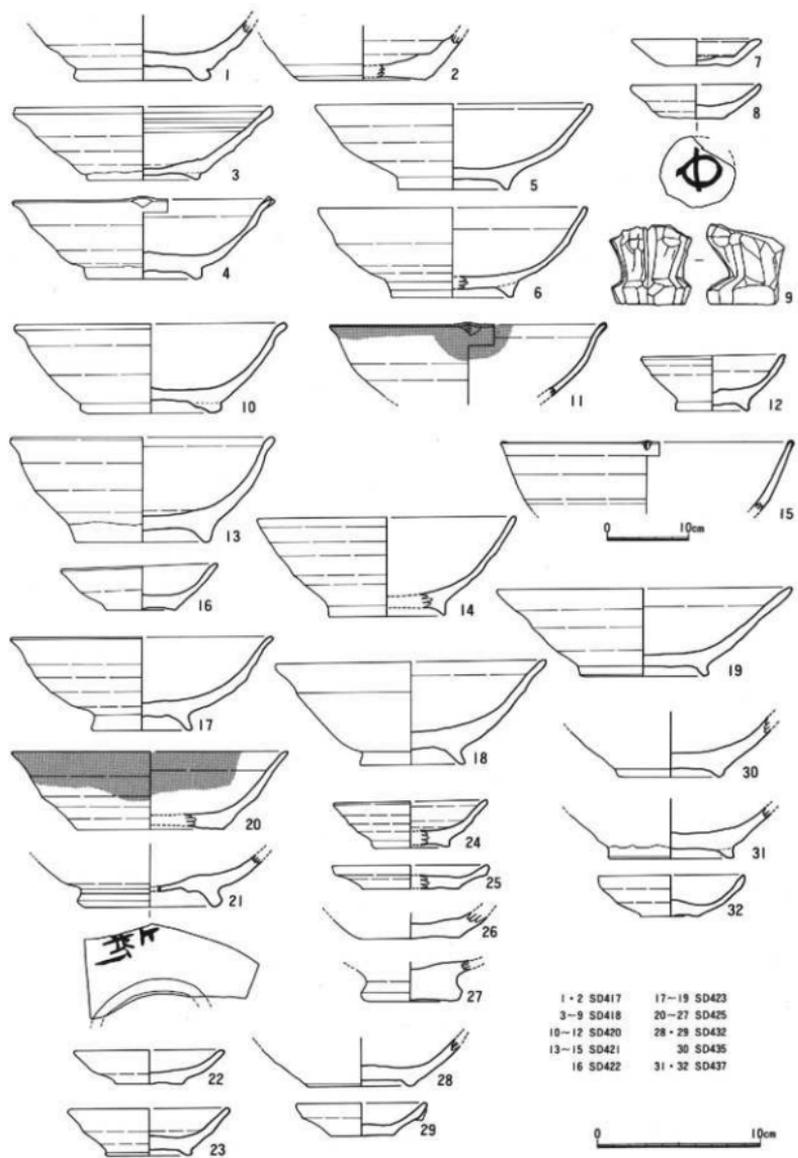


图86 4区平安時代末～鎌倉時代初 (SD412) 出土土器実測図Ⅲ



- | | |
|-------------|---------------|
| 1 · 2 SD417 | 17-19 SD423 |
| 3-9 SD418 | 20-27 SD425 |
| 10-12 SD420 | 28 · 29 SD432 |
| 13-15 SD421 | 30 SD435 |
| 16 SD422 | 31 · 32 SD437 |

图87 4区平安时代末~鎌倉時代清 (SD412) 出土土器実測図Ⅳ

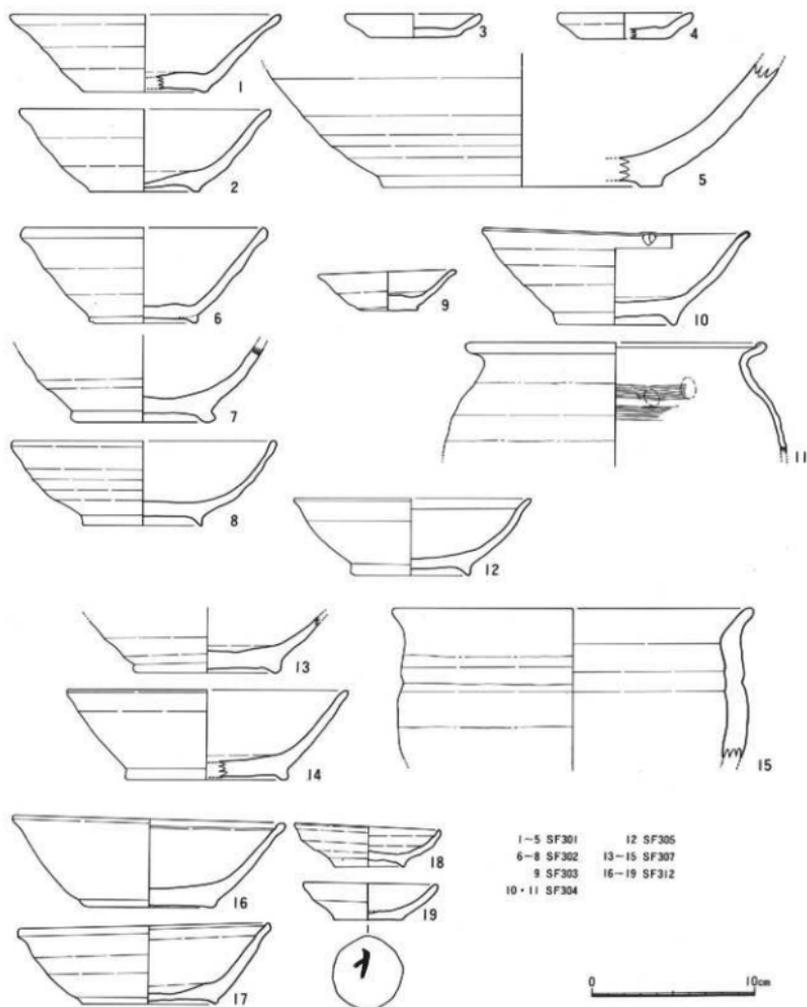


图88 3区平安时代末~鎌倉时代土坑出土土器実測图 I

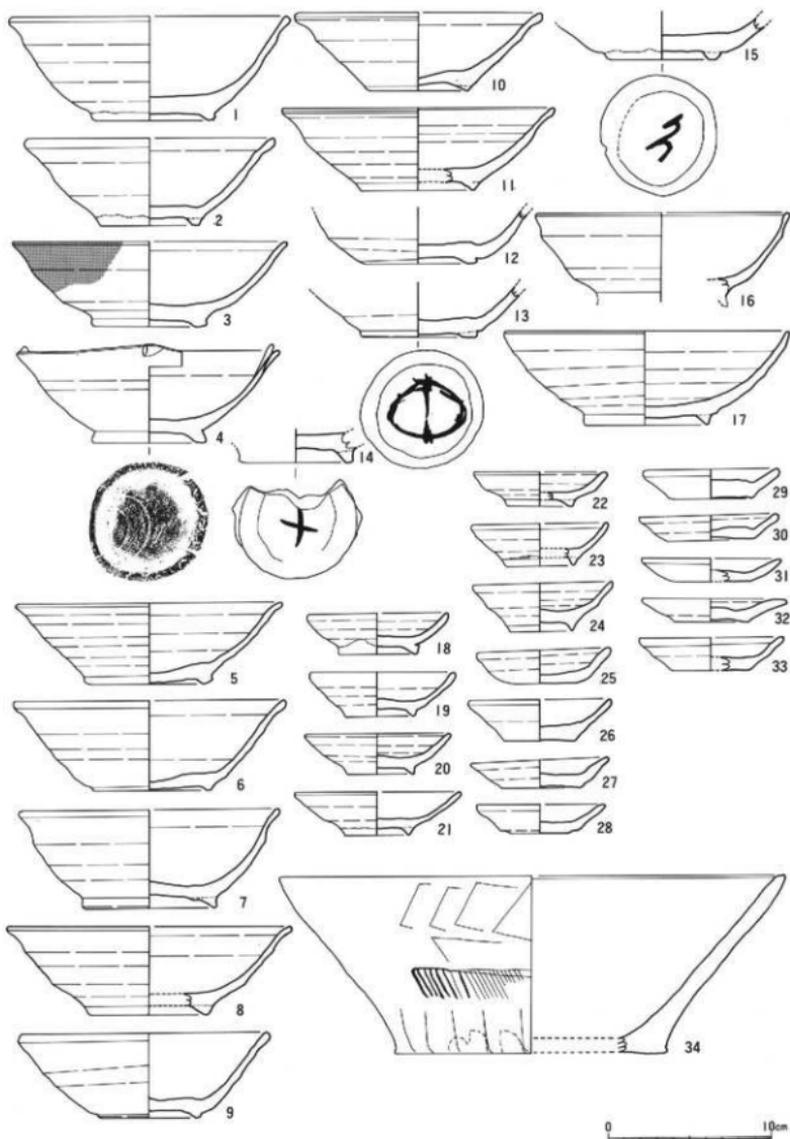


图89 3区平安时代末~鎌倉時代土坑(SF315)出土土器実測图Ⅱ

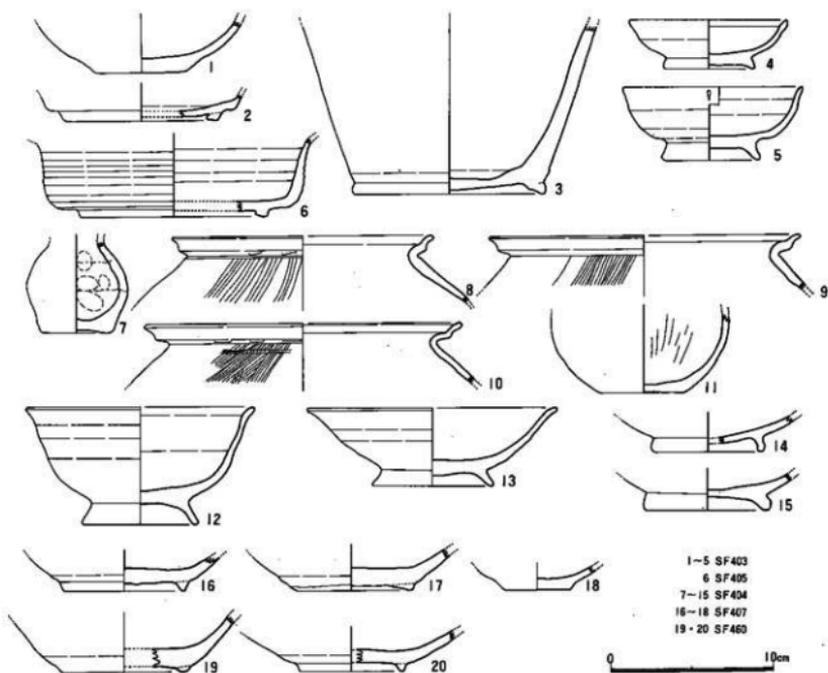


図90 4区平安時代末～鎌倉時代土坑出土土器実測図

基本的であるが、そのなかに太いもの、細いもの、とか高低の差がある。口唇部は丸く調整するもの（図88-15・17）、尖り気味（図89-24）、斜位に面取りするもの（図86-13・21）等があるが、一般的な傾向としては、体部下半からの強い回転ナデにより口縁部がやや肥厚している例が多い。

調整手法・胎土・色調等は山茶碗Ⅱ群と同じである。

口径は9cm前後の1cmに集まり、器高は2.5cm～3cmにある。形態また口径・器高の比からみれば、山茶碗との類似点を多くもっている類といえる。

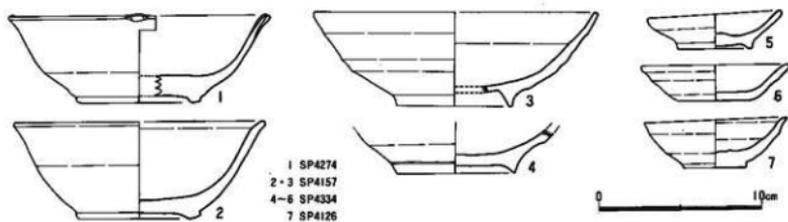


図91 4区ピット出土土器実測図

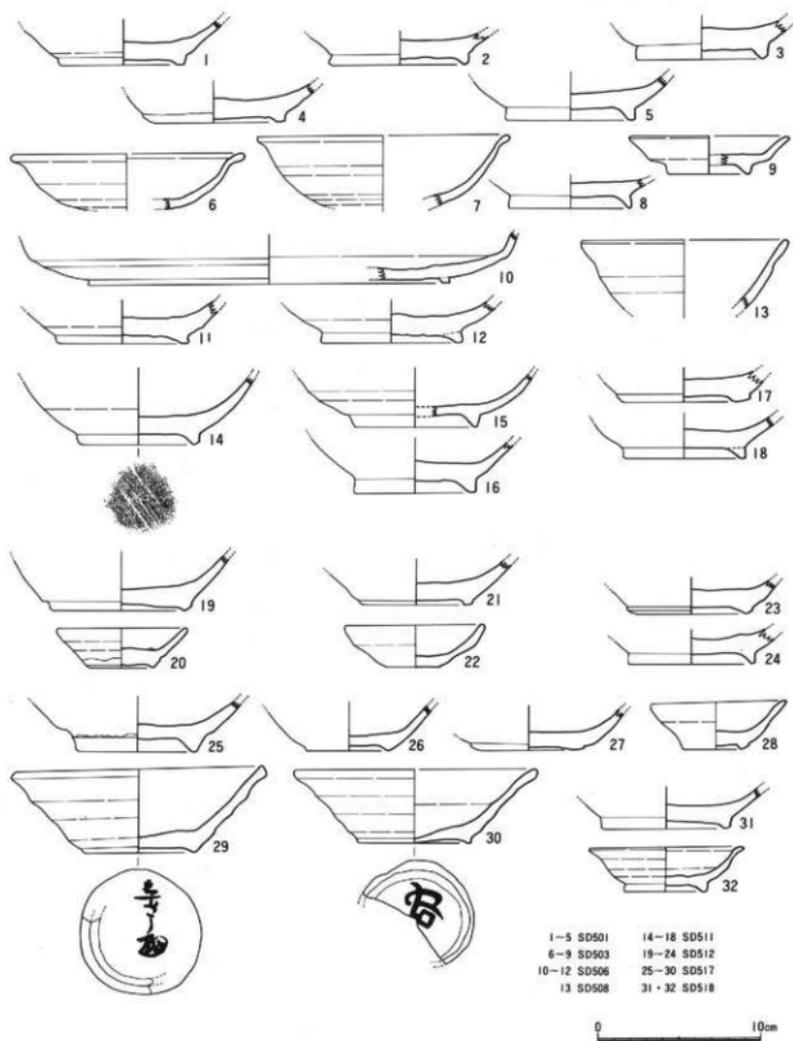


图92 5区平安时代末~鎌倉时代出土土器实测图

高台のつくものである。図81-36、図82-9、図84-9、図92-9等がその形態を代表している。法量を見ると、口径9.5cm～10cmでA類より1cm前後大きく、逆に器高では3cmを越えるものではなく、約0.5cm程低くなる。

分類は形態と法量を基準としたが、細部を検討すると、図84-10・図88-18のように弓状の体部をもちA類を小さくしたような形態も含まれる。

以上述べたように、本類は高台付の小碗というより、皿に近い形状を呈し、I・II群の小碗にみられた山茶碗の縮小された形態とは異なるといえる。

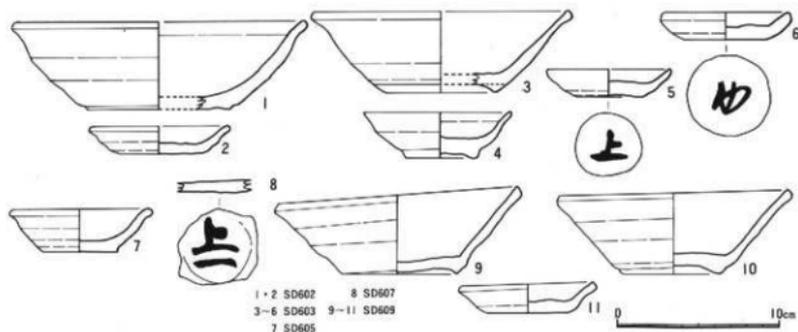


図93 6区平安時代末～鎌倉時代清出土土器実測図

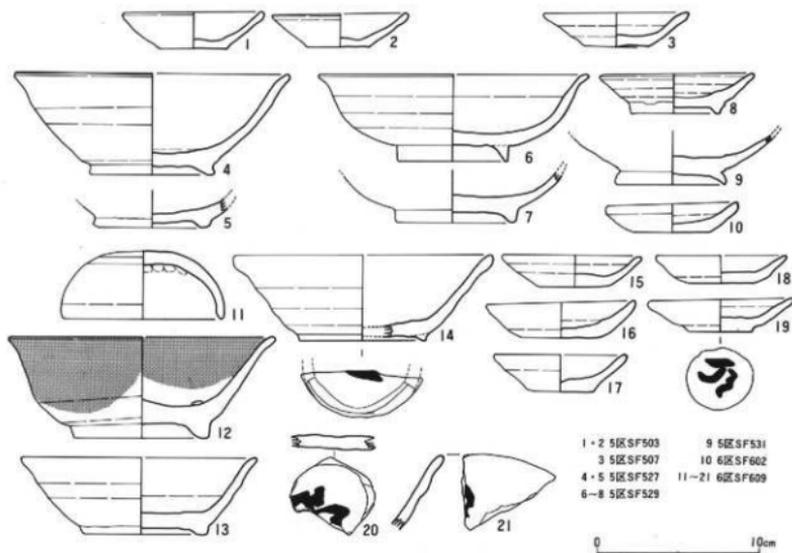


図94 5・6区平安時代末～鎌倉時代土坑出土土器実測図

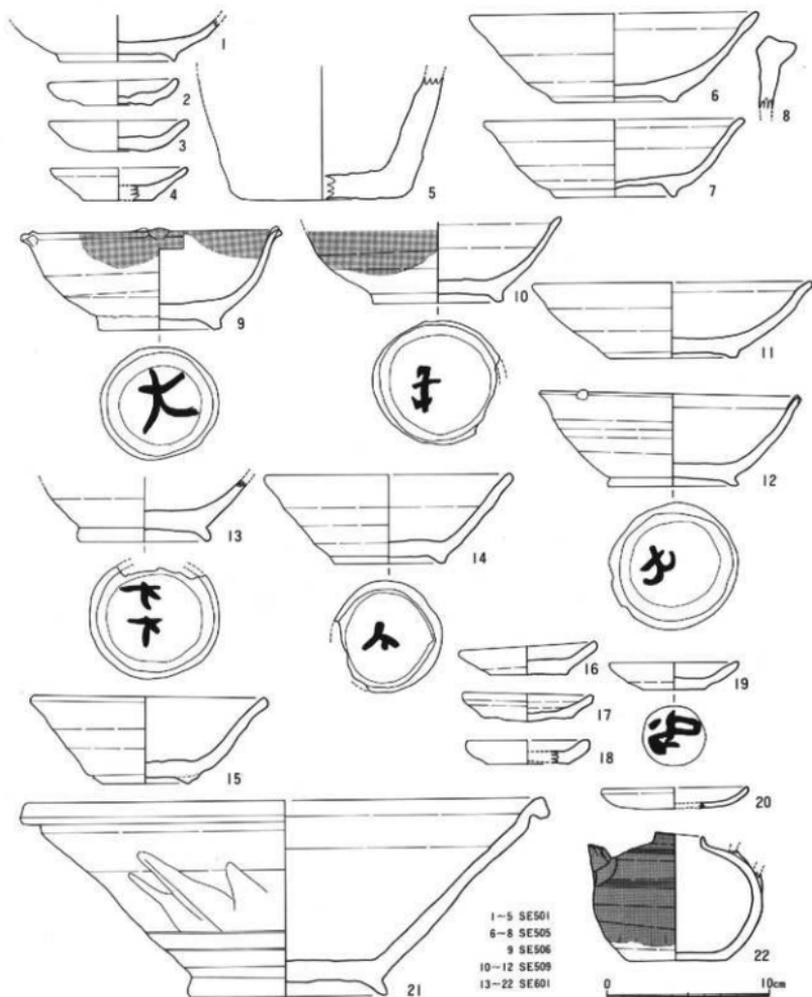


図95 5・6区平安時代末～鎌倉時代井戸出土土器実測図

小皿

小皿もまたⅠ・Ⅱ群に分けられるが、各々の群のなかでは、形態・法量が類似し、幾つかの傾向は指摘されるが明確な分離はできなかった。以下に各群ごとに特徴の幾つかを指摘してみる。

Ⅰ群

成形は底部の粘土板に細長い粘土帯を貼りつけて体部としたものであり、図100-6・14・15が典型的

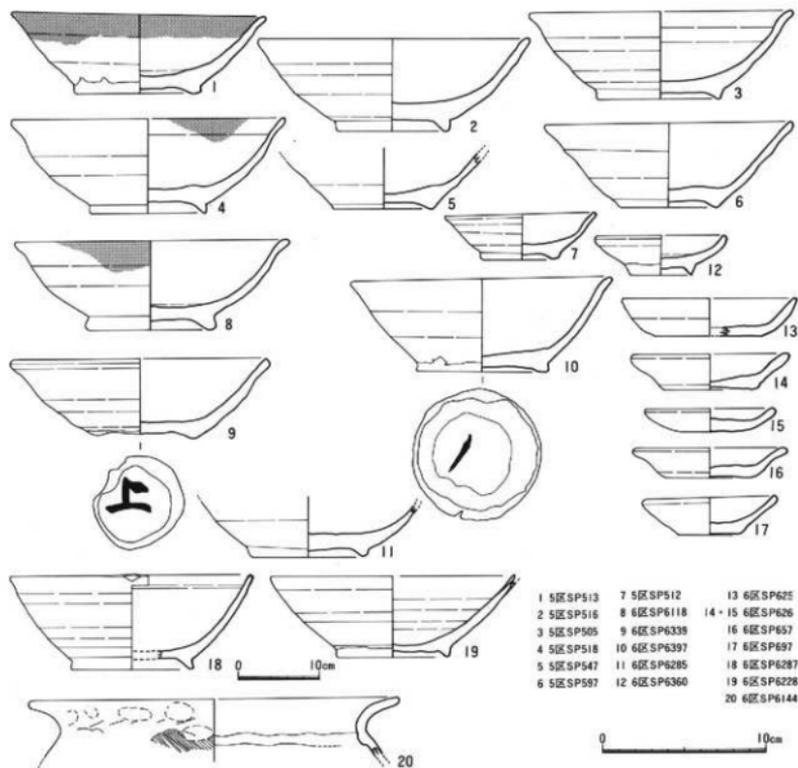


図96 5・6区ピット出土土器実測図

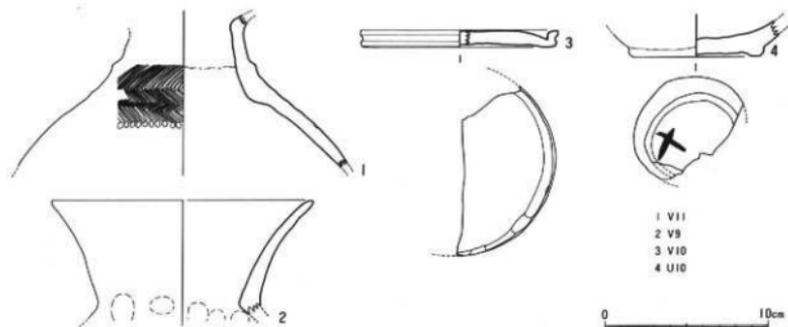


図97 2区遺構外出土土器実測図

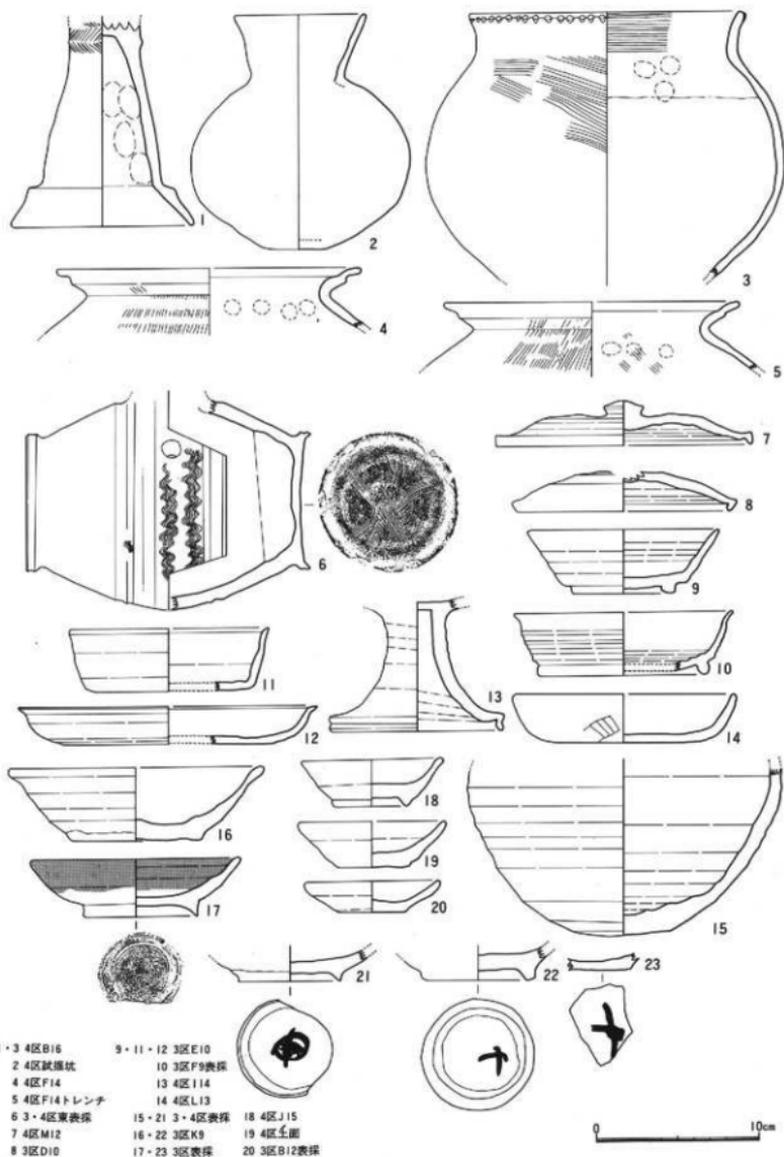


図98 3・4区遺構外出土土器実測図

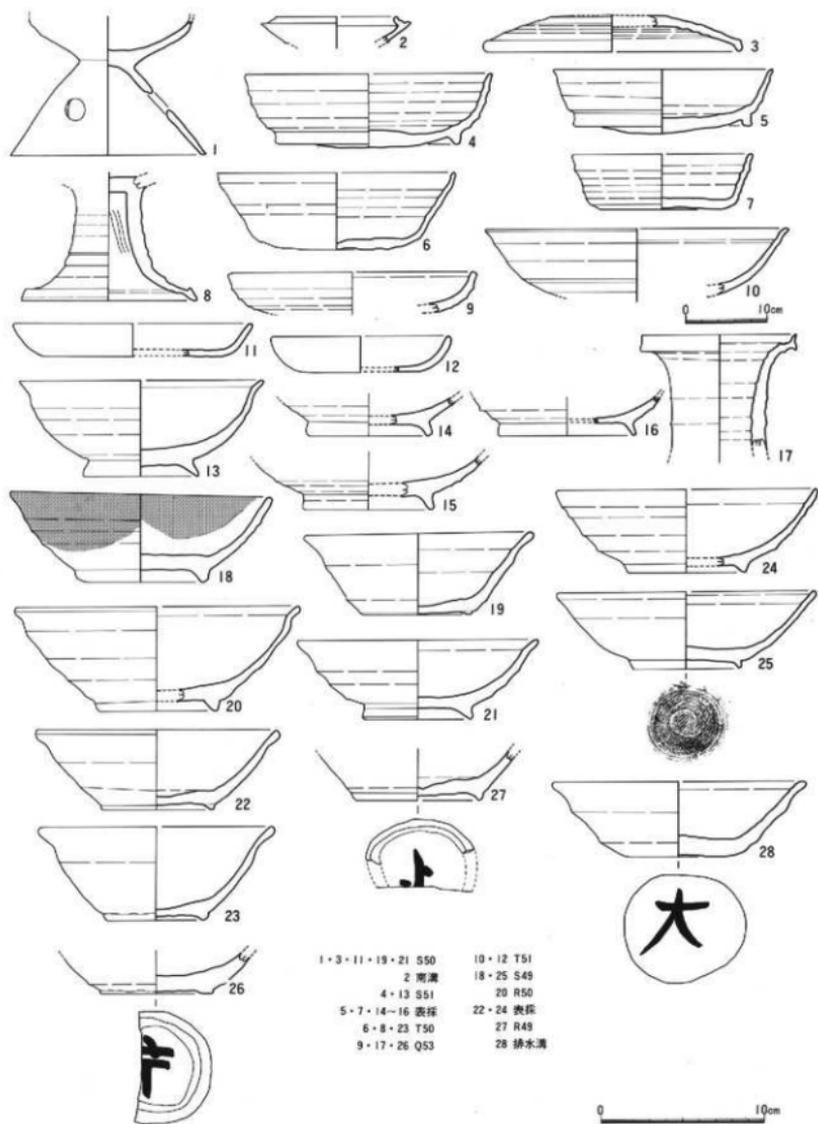


图99 5·6区遺構外出土土器実測図

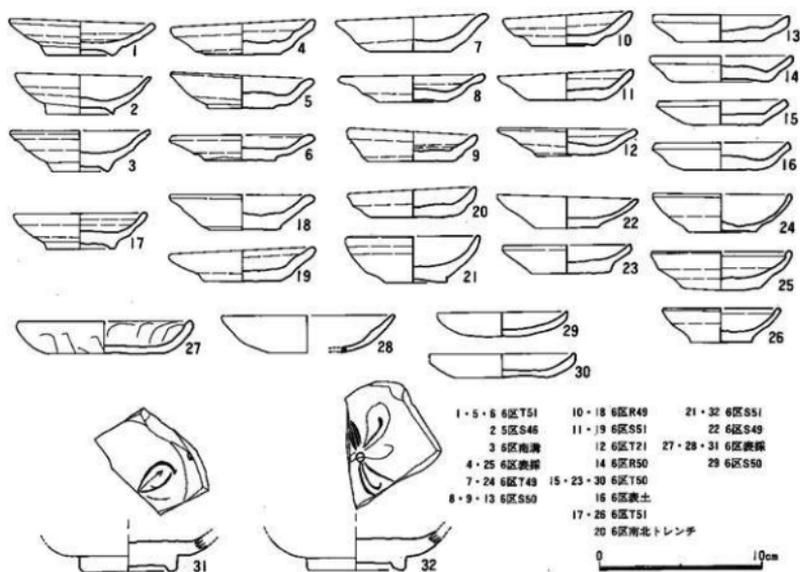


図100 6区遺構外出土土器実測図

な本類の形態を示す。体部直線で短く、底部は大きい。口縁部は肥厚し、口唇部は斜位に面取りされるもの(図77-9、図93-11、図100-14・15)が半数程度認められ、他は丸いもの(図96-14)が認められる。これらは器高が低く扁平であることに大きな特徴がある。

一方底部から体部への移行が丸く、底部の境が不明瞭で比較的器高の高いグループがある。図78-14、図93-2、図94-15等があり、なかには口縁部が外反するもの(図85-33)もみられる。

法量では、口径の大きいものが10cm、小さいもので8cmを測り、器高は扁平な形態で、2cm未満を示し、やや高いグループとしたものは、2cm前後を測る。

扁平な形態で、調整手法は回転糸切りが体部下半に食い込むものが観られることなどから、やや粗雑である。

II群

小皿は小碗A類の本体そのものであり、成形段階で高台を付けていないのがまさにII群の小皿といえる。従って、無高台であることが器高に反映するが、基本的には形態・法量ともに同じものである。

以上で山茶碗・小碗・小皿の分類を主とした記述をおわる。

基本的に無釉陶器といわれるこれらの土器は、その系譜は灰釉陶器から継続されているものであり、すでに成立していた大小の碗形態が継承されているのが山茶碗・小碗である。各種存在した灰釉陶器の器種のなかで、皿の欠落する段階を山茶碗の初現においた。

各分類の時期はおおまかにみて、山茶碗はI群A類が12世紀中葉、B類はやや下る時期で12世紀後半、C類は13世紀前半に考えた。D・E類は近い時期で13世紀後半に比定したい。

山茶碗II群については、東連江地域の在来系窯の資料も少なく3分類のもつ意味が、地域差か年代差かという大きな問題を残している。いずれにしても今後の資料の増加が待たれる。

表6 新羅遺跡奈良時代~鎌倉時代土器觀察表(1)

図番号	品種	分類	法量			出土地点	備考
			口径	器高	底径		
72	1	須恵、甕	17.3	3.5	—	SD305 No.093-5	
2	*	*	16.8	3.5	—	No.119-3	
3	*	*	16.3	3.4	—	No.114-4	
4	*	*	17.2	1.9	—	No.116-2	
5	*	*	16.75	2.35	—	No.116-3	
6	*	*	16.5	2.2	—	No.111-5	
7	*	*	16.4	2.5	—	No.009-7	
8	*	*	16.3	2.6	—	No.116-1	
9	*	*	16.1	2.15	—	No.062-6	
10	*	*	—	—	—	No.063-4	
11	*	*	16.0	2.75	—	No.111-3	
12	*	*	15.7	3.7	—	No.009-2	
13	*	*	16.0	3.3	—	No.009-1	
14	*	*	16.0	3.5	—	No.009-5	
15	*	*	15.8	3.4	—	No.009-6	
16	*	*	15.8	3.9	—	No.111-4	
17	*	*	15.6	4.1	—	No.009-3	
18	*	*	15.1	3.4	—	No.063-3	
19	須恵、甕		15.0	1.9	—	SD305 No.111-6	
20	*	*	14.2	2.65	—	No.066-4	
21	*	*	14.7	3.2	—	No.003-5	
22	*	*	14.3	3.8	—	No.009-4	
23	*	*	14.4	3.3	—	No.009-9	
24	*	*	14.0	2.5	—	No.066-2	
25	*	*	13.8	2.2	—	No.063-2	
26	*	*	14.0	3.3	—	No.009-8	
27	*	*	12.9	2.4	—	No.066-1	
28	*	*	13.1	2.6	—	No.066-3	
29	* 卍	B 2	18.0	5.8	11.4	No.007-4	
30	* 卍	B 2	—	—	9.9	No.114-3	
31	* 卍	B 2	14.8	—	—	No.131-1	
73	1	* 卍 B 3 I	16.9	7.5	11.6	No.063-1	
2	* 卍	B 3 II	16.6	—	—	No.112-1	
3	* 卍	B 3 II	14.7	4.5	10.0	No.119-2	
4	* 卍	B 3 III	14.8	4.2	10.7	No.006-7	
5	* 卍	B 1	14.3	3.8	10.6	No.006-1	
6	* 卍	B 3 II	13.9	4.0	10.9	No.113-3	
7	* 卍	B 3 II	14.1	3.7	10.7	No.007-1	
8	* 卍	B 3 II	13.5	4.4	9.8	No.006-4	
9	* 卍	B I	13.3	4.3	9.4	No.006-3	
10	* 卍	B 3 II	14.8	3.8	10.0	No.006-5	
11	* 卍	B 3 II	14.6	3.7	10.5	No.009-7	
12	* 卍	B 3 II	14.3	3.1	10.0	No.115-2	
13	* 卍	B 3 III	14.0	3.8	9.7	No.006-2	
14	* 卍	B 3 II	14.0	4.1	9.9	No.007-3	
15	* 卍	B 3 II	14.0	4.0	8.9	No.006-6	
16	* 卍	B 3 II	14.0	—	—	No.119-1	
17	* 卍	B 3 II	14.0	3.8	9.5	No.007-5	
18	* 卍	B 3 II	13.9	4.0	8.9	No.007-5	
19	* 卍	B 3 II	13.7	3.8	10.2	No.007-2	
20	* 甕高台环	A 1	15.2	4.2	—	No.111-1	
21	* 卍	A 1	14.5	4.5	4.5	No.114-2	
22	* 卍	A 1	14.4	4.2	—	No.005-6	
23	* 卍	A 1	14.0	3.9	—	No.004-2	
24	* 卍	A 1	14.0	4.2	—	No.004-3	

図番号	品種	分類	法量			出土地点	備考
			口径	器高	底径		
73	25	* 卍	A 1	13.9	3.6	6.6	* No.004-1
26	* 卍	A 1	13.0	4.0	6.0	* No.003-4	
27	* 卍	A 1	12.8	4.1	—	* No.115-1	
28	* 卍	A 1	12.9	3.8	—	* No.004-4	
29	* 卍	A 2 I	17.5	5.4	12.5	* No.003-2	
30	* 卍	A 2 I	16.5	4.8	11.0	* No.005-1	
31	* 卍	A 2 II	15.4	3.7	13.4	* No.114-1	
32	* 卍	A 2 II	13.4	4.9	—	* No.003-3	
33	* 卍	A 2 II	13.3	3.6	11.5	* No.113-4	
34	* 卍	A 2 II	13.3	3.5	9.0	* No.004-6	
35	* 卍	A 2 II	12.1	3.5	8.7	* No.113-2	
36	須恵、卍	A 2 II	12.4	3.3	8.6	* No.004-5	
37	* 卍	A 2 II	12.0	3.4	9.2	* No.003-6	
38	* 卍	A 2 II	12.1	3.8	6.2	* No.006-3	
74	1	* 卍	A 2 II	11.6	3.5	6.6	* No.006-2
2	* 卍	A 2 II	9.5	3.8	7.5	* No.005-4	
3	* 高坪		19.5	—	—	* No.006-1	
4	* 皿		17.7	2.4	11.6	* No.005-5	
5	須恵 埴輪甕		12.8	2.7	—	SD305 No.118-3	
6	* 瓶		—	7.2	—	No.117-1	
7	* 甕		21.6	—	—	No.119-2	
8	* 甕		21.4	—	—	No.119-4	
9	* 卍		22.8	—	—	No.143-1	
10	* 広口甕		—	13.5	—	No.142-1	
11	* 卍	B 1	—	—	—	No.302-1 器身×此字付	
12	* 卍		—	10.2	—	No.002-1 器身×此字付	
13	* 甕高台环		—	—	—	No.302-5 器身不明	
14	* 卍		—	—	—	No.002-2 器身×長	
15	* 卍		—	—	—	No.302-4 器身不明	
16	* 卍	B 3	—	—	10.5	* No.115-4 器身	
17	* 甕高台环	A 2 II	13.9	3.8	—	* No.302-2 器身	
18	* 卍		—	—	—	* No.302-3 器身不明	
19	灰輪、甕		—	12.6	—	No.074 磁骨器	
75	1	土師、卍	18.7	—	12.8	* No.146-5	
2	* 卍		16.4	—	9.8	* No.146-4	
3	* 卍		14.7	—	—	* No.146-1	
4	* 卍		14.4	—	—	* No.144-4	
5	* 卍		14.0	—	7.7	* No.144-3	
6	* 卍		13.1	—	—	* No.145-3	
7	* 卍		12.4	3.8	5.6	* No.146-2	
8	* 皿		14.0	—	9.8	* No.144-5	
9	* 卍		14.0	—	—	* No.145-5	
10	* 皿		14.7	—	—	* No.145-4	
11	* 卍		14.7	1.8	10.3	* No.144-2	
12	* 卍		16.5	2.0	13.8	* No.144-1	
13	* 卍		17.5	—	—	* No.144-6	
14	* 高坪付甕		—	—	11.2	* No.147-1	
15	* 甕		21.6	—	—	* No.145-1	
16	* 甕		20.8	—	—	* No.145-2	
17	* 甕		—	6.0	—	* No.147-2 底甕	
18	* 卍		11.2	—	—	* No.146-3	
19	* 卍		11.6	—	—	* No.111-2	
76	1	須恵、卍	15.8	3.1	—	SD102 No.105-3	
2	* 卍	环 B 3 - II	14.0	3.8	9.9	* No.107-3	
3	* 卍	环 B 3 - II	14.5	3.2	10.3	* No.107-2	

表6 新羅遺跡奈良時代~鎌倉時代土器観察表(2)

図録号	品 種	分 類	法 量		出土地点	備 考
			口径	高さ		
76	*	*	坪B 1	—	19.2	* No.106-4
5	*	*	坪B 3	13.9	3.9	7.2 * No.107-5 体部丸味
6	*	*	坪B 3	—	9.8	* No.108-1
7	*	*	坪A 2-1	17.4	6.0	11.5 * No.107-4
8	*	*	鉢	26.0	8.25	— * No.103-2
9	灰釉・碗			17.1	5.2	7.5 * No.107-1
10	*	*		16.6	—	— * No.105-2
11	*	*		—	7.4	* No.106-3
12	*	*		—	7.1	* No.104-1
13	*	*		—	7.4	* No.108-4
14	*	小碗	IA	10.4	2.35	5.3 * No.107-6
15	*	*		10.9	2.8	5.3 * No.104-1 輪花
16	*	*		—	5.35	* No.105-1
17	*	手付瓶		—	5.6	* No.103-1
18	山茶碗			—	7.0	* No.106-2
19	*	*		—	6.5	* No.105-4
20	小皿			10.3	2.6	5.0 * No.106-1
21	土師・坪			12.4	—	— * No.108-2
22	*	*		12.8	—	— * No.108-3
23	*	*		15.0	—	— * No.103-3
24	土師			22.4	—	— * No.104-2 伊勢型
77	山茶碗	IA		16.8	5.6	7.4 SD204 No.081-1
7	*	IB		15.9	6.0	— * No.081-1
8	*	IB		16.1	5.9	7.5 * No.038-1 蓋書
9	小皿	I		7.9	1.35	5.0 * No.020-7
10	山茶碗	IC		16.1	4.75	— * No.081-2
11	*	IC		16.35	5.6	6.8 * No.081-4
12	灰釉・碗	IC		16.45	5.35	6.0 * No.019-1
13	*	IB		17.8	6.1	7.6 * No.020-6
14	山茶碗	IA		15.8	5.05	7.4 * No.041-1
15	灰釉・碗	IB		16.3	5.6	6.9 * No.020-5
16	灰釉			16.0	—	— * No.080-1
17	小皿	II		8.4	2.4	3.7 * No.020-4
18	*	II		8.85	2.3	4.3 * No.020-3 蓋裏
19	小碗	IIA		8.6	2.45	3.5 * No.020-2
20	山茶碗			—	8.0	SD213 No.078
21	小碗	IB		8.4	2.2	4.2 * No.020-1
78	山茶碗	IC		16.3	5.2	9.0 SF202 No.038-2
2	小碗			8.1	2.7	3.8 SF203 No.097-4
3	*	IA		9.2	3.0	4.4 * No.097-2
4	*	IB		9.5	3.0	5.3 * No.096-1
5	*	IA		8.0	2.65	4.0 * No.096-3
6	*	IB		9.5	2.45	3.7 * No.096-4
7	*	IA		9.4	3.3	4.1 * No.096-5
8	*	IB		9.8	3.0	5.2 * No.097-1
9	*	IB		8.5	2.3	4.0 * No.097-5
10	*	IB		9.2	2.4	4.0 * No.097-3
11	小碗	IA		8.9	2.5	4.4 * No.096-2
12	灰釉			16.0	—	6.7 SF204 No.098-1
13	*			—	6.4	* No.098-2
14	山茶碗			—	7.4	SF205 No.099-1
15	*			—	7.1	* No.099-2
16	山茶碗			—	7.35	SF206 No.100-1
17	*			—	7.3	* No.100-2
18	須恵・坪身	坪B 1		—	9.25	SF212 No.101-3 蓋裏

図録号	品 種	分 類	法 量		出土地点	備 考
			口径	高さ		
78	土師・差			23.5	—	— * No.101-1
79	須恵脚 高坪			—	12.4	SE108 No.123-3
2	山茶碗	IC		16.4	5.1	7.6 * No.121-3
3	*	IC		16.8	5.5	8.3 * No.037-1
4	*			—	7.3	* No.121-2
5	*			—	8.1	* No.121-1
6	*			—	7.8	* No.122-2
7	*	IC		17.6	5.2	— * No.121-4
8	*			17.1	—	— * No.122-1
9	片口鉢			33.0	14.8	16.0 * No.120-1
10	中世須恵 甕			—	—	* No.301-1
80	山茶碗	IA		16.2	5.8	7.4 SE208 No.075-1 輪花
2	*			—	—	SE108 No.123-2
3	小碗	IA		9.0	2.9	* No.123-1
4	*	IA		8.2	3.5	— * No.123-3
81	山茶碗			—	6.4	SE201 No.095-1
2	*	IA		17.1	6.3	8.4 SE202 No.033-1
3	*	IA		17.6	5.4	7.8 * No.087-2
4	*	IB		16.6	—	8.3 * No.087-1
5	*	IB		14.2	6.35	7.6 * No.089-4
6	*			—	8.2	* No.086-1
7	*			—	8.4	* No.086-3
8	*			—	7.9	* No.089-5
9	*			—	6.6	* No.088-4
10	*			—	8.1	* No.089-1
11	*			—	7.0	* No.086-5
12	*			—	8.1	* No.086-4
13	*			—	8.4	* No.089-2
14	*			—	8.9	* No.089-1
15	*			—	7.6	* No.088-6
16	*			—	7.3	* No.088-3
17	*			14.1	—	— * No.089-2
18	*			16.5	—	— * No.089-3
19	小碗	IA		9.4	2.65	4.7 * No.094-4
20	*	IB		9.2	2.7	4.5 * No.096-3
21	*	IB		9.1	2.7	5.6 * No.093-7
22	*	IA		8.7	2.65	3.8 * No.094-6
23	*	IA		8.8	2.9	4.5 * No.093-9
24	*	IA		8.4	2.7	4.2 * No.094-5
25	*	IB		8.15	2.2	5.1 * No.093-5
26	*	IA		8.75	2.5	4.8 * No.093-3
27	*	IB		7.6	2.15	4.0 * No.093-6
28	*			—	4.5	* No.093-4
29	灰釉・碗	IIA		16.8	6.3	7.1 * No.086-2
30	山茶碗	IC		16.9	5.1	6.8 * No.087-3
31	*	IC		16.9	5.2	7.2 * No.097-4
32	小碗	IB		10.15	2.1	4.9 * No.093-2
33	*	IA		9.9	3.0	5.2 * No.036-4
34	*	IB		9.3	2.7	4.9 * No.093-6
35	*	IB		8.9	2.8	4.8 * No.094-3
36	*	IB		9.3	2.3	5.2 * No.093-1
37	*	IA		9.1	2.8	4.5 * No.036-1
38	小皿	II		9.1	2.25	4.6 SE202 No.036-2
39	小碗			—	4.9	* No.094-1
40	*			—	2.1	7.0 * No.094-2

表6 新堀遺跡奈良時代~鎌倉時代土器観察表(3)

図番号	品 種 分 類	法 量 α			出 土 地 点	備 考
		口径	高さ	底径		
81	須恵	—	—	—	No.225-1	観足
82	1 須恵、高弁	14.7	12.0	9.8	1区V10 No.082-5	
2	〃 器	—	—	—	2区奥部No.082-2	
3	小皿	—	—	3.9	2区U10 No.083	
4	須恵、蓋	—	—	12.3	SX201 No.126-1	
5	小皿 II	5.2	2.0	4.4	2区T31 No.084	
6	須恵、弁	11.2	—	—	2区V10 No.082-1	
7	灰釉、段皿	18.1	2.85	9.0	2区V11 No.085	K-14附
8	山茶碗 II B	16.6	5.9	8.0	P2235 No.128-4	
9	小碗 II B	9.8	2.3	4.9	2区V10C No.128-2	
10	山茶碗	—	—	7.3	P2133 No.125-1	
11	小皿 I	8.2	1.7	—	P2302 No.125-3	
12	〃 I	8.2	1.6	5.0	〃 No.125-4	
13	山茶碗 I B	15.3	6.0	7.3	2区V10C No.040-1	
14	小皿 I	8.6	2.1	4.2	PP134 No.125-2	鎌倉文字柄
83	1 灰釉、広口壺	12.4	—	—	SD801 No.073	
2	小皿	8.4	2.4	5.3	〃 No.125-3	
3	灰釉、瓶	—	—	5.5	〃 No.125-2	
4	灰釉、碗	—	—	4.8	〃 No.125-1	
5	山茶碗	—	—	8.7	SD304 No.127-1	
6	須恵、蓋	—	—	—	SD306 No.127-2	
7	長頸瓶	19.0	—	—	SD311 No.126-3	
8	小皿 II	8.5	2.5	4.0	〃 No.125-4	
9	山茶碗	16.6	—	—	〃 No.125-1	
10	灰釉、碗 II A	16.7	5.6	7.5	〃 No.125-5	
11	灰釉	—	—	7.4	〃 No.126-2	0.5mm厚
12	山茶碗 I A	16.6	6.0	7.6	〃 No.127-1	
13	短頸壺	9.6	—	—	SD314 No.128-1	
14	灰釉、碗	—	—	7.6	〃 No.128-2	K-14付
15	灰釉	—	—	7.6	SD321 No.128-3	
16	山茶碗	14.4	—	—	〃 No.128-1	
17	〃	15.3	—	8.3	〃 No.128-2	
18	小碗 II A	9.1	2.75	3.9	SD323 No.140-1	
19	長頸瓶	9.5	—	—	SD325 No.141-1	
84	1 〃 皿	10.8	2.4	?	SD402 No.129-2	
2	かわらけ	7.2	1.9	?	〃 No.129-1	
3	須恵、水注	3.9	—	—	〃 No.129-3	
4	〃 高台付蓋	—	—	16.8	〃 No.128-4	
5	灰釉、小碗	12.2	3.9	6.9	〃 No.129-1	
6	須恵、瓶	—	—	8.3	〃 No.129-2	
7	〃 壺	9.7	24.8	—	SD403 No.129-1	
8	〃 弁	9.8	—	—	SD407 No.124-2	
9	小碗 II B	9.0	2.7	5.2	〃 No.124-1	
10	〃 II B	15.05	6.3	7.2	〃 No.124-3	
11	〃 I B	10.7	2.8	6.3	〃 No.029-1	
12	山茶碗	—	—	8.0	SD408 No.123-1	
13	灰釉	—	—	8.2	SD410 No.122-1	
14	須恵、高弁	—	—	—	SD411 No.120-3	
15	山茶碗 I A	15.9	5.55	8.4	〃 No.045-3	墨書、菊花
16	〃 I A	16.25	5.7	8.15	〃 No.061-1	
17	〃 I B	16.9	6.2	7.7	〃 No.045-2	
18	〃	—	—	7.7	〃 No.128-3	
19	〃	—	—	8.0	〃 No.121-1	
20	〃	—	—	8.5	〃 No.120-2	
21	〃	—	—	7.8	〃 No.121-4	

図番号	品 種 分 類	法 量 α			出 土 地 点	備 考
		口径	高さ	底径		
84	22 小皿	8.4	2.45	3.3	SD411 No.128-2	
23	小碗	—	—	3.9	〃 No.129-1	
24	山茶碗 II B	16.45	5.6	6.4	〃 No.129-4	
25	〃 II B	16.0	5.0	6.6	〃 No.121-3	
26	〃 II A	16.5	5.2	6.15	〃 No.129-3	
27	〃	16.7	5.2	7.1	〃 No.045-1	
28	小皿 II	8.0	2.3	4.2	〃 No.120-1	
29	〃 II	8.05	2.15	3.9	〃 No.129-2	
85	1 須恵、壺	—	—	—	SD412 No.122-3	
2	〃 弁 B 2	—	—	8.8	〃 No.123-3	
3	灰釉、碗	—	—	7.1	〃 No.128-5	K-14
4	〃 小壺	—	—	4.6	〃 No.127-1	
5	灰釉 I B	15.1	—	—	〃 No.122-2	
6	山茶碗 I A	17.5	5.95	9.4	〃 No.047-1	
7	〃 I A	15.9	5.9	7.0	〃 No.121-1	
8	〃 I A	16.5	5.4	7.6	〃 No.122-1	
9	〃 I A	16.0	6.4	8.4	〃 No.124-1	
10	〃 I A	16.8	—	7.0	〃 No.121-2	
11	〃 I A	15.6	5.55	7.5	〃 No.122-4	
12	〃 I A	16.5	5.8	8.3	〃 No.125-4	
13	〃 I A	16.4	5.2	7.9	〃 No.124-3	
14	〃 I A	17.3	5.6	6.9	〃 No.128-4	
15	〃 I A	16.7	5.9	7.9	〃 No.123-4	
16	〃 I A	16.4	5.4	7.0	〃 No.122-3	
17	〃 I C	17.0	5.5	8.8	〃 No.122-1	
18	〃 I C	16.0	5.7	7.6	〃 No.046-2	
19	〃 I B	16.8	6.6	6.6	〃 No.120-3	
20	〃 I C	15.3	5.3	7.0	〃 No.123-1	
21	〃 I B	15.8	5.9	6.6	〃 No.120-4	
22	〃 I B	16.2	6.3	7.7	〃 No.125-1	
23	〃 I C	16.7	5.1	8.0	〃 No.122-4	
24	〃 I C	17.2	5.3	8.9	〃 No.128-1	
25	小碗 I A	9.0	3.0	3.9	〃 No.021-1	
26	〃 I B	9.4	2.4	4.95	〃 No.122-4	
27	〃 I A	8.9	2.7	4.0	〃 No.122-1	
28	〃 I A	8.4	3.0	4.1	〃 No.122-4	
29	〃 I A	9.05	2.7	4.3	〃 No.021-2	
30	かわらけ I	8.6	2.0	4.0	〃 No.127-3	
31	〃 I	9.5	2.0	4.5	〃 No.124-4	
32	〃 I	8.4	1.7	4.1	〃 No.124-5	
33	〃 I	8.3	1.85	4.1	〃 No.128-3	
34	〃	8.4	1.9	4.0	〃 No.120-1	
86	1 山茶碗 II B	16.5	5.3	7.2	〃 No.122-2	
2	〃 II C	16.9	5.5	6.9	〃 No.126-3	
3	〃 II B	17.2	5.5	7.7	〃 No.123-1	
4	〃 II C	17.0	5.6	6.5	〃 No.046-1	
5	〃 II B	15.7	6.1	7.2	〃 No.122-1	
6	〃 II A	17.8	5.7	6.2	〃 No.122-2	
7	〃 II A	16.4	5.7	7.8	〃 No.124-2	
8	〃 II C	17.3	5.5	7.0	〃 No.122-2	
9	〃 II A	15.7	5.5	7.0	〃 No.127-4	
10	〃 II A	16.7	5.5	6.8	〃 No.120-6	
11	〃 II A	17.1	5.8	7.2	〃 No.122-2	
12	小碗 II A	8.3	2.4	3.8	〃 No.122-5	
13	〃 II A	9.95	3.0	4.4	〃 No.021-6	

表6 新堀遺跡奈良時代～鎌倉時代土器観察表(4)

図番号	品名	分類	注量 口徑 器高 底径	出土地点	備考
96	14	小瓶	II B 9.46 2.3 5.2	SD412 No.021	
	15	*	II A 8.0 2.6 4.4	* No.153-4	
	16	*	II A 8.6 2.4 4.0	* No.150-2	
	17	*	II A 8.2 2.9 4.4	* No.153-3	
	18	*	II A 9.0 2.8 4.2	* No.021-5	
	19	*	II A 8.8 2.4 4.9	* No.021-4	
	20	*	II B 9.1 2.6 5.1	* No.150-5	
	21	*	II A 9.0 2.5 4.2	* No.149-2	
	22	*	II A 9.4 3.0 5.4	* No.149-1	
	23	小皿	II 8.4 2.4 3.8	* No.149-2	
	24	*	II 7.6 2.0 4.0	* No.149-3	
	25	*	II 8.1 1.8 4.4	* No.149-3	
	26	*	II 8.4 2.1 3.6	* No.149-6	
	27	山茶碗	— — 6.7	* No.153-2	墨書
	28	*	— — 7.4	* No.155-3	*
	29	土師、甕	25.0 — —	* No.151-3	伊勢型
97	1	山茶碗	— — 8.4	SD417 No.135-1	
	2	不明	— — 7.6	* No.135-2	灰粒か
	3	山茶碗	ID 15.7 4.5 7.0	SD418 No.219-1	
	4	*	IA 15.9 5.0 7.0	* No.217-1	
	5	*	II C 16.7 5.2 6.8	* No.217-2	
	6	*	II A 16.3 5.4 7.3	SD412, 418, 425, No.217-3	
	7	小皿	7.9 1.7 3.9	SD418 No.219-2	
	8	*	7.6 2.0 3.8	* No.217-4	墨書土器
	9	須臾・飯足	— — —	* No.225-2	飯足
	10	山茶碗	IB 16.6 5.5 8.6	SD420 No.135-4	
	11	*	17.0 — —	SD220 No.135-2	
	12	小瓶	II A 8.8 3.45 4.5	SD420 No.135-3	
	13	山茶碗	IB 15.9 6.4 8.3	SD412 No.130-2	
	14	*	II A 15.8 6.1 7.0	SD411, 421, No.130-1	
	15	大平鉢	36.0 — —	SD421 No.131-1	梅花
	16	小皿	II 9.6 2.7 4.2	SD422 No.068-1	墨痕
	17	土師、甕	II B 16.4 6.3 8.5	SD423 No.219-4	
	18	灰輪、*	16.0 5.7 6.15	* No.219-2	
	19	山茶碗	17.8 5.4 7.9	* No.219-1	
	20	*	16.7 — —	SD425 No.221-4	
	21	*	— — 7.8	* No.220-1	墨書土器
	22	小皿	I 9.0 2.0 4.0	* No.221-3	
	23	小瓶	IA 9.6 2.9 5.3	* No.220-2	
	24	*	IA 9.45 2.9 4.5	* No.033-1	
	25	小皿	I 9.5 1.45 6.0	* No.221-2	
	26	土師、甕	— — 5.9	* No.221-1	
	27	*	— — 5.9	* No.220-4	笹状の溝付
	28	山茶碗	— — 6.3	SD432 No.223-1	
	29	小皿	II 7.8 2.0 3.8	* No.223-2	
	30	山茶碗	— — 6.5	SD435 No.221-1	
	31	*	— — 7.6	SD437 No.224-1	
	32	小皿	II 8.7 2.5 3.5	* No.224-2	
98	1	山茶碗	ID 16.4 4.8 7.6	SF301 No.201-5	
	2	*	IC 15.8 5.1 6.8	* No.201-1	
	3	小皿	I 8.2 2.0 —	* No.201-3	
	4	*	I 8.1 1.6 —	* No.201-4	
	5	鉢	— — 17.0	* No.202-1	
	6	山茶碗	ID 15.0 5.9 6.8	SF302 No.203-2	
	7	*	— — 8.85	* No.203-1	

図番号	品名	分類	注量 口徑 器高 底径	出土地点	備考
98	8	山茶碗	II A 16.1 5.1 7.2	SF302 No.203-3	
	9	小皿	8.4 2.5 —	SF303 No.204-1	
	10	山茶碗	IA 16.1 5.9 7.4	SF304 No.043-1	
	11	土師、甕	21.2 — —	* No.205-1	伊勢型
	12	山茶碗	IC 16.6 5.5 8.4	SF305 No.206-1	
	13	*	— — 9.0	SF307 No.208-1	
	14	*	IC 17.0 5.55 10.0	* No.207-2	
	15	灰輪、甕	22.0 — —	* No.207-1	青+白磁
	16	山茶碗	ID 16.4 5.55 8.2	SF312 No.209-2	
	17	*	ID 15.1 5.1 8.0	* No.209-3	
	18	小瓶	II B 8.7 2.5 4.2	* No.202-1	
	19	*	II 7.9 2.3 4.2	* No.209-1	墨書
99	1	山茶碗	IB 15.6 6.3 7.5	SF315 No.173-2	
	2	*	ID 14.8 5.3 5.9	* No.171-4	
	3	*	IC 16.5 5.2 7.0	* No.170-1	
	4	*	IA 15.9 6.1 7.0	* No.042-1	
	5	*	IC 16.1 5.0 7.8	* No.174-2	
	6	*	ID 16.4 5.4 7.2	* No.172-1	
	7	*	15.6 6.0 8.2	* No.175-2	
	8	*	IC 17.2 5.4 7.2	* No.174-3	
	9	*	IC 14.9 5.25 6.2	* No.044-1	
	10	*	ID 15.8 4.7 6.0	* No.176-1	
	11	*	IC 16.5 5.1 7.0	* No.175-2	
	12	*	— — 6.8	* No.170-2	
	13	*	— — 6.9	* No.176-3	墨書
	14	*	— — 7.0	* No.171-1	*
	15	*	— — 6.6	* No.175-3	*
	16	*	15.1 — —	* No.170-3	
	17	*	II A 17.1 5.8 7.5	* No.174-1	
	18	小瓶	IB 8.7 2.4 4.7	* No.035-6	
	19	*	8.35 2.7 4.2	* No.035-2	
	20	*	IB 8.85 2.4 3.9	* No.035-1	
	21	*	IB 10.1 2.6 3.9	* No.175-1	
	22	*	II B 7.8 2.0 3.9	* No.171-3	
	23	*	II A 8.1 2.6 4.1	* No.174-4	
	24	*	II A 8.7 2.95 3.8	* No.035-4	
	25	小皿	8.2 2.05 4.8	* No.035-5	
	26	*	II 8.6 2.5 4.2	* No.172-2	
	27	*	8.3 1.8 4.7	* No.172-3	
	28	*	7.6 1.8 3.4	* No.171-5	
	29	*	I 7.9 1.8 4.9	* No.170-4	
	30	*	I 8.5 1.6 4.8	* No.035-3	
	31	*	8.2 1.4 4.5	* No.172-4	
	32	*	I 8.5 1.4 4.4	* No.170-5	
	33	*	I 8.7 2.0 4.6	* No.171-2	
	34	鉢	30.8 10.3 16.3	* No.173-1	
99	1	土師、坪	— — 5.6	SF403 No.214-3	
	2	須臾、*	B I — — 9.3	* No.214-2	
	3	灰輪、甕	— — 11.8	* No.214-4	
	4	小瓶	9.2 3.0 5.6	* No.214-1	
	5	灰輪、小瓶	10.9 4.45 5.5	* No.071-1	
	12	灰輪、埴	13.8 — 7.1	* No.188-1	
	13	*	15.0 — 7.4	* No.188-4	
	14	*	— — 6.7	* No.188-3	R-90
	15	*	— — 7.3	* No.188-2	

表6 新羅遺跡奈良時代~鎌倉時代土器観察表(5)

図号	品種	分類	法量		出土地点	備考	
			口径	底径			
90	16	灰釉、碗	—	7.3	SF407 No.274-2		
	17	山茶碗	—	7.0	* No.274-1		
	18	小皿	—	4.0	* No.273-3		
	19	山茶碗	—	7.6	SF469 No.181-2		
	20	*	—	6.2	* No.181-1		
	91	1	*	IA	16.0 5.5 7.5	P472 No.304-1	
		2	*	IB	15.3 6.0 7.6	M49(A) No.307-1	
		3	*	IC	17.3 5.8 7.2	* No.307-2	
		4	*	—	7.3	P434 No.305-5	
		5	小碗	IIA	8.2 2.1 4.5	* No.305-4	
6		小皿	—	8.9 2.2 4.5	* No.305-1		
7		*	II	8.7 2.9 3.8	M18(B) No.306-1		
92	1	山茶碗	—	7.8	SD501 No.340-1		
	2	*	—	8.6	* No.340-4		
	3	*	—	8.1	* No.340-2		
	4	*	—	8.7	* No.340-3		
	5	*	—	8.0	* No.340-5		
	6	灰釉	—	14.3	—	SD503 No.342-2	
	7	*	—	15.4	—	* No.342-3	
	8	*	—	7.6	* No.342-4		
	9	小碗	II B	9.8 2.4 4.8	* No.342-1		
	10	須恵、黄台付	—	22.0	SD506 No.346-3		
	11	山茶碗	—	8.05	* No.346-2		
	12	*	—	8.7	* No.346-1		
	13	*	—	12.7	—	SD508 No.341-1	
	14	*	—	7.4	SD511 No.338-4		
	15	*	—	7.4	* No.338-2		
	16	*	—	7.4	* No.016-2		
	17	*	—	8.1	* No.338-5		
	18	*	—	7.5	* No.338-1		
	19	*	—	8.6	SD612 No.339-1		
20	小碗	IIA	8.0 2.4 4.0	* No.339-2			
21	山茶碗	—	6.8	SD612 No.016-3			
22	小皿	—	8.5 2.5 3.0	* No.016-7			
23	山茶碗	—	7.6	* No.016-5			
24	*	—	7.7	* No.016-4			
25	*	—	7.3	SD617 No.337-4			
26	*	—	5.4	* No.337-1			
27	*	—	7.0	* No.013-3			
28	小碗	IIA	8.2 3.0 4.0	* No.014-1			
29	山茶碗	ID	15.5 5.2 6.6	* No.013-1	墨書		
30	*	ID	14.7 4.5 6.9	* No.337-2	墨書		
31	*	—	7.9	SD518 No.013-5			
32	小碗	—	9.45 2.6 4.8	* No.030-1			
93	1	山茶碗	ID	16.6 5.4 8.8	SD602 No.318-1		
	2	小皿	I	8.2 1.7 4.8	* No.318-2		
	3	山茶碗	ID	15.6 5.9 6.6	SD603 No.317-1		
	4	小碗	IA	9.0 2.8 4.3	* No.317-2		
	5	小皿	—	7.4 1.7 4.2	* No.317-3	墨書「上」	
	6	*	—	7.6 1.7 5.1	* No.317-4	墨書「内」	
	7	*	II	8.3 2.65 4.5	SD605 No.319-1		
	8	*	—	4.6	SD607 No.314-1	墨書「上」	
	9	山茶碗	ID	15.2 5.4 7.6	SD609 No.313-2		
	10	*	ID	14.4 5.2 6.5	* No.313-3		
	11	小皿	I	8.5 1.9 4.9	* No.313-1		

図号	品種	分類	法量			出土地点	備考	
			口径	底径	底厚			
94	1	かわらけ	II	8.7	2.3 4.1	SF503 No.348-1		
	2	*	II	8.5	2.1 3.8	* No.348-2		
	3	小皿	II	8.2	2.1 4.0	SF607 No.358-1		
	4	山茶碗	IB	16.4	6.2 7.6	SF527 No.364-2		
	5	*	—	7.1	—	* No.364-1		
	6	*	—	16.2	5.4 6.8	SF529 No.364-4		
	7	*	—	7.5	—	* No.364-3		
	8	小碗	IB	9.5	2.4 5.2	* No.032-1		
	9	灰釉、碗	—	6.9	—	SP531 No.350-1		
	10	小皿	I	8.0	1.9 4.6	SP607 No.357-1		
	11	須恵、蓋	—	9.4	1.35 3.4	SP609 No.353-5		
	12	山茶碗	IA	16.0	6.3 8.2	* No.362-5		
	13	*	ID	14.0	4.75 7.3	* No.362-3		
	14	*	ID	15.6	—	* No.362-4	墨書	
	15	小皿	I	8.5	1.9 4.7	* No.031-1		
	16	*	I	8.9	2.2 4.7	* No.363-1		
	17	*	II	8.0	2.3 3.6	* No.363-2		
	18	*	I	7.8	1.7 4.0	* No.363-3		
	19	*	I	8.7	2.0 3.9	* No.363-4	墨書	
95	1	山茶碗	—	7.0	—	SD501 No.352-3		
	2	小皿	I	7.7	2.55 4.2	* No.352-5		
	3	*	I	8.4	1.9	—	* No.352-2	
	4	*	—	8.2	2.05 4.2	* No.352-1		
	5	中世陶器	—	—	—	* No.352-4		
	6	山茶碗	IC	17.4	5.5 7.3	SD505 No.344-1		
	7	*	IC	15.6	4.8 7.4	* No.344-2		
	8	土師、蓋	—	—	—	* No.344-3	透明型	
	9	山茶碗	IA	16.0	6.1 7.5	SD506 No.012-2	墨書「大」	
	10	*	IA	—	7.8	SD508 No.343-2	墨書	
11	*	IC	16.8	4.7 7.8	* No.343-1			
12	*	IA	16.9	5.7 8.0	* No.012-1	墨書「大」		
13	灰釉、碗	—	7.6	—	SD601 No.356-1	墨書「下」		
14	山茶碗	ID	14.8	5.5 6.6	* No.356-2	墨書		
15	*	ID	14.05	5.5 5.15	* No.056-1			
16	小皿	I	8.3	1.8 4.8	* No.356-4	墨書		
17	*	—	7.8	1.6 5.3	* No.026-1			
18	*	I	7.6	1.5 5.0	* No.356-5			
19	*	I	7.8	1.7 3.8	* No.356-3	墨書		
20	かわらけ	—	9.1	—	* No.355-2			
21	鉢	—	32.3 12.1 12.2	—	* No.355-1			
96	1	山茶碗	ID	15.4	5.1 7.8	SP513 No.049-1		
	2	*	IB	16.5	5.75 6.9	SP516 No.050-1		
	3	*	—	16.0	5.4 7.6	P41 SP505 No.048-1		
	4	*	IA	16.6	5.9 6.8	SP518 No.315-2		
	5	*	—	6.1	—	P547 No.315-3		
	6	*	ID	15.0	5.2 6.0	P597 No.315-1		
	7	小碗	IA	9.2	2.75 4.05	SP512 No.039-1		
	8	山茶碗	IA	16.5	5.6 7.9	PS118 No.061-2		
	9	*	ID	15.8	4.9 6.9	SP3295 No.322-2	墨書「上」	
	10	*	IB	15.9	5.9 8.2	P3397 No.050-1	墨書	
	11	*	—	7.3	—	P6285 No.323-2		
	12	小碗	IIA	8.0	2.4 3.8	P680 No.321-5		
	13	かわらけ	—	10.6	2.3 6.6	P625 No.321-1		
	14	小皿	I	9.7	2.2 6.2	P626 No.321-2		
15	*	I	8.0	1.4 4.0	P626 No.321-3			

表6 新羅遺跡奈良時代~鎌倉時代土器観察表(6)

図番号	品種	分類	法量 cm		出土地点	備考		
			口径	底径				
96	小皿	I	9.5	1.8	5.3	P557 区 No.321-4		
	*	II	8.3	2.4	3.8	P697 No.321-6		
	大平鉢		29.6	11.6	14.9	P6287 No.323-1	梅花	
	*	IC	30.0	10.0	14.0	PM20(A) No.323-1		
	土師、壺		22.6	—	—	P6144 No.321-7		
	97	須恵、壺	B1 弁	12.0	1.05	11.6	V210 No.310-1	転用備小
		山茶碗	—	—	8.2	U219 弁上 No.310-4	墨書	
		須恵、壺		15.7	2.8	—	M417 No.768-3	
		*		13.8	—	—	R319 3 壺 No.256-4	
	98	* 坪	B3 II	13.8	4.0	8.0	E310 No.326-1	
* *		B1 弁	13.4	3.85	10.5	F20 3 壺 No.327-3		
11		* 兼用台坪	A2 II	13.2	3.9	8.8	R319 3 壺 No.327-2	
12		須恵、皿		18.0	2.3	12.8	* No.236-3	
13		* 高坪	—	—	10.8	L414 盆 No.227-1		
14		土師、坪身		13.7	3.0	—	L413 No.268-2	
15		灰鉢、壺	—	—	—	衣採 No.316-1		
16		山茶碗	ID	15.6	4.5	—	K39 No.226-2	
17		灰鉢、小碗		13.8	3.6	7.1	3 区 灰鉢 No.227-1	
18		小碗	IA	8.7	3.0	4.9	J415 No.269-1	
19		土師質土器		9.0	2.8	—	4 区 3 区 壺 No.268-4	
20		小皿	II	8.3	1.9	4.0	B312 灰鉢 No.227-4	
21		山茶碗	—	—	6.2	4 区 灰鉢 No.228-3	墨書	
22		*	—	—	7.0	K39 No.238-1	墨書	
99	23	小皿	—	—	—	3 区 灰鉢 No.238-2	墨書	
	24	須恵、坪		9.2	—	6 区 南坪 No.205-1		
	3	* 蓋		15.8	2.3	—	6 区 2 壺 No.235-3	
	4	* 坪	B1	15.0	4.5	—	6 区 5 区 No.263-1	
	5	須恵、*	B1	13.3	4.0	10.8	6 区 2 壺 No.218-1	
	6	* *	A1	14.6	4.8	7.0	6 区 7 壺 No.239-4	
	7	坪	A2 II	10.8	3.4	7.8	6 区 灰鉢 No.265-1	
	8	須恵、高坪		—	10.7	6 区 7 壺 No.253-3		
	9	* 皿		14.6	—	—	6 区 Q53 No.256-1	
	10	鉢		38.8	—	—	6 区 7 区 No.320-1	
100	11	土師、皿	14.4	2.0	11.0	6 区 2 壺 No.240-3		
	12	坪	10.8	2.2	7.4	6 区 7 区 No.254-2		
	13	灰鉢、碗	14.9	5.9	—	6 区 3 区 No.234-3		
	14	* *	—	—	7.7	6 区 灰鉢 No.224-1		
	15	* *	—	—	7.8	* No.224-4		
	16	* *	—	—	8.3	* No.224-3		
	17	長頸瓶		9.4	—	—	6 区 Q53 No.256-4	
	18	山茶碗	IA	15.7	5.4	7.0	6 区 3 壺 No.239-3	
	19	* *	ID	13.7	5.0	6.6	6 区 3 壺 No.239-1	
	20	* *	IB	17.3	6.5	7.3	6 区 3 壺 No.261-4	
	21	* *	IC	4.6	4.9	6.8	6 区 3 壺 No.238-2	
	22	* *	ID	14.5	4.9	6.85	6 区 No.051-1	
	23	* *	IB	14.5	5.8	6.0	6 区 7 壺 No.239-5	
	24	* *	IIA	15.8	5.1	7.1	6 区 灰鉢 No.227-1	
	25	* *	II C	15.9	4.75	6.6	6 区 5 区 No.236-2	
	26	* *	—	—	6.8	6 区 Q53 No.224-3	墨書	
	27	* *	—	—	7.8	6 区 R49 No.261-2	墨書	
	28	* *	IE	15.2	4.6	6.0	6 区 脚付 No.227-2	墨書(大)
1	小碗	IB	9.0	2.1	4.2	7 区 1 区 No.027-1		
2	* *	IA	8.4	2.45	4.2	SS46 No.014-2		
3	* *	IA	8.6	2.5	3.5	6 区 南坪 No.228-2		
4	小皿	I	8.7	1.9	—	6 区 灰鉢 No.205-4		

図番号	品種	分類	法量 cm		出土地点	備考	
			口径	底径			
100	5	小皿	8.8	2.3	4.2	T651 No.320-2	
	6	*	I	9.0	1.6	4.3	T651 2 壺 No.320-4
	7	*	I	9.3	2.3	4.9	T649 3 壺 No.259-1
	8	*	I	13.8	1.6	4.1	S650 2 壺 No.240-1
	9	*	I	7.8	1.85	5.3	S650 2 壺 No.240-4
	10	*	I	7.9	1.8	3.9	R549 No.023-1
	11	*	I	8.2	1.7	4.8	S651 No.263-2
	12	*	I	8.6	1.8	3.8	T651 2 壺 No.320-6
	13	*		8.3	1.7	—	S650 2 壺 No.235-4
	14	*	I	8.7	1.6	5.8	R650 No.261-5
	15	*	I	8.1	1.5	4.8	T649 3 壺 No.259-5
	16	*	I	8.2	1.7	4.4	6 区 7 区 3 No.236-3
	17	小碗	II B	8.0	2.2	4.2	T651 2 壺 No.264-1
	18	小皿	II	9.0	2.1	—	R549 No.261-1
	19	*		9.1	2.1	—	S651 No.234-1
	20	*		7.8	1.7	—	6 区 脚付 No.227-2
	21	*	II	8.3	2.9	—	S651 2 壺 No.234-2
	22	*	II	8.6	2.1	3.9	S649 3 壺 No.235-1
23	*	II	7.9	1.8	4.9	T650 No.329-6	墨書小
24	かわらけ	II	8.5	2.35	4.05	T649 No.329-3	
25	小皿	II	8.5	2.4	4.5	6 区 質土 No.025-1	
26	*	II	7.2	2.1	3.8	T651 2 壺 No.326-5	
27	かわらけ		10.6	2.6	7.0	6 区 灰鉢 No.265-5	
28	*		10.4	2.3	4.4	* No.265-3	
29	*		8.0	1.5	—	S650 2 壺 No.240-2	
30	*		8.8	1.5	6.0	T650 No.253-2	
31	青磁		—	—	5.6	6 区 灰鉢 No.284-1	
32	*		—	—	5.8	S651 No.262-1	

小碗・小皿については、小皿が後出であり、I群A類は山茶碗A類とセット関係であり、12世紀中葉に置き、B類は山茶碗B類と並行であり、そして小皿は山茶碗C～E類に並行する段階と推定した。ついでII群の時期であるが、山茶碗で述べたように不明確であり、かつ単純に山茶碗の縮小形態とはいえないB類という形態もある。このことから、小皿が後出であり、13世紀におけるであろうが、小碗A・B類の時代的關係は今後の検討課題としたい。

今回の調査では以上の土器類のほかにも少量ではあるが、鉢(図89-34、図95-21)、輪花が施される大平鉢(図87-15)、片口鉢(図75-9)、大型の甕(図75-10)が出土している。

D 墨書土器について

新堀遺跡からは「山名野」と書かれた須恵器環の墨書(図82-12)が発見され、調査中から新聞紙上等で注目されてきた。ここでは、明瞭に墨痕が確認され、かつ筆使い等が検討可能なものに限って図示し、紹介してみた。図示した墨書土器の総数は41点で、時期別の内訳は、奈良時代の須恵器が8点と、平安時代末～鎌倉時代の山茶碗・小碗・小皿に墨書されたものが、33点を数えた。以下時代ごとに墨書土器の概要を述べてみる。

奈良時代(図82)

この時代の墨書土器はすべて須恵器環であり、3区SD305からの出土である。高台環3点、無高台環5点を確認した。墨書はすべて底部に施され、図82にまとめて示した。

図82のなかで、文字と確認できるものは、11・12・14・16・17の5点、そのうち文字が明瞭に確認されるものは、12の「山名野」と14の「長」のみである。

「山名野」は言うまでもなく遠江国山名郡に置かれた野のことであり、この墨書土器の発見により新堀遺跡及びその周辺が、山名郡の官衙推定地として注目されてきた。墨書は高台環の底に書かれ、中央に丸印があり、その左に施される。個々の文字をみると「山」は墨痕が薄いのに対し「名野」は肉眼でも明確に読み取ることができる。全体としては比較的残りのよい墨書といえる。

14の「長」はその下に文字があったのではと推定される資料であるが、その接合破片は発見できなかった。無高台環の底部に書かれ、発見されている墨書のなかでも最も鮮明で非常に残りが良い。

16は高台環底部に書かれ、一部の墨痕が不明確であるが、二文字と推定される。上の人偏は比較的明確で、作りの「ノ」という斜めに向かう筆運びは認めることができる。下の「大」は認定可能な状態である。

無高台環の17も二文字と推定され、比較的墨書は明確ではあるが、判読できない。下の文字は「登」と読めるが上は不明である。

この3区SD305出土の墨書はほとんどが文字と推定されるが、11はカタカナの「メ」のような筆の運びが観察されることから、記号かもしれない。

平安時代末～鎌倉時代

この時代の墨書土器は33点を図示したが、ほとんどが一文字または記号風の墨書であり、その意味するところは不明である。墨書の部位は、ほとんどが山茶碗と小皿の底部にみられ、33点中の31点を占める。体部が1点、口縁部付近が1点であった。

体部に墨書のある図87-21は、二文字認められ、一字目は「上」、二文字目は「コメヘン」で作りは「斤」に似た筆の運びである。口縁部付近の図94-21は、欠損した小破片で、縦に墨痕が認められるのみである。以下、山茶碗と小皿の底部に墨書を施すもの、31点のうち主要なものをあげてみる。

図86-28は山茶碗に明瞭な墨痕が残り、カタカナの「ナ」のような筆の運びが認められる。このような二本の線を交差する例は、図87-8の小皿、図97-4の山茶碗にも施されており、図97-4は、直線を二本

交差させており、やや曲がりをもつ他のものとは相違する。また図98-22の山茶碗には二本棒を交差させてはいるが、筆を入れた位置と、抜く直前の位置で、その運びを曲げていることが観察される。図87-8は、小皿の底部に書かれたもので、「丸とその中央に一本棒」が記されている。同じものは、図89-13の山茶碗にもみられ、やや隅丸の三角形で、中央の棒は丸に接する周辺で筆を止めている。従って、上に棒が突き抜ける前者とは異なる意味をもつものかもしれない。

図92-29は山茶碗への墨書であるが、この1点のみ2文字以上からなると推定されるが、判読できなかった。筆使いからみて図示した位置関係とおもわれるが、底部中央付近を縦長に墨書している。上は幾つかの文字であり、最も下は花押のようにもおもえる。

「大」という文字が墨書された例も3点（図99-28、図95-9・12）みられ、この3点はいずれも鮮明な墨痕が認められる。図99-28は6区からの出土で、遺構に伴うものでないが、他の2点は5区 SE506 と SE509 という深い井戸状の土坑の底から出土したものである。両者は完形の子茶碗であり、特に SE506 出土の図95-9は、正位で土坑の底中央に置かれていたものである。このようなことから、両者の山茶碗は埋納されたものと判断される。従って、この「大」も祭祀の対象を示す略称と考えられる。

「上」という文字の例は2点ある。図93-5、図96-9であり、前者は小皿、後者は山茶碗に墨書されている。また図93-8は小皿にみられる墨書で、2文字とおもわれ、上の文字は「上」、下は「一」と判読される。

図95-13は、「下下」と同じ文字を繰り返している。同図14は、「人」の文字の左右に開く又の部分に点を打っている。同図10と19は、直線と曲線の組合せであり、記号と思われる例である。

以上のように、本遺跡で出土した墨書土器は、文字、記号、なかには花押とおもわれるものが認められるが、そのほとんどは意味不明の墨書であった。そのなかで、「山名厨」の墨書土器の発見は貴重な成果といえる。

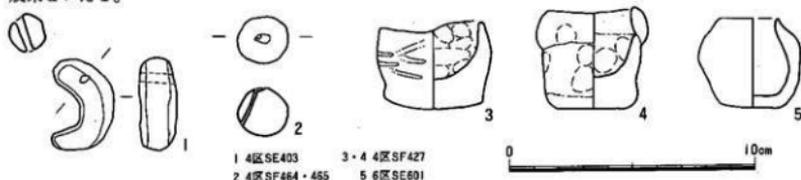


図101 土製模造品実測図

第2節 土製品

土器以外の遺物の出土は少ないことから、土製品、木製品、石製品、金属製品と素材の種類ごとに分け、時代別でなく一括して扱った。以下にその順に従って、各遺物の概略を述べる。

土製品は、祭祀遺物の土製模造品、土鍾、布目瓦が出土した。

土製模造品 (図101-1・2)

2点出土しており、1は勾玉、2は丸玉である。1は、4区 SE403 という井戸状の深い土坑から壺・甕に伴って出土したもので、長さ3.7cm、幅1.5cmを測る。形態をみると、屈曲は穴のある付近は弱く、先端は強い。一方向からの穿孔であり、全体は丁寧に調整されている。

2の玉は、4区 SF464・SF465 という土坑から出土したもので、この土坑は多量の土器片、炭化物が含まれていた。これは、直径1.9cm、ほぼ正円形を呈し、穿孔は一方向からされており、断面をみると穴の位置が、大きく中央よりずれていることが観察される。全体丁寧に調整がされる。

手捏ね土器 (図101-3～5)

3点出土している。3と4は完形品である。両者ともに、4区 SF427 という土坑から出土している。この土坑は、この2点の手捏ね土器の存在と他の土器の出土状態から、祭祀にもちいられたと推定される。3は、口径4.2cm、底径4.0cm、器高3.3cmを測り、形態は、胴部に丸みをもち垂直に立ち上がり、口縁部は尖り、底部は丸みをおびている。胴部の内外では調整が異なり、外面は横ヘラナデ、内面は指押さえナデが認められる。全体的に丁寧に調整がされている。

4は、口径3.6cm、底径3.0cm、器高4.2cmを計測し、全体の形態は3と類似しているが、やや細長い形状である。口縁部は、粘土紐を貼りつけており幅広く、丸みをもって外に張りだしている。細部の調整はやや荒く、内外に指押さえナデの痕跡が認められる。

5は、近世に掘られた土坑 (6区 SE601) 覆土中から出土しており、口縁部を欠損し、器面の摩滅が激しい。計測値は底径2.5cm、残存高3.6cmである。形態は広口の壺を模倣したもので、胴部に弱い張り出しが認められ、焼成も3・4に比較すると軟質である。

土鍾 (図102)

土鍾は、20点を図示した。他は小破片であり、個体数の確認はできなかった。形態と大きさから、Ⅰ類・大型で太い円筒状のもの、Ⅱ類・長細く、形態はⅢ類と類似するがやや大きいもの、Ⅲ類・細長い円筒形で小型のもの、三種類が認められる。

Ⅰ類は、1～3の3点があり、いずれも北地区と呼称した2・4区から出土している。断面をみると多少不整形ではあるが円筒状を呈し、大きさも一定しないが、1は長さ4.4cm、径は4.2cmと太く、3では長さ6.6cm、径3.7cmで長細い形態となる。2はそれらの中間の大きさである。この土鍾の時期は平安時代末から鎌倉時代と推定され、2が4区の溝 SD411 から、多くの山茶碗とともに出土している。

Ⅱ類は、4・5の2点が認められる。4は全体に丸みをもち、長さ4.7cm、最も太い部分で2.0cmを示す。5は欠損しており、残存長3.9cm、太さ1.2cmを計測する。両者ともに、全体に調整は荒く、凹凸が顕著にみられる。この2点は2区から出土しているが、供伴する遺物もなく、所属時期は不明である。

Ⅲ類は、15点を数えるが、すべてが南地区の6区から出土している。大きさは、Ⅲ類のなかでも大型といえる6をみると、長さ2.4cm、太さ0.7cmを計測し、小さいものなかで、13は長さ2.3cm、太さ0.7cmを計測する。土鍾は使用の過程で、摩滅・欠損しやすく、特に小さいⅢ類については参考の数値と理解した。このⅢ類は、土鍾のなかでも、最も定型化し、大量に製作されたものであろう。所属する時期は、調査の所見からは特定できなかった。

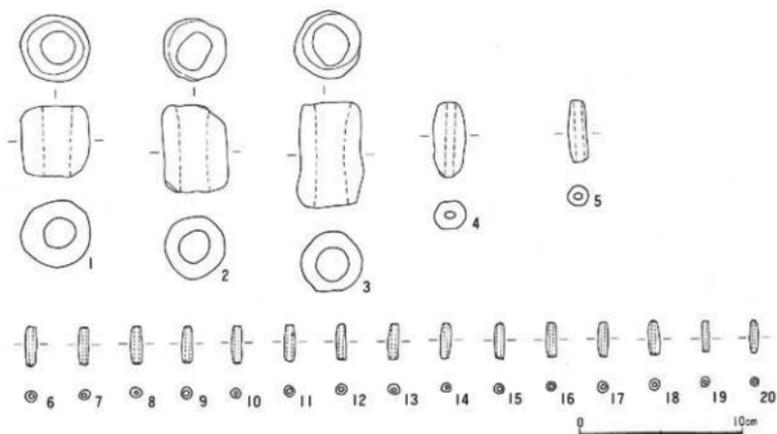


図102 土鍾実測図

布目瓦 (図103)

布目瓦は、13点出土し、平瓦が多みられるが、丸瓦も1点出土した。それらのなかで、比較的大きく、細部の観察可能なもの、平瓦6点、丸瓦1点を図示した。

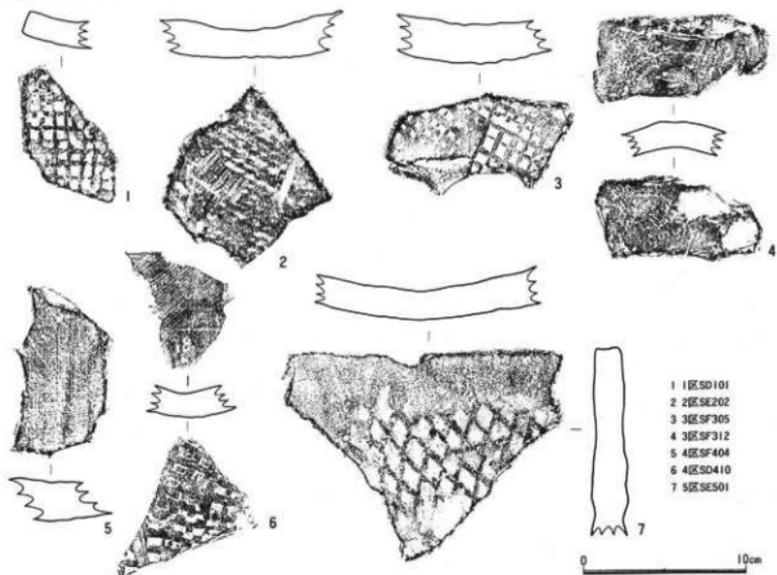


図103 布目瓦拓影図

全体に摩滅が著しく、凹面では、布目が認められる程度である。凸面の叩き目は二種類認められ、1と3が正格子、6と7が斜格子である。4は丸瓦で、凹面に布目が残るが、凸面は摩滅が激しく観察できない。端部調整は1と7で観察され、1では側端部がヘラに一面の面取りをし、7もまた端部に一面の面取りを施している。全体に赤褐色を呈するものが多く、焼成は軟質である。参考までに、その大きさをあげると、残存値の大きい7で、長さ8.6cm、幅10.0cm、厚さは1.4cmを計測する。丸瓦の4では、長さ3.6cm、幅4.8cm、厚さ1.2cmであった。

これらの布目瓦は、北地区の1～4区から出土し、なかでも「山名野」黒書土器を伴った大型の溝のある3区に集中して認められた。その手法からみて奈良時代のもものと推定される。出土状態は遺構に伴うものもあるが、それらは平安時代末～鎌倉時代の遺構であり、かつ摩滅も激しいことからして、放棄された後の移動が考えられる。

第3節 木製品

木製品は、板状とか棒状のもの、また若干の加工痕が認められる枝等がみられるが、用途・名称まで特定可能なものはごく少ない。大部分は土坑とか、ピットから出土したもので、古墳時代の木製品は出土していない。種類としては、柱根が最も多く6点を数え、他に下駄、礎板、板状のものが数点みられる。以下、種類ごとに説明をしてゆく。

柱根 (図104-1-6)

ピットから検出され、柱根と推定される木材は図示したもの以外にもみられるが、その多くは腐食しており、残骸のような状態であった。これらのなかには細片もあり、柱根と判断できない例もみられた。図示した順序に従って記述をすすめる。

1から3は3区のピットから発見されたもので、遺存状態は良好である。いずれも上半部の腐食が進み先細りしている。先端部の加工は明瞭に残され、中央部がやや張り出すように削った細かい加工痕が観察される。木取りは、1と3は芯持ち材、2は中心を除いた端部を用いている。形状が整っている2・3の大きさは、2が最も大きく、長さ4.5cm、幅17.0cm×13.5cmであり、3は、長さ28.0cm、幅9.0cm×7.0cmでやや細長い断面となっている。これらは、伴出遺物がなことから時期は明確にできないが、平安時代末～鎌倉時代の掘立柱建物の柱であろうと推定される。

4～6は、4区の奈良時代の掘立柱建物に伴う柱根であり、先の1～3と比較すると、腐食がより以上進行し、下半部から先細りがみられ、三角形状となっている。4は最も腐食が進み、二つに割れており、端部の加工痕も観察できない。木取りは、芯持ち材を使用している。

5は、比較的残りのよいものであり、端部はやや中央が張り出し、加工痕も明瞭に残されている。断面形は不整形であり、縦横は、13.5cm 11.0cm、長さ67.0cmを測る。これは芯持ち材であり、年輪中央から計測すると、直径20cm以上の太さの柱が推定される。

6は、端部の加工痕が比較的良好に残っているが、全体に腐食し断面も厚い板状となっている。断面での計測値は、15.0cm×9.0cmを示し、長さは36.5cmである。木取りは、中心を外した縁を使用していることが確認される。板を加工した木製品 (図104-7・9・11)

7と9は、板を加工したもので、欠損のため全体の形状は不明である。3区の土坑SF315から出土し、鎌倉時代のものである。7は穴が開き、中央付近で欠損する。縁の側は大きく弧を呈し、面取り加工され、屈曲した下部はやや強い曲線をもち端部の一方が尖る。長さ27.0cm、最大幅9.2cm、厚さ1.5cmを計測する。9は、19.2cm×11.0cm、厚さ1.0cmの長方形の板であり、側端に上下二つの小さい穴を伴う。

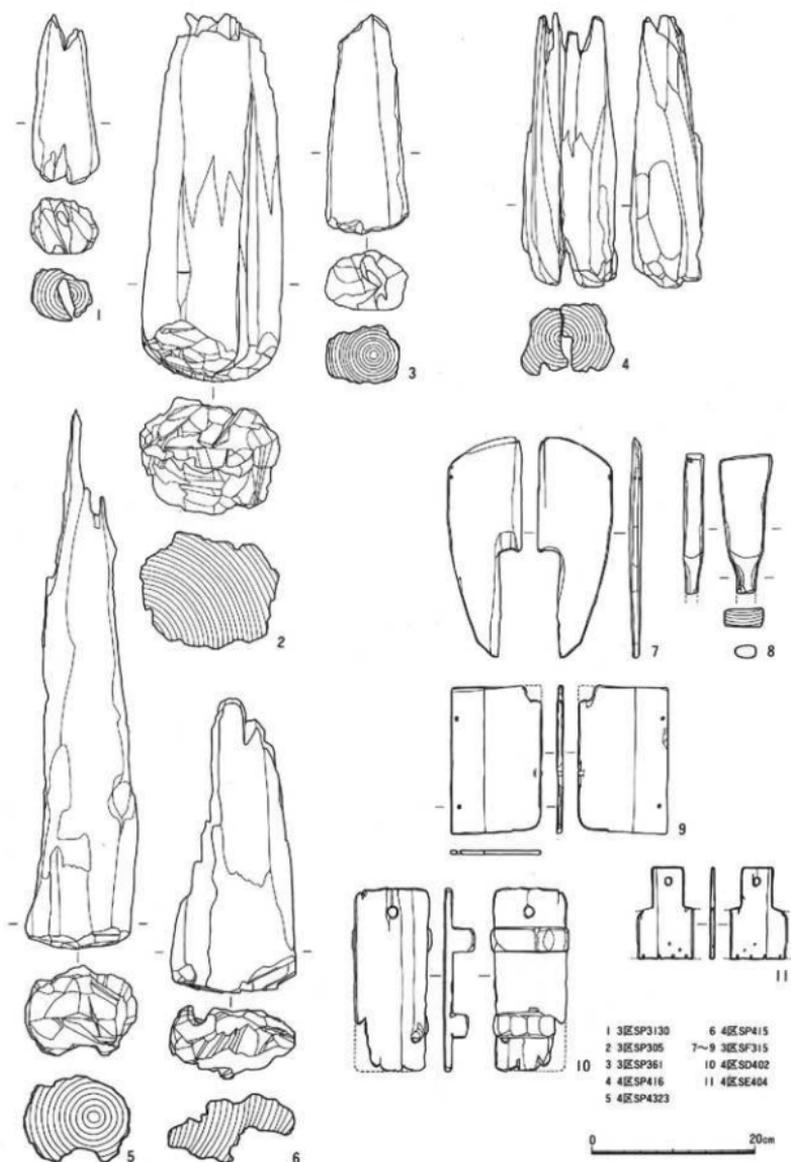
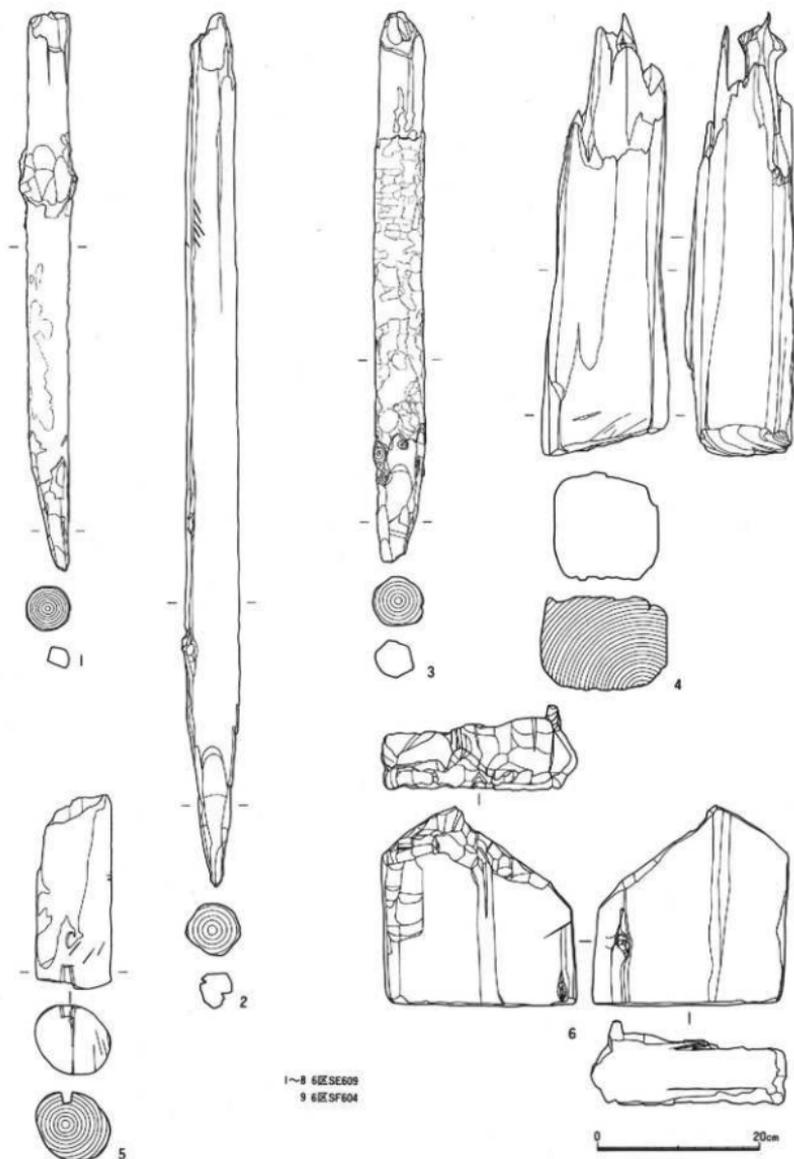


图104 木製品実測図 I



7-8 6区SE609
 9 6区SF604

图105 木製品実測図Ⅱ

表7 新編遺跡出土柱根樹種同定一覧表

樹種同定 山内 文氏

登録番号	標本No	樹種	出土地点	時代	備考
11	2396	サワラ	5区 SE 503, No10	鎌倉	板
46	2421	カシワ属の一種	6区 P 648		
52	2405	マツ	6区 P 6277		
53	2413	クリ	6区 P 6181		
90	2395	ムクノキ	6区 P 418		
92	2404	マツ	6区 P 6327		
93	2412	サワラ	6区 P 6358		
100	2420	マツ	2区 P 2181		
101	2394	コナラ	2区 P 2106		板状
107	2403	マツ	3区 P 339		
108	2411	マツ	3区 P 350		
109	2419	マツ	3区 P 399		
115	2397	マツ	3区 P 3285		
117	2488	マツ	3区 P 3234		
121	2480	マツ	2区 P 2456		
125	2487	クリ	3区 P 3130		図104-1
142	2393	イヌマキ	2区 P 2321		
154	2402	チョウジザクラ	4区 SH 405, SP 416	奈良	図104-4
155	2410	イヌマキ	4区 SH 405, SP 415	奈良	図104-6
156	2418	マツ	4区 SH 405, SP 414	奈良	
157	2479	イヌマキ	3区 P 3305		図104-2
159	2486	ヒノキ	5区 P 528, SP 504		
162	2409	ヒノキ	5区 P 524, SP 503		
163	2417	コナラ	5区 P 5167, SP 509		
164	2478	マツ	3区 P 357		
165	2485	クスノキ	2区 P 2317		
167	2401	クリ	6区 P 6147		
168	2400	マツ	2区 P 284		
169	2416	チョウジザクラ	4区 SH 405, SP 420	奈良	南東端
170	2476	マツ	6区 P 601		
171	2477	イヌマキ	5区 SP 501		
172	2484	マツ	2区 P 2180		
174	2392	コナラ	3区 P 3320		
175	2398	サワラ	3区 P 3120, No 1		板状
176	2407	クスノキ	3区 P 3131		
177	2406	マツ	3区 P 3261		
187	2399	クスギ	3区 P 3361		図104-3
189	2408	マツ	3区 P 3283		
190	2415	クスギ	4区 P 4325		
191	2475	チョウジザクラ	4区 P 4324		
192	2483	コナラ	4区 P 4323		図104-5
211	2391	イヌマキ	4区 SH 405, No 1	奈良	
212	2482	チョウジザクラ	4区 SH 405, No 2	奈良	
214	2481	マツ	6区 P 6307		礎板か

柱根で時代表記のないものは、平安時代末～鎌倉時代と推定される。木製品は頭文字にW（木製品の略称）を付けて登録しているが、この表ではWを省略する。出土地点のPはピットの略。SPは大型のピットを示す。

四隅の角のうち、穴のある側は上下ともに直角、反対側の上は欠損、下の角は緩やかな曲線に加工されている。

11は、札状を呈しており、4区の井戸のように深いSE404から出土した。これは一方の縁を欠損している。本体と思われる部分から上半に広い張り出しをもち、穴を穿っている。また本体の下部には、規則的な四つの刻みを施している。長さ11.4cm、残存の幅6.8cm、厚さ0.5cm、張り出し部は5.0cm×3.8cmを計測する。これが左右対称の製品とすれば、推定幅8.0cm程度と考えられる。伴出遺物が少ないが、遺構の状況からみて鎌倉時代ではないかと推定される。

横槌 (図104-8)

8は、手に持って使用した横槌のような道具であろうとおもわれ、把手の基部を削り出した痕跡が認められるが、把手の大部分を欠損する。残存長が17.1cm、上部は、先端が6.3cm、把手の付け根で4.4cm、上部の長さ12.0cm、厚さ2.4cmを計測する。形状は、上部はやや長い台形状を呈し、角の一方がわずかにとびだしている。その長い辺の側面に使用によって生じたとおもわれる凹みが認められる。先の7・9と同じ3区 SF315 から出土し、鎌倉時代と推定される。

下駄 (図104-10)

10は、4区の近世の溝 SD402 から出土したもので、左側下半が欠損している。長さ22.5cm、幅9.2cmを示す。

杭 (図105-1~3)

これらは、6区の大型の鎌倉時代の土坑、SF609 から出土したもので、壁よりに階段状に組まれていた部材の一部で、土坑の底に打ち込まれていた杭である。いずれも、皮のついたままの自然木の先端を尖らせており、最も大きい2では、長さ110cm、直径6.5cmを計り、1では長さ68.5cm、直径は5.5cmである。

礎板 (図105-6)

これは、6区の土坑 SF604 の底から出土し、厚みのある堅固な礎板である。礎板に転用する際の加工痕が明瞭に残されている。最大の長さ24.6cm、幅22.6cm、厚みは8.0cm程度である。

不明木製品 (図105-4・5)

両者は、前述した杭と同じ、6区 SF609 から出土したものである。柱根のような形状を呈し、4は一方の先端をやや尖らせており、5は端部側面に抉りを入れている。このような形状の相違から不明木製品とした。組合せの部材でなく、破棄される段階で入れられたものであろうと推定した。

第4節 石製品 (図106)

石製品は大部分が研磨痕をもち、図示しては不在が不定型の軽石にも認められた。それらのなかで、明らかに砥石といえるもの7点と、3区から出土した紡錘車1点を示した。

砥石

砥石は、断面長方形に面取りし、定型化したもの(3・5・6・7・8・10)と、自然石の側面を利用したもの(1・2・9)との二種類がある。ほとんどは平な砥面であるが、1と10には細い溝が認められ、鋭利な刃先を対象としたものと推定される。すべてが欠損しており、原型を残すものはないが、長さは5をみると計測可能であり、それは15cm程を計測する。

紡錘車

4が1点のみ出土した。側面が丸みをもつ台形状の断面を呈し、整った形態であり、屈曲部も丸く研磨している。上辺が2.3cm、下辺3.4cm、厚さ1.8cmで、穴の直径は0.8cmを計測する。滑石を用いた製品である。遺構外からの出土のため時期は特定できない。

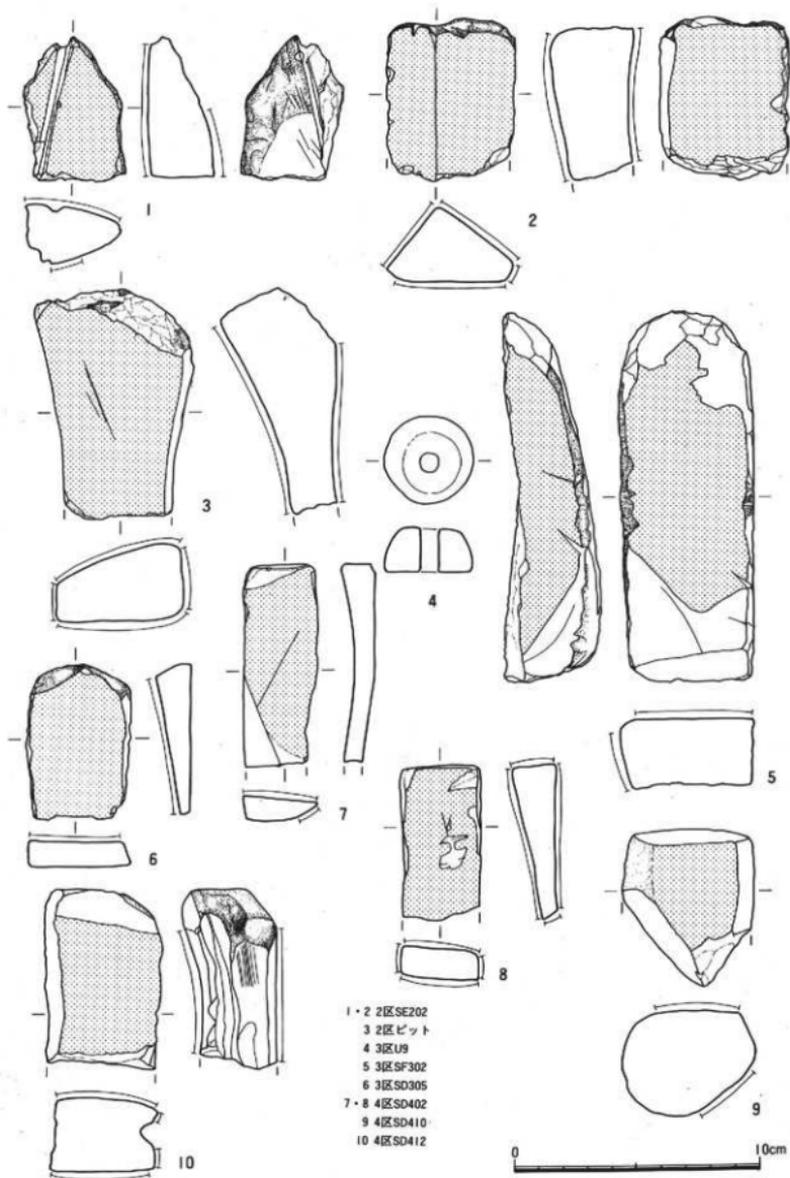
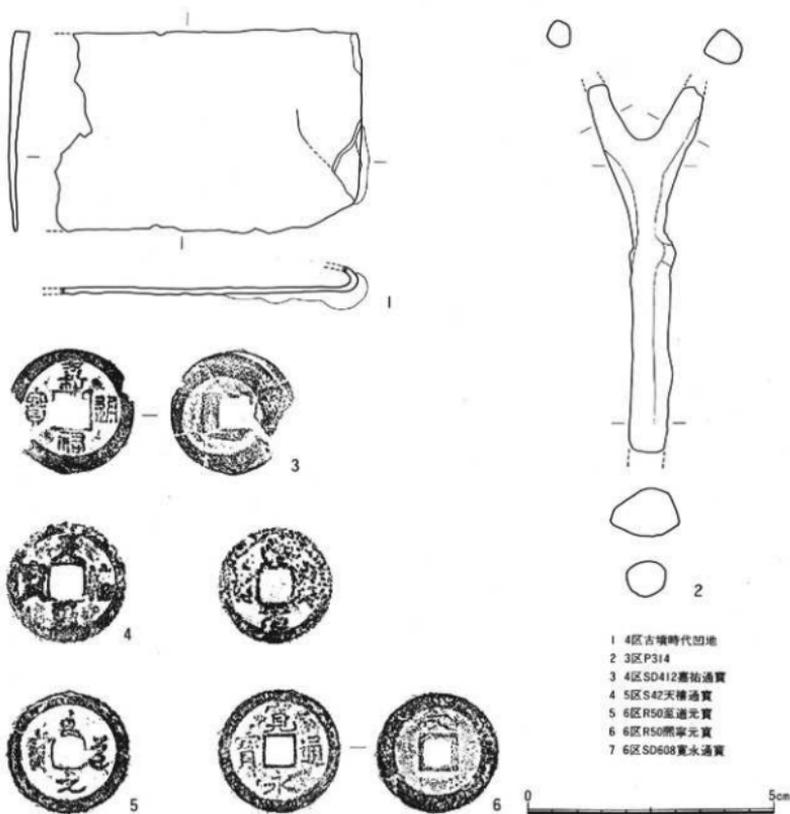


図106 石製品実測図



- 1 4区古墳時代凹地
- 2 3区P314
- 3 4区SD412唐祐通寶
- 4 5区S42天禧通寶
- 5 6区R50至道元寶
- 6 6区R50開寧元寶
- 7 6区SD608寬永通寶

図107 金属製品実測図

第5節 金属製品 (図106)

金属製品の出土はごく少なく、図示した7点が出土している。内訳は、鉄鎌1点、銅鎌1点、銭貨5点である。

鉄鎌

1の鉄鎌は、4区古墳時代前期の集落の東縁にあたる凹地から、多量の土器とともに出土したものであり、出土状態から土器と同時期であると判断した。基部の折り返しの一部と、本体の一部を残すのみであり、全体の形状は不明であるが、刃と肩は断面形で容易に判断される。基部に近い刃の幅は計測可能で、約4.0cmを示し、長さは6.2cmが残存している。この鉄鎌は、この周辺でも古墳時代前期の数少ない貴重な資料となった。

銅鉄

2は、3区のピットから単独で出土した銅鉄で重量があり、遺存状態は良好である。先端が二つに分かれ、基部がやや太くなる形態で先端部を欠損している。重量があり遺存状態は良好である。確認される長さは7.5cm、径は0.4cmを測る。時期は単独出土のため不明であるが、これが出土したピットの周囲は平安時代末から鎌倉時代の遺構のみであり、多くのピットもこの時期に推定されるものであった。

銭貨

銭貨は、3～7の5点が出土している。7の寛永通宝を除き、他は宗銭である。3が喜祐介通宝、4は天禧通宝、5は至道元宝、6は熙寧元宝であった。

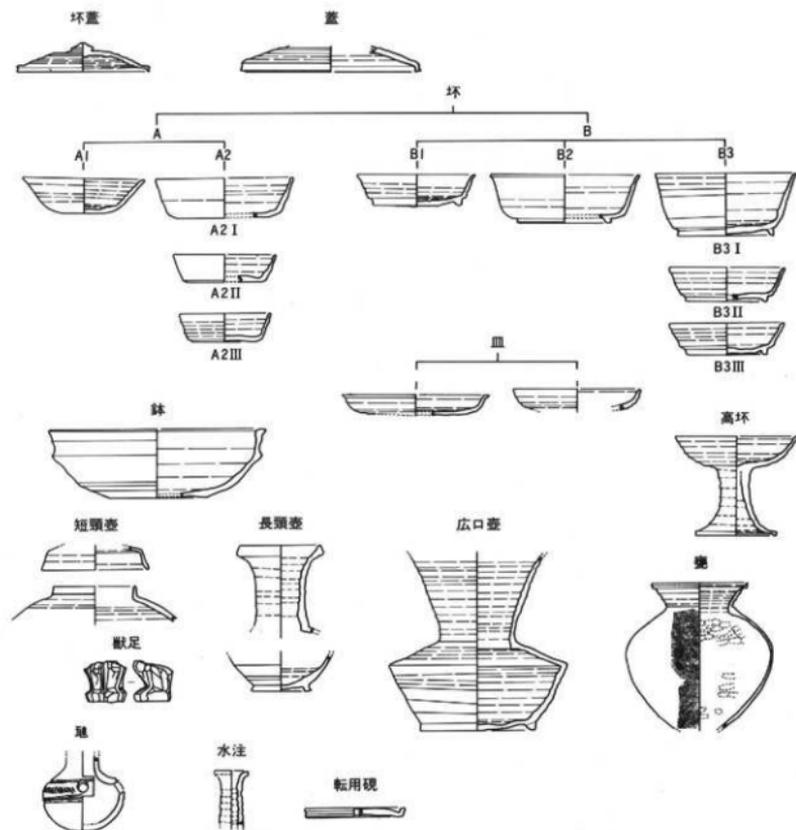
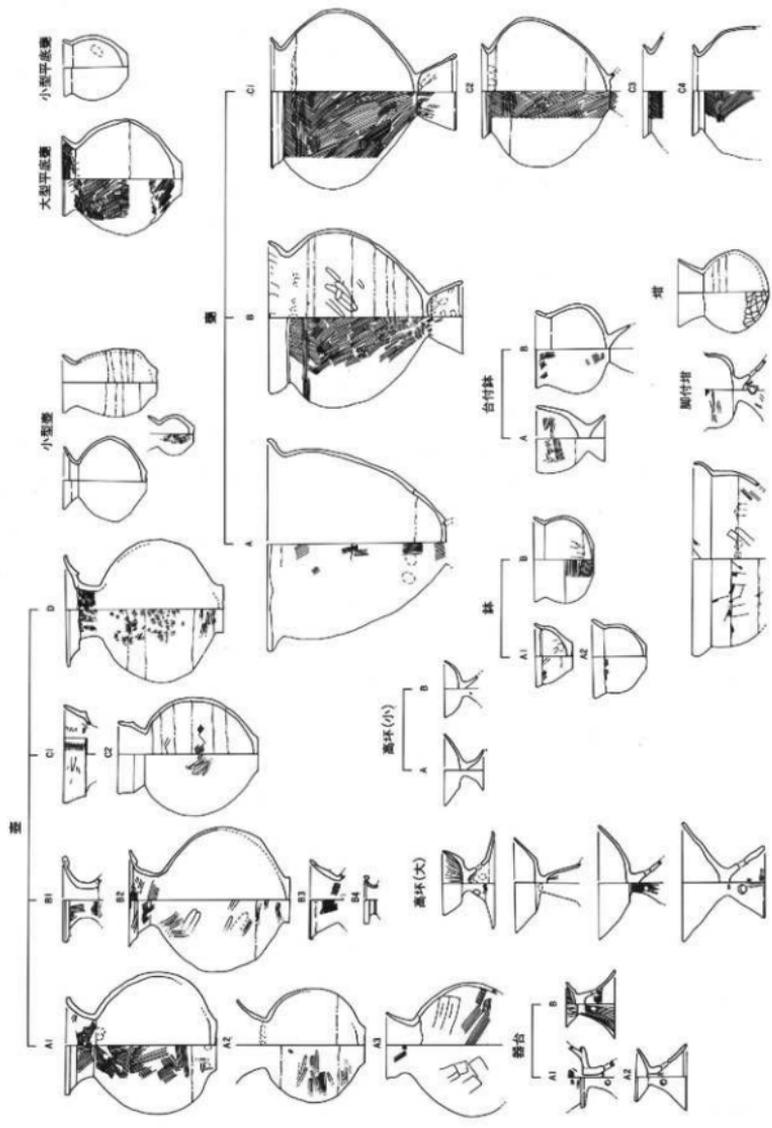


図108 新堀遺跡奈良時代須恵器の分類



大形平底器

小型器

壺

瓶

高杯(小)

高杯(大)

台付鉢

鉢

罇

胴付罇

図109 新羅遺跡古墳時代土器の分類

第V章 まとめ

新堀遺跡の調査の成果を、時代ごとにあげると以下のようにまとめられる。

古墳時代前期の墓制について

北地区の1・2区において、古墳時代前期の堅穴住居と、それとはほぼ同時期の方形周溝墓を検出して、期的には両者が平行し、同時期の存在とおもわれる。居住域と墓域は約30mの間隔をもっており、これらは遠江地域において、最古といわれる前方後円墳である、磐田市新豊院山D-1号墳が成立する時期でもあり、集落構造の後進性を示す良好な例となった。

古墳時代の集落内祭祀について

古墳時代の集落内祭祀においても、貴重な発見があった。それは土坑を対象とした祭祀ではあるが、二つの形態をもつようである。一つは、深い井戸状の遺構に完形土器及び土製模造品を納めるもので、1区のSE101と4区SE403、5区SE516がそれにあたる。もう一つの形態は、あまり深くない大型の土坑を対象として行なわれたと推定され、完形土器、玉の土製模造品、手捏ね土器等を伴い、埋納された状態ではあるが、その他の多くの土器片、炭化物、礫、白色粘土など、混入物を多く伴っている。一定の祭祀行為の後、使用した道具も一括して埋めたものであろうか。4区の土坑には、多量の土器、炭化物、礫を伴う土坑が多く認められ、それらが堅穴住居の周辺に分布する。このように、4区の土坑群と堅穴住居の配置、及び東側の凹地の発見は、狭い範囲ではあったが、古墳時代前期の集落景観を考える上で、大きな成果であった。

さらに土坑祭祀の対象を拡大して考えることも可能である。その根拠は、祭祀に使用した土器とか道具及び供物等を一括土坑に投棄したと推定すると、一見ゴミ穴のようなA-1類及びB-1類の土坑は、完形土器とか土製模造品を伴わずとも、祭祀を対象としていたと推定されるのではないか。凹地の在り方は、多くの破損した土器とともに鉄鎌も投棄され、ゴミ捨場と考えられる。遺構別の用途の使い分けを前提とすれば、土坑は祭祀の対象と推定しても大過ないであろう。

祭祀遺物と考えられる勾玉、丸玉、手捏ね土器の多くは、4区に集中し、多くの土器・炭化物・焼土を伴う土坑から単独で出土している。この祭祀遺物の在り方は、豊富な土製・石製模造品を伴う祭祀とは異なり、その前段階的な様相といえるのだろうか。現地調査の段階で、柴田稔氏から縦向型の祭祀に類似するという指摘を受けた。この新堀遺跡の祭祀形態については、石野博信氏(石野 1990)が縦向型祭祀としたいいくつかの特徴のなかで、水辺にあること、穴を掘ること、火の使用を推測させることという共通点がみられ、農耕祭祀が底辺にある弥生時代の伝統を残す段階という指摘もされている(佐藤 1993)。尚、柴田稔氏から、本遺跡の祭祀土坑及び青木遺跡はじめ周辺遺跡の例を加味して、この周辺の集落では、古墳時代前期の一般的な祭祀として定着していたのではないかという教示を受けた。しかし、深い井戸状の土坑を用いた祭祀形態は、周辺での類例に乏しいため今後の調査に期待したい。従ってここでは、一応の指摘に止めておく。

土器については、在来系の土器の他に、愛知県岡崎遺跡・塔ノ越遺跡にその系譜を求められる土器群があり、さらに山陰系、そして東の大塚式の大型の壺など多様な土器様相をもっている。S字口縁台付壺はC類といわれるものが大部分を占め、それらも三分類が可能であった。

鎌倉時代の屋敷地について

5区では屋敷地とおもわれる、南北50m、東西30mの区画を検出し、そのなかには、小規模な建物で配置に規則性は認められないが独立柱建物が6棟、井戸状遺構、シジミが捨てられていた土坑、「大」と墨書された山茶碗を出土する祭祀土坑がみられる。これらのことから、屋敷の中心となるような母屋

風の大型の建物跡は確認されず、納屋とか小屋等の比較的小型の施設及び、日常の食料を扱う施設、祭祀にかかわる施設の存在を推定できる。この区画は、自然堤防の西の縁にそって設けられており、何回かの区画溝の再掘削が認められるが、土器の検討の結果では時期差を明確にできなかった。区画内での溝列等、更に細分した区画を示すような遺構は検出されていない。

本遺跡の屋敷地の年代は、区画溝から出土する山茶碗からみて、鎌倉時代の前半代が最盛期と推定され、遠江地域での一般的な集落の屋敷地の例としては古い段階に属する。従って、古代から中世への集落形態の変化の時期について、この地域では鎌倉時代の前半には中世的な散居形態をもつ屋敷地が成立していたといえる。

県内で、本遺跡と同時期の調査例は少ないが、細江町祝田遺跡（佐野 1984）と清水市能島遺跡（佐野 1989）に区画溝が検出されている。祝田遺跡は、南北は不明であるが、東西約41mで大型の幅の広い溝、同じく能島遺跡でも断面「V」字状を呈し、南北不明、東西31mを測る区画を検出している。しかし、両者ともに一般的な集落といえない面をもっている。前者は伊勢神宮の荘園である「祝田御厨」の比定地であり、その施設をめぐる区画と考えられ、また後者は清水市内から海に注ぐ巴川に面した最奥の砂堆列に位置し、「津」の施設ではないかと推定されている。これらは新堀遺跡の屋敷地とは同列に論られる性格でないと判断される。

このように、調査例の乏しい状況ではあるが、畿内周辺の地域では、11世紀代にはすでに古代の集村的な状態から中世的な屋敷地に変化してくるようであり、遠江地域では集落のなかに中世的な屋敷地がいつ頃から現れるのか、本遺跡の5区の区画からみれば、12世紀には出現していたと推定される。

出土した土器は、11世紀代と推定される少量の灰釉陶器を除き、ほとんどは山茶碗であった。今回の調査のなかで、湿美窯を主体とした愛知県内産の製品とともに、この地域での在来窯の製品が多くみられ、そしてこれら、在来の東遠江系の山茶碗は、さらに細分の可能性がでてきた。

以上、このように調査成果の概要がまとめられるが、これ以外の問題点として、本遺跡における奈良時代の山名郡をめぐる問題について、調査中の所見を踏まえて、考えてみることにする。

第1節 山名厨をめぐる

「山名厨」の示すところの遠江国山名郡はどのあたりか、どこに郡衙が置かれていたか。それは平城宮出土の中男作物の木簡により、存在はすでに確認されていた郡名であった。しかし、その比定地については、延喜式神名帳に山名神社とあることから、袋井市北部地域の周辺と推定する原秀三郎氏の見解も出されてきた。このようななかで、「山名厨」の墨書土器の出土をみたわけである。ここで再度、現地調査での発見以来、検討してきたことの整理をし、新堀遺跡及びその周辺に、山名郡衙を推定することの可能性について追求してみたい。まず、この墨書土器が周辺の施設で利用された後、他の土器とともに一括投棄されたと推定した根拠を示し、これらの土器群のもつ特徴、年代観、「厨」と記された墨書土器の県内での出土例を整理してみる。

- 1) 墨書土器を含む土器群の出土状態は、一定の範囲にまとまり、一括投棄された出土状態であった。
- 2) これが出土した遺構は、大型の区画溝であり、底からの出土土器はみられない。土器の投棄は溝が埋没してゆく過程で行なわれ、ここは不用品の廃棄場所として使われていたようである。
- 3) 土器は、須恵器が圧倒的に多く、少量の土師器が伴う。接合された破片も多く、一定の範囲にまとめて投棄した状態がうかがえる。
- 4) 出土した須恵器は豊富な器種をもち、また無高台の環Aは法量分化することが確認された。

- 5) 「山名厨」の土器の年代は、一括出土したなかでは、最も古い形態を示し、山名郡が成立した養老6年(722年)に近い年代が与えられる。これらの須恵器群は、およそ8世紀の第2Ⅳ半期に位置付けられる。土師器も、形態は奈良時代前半期の坏・皿を踏襲し、金属器の模倣形態及び、丹塗りの痕跡が認められるが、畿内風の暗文は認められない。なお、奈良時代後半から現れるこの地域に一般的に分布する、指成形で口縁部に回転撫でを施す坏を伴わないことも、奈良時代の後半に下らない根拠になるだろう。この時期の土師器は、浜松市下滝遺跡(辰巳 1985)から出土している。
- 6) 静岡県内の「厨」と表記される墨書土器を出土する遺跡は、新堀遺跡を含め8遺跡となった。旧国別にあげると、遠江国では、浜松市伊場、袋井市土橋・同坂尻、浅羽町新堀の4遺跡、駿河国では藤枝市御子ヶ谷・同秋合・同郡、沼津市御幸町遺跡の4遺跡となり、伊豆国での発見はまだ知られていない。「厨」の袋井市土橋遺跡と、「厨」の沼津市御幸町遺跡は遺跡の性格について、検討の余地は残されるが、他の各遺跡は官衙として機能しており、その地域において重要な位置をめている。このことから、公的内容が記された墨書土器は、本来用いられた場所から出土し、集落というような性格の異なる遺跡から出土する例は極めて低いといえる。
- 7) 量は少ないが、奈良時代の瓦(清ヶ谷窯の製品と思われる)が小破片で散在して出土しており、付近での瓦使用を類推することは困難であることから、一時的に、瓦が他の物品とともに一時的に集積された結果であろうと推定した。

以上のような出土遺物からみた検討の結果、新堀遺跡及び周辺に遠江山名郡衙の置かれていた可能性が高いことが指摘され、土器の年代も、山名郡の成立時期に継続する8世紀第2Ⅳ半期と考えた。

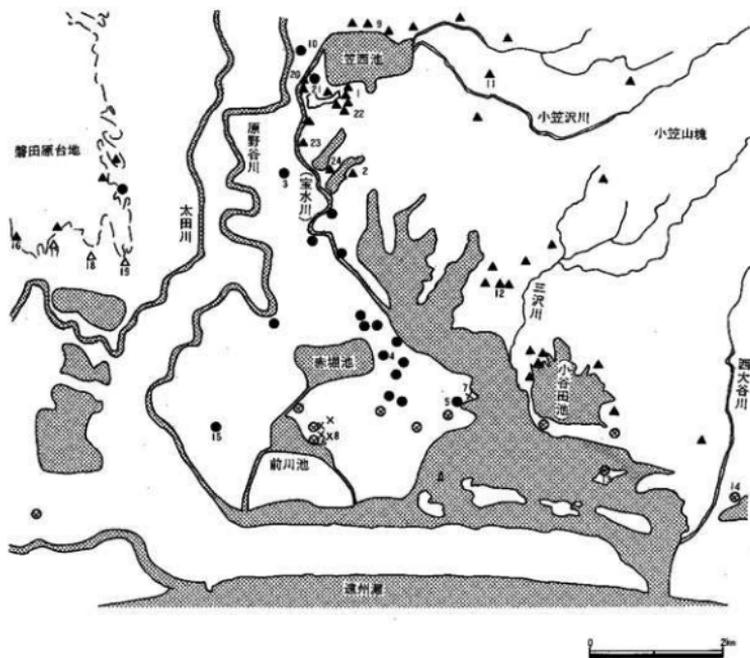
第2節 遠江地域からみた奈良時代の新堀遺跡

奈良時代の遺構から若干の検討を加えてみる。新堀遺跡では、掘立柱建物配置が「L」字状となる傾向はあるが、南北配置と東西配置の建物を比較すると、規模、柱穴の規則性、掘り方の平面形状及び大きさ等、相違が顕著にみられる。南北列は横列も伴い、郡衙の建物と推定しても妥当な内容であるが、逆に東西列の貧弱さが対称的である。これらは、雑倉庫のようなものかと推定される。いづれにしても、調査範囲のなかでは、官衙的な建物といえるこの遺構群がどういう建物か、何に使われたのか、判断できなかった。一つの可能性からいえば、同時期の他の遺構はなく、建物及びその周辺には遺物がほとんど出土しないことからして、常時人の出入りのない場所として、郡衙に置かれた倉庫群でないかと推定される。

本遺跡周辺に置かれたであろう遠江山名郡は、続日本紀養老六年二月十六日条によると、佐益郡の八郷を分割して、722年に成立している。この年代は先にも指摘した「山名厨」墨書土器の年代観と符号するといえる。郡衙の施設は倉庫群とおもわれるが、土器の年代観からすると短期間に官衙としての機能を終息させるようであり、奈良時代の後半には継続していない。逆に、平安時代前期まで継続する、遠江佐野郡衙(袋井市坂尻遺跡)、駿河国志太郡衙(藤枝市御子ヶ谷遺跡)等の例とは大きな相違がみられ、おそらく何らかの事情により、別の場所に郡衙が移転したと推定される。しかし一方では、この新堀遺跡周辺に置かれた山名郡衙は、律令制度による地域支配の要としての機能・役割を担ったものでなく、遠江国のなかでも特別な役割を担い、その役割を終えて消滅したといえないだろうか。

同時期の周辺遺跡の在り方からみるとどんなことがいえるか、次に検討してみたい。

図110に周囲の遺跡をあげた。大きく広がる遠江地域の沖積平野のなかで、それを囲むように、西側の磐田原台地の末端に、遠江国府と推定される磐田市御殿二ノ宮遺跡、北には原野谷川の自然堤防に立



- | | | |
|-----------|-------------|-----------------|
| 1. 団子塚 | 13. 松尾 | ▲ 洪積地の遺跡 |
| 2. 古新田 | 14. 天王森古橋神社 | △ 舌状台地末端の沖積地の遺跡 |
| 3. 十二所 | 15. 塩口 | ● 自然堤防上の遺跡 |
| 4. 新堀 | 16. 西貝塚 | ◎ 砂堤上の遺跡 |
| 5. 松山 | 17. 野郷 | × 沖積地の古墳 |
| 6. 権現山 | 18. 長江崎 | |
| 7. 大場稲荷古墳 | 19. 御影 | |
| 8. 地蔵山古墳 | 20. 谷坂 | |
| 9. 大門 | 21. 北山 | |
| 10. 関口 | 22. 北原 | |
| 11. 長者平 | 23. 王子 | |
| 12. 大畑 | 24. 真名埜 | |

図110 浅羽平野の復元(柴田 稔「田子塚(1)」から作成)

地する佐野郡衙である袋井市坂尻遺跡、東には小笠山塊の末端に、須恵器と遠江国分寺瓦を生産する官窯といわれる大須賀町清ヶ谷窯が立地している。これらの遺跡は天竜川の東の地域において、奈良時代の主要な位置を占める遺跡であり、地形からみると台地・自然堤防・丘陵というような安定した場所に立地していることがわかる。

天竜川東側の沖積平野の遺跡立地については、浅羽町を中心として行なわれてきた調査のなかで、海及び、中小河川を利用した水上交通の問題が指摘されてきた。古墳時代中期の豪族居館跡である古新田遺跡(柴田 1992)の立地においても、現在は埋没している宝水川の推定流路の復元から、海につながる水上交通による物資の交易を指摘し、それが豪族の富の背景の大きな背景と位置づけている。奈良時

代の当時の海岸線及び、ラグーンの形成がどの程度であったか、知る由もないが、江戸時代の絵図には図110に示した状況より沖積化が進行し、小笠丘陵の縁及び、自然堤防の周辺に池となった高湖の痕跡を認めることができる。このことから古代において、遠江地域の主要な遺跡間は、河川とか高湖を利用した船による往来は可能と推定され、特にそれは少ない人員で、多量の物資を運ぶ船の利用を促したことは想像に難くない。このような船の利用に適した東遠江地域では、従来からの物資輸送手段及びルートが、国府・郡衙を中心とする地域支配機構に組み込まれ、税としての物資はもとより、国分寺瓦・須恵器等の官物を運ぶ手段として確立されていたであろう。このような地域交通体系を前提とすれば、本遺跡の位置は、沖積平野のなかで、河川及び海につながる適地であることが指摘される。

まさに本遺跡の奈良時代における役割は、ここでは使用することのない国分寺瓦を出土することからみても、物資の集積場所、また各地に送り出す出荷という機能、物資の流通センターのような役割を担ったと推定される。国分寺(国分尼寺)の設置という、律令制度の地域における完成期に大きな役割を果たしたのが、本遺跡周辺に置かれた山名郡衙の施設であったのではないかと。しかし、郡衙本来の行政機構としての役割はどうか、今回の調査のなかでは不明確な問題として残された。しかし、須恵器をみる限り、官衛的な土器様式といえる内容をもっており、それは供膳形態を中心として豊富な器種の存在、坏Aとした無高台坏が法量分化する等の特徴にあらわれている。山名郡をめぐるのは検討のとりかかりを見つけたという段階であろう。なお、清ヶ谷窯の須恵器生産は奈良時代で終息し、灰釉陶器の生産開始までには断絶のあることが確認されている。このことは、本遺跡と同じように、清ヶ谷窯の須恵器生産も、律令制の確立・完成期の一翼を担った、官窯としての生産地の在り方を象徴する姿であろう。

おわりに

三年間にわたる新堀遺跡の調査も本報告をもって終了することとなった。静岡県西部、河川の自然堤防の末端に位置し、沖積平野でも海岸に近い地点の調査としては、大規模なものであった。浅羽町で実地した以前からの調査例に加え、今回の調査成果からも、沖積平野に展開した歴史の豊富さが類推される。特に注目すべきは、「まとめ」で述べた水上交通の問題がある。

従来から平野吾郎氏により県内の官衛の立地と、河川の関係が指摘されてきた(平野 1988)。それは、静岡県中東部の官衛遺跡は、船による水上交通を前提に立地しているという指摘であり、官衛への物資輸送が河川を中心に行なわれていたことを暗示する。今回、奈良時代の本遺跡を考えるなかで、都への税の輸送は人担方式により、官道が重要な役割を果たすのは勿論であるが、一方、地域の地理的環境及び歴史性からみて、交通、物資の輸送はどんな実態だったかを検討した。そして、平野の沖積化が進行しつつある遠江地域にあっては、古代の官道たる東海道ルートの役割と同時に、一方ではこの地域にとって、平野に網のように張り渡る、河川を利用した水上交通の果たした役割も積極的に評価するべきであろうと考えた。それは安定した丘陵とか台地を中心とした遺跡から地域史を考える従来の視点とともに、水上交通・交易という船を利用した物資の移動にかかわる問題として、海及び平野部から丘陵及び台地の遺跡を見なおすという視点の転換である。このような視点が、遺跡数の少ないこともあり、従来論議のなかった海岸沿いの遺跡及び海岸に面する沖積平野の遺跡群の理解の一助となることを確信した。最後に現地調査から整理報告事業までの間、暖かい協力をいただいた、調査委託者の静岡県住宅供給公社、及び現地調査実務のなかで多大な協力をいただいた浅羽町教育委員会の関係者の方々に厚く感謝を申し上げたい。なお、椋原町教育委員会・本杉和美主査は、平成2年度に、当研究所の埋蔵文化財担当職員養成研修に参加され、研修のみならず調査の一翼をも担って活躍されたことをも付記しておく。本報告の結びとして、現地調査及び整理作業のなかで、指導助言をいただいた方々及び現地調査、資料整理に

かかわった方々の御芳名を列挙し、深く感謝を申し上げる次第である。

指導助言をいただいた方々（敬称略）

加藤芳朗 寒川旭 柴田稔 松井一明 向坂鋼二 山本義孝 山中敏史 吉岡伸夫

現地調査（平成2・3年度）

天野千重子 阿部豊平 荒井克巳 荒井しん 荒井友彦 安間好美 石川かの 石川とき子
石川幸一郎 石黒みつ子 石部花子 梅川元美 大石広司 大石あや子 大石俊 大石勝
大岡みつえ 岡本たつ江 大須賀寿美子 加藤節夫 加藤まさ子 加藤みよ 金原藤江茂
金原みよ 久保田久子 桑原恒夫 古池くに 小杉真一 小杉緑 後藤正路 近藤ときえ 近藤康恵
佐藤勝人 佐藤一枝 澤田しな子 澤田てるえ 澤田まつえ 杉浦久子 杉島六郎 杉島ゆき
杉山悦子 杉山さん 鈴木まさ子 武田久馬 田中勇 玉木加奈子 津金む津江 恒川鶴子
戸塚寛 中島淳 長塚多栄子 中村節 西尾義男 袴田なみえ 早川トミ 原幸一 東原真喜子
古川トヨ子 前島純子 松下勇 水野千代子 山下のぶ

資料整理（平成4年度）

技術職員 望月節子

板倉文子 伊藤重子 井上のり子 入手悦子 杉本明子 鈴木智恵子 鈴木美代 瀬川真理 滝桂子
長沢奈保子 沼本京子 堀八重子 望月夏江 山梨昌子

参考文献

- 佐 藤 達 雄 「静岡県概要—古墳時代祭祀の変遷—」『古墳時代の祭祀』東日本埋蔵文化財研究会 1993
- 佐野 五十三 「祝田遺跡Ⅰ」（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 1984
- 佐野 五十三 「能島遺跡—本文編—」（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 1989
- 柴 田 稔 『青木、馬場第1・第2遺跡』静岡県磐田郡浅羽町教育委員会 1984
- 柴 田 稔 『権現山遺跡』静岡県磐田郡浅羽町教育委員会 1987
- 柴 田 稔 『団子塚遺跡（1）』静岡県磐田郡浅羽町教育委員会 1992
- 柴 田 稔 『北ハサマ遺跡』静岡県磐田郡浅羽町教育委員会 1991
- 柴 田 稔・山本義孝 『青木遺跡』静岡県磐田郡浅羽町教育委員会 1991
- 柴 田 稔・柴田 睦 『古新田Ⅰ 遺構編』静岡県浅羽町教育委員会 1992
- 柴 田 稔 『十二所遺跡』静岡県浅羽町教育委員会 1989
- 辰 巳 均・鈴木俊則 「下滝遺跡」浜松市遺跡調査会 1985
- 永井義博 『団子塚遺跡—遺構編—』静岡県袋井市教育委員会 1992
- 平野吾郎 「東海地方における郡衙推定遺跡とその立地について」『考古学叢考』中巻 斎藤忠先生頌寿記念論文集刊行会 1988
- 湯之上 隆 『鎌倉時代の袋井』『袋井市史』通史編 1983

浅羽町新堀遺跡の地学的背景

加藤芳朗 (静岡大学名誉教授)

1. まえがき

この遺跡は、原野谷川左岸の岡町諸井から南下して浅名一壺住一新堀にのびる微高地の上に立地する(図1)。この微高地について現地調査でえられた結果を報ずる。あわせて、周辺地域の遺跡、平野における既往の知見を参照しながら、遺跡をめぐる環境を考察する。これに際し、浅羽町柴田 稔氏から本遺跡の発掘未公開資料の提供と有益な助言を頂いたのでお礼申し上げる。なお、引用文献のうち、遺跡発掘報告関係は末尾に一括してかかげ、必要な場合のほか、文中では『』内に略記するにとどめ、著者(執筆者)を省いた。

2. 旧原野谷川の分派……「古浅羽川」……

上記の微高地は蛇行したり、流路跡らしい凹地をとまなうので、流路と自然堤防よりなる旧河川跡と解釈される。そこで、これを、かりに、古浅羽川と呼ぶこととする。本来なら、柴田の「宝水川」(『国子塚遺跡』、3頁)を踏襲すべきであるが、本稿の古浅羽川と新堀付近の流れすが違うので、混乱を避ける意味で使わなかった。なお、図1の流路は主に門村(1964)のそれに従っているが、新堀付近だけ、門村と国土地理院(1982)のそれにいちがいがあるので、後者を破線で記入してある。その当否を3.(2)で論ずる。

微高地の両側は後背低地と呼ばれる排水不良地である。とくに、東側には江戸時代まで、広い水域が存在していた。宝水大地震(1707)時の地盤隆起で消滅したといわれる(『袋井市史』、8-11頁、『青木、馬場第一・第二遺跡』、5頁)。

この微高地は一部が沖積面の下に埋没して連続性が悪い。太田川・原野谷川平野には同様な例が多い(加藤、『坂尻遺跡』、3-6頁、加藤、『土橋遺跡』、12頁、加藤、『原川遺跡』、4-6頁、加藤、『袋井市史』、35-38頁)。連続性がよくて形がしっかりしたものが本町西部の八幡一長溝一浅岡一色の旧原野谷川の蛇行流路跡である。旧流路と自然堤防をはっきり認められる。こちらの方が新しいと思われる……。

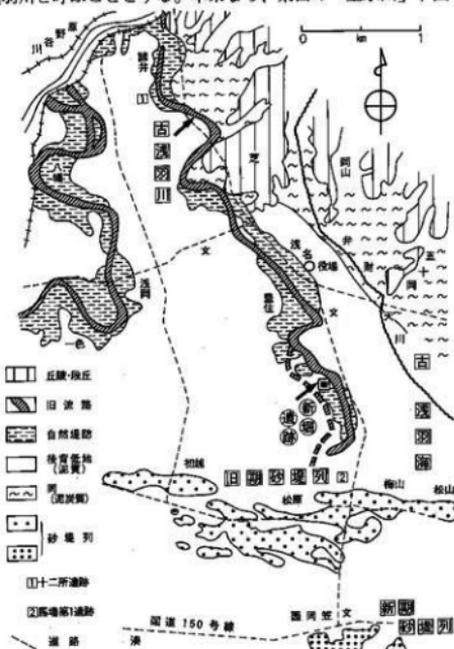


図1 遺跡周辺地形分類図

(主として門村、1965、『大塚遺跡』51-80による) 破線旧流路は国土地理院(1982)による。

3. 遺跡と周辺地域の地下地質

(1) 遺跡内の埋没砂礫層

発掘前に行なわれたボーリング、サウンディング調査資料(フジヤマkk.)によると(図2)、①新堀遺跡全体は、地表を占める粘土層(厚さ2~5m)と下位の厚さ4~7mの砂・礫層からなる。②この砂礫層の表面は起伏にとむ。③新堀集落の北から東をとり囲むように、砂礫層の高い部分(砂礫層が浅くでる)が連続する。これと礫層が集中的に出現する部分とがだいたい一致する。④この高まりから県道西同笠浅羽線のにかけて砂礫層表面は急速に低下する。⑤集落の西縁にそって砂礫層表面の低い部分が溝状に走る。

ボーリング資料(No. 1~4)による砂礫層の厚さ、下限深度、内容(専門語で層相)は図2の付表のとおりである。③に属するNo. 3, 4で礫、④に属するNo. 1で粘土質砂(貝殻まじり)、⑤に属するNo. 2で砂が、それぞれ、優勢である。遺跡内の発掘区との対応をみると、1, 2区が④に、3, 4区が③に、5, 6区が⑤に、それぞれ、当たるようである。ただし、下述のように、これらは厚さ2~5mの粘土層におおわれる。

(2) 埋没流路と自然堤防

以上のことから、⑤の部分が旧河川流路、③の部分がその左岸側の自然堤防と推定される。両者の高低差は最大3mほどである。なお、図の等高線から判断すると、5区の西側に右岸側の自然堤防が存在するもようである。地表の標高は盛土部分をのぞくと、1.8~2.1m(平均2mとする)なので、⑤、③は地表から、それぞれ、4~5m、2~3mの深さに埋没していることになる。前記資料によると、そこまでは粘土(シルト)層が占める。

この埋没地形は古浅羽川流路の一部に当たると思われる。もしそうだとすると、その流路は新堀集落の西側を通ることになり、図1のふたつの推定流路(新堀付近における)のうちの西側のもの(太破線)

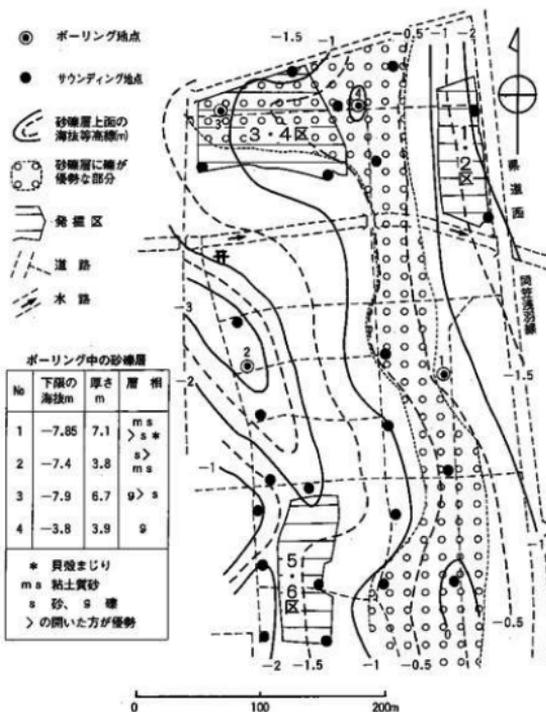


図2 新堀地区砂礫層上面の海拔等高線(0.5m毎)

静岡県埋蔵文化財調査研究所資料(堀フジヤマ担当)より筆者作製

の可能性が大きくなる。

(3) 周辺域の地下地質

上記で古浅羽川流路の一部が砂礫層からなることが明らかになった。同流路の他の部分はどうであるか。

- i) 諸井地区……十二所遺跡は古浅羽川の右岸自然堤防に隣接する(図1)。この遺跡から自然堤防にかけて砂礫層が浅く出現することが知られている(『十二所遺跡』)。同層から摩滅した古墳前期の土器が出土した由である。諸井南部での地下地質資料によれば、海拔4.5—4+mの間に砂礫層が出現する。(地表の海拔高7.5m)。その上位には粘土層がくる(静岡県地震対策課、1984)。
- ii) 馬場第一遺跡(梅山)……新堀と梅山との中間にある(図1)。このあたりは畑が散在する高畑景観をなし、かつて微高地があったようにみえる。ここでも浅礫部(埋没砂礫層の高まり)が認められた。これによって古浅羽川がここまでのびる可能性が示唆された。その上位の褐色粘土層上部に古墳前期の土器が含まれる(『青木遺跡・馬場第一遺跡・西立遺跡』、19頁、『青木、馬場第一・第二遺跡』、57—60頁)。

4. 遺跡内の土層の状況—主として3, 4区を中心に

筆者は3, 4区の土層しか観察しなかったので、これを中心のべ、他の発掘区の土層は、『新堀遺跡、概報』、『静岡の原像、平成3年度』を参照することとする。

(1) 標準的土層構成

筆者の観察で、3, 4区の土層はつぎの構成単位からなる。ただし、現耕作土をのぞいた下位の土層についてだけのべる。

- イ. 管状斑鉄をふくむ灰色土層。最上部に鉄・マンガン集積層あり。
- ロ. オレンジ斑鉄(上半)、点状マンガン斑(下半)とそれらを切る灰色条斑を含む灰色土層。
- ハ. 管状斑鉄をふくむ青色土層(グライ土層)。
- ニ. 青色土層(グライ土層)。

これらは地下水位、水田耕作に関連する酸化還元現象である。この現象の解説は加藤、『川合遺跡』、251—255頁を参照されたい。イ、ロは酸化土層、ハ、ニは還元(グライ)土層に属する。発掘現場で使用された土層名と対応させると、3層=イ+ロ、4層=ハ+ニとなるようである。

3, 4区で認められた構成単位土層の組合せ(上位から順に配列)はつぎのとおりである。

- A. イーローハーニ
- B. イー(ロ)ーハーニ
- C. ハーニ

4区南壁では図3のような構成単位土層の組合せ(A、B、C)の水平変化が観察された。地表の標高は2.2m位、右端と左端との高低差はほとんどない。左方にゆくにつれてイとロが薄くなりついには消滅する。そのかわりにハとニが地表に近づく。このグライ土層は地下水で飽和して酸素が入りこめず、結果として酸素不足(還元)の状態になったものであるから、地下水位が右方ほど低く、左方ほど高いことになる。

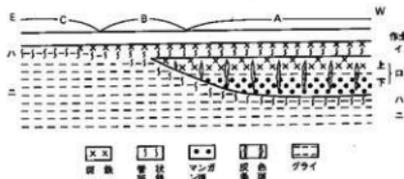


図3 4区南壁セクション模式図

(上下幅:約1.2m、左右幅約140m) イーニ、A~Cは本文参照

ここで誤解をさけるため特に強調したいのは、上の構成単位が、前記のように、地下水位、水田耕作ともなう酸化還元現象でできた点である。土粒子が水ではこぼれ堆積した土層とはでき方がちがう。これを堆積土層というが、通常使われる「土層」はこの意味である。上記した現場の土層名もこれにしている。図3について、「左方にゆくとつれてイとロが薄くなり…かわりにハとニが地表に近づく」とのべ

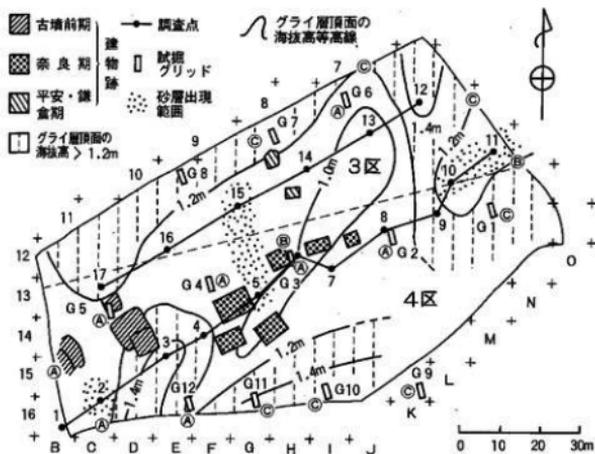


図4 3・4区におけるグライ層頂面の海拔高等高線、建物跡、砂層出現範囲

①、②、③は本文4.(1)の構成単位土層の組合わせ

たが、堆積土層である3層は水平に連続していると観察された。つまり、同層は右方では酸化的なイ、ロの状態にあるが、左方では還元的なハ、ニに変化する、と考えなければならない。

(2)発掘区内でのグライ土層の高低

4区南壁での上記の傾向は3、4区内ぜんたいではどうであろうか。3層上面から長さ1.5mのボーリングステッキを突きさして土層の調査をおこなった。ピットやトレンチでは、最大2m近くの深さまで達した。図4のように2本の側溝ぞいに地点を選んだ。この調査ではイとロ、ハとニの区別が不完全なので、結局のところ、イとロの酸化土層とハとニのグライ土層との認識しかできなかった。図4にグライ土層表面(=酸化土層底面)の海拔高の等高線が描いてある。これには、'89年(平成元年)に浅羽町が行なった試掘調査(柴田 稔氏担当、筆者も現地で確認)の結果が盛り込んでいる。試掘グリッドや壁面での土層の組合せ(A、B、C)のうち、Cがグライ層の浅い部分(縦の点線模様)に、同A、Bが深い部分(白地)に、それぞれ、対応するのも調和的である。この等高線によると、発掘区のはほぼ中央に、北東~南西にひろがる低所(グライ層の出現が深い)がある。そこは建物跡の集中域でもある。これは、図2の3、4区で砂礫層が浅い部分(出現海拔-1~0m)にはほぼ該当する。また、5、6区は、ともに西側ほど還元状態となり、酸化の進んだ東半に遺構が集中するという(『新堀遺跡概報』)。これと、図2の砂礫層上面が浅くなる部分とが一致する。両者のこのような一致は袋井市坂尻遺跡でも認められた(『坂尻遺跡』、8頁)。砂礫層が排水暗渠と似た効果を及ぼしたのであろう。

(3)発掘区内での礫層の深さ

前項のボーリングステッキ調査によると、3層上面から2m弱の深さまでの大部分は粘土層で、部分的にシルト、砂層が検出された。砂礫層にはまったくぶつからなかった。これは、先述の3、4区で砂礫層が田面から2~3mの深さにあるとの推定(3.(2))を裏付けたものである。図4に砂層(大部分が細砂、シルト質砂)がステッキ調査で検出された範囲を示した。図にはないが、そのまわりにシルト層がくることが多い。砂層のものはステッキの最下部であるから、伏在する砂礫が上方にむかって砂

に変化した部分に相当しそうである。その出現に一定の傾向がないのは、図2に表しきれない砂礫層上面のふくらみを示すのかもしれない。粘土層の堆積する静水域に移りかわる初期に、古浅羽川が、それまでの砂礫にわかって、砂、シルトを自然堤防上に堆積させたのではなからうか。

5. 噴砂脈の産状

3, 4区の各所で、粘土層をつらぬく砂の脈が見いだされた。3層上面(古墳前期)に露出したものを、現場担当者がくわしく記録したので、それに基づいて述べる(図5)。脈の内部にまわりの粘土層の破片が含まれることから、砂が下から噴きあげたものと解釈される(写真1)。

(1) 大きさ・形・伸長方向

水平面(発掘面)では細長く一定の方向に伸長する。幅、長さの統計的傾向は図5左上のとおりである。幅、長さの最大値は、それぞれ、40cm弱、70m以上に達する。

同じ脈でも幅が変化する。単一の脈でも屈曲したり、枝分かれしたりする。複数の脈が平行したり、雁行したり、交差したりする(図5、写真2)。垂直断面も同様である。これらは、「原川遺跡」、「駿府城3の丸跡」で筆者が「脈状砂」と称したものと同じであるが、はるかに高密度である。

水平面での伸長方向は、北から西へ $0\sim 20^\circ$ 、 $30\sim 40^\circ$ 、 $50\sim 60^\circ$ に極大がある。つまり、北北西-南南東と北西-南東に走るものが多い(図5)。

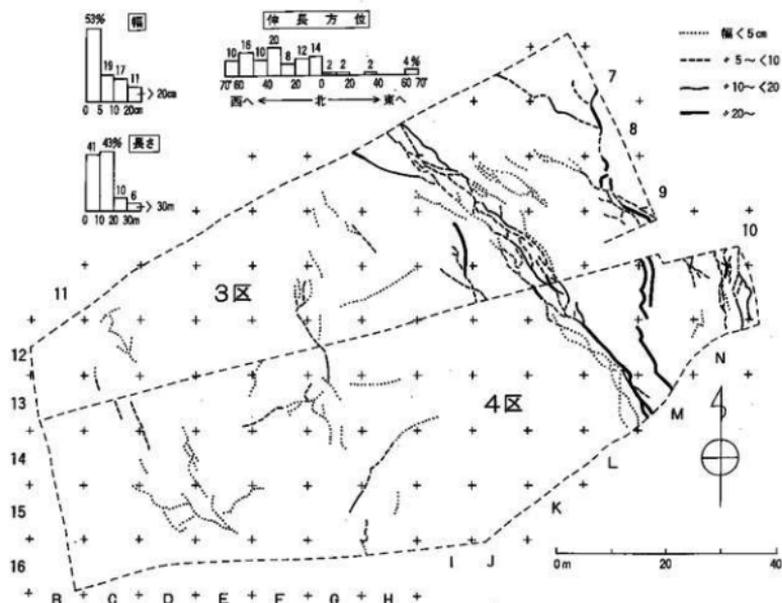


図5 3・4区3層上面の噴砂脈の状況(現場担当者の資料より作製)

(2)3、4区内での分布

比較的集中度の高い部分が両区の東、中、西部に認められる。とくに両区の東部には規模の大きいものが目立つ(図5)。両区の東西両端で北北西-南南東方向のものが卓越する傾向がある。

(3)砂の供給源

始めにふれたように、脈の内部にまわりの粘土層の破片が含まれること、また枝分かれが上向きなこと、脈を掘り下げると、粘土層の下位の砂層に連続すること、などで砂が下の砂層から粘土層を引き裂きながら上昇したことがうかがわれる。粘土層の上部ほど、脈は幅や数を減らす。従って、脈の集中度が大きい部分では下位砂層が比較的浅いと推定される。これは4、(3)のボーリングステキ調査で砂やシルトが検出された部分(図4)とおよそ一致する。

(4)形成メカニズム

このような産状から、この脈は寒川(1992)が日本各地の例で実証した地震噴砂であると思われる。これは、地下水で飽和した砂や砂礫層の上を粘土質の土層がおおう場所が、地震の振動(震度V-強震-)以上)をうけたとき、砂や砂礫層が液状化し、上位の粘土層を突き破って噴き出す現象である。筆者は噴砂脈の水平方向の伸びが、埋設砂礫層表面の等高線の向き(=同砂礫がつくる微高地の伸びの方向=河川旧流路の方向)と平行することを見出した(『原川遺跡』、10-11頁)。これに基づいてつぎのような形成メカニズムを考察した。すなわち、砂礫層が液状化したとき、上位の粘土層が支持を失って砂礫層上面の傾斜方向に滑動する。ここでその方向に展張力が働き、傾斜方向に直交する割目群を生ずる。そこへ液状化した砂礫が貫入する。……というものである(『原川遺跡』、10-11頁)。図5の噴砂脈の水平方向の伸びは、図2の砂礫層上面等高線の全般的傾向と平行するように見える。上のメカニズムが本発掘区でも発動したものである。

(5)噴砂の時代

①図5の噴砂脈は古墳前期で検出されたものであるから、同時期より後の生成ということになる。
②垂直壁面での脈に2種類ある。いずれも、前記のイ、ロ、ハ層(4、(1))を貫くが、1つはまわりの斑鉄、マンガン斑と同じものが脈の中にあるもの、他はそれらが脈の中にあるもの(まわりにはある)、である。前者は斑鉄の生成より前、後者はそれより後の時代だということになる。これらをかりに、それぞれ、旧期噴砂脈、新期噴砂脈とよぶことにする。③旧期噴砂脈は3区東部(K-9グリッド)の奈良・鎌倉期の円形遺構によって切られるので、それよりも古いことになる。

以上から、旧期噴砂脈が古墳前期以後、奈良・鎌倉期以前の時代だという推定が成り立つ。新期噴砂脈の新しいほうの時代限界はわからない。

旧期噴砂脈は、3、4区全般に見られるのに、新期噴砂脈は同区の西半に限られるようである。

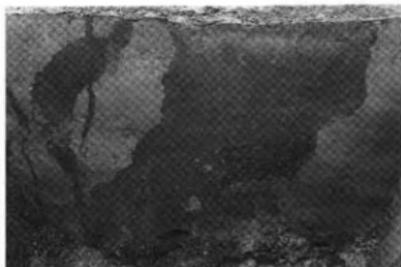


写真1 3区東南壁の噴砂脈(発掘担当者による)
中央の脈幅約50cm、まわりと同様の斑鉄、灰色条斑が脈の中にもできている。



写真2 4区東端の噴砂脈(発掘担当者による)

6. 管状斑鉄を含む灰色土層（イ）の形成

これとオレンジ斑鉄、点状マンガ斑と灰色条斑を含む灰色土層（4. (1)）のイとロ）は袋井市土橋遺跡や坂尻遺跡でもみられるから、太田川、原野谷川平野の埋没微高地を被覆する土層に共通する現象のようである。イの管状斑鉄は、地下水の低下によるグライ層の酸化の過程で起こる。ヨシなどの根跡孔隙に侵入した空気が壁面から内部に浸透してグライ層を酸化し、管状の形に酸化鉄が沈殿したものと考えられる。さらに酸化が進むと、グライ層が灰色土層になる。このことから、イはかつてグライ層であったことが暗示される。酸化はグライ層の上位から始まるので、当然、イの下にはグライ層が続く。しかし、下に酸化土層のロがくることから、単純に、グライ層の酸化で説明することができない。これについては、つぎのような土層の生成過程を暫定的に考えている。

①一帯が水域下にあり、イ、ロ以下の粘土層（＝3、4層、一部シルト、砂層）が堆積（還元状態）、②水域水位の低下に伴う地下水低下があり、イ、ロの酸化が進む。③イよりも上面で表面水型水田（乾田）が営まれ、イ、ロに斑鉄、マンガ斑、灰色条斑が生成する。この間に、表面水（水田作土の湛水）の影響とロの透水性不良のため、イの部分がグライ（還元）化される（停滞水グライ化作用）。これに、水域水位の上昇が一役かって、水田の表面排水を悪くしたのかもしれない。④水域水位の低下があり、イの酸化が進行する。

旧期噴砂脈は②と③の間に、新期噴砂脈は④に、それぞれ、生じた。

3、4区の遺構（古墳前期～鎌倉期）は②の時期にあたる。その覆土とまわりの土層とが現場で識別しにくかったという。③、④の過程が後で加わったのがその一因かもしれない。

7. 遺跡をめぐる環境変化

本遺跡および太田川平野下流部から海岸部にかけての地学的事象を時代順に整理してみた。（表1）。以下、補足的に説明する。

(1) 縄文海進に伴う入江（古磐田海）の出現（縄文早～前期）

浅羽町と隣接市町の平野部における地質ボーリングに、貝殻まじりの泥炭層（厚さ20～30mまたはそれ以上）が広く見出せる。他地域での、同類層の貝殻や微化石（珪藻、有孔虫など）の研究から、この層が内湾（入江）底に堆積したことが分かっている。本地域の泥炭層にも同様の解釈が成り立つとすれば平野一帯に入江が生じたことになる。市原（『大畑遺跡77』、5頁）に準じて、これを「古磐田海」と呼ぶこととする。その最盛期（縄文前期初）には、太田川筋で森町上飯田、原野谷川筋で掛川市大池あたりまで達したといわれる（大庭…『袋井市史』、12頁）。

(2) 旧期砂堤列の形成と古磐田海のラグーン化（縄文後期以前）

- i) 旧期砂堤列の形成……松山—梅山—初越ぞいとその南側に、東西に伸びる数列の砂地群（砂堤列）がある（図1）。柴田（『権現山遺跡』、6—10頁）はこれらを6列に細分している。筆者はこれを旧期砂堤列と称した（加藤、『磐田市史』、30頁）。

もっとも北（内）側の砂堤に、松山遺跡（縄文後期）、その南の砂堤に宮ノ腰（縄文—鎌倉期）、権現山（弥生中期以降）の遺跡がある。両砂堤間の低地で、砂層の上にいる泥炭層の最下部が¹⁴C年代値、約2,300年前（縄文晩期末葉）を示す（『権現山遺跡』、12頁）。松山の砂堤の続きにあたる大須賀町石津のその北側低地で、同様な泥炭層最下部の¹⁴C年代値が約2,980年前（縄文晩期初頭）である（鶴見他、1983）。泥炭層を構成するヨシは淡水に生えるものだから、泥炭層の存在は、そ

こにあった入江がすでに淡水化したことを語る。従って、おそらく、旧期砂堤列のもっとも内側の砂堤は縄文後期に、その両側の砂堤は縄文晩期に、それぞれ、出現したとしてよい。旧期砂堤列の地下に厚さ20m以上の砂が土台として伏在し（静岡県地震対策課、1984）、上述の時期より前から砂の搬入が行なわれたことがうかがわれる。

ちなみに、これより南、国道ぞいの西同笠、中新田から海岸までが「新期砂堤列」である。福田町から磐田市鮫島一帯の砂堤列もこれに相当する。そのもっとも内側の砂堤上の浜部遺跡には古墳後期初頭の遺物およびそれと同じか、より前の溝が検出された（「浜部遺跡」、6-8頁）。

表1 新堀遺跡と周辺の環境変遷

時代	海進海退	海水位*	太田川下流～海岸	新堀遺跡	気候※
縄文早期	⇨ 縄文海進	現在より3 ←～5m高い 縄文前期初	◇広い入江(古磐田海) の出現	◇古磐田海の底 8,000年前..... 温暖(ヒブシ サーマル)
縄文前期	⇦			 5,000年前..... 寒冷の始まり
縄文中期	⇦ 縄文中～後 期小海退	上記より低 ⇦下...縄文中 ～後期	◇旧期砂堤列群の形成 ◇古磐田海の閉塞、潟 湖化 ◇古太田川・古原野谷 川流路が入江に進出 ◇古浅羽川の形成、古 浅羽海の誕生 ◇大畑、西貝塚遺跡等 の貝塚	◇古浅羽川の微高 地出現 3,500年前..... 急速な寒冷化
縄文後期					⇨
縄文晩期	⇨ 縄文後期～ 弥生末期小 海進	上記より上 ⇦昇...弥生後 ～古墳初期	◇旧期砂堤列群と古浅 羽川の形成継続 ◇古浅羽川微高地の水 没 ◇二之宮貝塚?	◇古浅羽海の閉 塞、沼沢・湿地 化(江戸後期ま で存続) ◇水成化と微高地 の埋積(粘土層) 2,400年前..... 弥生暖期
弥生期	⇨			 2,000年前.....
古墳期	⇦ 古墳期中頃 の小海退	⇦上記より低 下...古墳期 中頃	◇新期砂堤列群の形成 開始とその継続	◇水域の乾陸化 ◇古墳前期、奈良 期の遺構 3世紀半ば..... 古墳寒期
奈良期					⇨
平安期	平安期の小 海進	⇦上記より上 昇...平安期	◇水域、泥炭地の拡大 地点貝塚(磐田市)	◇水域化? 8世紀..... 小暖期(リトル オブチマム)
鎌倉期	⇦			◇水域の乾陸化 ◇平安～鎌倉期の 遺構 13世紀.....
中世	⇦			 14世紀..... 小寒期(リトル アイスエイジ)
近世				 19世紀..... 20世紀..... 現暖期

⇨[海進] ⇦[海退]、* [↑の時期(海進または海退の極)の海水位]、※ [鈴木(1990)による]

一般に、海岸に近い砂堤ほど生成の時代が新しい、という原則が当地域にも当てはまるようである。

- ii) 古磐田海のラグーン(潟湖)化(縄文後期以前)……磐田市南部では旧期砂堤列の存在がはっきりしないが、ちょうどその位置あたりに、天竜川からの旧流路の先端が微高地として張りだしている(同市岡田、大之郷)。これと東方の旧期砂堤列とによって古磐田海の出口はかなり狭まった。

(加藤、『磐田市史』、34頁)

(3) 古浅羽川の進出—古磐田海埋積の一環—(縄文後期またはそれ以前)

古原野谷川が、川筋ぞいに、古磐田海を埋め立てながら前進してきた。その自然堤防地形を埋没する粘土層中に、弥生中期を最古とする遺構、遺物が出土するので(『原川遺跡I』、4-5頁)、それより前のことである。諸井で古原野谷川から分派した古浅羽川の自然堤防も粘土層で埋没される。この粘土層に弥生期以降の遺跡が介在する(『青木、馬場第1・第2遺跡』、3頁)。

古浅羽川の砂礫層が地表下10m以内にしかないことはすでに3.(1)、(3)でのべた。古原野谷川のそれも同様である(『坂尻遺跡』、4頁)。それより下位には、いずれも、貝殻まじりの粘土層(入江の堆積)がくるので、古磐田海がかなり埋積されてから、これらの川の進出があったわけである。本遺跡のボーリングNo.1地点で、砂層に貝殻がまじる(3.(1))ので、入江が淡水化する以前にそれが起こった可能性が大きい。その時期は次項のことから縄文後期またはそれ以前と推定される。

(4) 古磐田海の分化—古浅羽海の誕生(縄文後期またはその前)

古磐田海に古太田川、古原野谷川やその分派のつくる流路が前進したことで同海が分割されることになった。とくに閉鎖性の大きいものが2つある。西の今之浦・大池と東の浅羽一帯である(加藤、『磐田市史』、38頁)。両者とも有数の低湿地帯である。前者は、古太田川から西に分かれ出た新出一西之島—中原の古流路と天竜川の旧流路(2. ii)とに囲まれたものである。後者は古浅羽川の流路と旧期砂堤列によって、古磐田海から分離したもので、かりに「古浅羽海」と呼ぶ。

- i) 古浅羽海の誕生……袋井市(旧笠原村)大畑遺跡の地点貝塚(縄文後期)はヤマトシジミを主とするので、その前面の入江は汽水域(ごく低塩分)だった(『大畑遺跡77』、3頁)。これは外海からの隔離の度合の大きな水域なので、この時期には古浅羽川の流路と旧期砂堤列とは大よそでま上がっていた、つまり、古浅羽海が出現していたと見なければならぬ。旧期砂堤列がおそくとも、縄文後期までに成立したことは上述した(2ii)。現在は松山と石津の間で切れているように見えるが(図1)、地下地質資料では、砂層が連続して浅所を占めている(静岡県地震対策課、1984)。

その後、淡水化、湿地化が進み、泥炭地が広い面積を占めるにいたった。一部は開水域として江戸期まで残存したが、宝永大地震(1707年)の地盤隆起で消滅した(大庭、『袋井市史』、8-11頁)。

- ii) 今之浦・大池水域……ここには西貝塚などの貝塚群(縄文中—晩期)が磐田原台地の縁に分布する。いずれも汽水性のヤマトシジミを主体とする(『西貝塚』、16-17頁)。この汽水域の出現は縄文中期からであろう。古浅羽海の場合と同じく、古太田川からの分派流路の生成は同時期またはすこし前であろう。

(5) 古浅羽川微高地の埋没(縄文晩期—弥生期末)

古浅羽川の微高地はところどころで連続せず、形も不明瞭である。これは、既述のように(3.(2))、その上を粘土質土層が覆うためである。本遺跡の粘土質土層上面から、古墳前期、奈良、平安—鎌倉の各時代の遺構・遺物が出検されている。古浅羽川の流路が成立した縄文後期から古墳前期までの間にこの土層が堆積したことになる。そのためには、遺跡一帯が水没し、静水域化したはずである。この粘土質土層の最下部に部分的な砂やシルトがある(4.(3))。水没への移行期に、古浅羽川がそれまでの砂礫のかわりにそれ等を堆積したものと思われる。

(6)古墳前期以降の乾燥化と遺構の環境

3、4区の遺構は粘土質土層の上に造営されているので、古墳前期までに一帯が乾燥化したわけである。乾燥に伴う土層の酸化、グライ土層（＝地下水水位）の低下の程度は下位の砂礫層が浅いところほどおおきかったらしい（4、(2)）。3、4区における各時代の建物遺構の配置を図4に記入してある。これらがグライ層の浅い部分（縦の点線部）を避けていることが明らかである。発掘資料によれば、遺構は、古墳前期が、4区西部に、奈良期が同区中部に集中する。平安一録倉期は3、4区全体に広がる。ただし、建物遺構だけは3区東半にかざられる。建物遺構に見られる時代別の変遷がなぜ起きたのかは不明である。

(7)海水位の変動と環境変化

i) 意義……地盤の昇降がなくても、海水位は変動することが知られている。その上昇・下降（海進・海退ともいう）を直接に記録するものは海岸線でしか得られない（海食台、ノッチ、穿孔貝などの痕跡）。しかし、それらと連動して沿岸平野の土層や水況が変化する。例えば、海進時に、入江とその縁辺湿地（泥炭地）の陸側への進入、入江底に堆積する泥層（しばしば貝殻まじり）の拡大、河川からの砂礫層の縮小、川床の上昇などが伴う。あるいは、海退時に、上と逆のことが起こり、さらに関連して、川床低下による小谷の形成、砂礫層の拡大による海岸漂砂の増大（砂堤列の形成）をもたらす。これらの事象を総動員して海水位の変動をつかもうとするのは、これが広い地域で一斉に起こり、たとえば、ある場所で海退が確認または推定されれば、他の場所で同じことが起きたとして、それを検証することができる。また、それによって上述のような多くのことを説明し得るからである。ただし、地盤変動の激しい地域には適用できないことがある。今は材料を集めている段階である。

ii) 環境変化との関連……筆者が県内の事例から推測している海進・海退の模様を表1に示した。もちろん、これがすべてではない。誤りを含んでいるかもしれない。

表中の海水位の変動と上述の(1)から(6)までの環境変化との関連を整理すると、下記のごとく、よく対応しそうである。

- ◇ 縄文海進と(1)の入江（古磐田海）の出現とは、県内だけでなく、全国でよく知られた関係である。
- ◇ 縄文後期～後期小海退と(2)旧期砂堤列の形成と古磐田海のラグーン化、古浅羽川の進出、古磐田海の分化～古浅羽海の誕生
- ◇ 縄文後期～弥生期末小海退と(5)古浅羽川微高地の粘土質土層による埋没
- ◇ 古墳中頃の小海退と(6)古墳前期遺構の乾燥化。小海退のきざしは古墳初期から始まる。平安期の小海進に対する本遺跡の土層が未発見である。

(8)気候変化

本遺跡や周辺域からこれを指示するデータは皆無である。参考として、鈴木（1990）がまとめた気候変化の様子を表1にかかげた。寒期と海退、暖期と海進がかなり一致するのが注目される。

引用文献

…… 遺跡調査報告書、市史関係（年代順） ……

- 『西貝塚』（1961）磐田市教育委員会
『袋井市大畑遺跡、1977年度調査』（1978）袋井市教育委員会
『袋井市大畑遺跡、1951、1977、1978、1980年度調査』（1981）袋井市教育委員会
『青木遺跡・馬場第一遺跡・西立遺跡』（1982）浅羽町教育委員会
『袋井市史、通史編』（1983）袋井市史編纂委員会
『青木、馬場第一・第二遺跡』（1984）浅羽町教育委員会
『坂尻遺跡、自然科学編』（1985）袋井市教育委員会
『土橋遺跡』（1985）袋井市教育委員会
『権現山遺跡』（1987）浅羽町教育委員会
『浜部遺跡発掘調査報告書』（1987）磐田市教育委員会
『駿府城三の丸跡発掘調査報告書』（1987）静岡県教育委員会
『十二所遺跡確認調査完了報告書』（1989）浅羽町教育委員会
『原川遺跡Ⅰ』（1989）静岡県埋蔵文化財調査研究所
『川合遺跡（遺構編）本文編』（1990）静岡県埋蔵文化財調査研究所
『新堀遺跡、平成2年度概報』（1991）静岡県埋蔵文化財調査研究所
『静岡の原像をさぐる！平成3年度報告会』（1991）静岡県埋蔵文化財調査研究所
『団子塚遺跡（Ⅰ）』（1992）浅羽町教育委員会
『磐田市史、通史編上巻、原始・古代・中世』（1993）磐田市史編さん委員会

…… 一般文献（著者名アルファベット順） ……

- 門村 浩（1964）土地分類基本調査5万分の1「磐田・掛塚」、地形分類図、経済企画庁
国土地理院（1982）1/25,000土地条件図「磐田」
寒川 旭（1992）「地震考古学、遺跡が語る地震の歴史」、中公新書
静岡県地震対策課（1984）「静岡県地質断面図、中遠・西部地域」
鈴木秀夫（1990）「気候の変化が言葉をかえた」、NHKブックス
鶴見英策他（1983）「南関東・東海地域広域変動地形調査報告」、国土地理院

新堀遺跡出土須恵器の蛍光 X 線分析

奈良教育大学 三辻利一

1) はじめに

湖西窯群は弥生前期とともに東海地方における最大の須恵器窯群である。当然、外部地域に須恵器を供給するための大生産工場と考えられる。そして、それを裏づけるように、関東地域の古代遺跡から湖西窯群産と推定される相当数の須恵器が検出されている。

静岡県内には大須賀町に清ヶ谷窯群という中規模の須恵器窯群もある。

本報告では、湖西窯群と清ヶ谷群の特性を比較するとともに、新堀遺跡から出土した須恵器の蛍光 X 線分析の結果について報告する。

2) 分析方法と分析結果

試料片はすべて、表面を研磨してのち、タングステンカーバイド製乳鉢の中で100メッシュ以下に粉碎された。粉末試料は塩化ビニール製リングを枠にして約15トンの圧力をかけてプレスし、内径20mm、厚さ3~5mmの錠剤試料を作成した。この錠剤試料に X 線を照射し、試料から発する 2 次 X 線（蛍光 X 線という）を測定した。各元素の蛍光 X 線強度は標準試料として使用した岩石標準 JG-1 を使って標準化された。その結果、分析値はすべて、JG-1 による標準化値で表示された。

はじめに、湖西群と清ヶ谷群の化学特性を比較した結果から説明する。

図1に湖西群の須恵器の Rb-Sr 分布図を示す。多くの湖西群の須恵器は湖西領域とした領域内に分布する。ところが、湖西群の須恵器のなかには時折、K、Ca、Rb、Sr 量が少ないものが出土する。このような須恵器は特定の窯からのみ出土するというものではなく、いくつかの窯から出土する。出土しない窯もある。そこで、これらを包含するようにして、湖西第2群領域を描いてみた。勿論、この領域は定性的な領域を示すにすぎないが、他の領域と比較したり、また遺跡出土須恵器の産地を定性的に推定したりする上には十分役立つ。

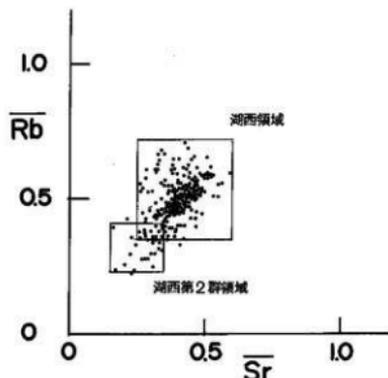


図1 湖西窯群出土須恵器の Rb-Sr 分布図

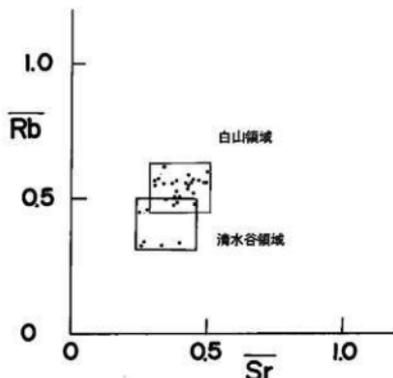


図2 清ヶ谷窯群出土須恵器の Rb-Sr 分布図

次に、大須賀町の窯群のうち、白山窯跡と清水谷窯の須恵器 Rb-Sr 分布図を図2に示してある。清水谷窯の須恵器には Rb、Sr 量が少ない。このように、清水谷窯群の中にも、湖西窯群と同様に、Rb、Sr 量の少ない胎土をもつ須恵器があることが明らかになった。ただ、清水谷窯群側ではこのような胎土をもつ須恵器は清水谷窯にのみみられる。

湖西群と清水谷群の Rb-Sr 分布図上での比較から、両群の須恵器の化学特性は似ていることがわかる。かつ、2種類の胎土があることまで似ている。つまり、両群の後背地の地質は K、Ca、Rb、Sr 因子からみて類似していると推察される。

湖西群と比較して、清水谷群の分布の広がりはずいぶん狭く、また、少しずれているため、2群間判別分析法を使って相互識別を行なうと、両群は部分的にでも相互識別できることがわかる。また、両群のそれぞれの第2群ともいうべき、清水谷群と湖西第2群の相互識別を試みた結果を図3に示す。試料数が少ないので、良好な条件とはいええないが、両群は部分的にでも分かれていることがわかる。

図3の説明を若干しておこう。両軸にはそれぞれ、清水谷群、湖西第2群からのマハラノビスの汎距離の二乗値をとってある。通常、両群の境界は $D^2 = 10$ のところにあり、したがって、両群の化学特性が異なり、完全に相互識別できるとすると、湖西第2群の試料は D^2 (湖西第2群) ≤ 10 、 D^2 (清水谷群) > 10 の領域に、また、清水谷群の試料は D^2 (清水谷群) ≤ 10 、 D^2 (湖西第2群) > 10 の領域に分布する。しかし、両群の化学特性が類似してくると、次第に接近して分布し、遂には、両群への帰属条件を満足して、重複領域 [D^2 (湖西第2群) ≤ 10 、 D^2 (清水谷群) ≤ 10] に混在するようになる。

図3をみると、清水谷群の試料の過半数は清水谷領域に分布するが、湖西第2群の試料はすべて、重複領域に分布することがわかる。しかし、両群の相互識別は可能であることは図3からわかる。

以上の結果をもとに、新堀遺跡出土須恵器の産地を探ってみた。分析値、および、分析結果は表1に

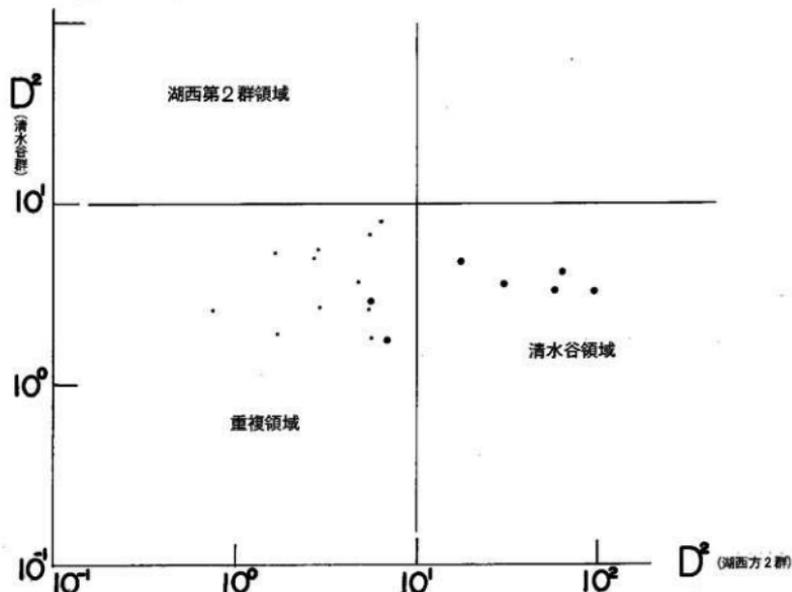


図3 清水谷群と湖西第2群の相反識別 (K、Ca、Rb、Sr 因子使用)

表1 新堀遺跡出土須恵器の分析値

	試料番号	K	Ca	Fe	Rb	Sr	D ² (清水谷)	D ² (湖西第2群)	推定産地	押印番号	
N-1-1	No 1	0.485	0.236	1.82	0.485	0.585	44	167	不明	73-25	
	2	0.373	0.176	1.24	0.307	0.452	27	48	〃	73-23	
	3	0.496	0.227	1.86	0.422	0.547	63	198	〃	73-24	
	4	0.463	0.223	1.93	0.441	0.528	48	166	〃	73-28	
	5	0.428	0.214	2.03	0.419	0.500	39	126	〃	73-36	
	6	0.465	0.234	1.93	0.451	0.572	51	166	〃	73-34	
N-2-1	No 7	0.398	0.132	1.28	0.482	0.509	11	95	〃	73-30	
	2	0.365	0.105	1.30	0.432	0.447	7.9	65	清水谷	74-1	
	3	0.379	0.108	1.16	0.402	0.459	12	78	不明	73-38	
	4	1.0	0.345	0.105	0.795	0.437	4.21	3.7	清水谷	74-2	
	5	1.1	0.406	0.098	1.14	0.503	0.428	7.1	115	〃	74-4
N-3-1	No 1 2	0.464	0.294	1.78	0.502	0.608	84	273	不明	73-5	
	2	1.3	0.290	0.068	2.09	0.342	0.242	1.9	10	清水谷	73-13
	3	1.4	0.308	0.067	1.59	0.269	0.333	9.6	34	〃	73-9
	4	1.5	0.236	0.059	2.12	0.293	0.223	4.3	3.6	〃	73-8
	5	1.6	0.298	0.082	1.21	0.398	0.273	1.5	23	〃	73-10
	6	1.7	0.305	0.146	1.47	0.321	0.377	8.3	19	〃	73-15
	7	1.8	0.398	0.118	0.963	0.471	0.442	6.0	88	〃	73-4
N-4-1	19	0.442	0.232	1.27	0.539	0.635	33	153	不明	73-7	
	2	2.0	0.289	0.065	1.86	0.342	0.238	2.0	10	清水谷	73-19
	3	2.1	0.471	0.151	1.42	0.525	0.453	16	187	不明	73-14
	4	2.2	0.419	0.113	1.58	0.391	0.360	11	92	清水谷	72-29
	5	2.3	0.321	0.146	1.61	0.321	0.388	9.4	20	〃	73-18
	6	2.4	0.260	0.075	1.47	0.279	0.275	2.4	0.4	〃	73-17

まとめられている。また、清水谷群と湖西第2群からのマハラノビスの汎距離の二乗値も計算した。そして、 $D^2 \leq 10$ を帰属条件として、各試料の両群への帰属を求めた。その結果も表1に示されている。その結果、N-1のグループには清水谷群産の須恵器はなく、逆に、N-3のグループには清水谷群産と推定される須恵器が集中する。そして、N-2, N-4のグループには清水谷群産と不明と推定されたものが混在する。

新堀遺跡の須恵器の産地推定の結果はRb-Sr分布図上確かめられる。図4に示す。この図をみると不明とされたものは湖西領域には入っており、湖西群産の可能性は十分あることがわかる。

以上の結果、新堀遺跡の須恵器には湖西第1群産と清水谷産の両方があることがわかった。

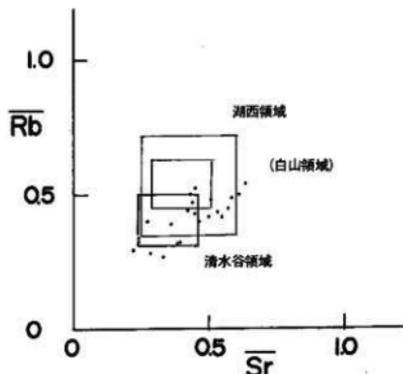
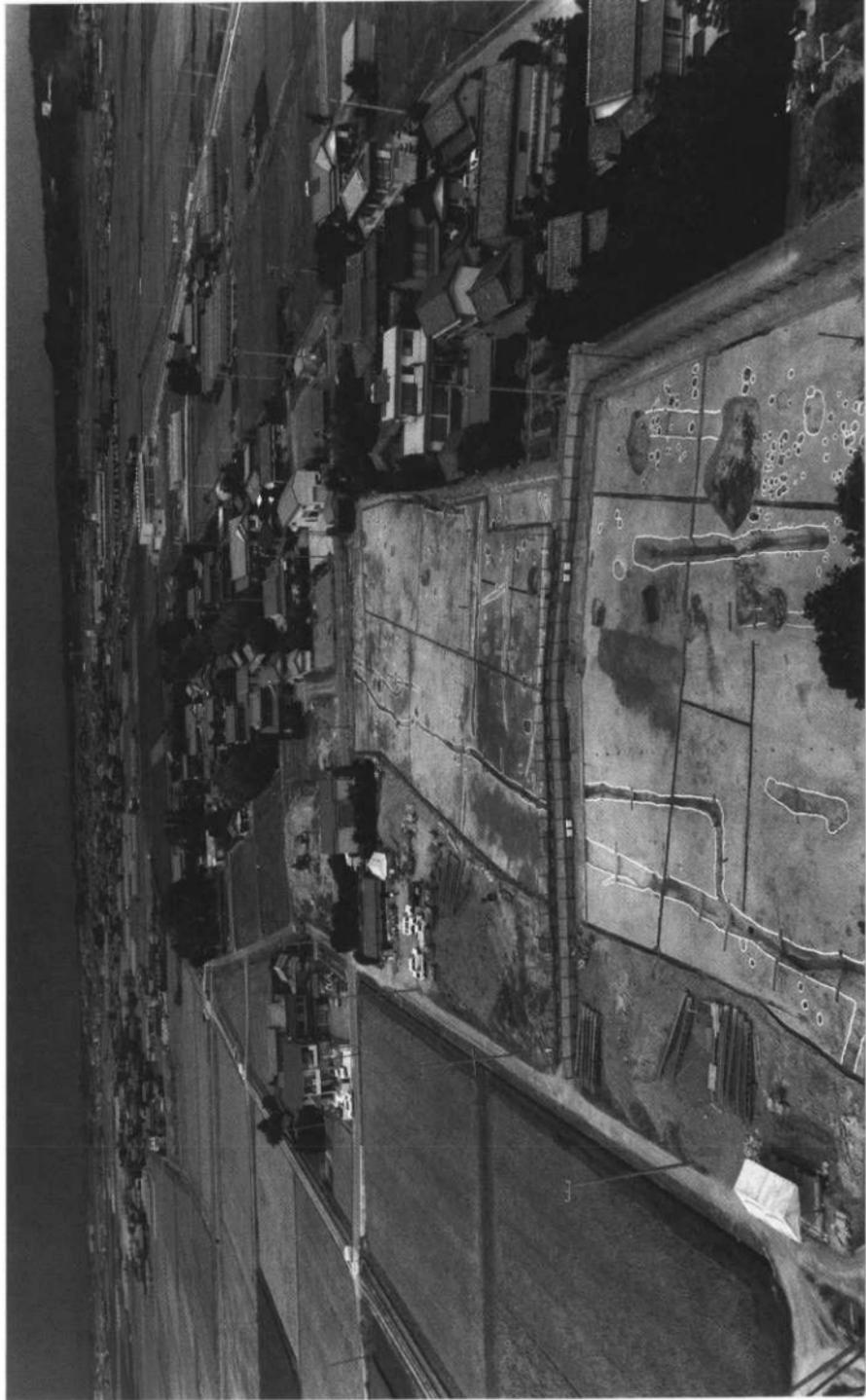


図4 新堀遺跡出土須恵器のRb-Sr分布図

圖 版





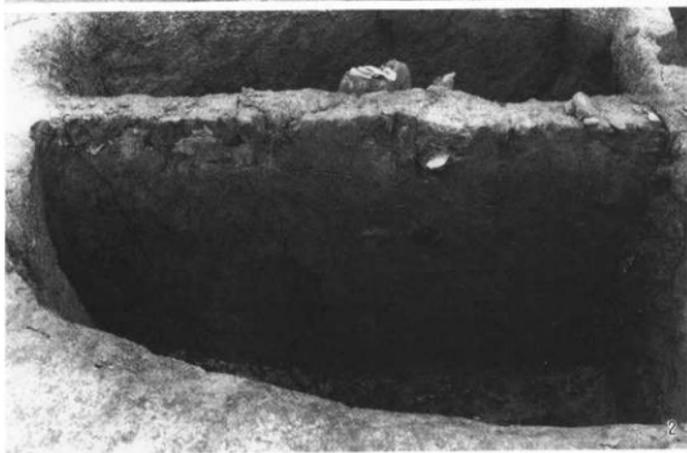
- 図版3 1 1・2区遺構全景、北から
2 3・4区古墳時代遺構全景、北から



- 图版 4
- 1 5区古墳時代溝 SD520 土器出土状態
 - 2 5区古墳時代溝 SD520 土器出土状態
 - 3 3区古墳時代土坑 SF312 土器出土状態



- 图版 5
- 1 4区古墳時代土坑
 - 2 4区古墳時代土坑 SF411 土層
 - 3 4区古墳時代土坑 SF411 井戸粹



- 図版 6
- 1 4区古墳時代土坑 SF419 土器出土状態
 - 2 4区古墳時代土坑 SF420 上層の土器
 - 3 4区古墳時代土坑 SF421



4
3
2
1

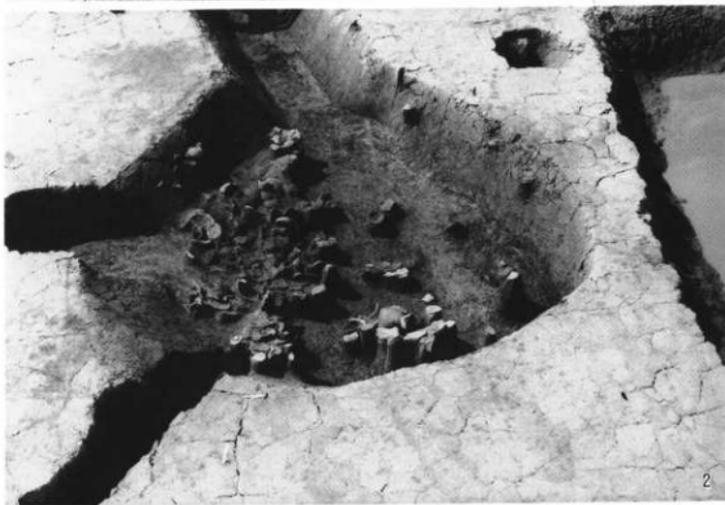
- 图版 7
- 1 4区古墳時代土坑 SF422 土器出土状態
 - 2 4区古墳時代土坑 SF422 焼土検出状況
 - 3 4区古墳時代土坑 SF423 土層



- 图版 8
- 1 4区古墳時代土坑 SF427 土器出土状態
 - 2 4区古墳時代土坑 SF427 上層壺検出状況
 - 3 4区古墳時代土坑 SF427 下層土器出土状態



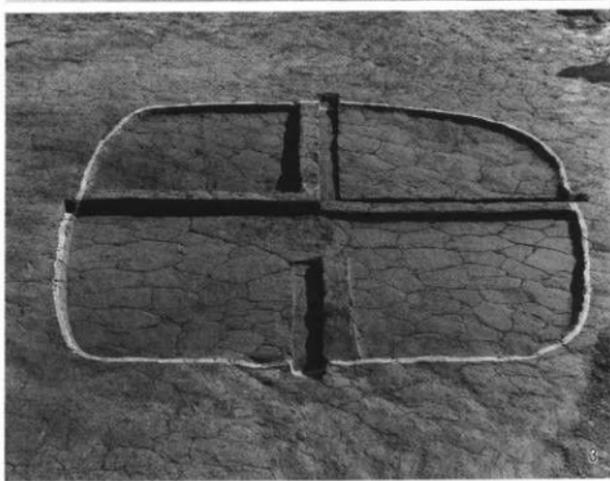
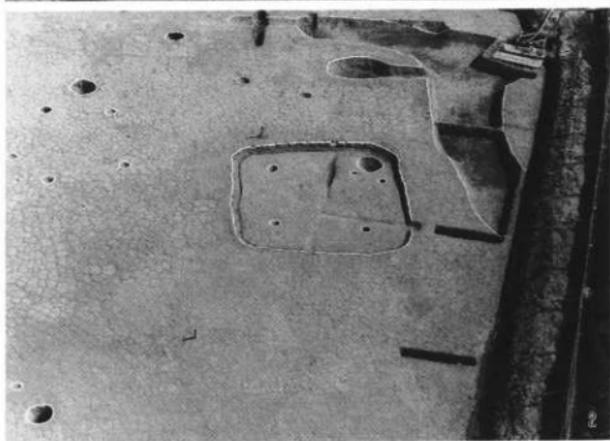
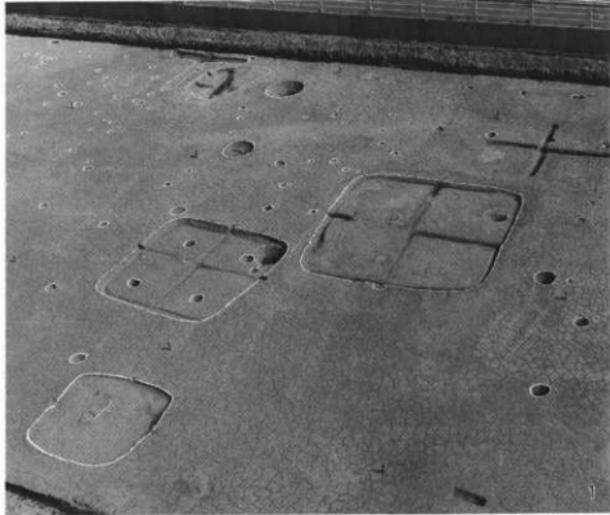
- 图版 9
- 1 4区古墳時代土坑 SF429 上層土器出土狀態
 - 2 4区古墳時代土坑 SF431 土器出土狀態
 - 3 4区古墳時代土坑群



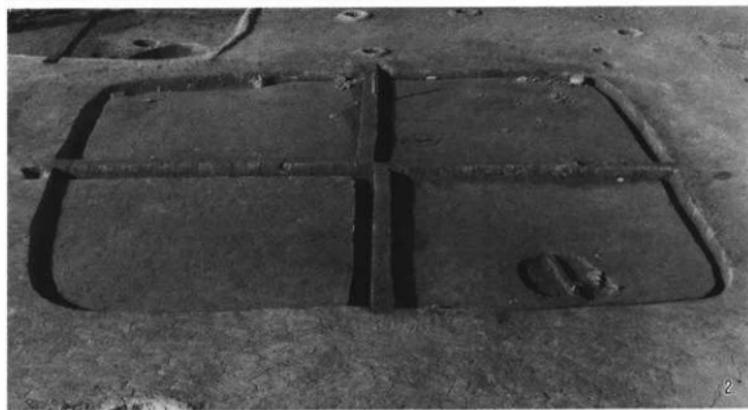
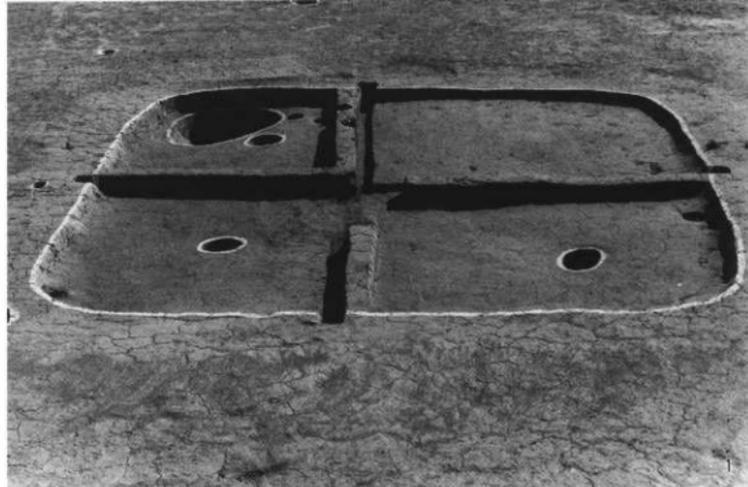
- 图版10 1 1区古墳時代井戸 SE101土器出土状態
2 4区古墳時代井戸 SE403土器出土状態
3 5区古墳時代井戸 SE516土器出土状態



- 圖版11
- 1 1·2区古墳時代竪穴住居跡
 - 2 2区古墳時代竪穴住居跡 SB201
 - 3 2区古墳時代竪穴住居跡 SB203

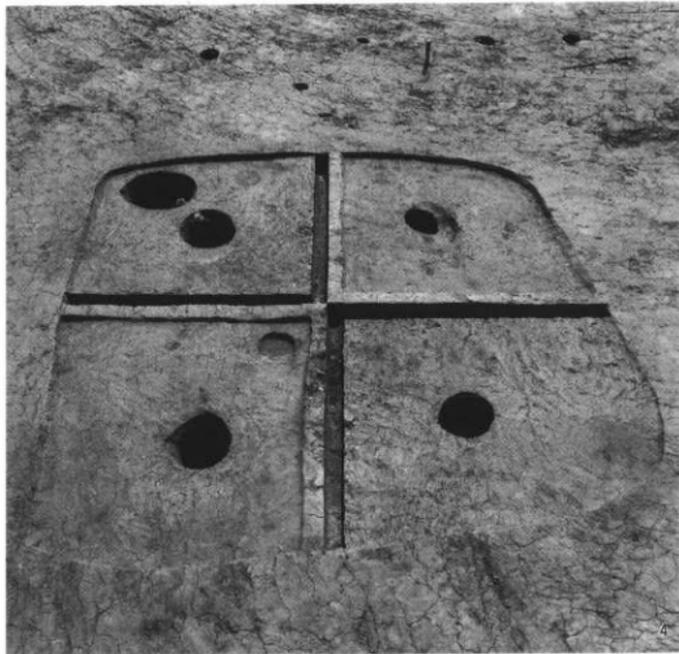
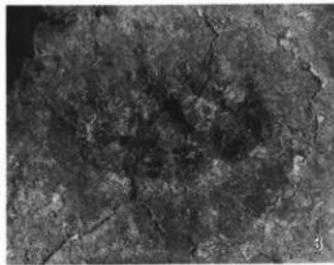


- 图版12
- 1 2区古墳時代竪穴住居跡 SB202
 - 2 2区古墳時代竪穴住居跡 SB204
 - 3 2区古墳時代竪穴住居跡 SB204 土器出土状態



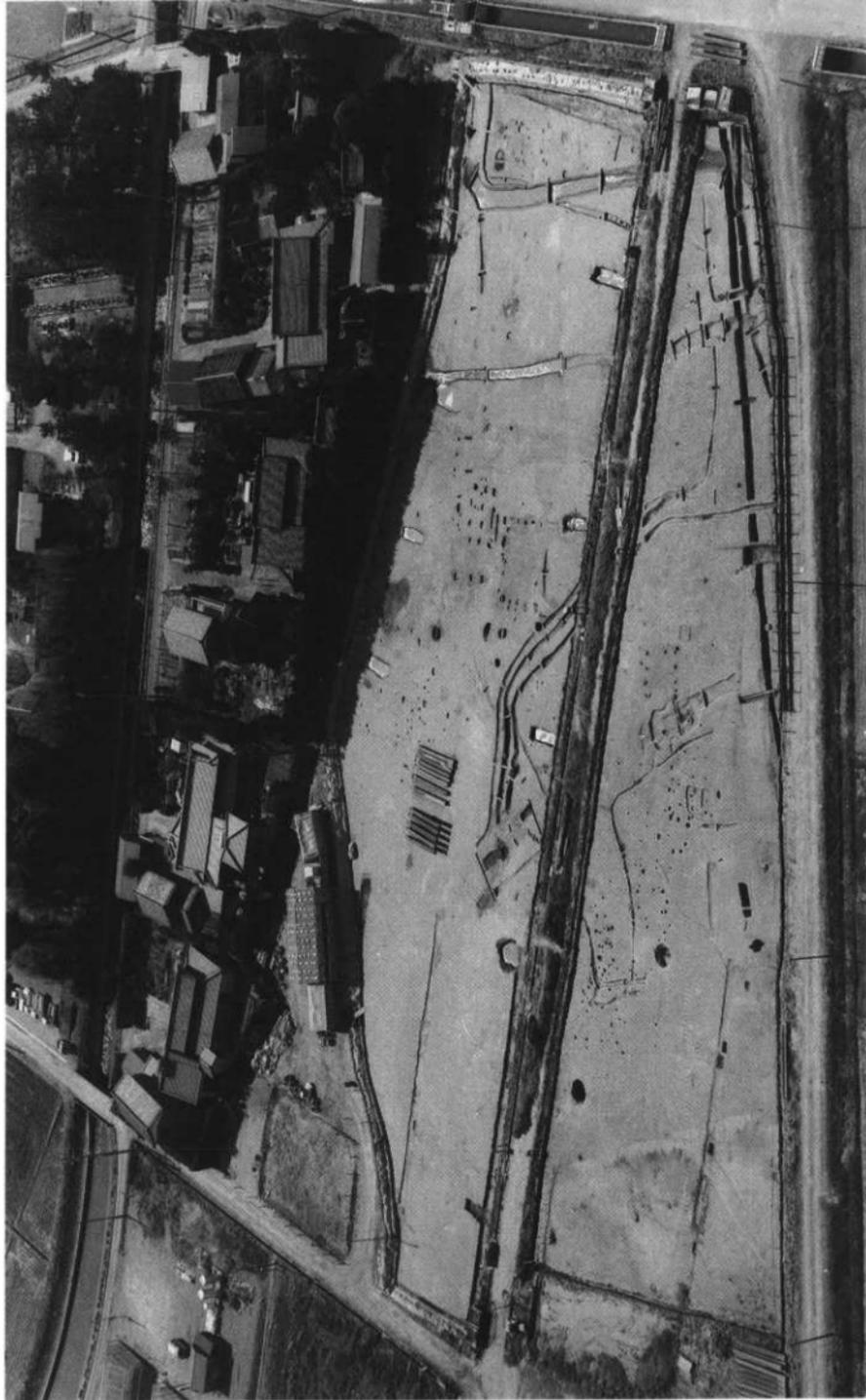


- 図版14 1 4区古墳時代竪穴住居跡 SB402・405
2 4区古墳時代竪穴住居跡 SB402 土器出土状態
3 4区古墳時代竪穴住居跡 SB405 の炉跡
4 5区古墳時代竪穴住居跡 SB501



- 图版15 1 1区古墳時代1号周溝墓
2 2区古墳時代3号周溝墓
3 2区古墳時代3号周溝墓



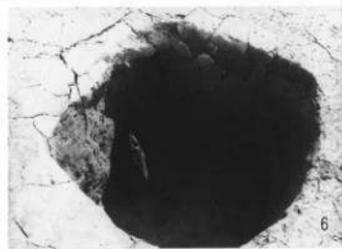
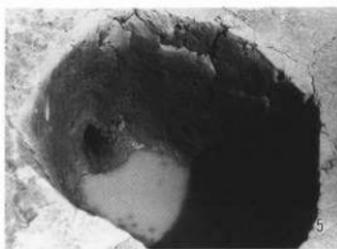




- 图版18 1 3区奈良时代冢 SD305 土器出土状态
2 3区奈良时代冢 SD305 土器出土状态
3 3区奈良时代冢 SD305 土器出土状态

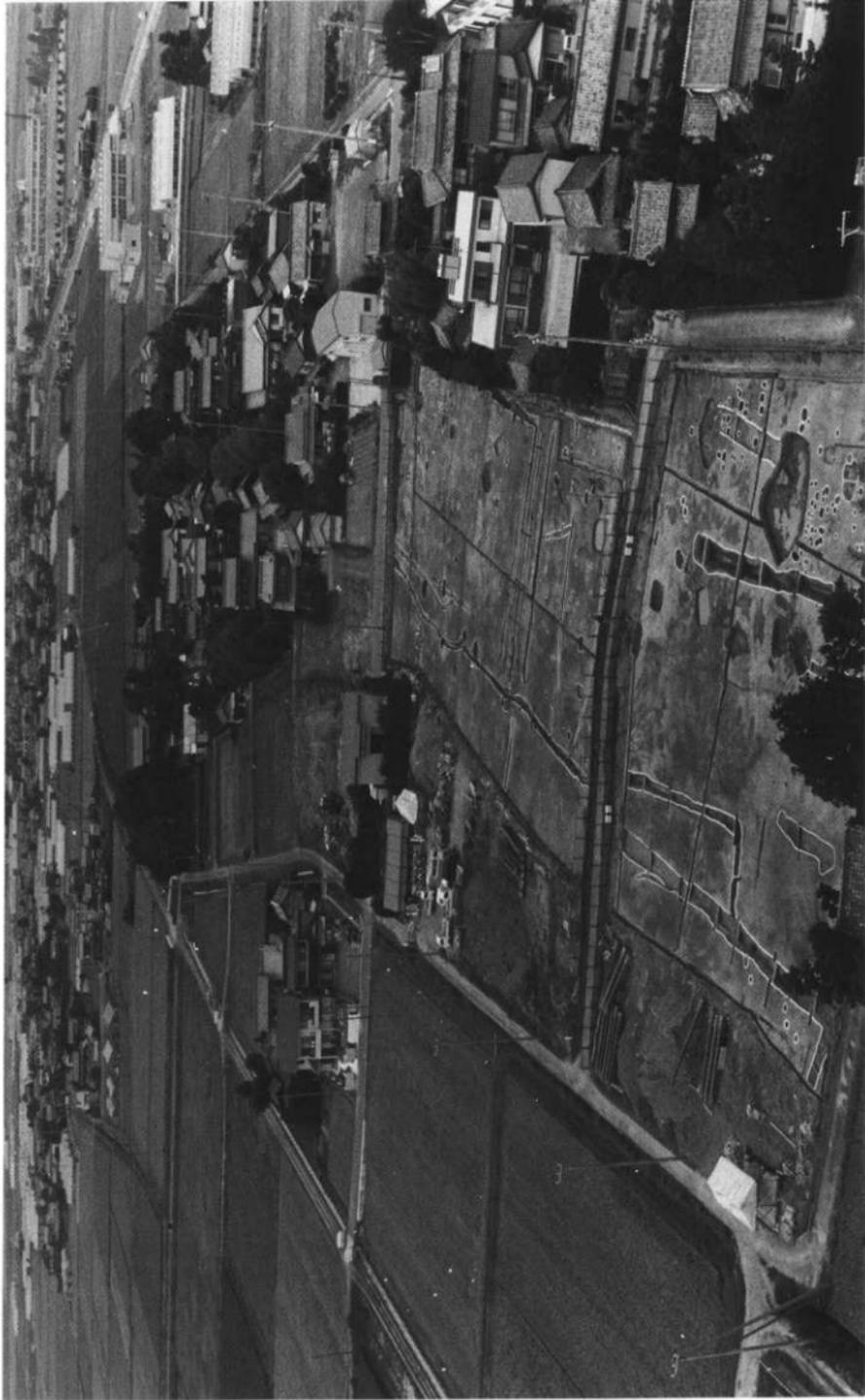


- 図版19
- 1 4区奈良時代掘立柱建物群、西から
 - 2 4区奈良時代掘立柱建物 SH401
 - 3 4区奈良時代掘立柱建物 SH401 柱穴
 - 4 4区奈良時代掘立柱建物 SH401 柱穴
 - 5 4区奈良時代掘立柱建物 SH401 柱穴
 - 6 4区奈良時代掘立柱建物 SH401 柱穴



- 图版20
- 1 4区奈良时代掘立柱建物 SH402
 - 2 4区奈良时代掘立柱建物 SH403·404
 - 3 4区奈良时代掘立柱建物 SH405

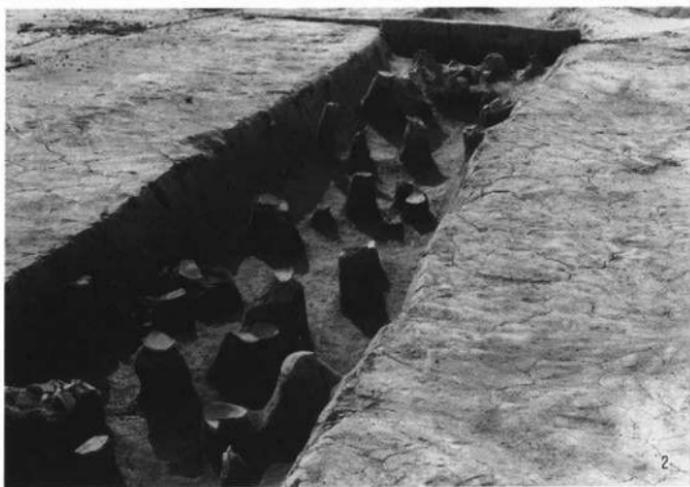




- 図版22 1 3区平安時代末～鎌倉時代満 SD301 北から
2 3区平安時代末～鎌倉時代満



- 图版23 1 4区平安时代末～鎌倉時代溝 SD411・412
2 4区平安時代末～鎌倉時代溝 SD412 土器出土状態

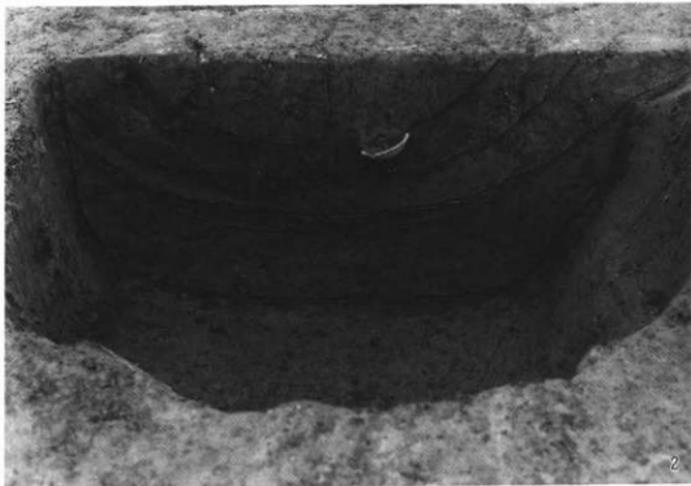


- 図版24 1 5区平安時代末～鎌倉時代満 SD501
2 5区平安時代末～鎌倉時代満 SD518
3 6区平安時代末～鎌倉時代満 SD608

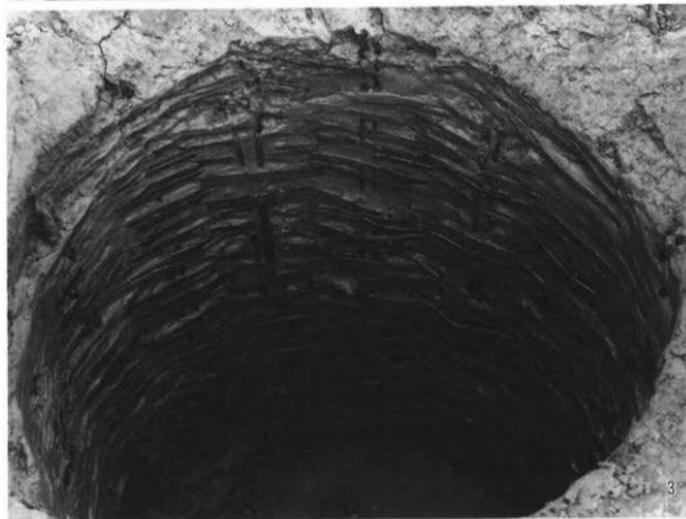




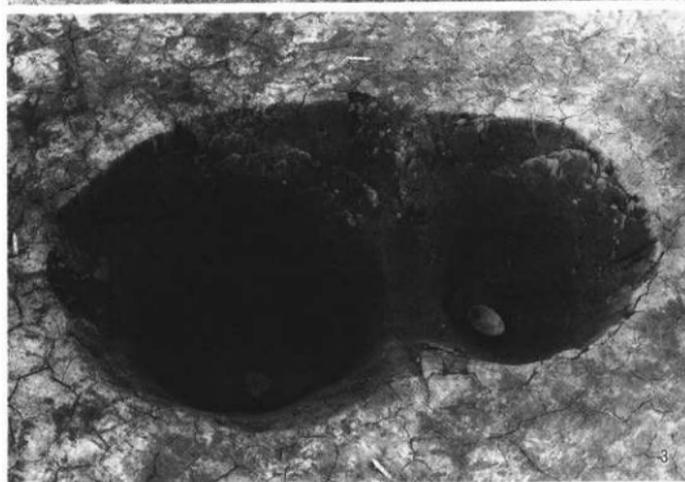
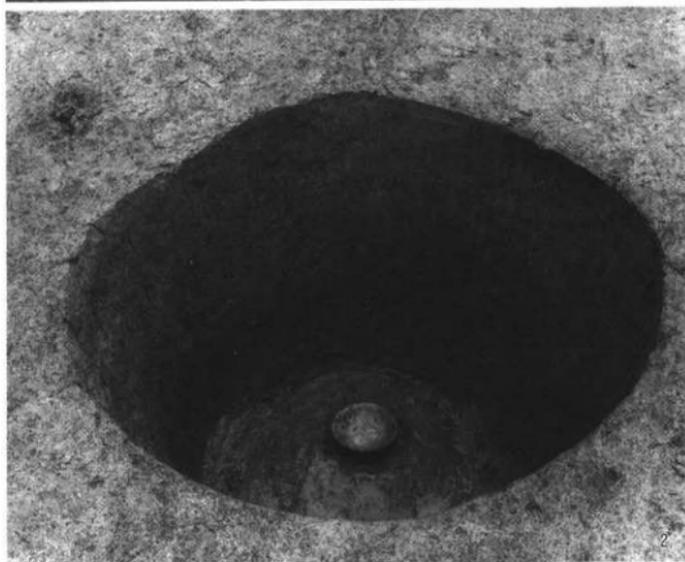
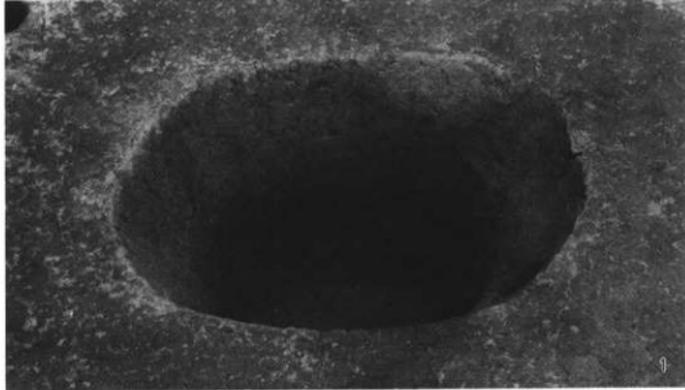
- 図版26 1 3区平安時代末～鎌倉時代土坑群、北から
2 3区平安時代末～鎌倉時代土坑 SF303 土層
3 3区平安時代末～鎌倉時代土坑 SF310 土器出土状態



- 図版27
- 1 1区鎌倉時代井戸 SE102
 - 2 2区鎌倉時代井戸 SE203 土層
 - 3 4区井戸 SE404 採検出状況



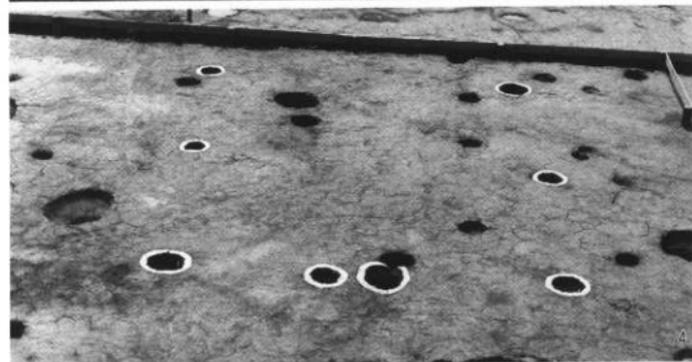
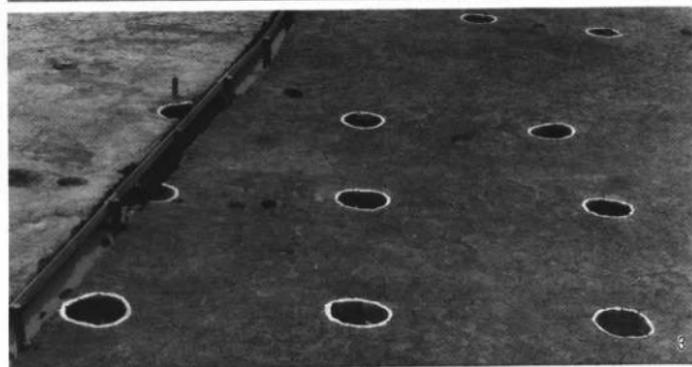
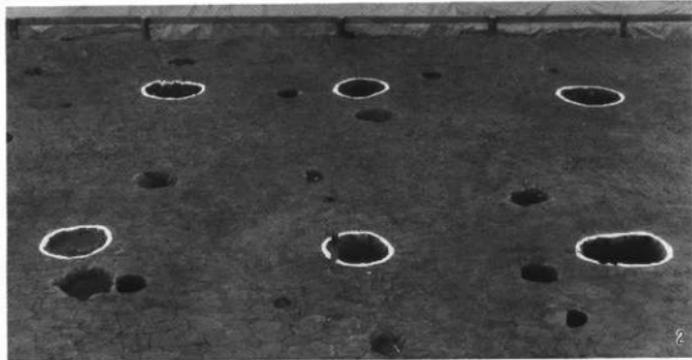
- 图版28 1 5区鎌倉時代井戸 SE503
2 5区平安時代末井戸 SE506 土器出土状態
3 5区平安時代末井戸 SE509



图版29 1 5区近世墓 SF503
2 6区近世土坑 SF601 土器出土状况



- 図版30 1 5区平安時代末～鎌倉時代掘立柱建物 SH502
2 5区掘立柱建物 SH503
3 5区掘立柱建物 SH504
4 5区掘立柱建物 SH505







53-12



53-2



53-3



54-1



54-3



53-1



55-2



56-1



57-2



57-6



56-2



57-7



57-4



56-9



57-19



57-11



58-7



57-13



59-16



60-5



57-14



58-1



60-6



61-7



60-8



61-11



60-9



61-22

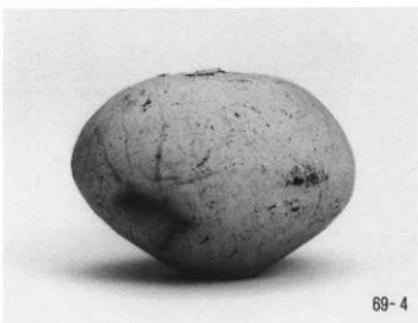


60-16



60-14









78-5



81-32



78-8



81-20



78-10



81-21



81-19



81-27



81-3



81-23



79-3



81-29



81-2



81-31



81-33



81-34



81-35



81-37



81-38



82-7



82-13



72-1



72-3



72-7



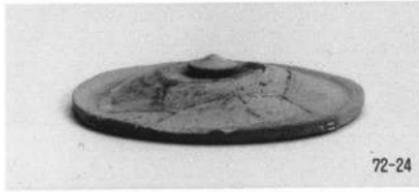
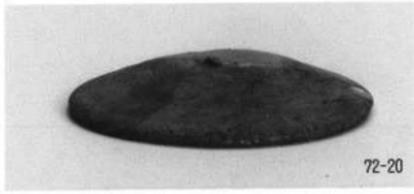
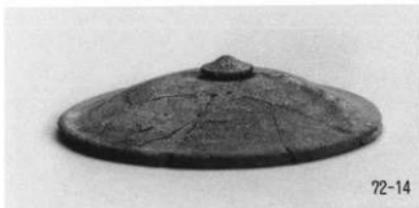
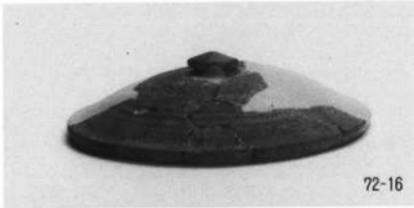
72-9



72-10



82-1





73-4



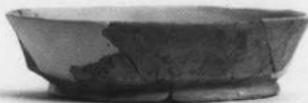
73-23



73-5



73-24



73-6



73-25



73-7



73-28



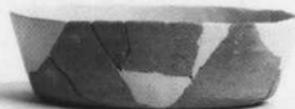
73-21



73-33



73-22



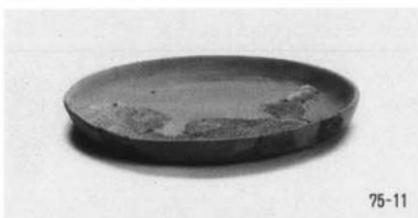
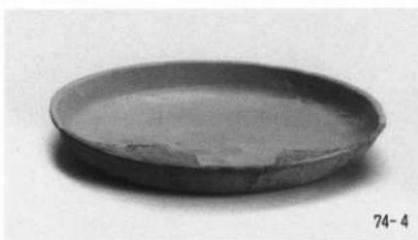
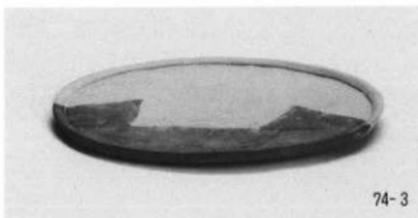
73-35

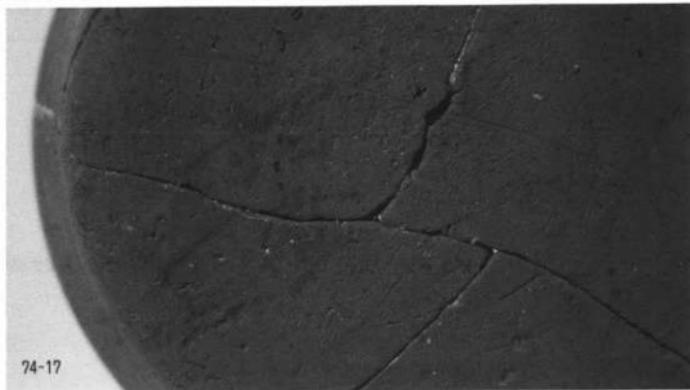
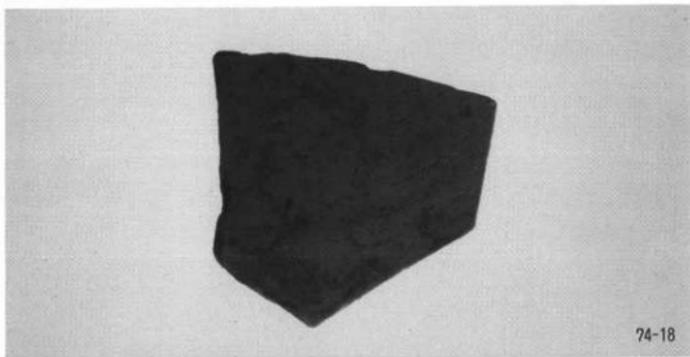
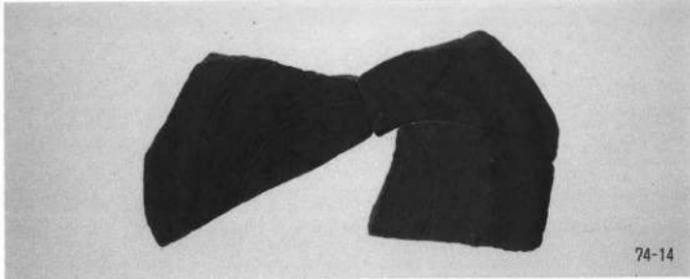


73-1



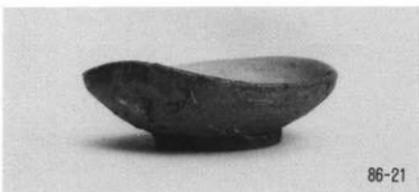
73-31















92-32



93-11



93-7



94-1



92-28



94-2



92-29



94-8



93-9



94-10



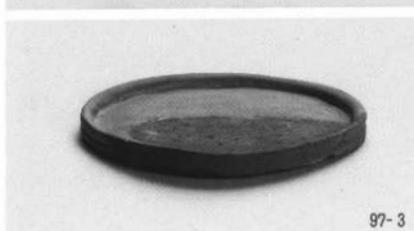
93-10

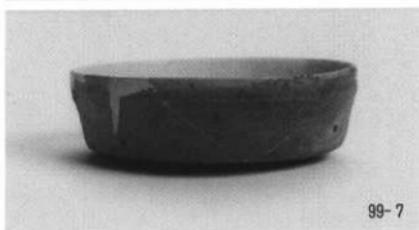
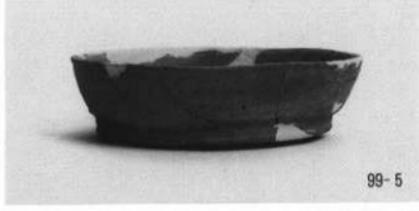
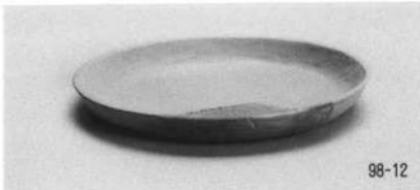


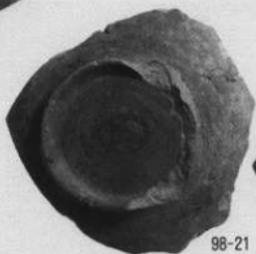
94-15

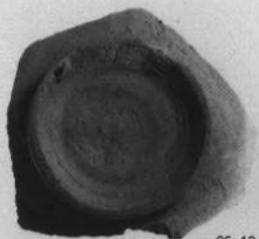


94-16





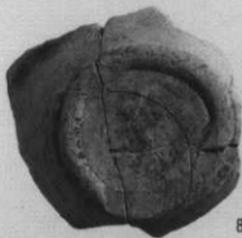




95-13



92-29



86-28



95-9



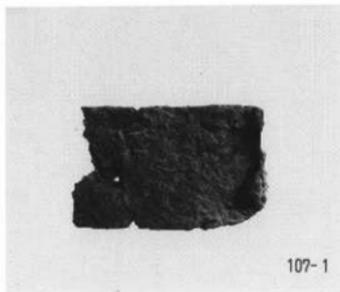
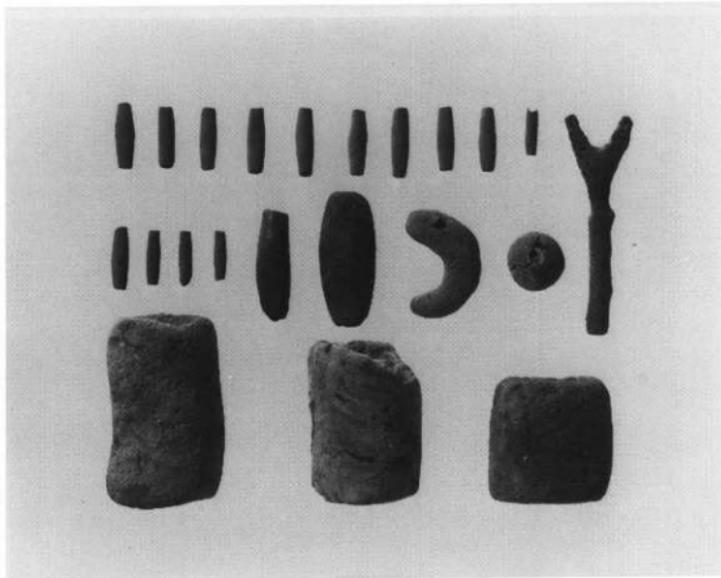
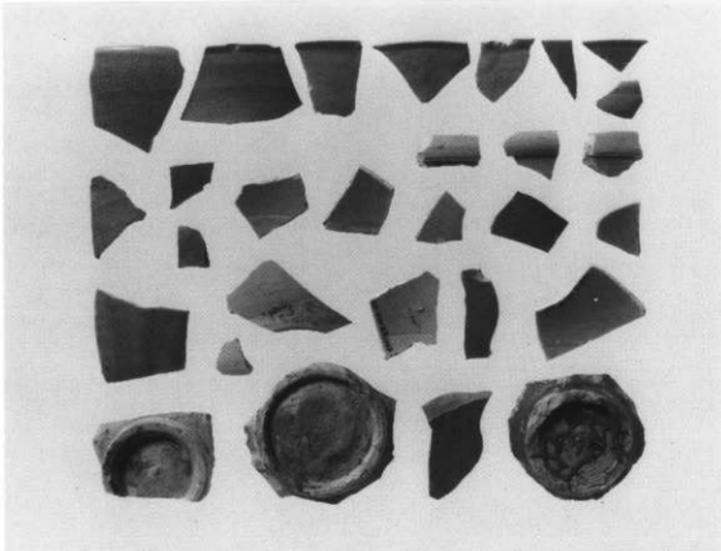
95-10

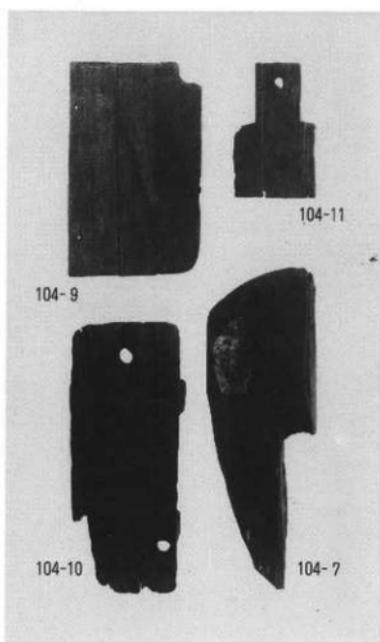
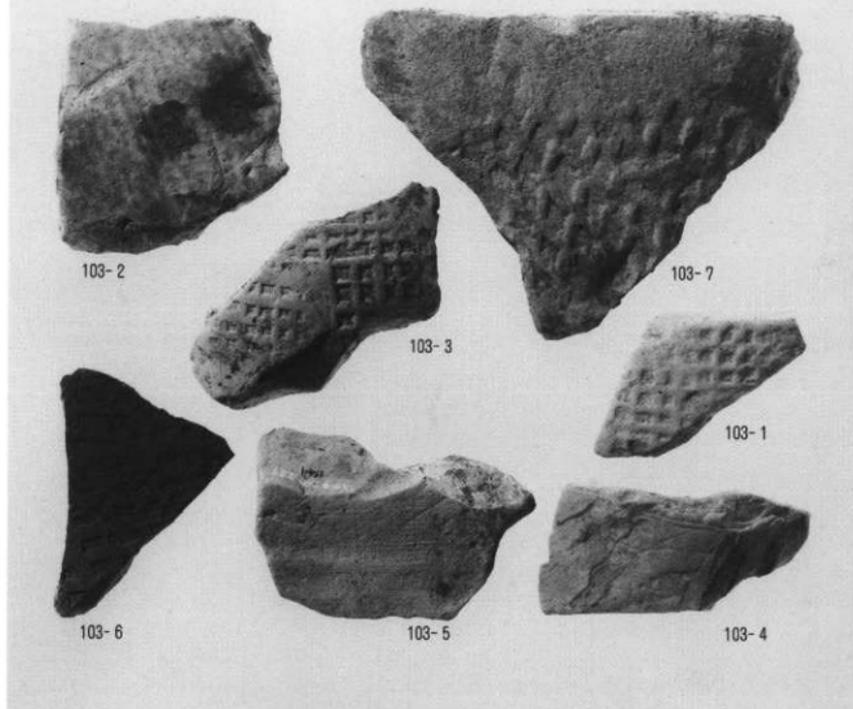


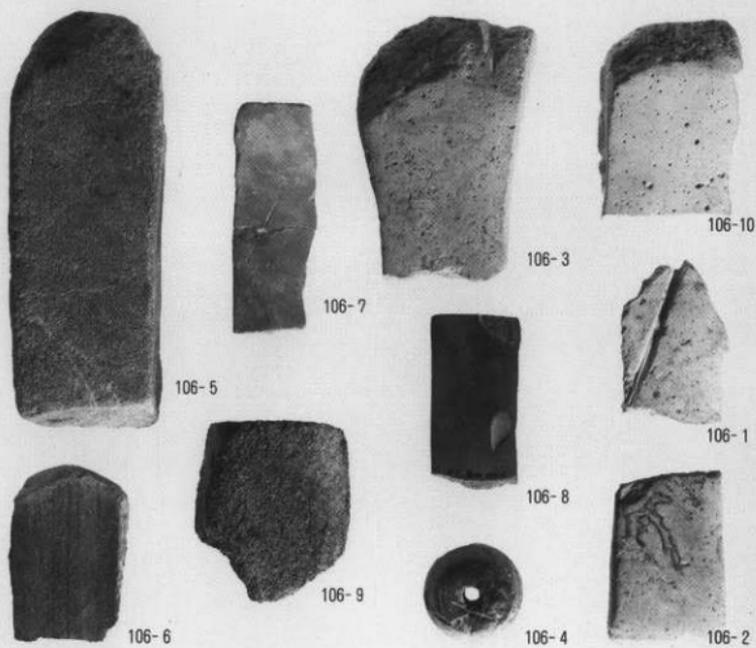
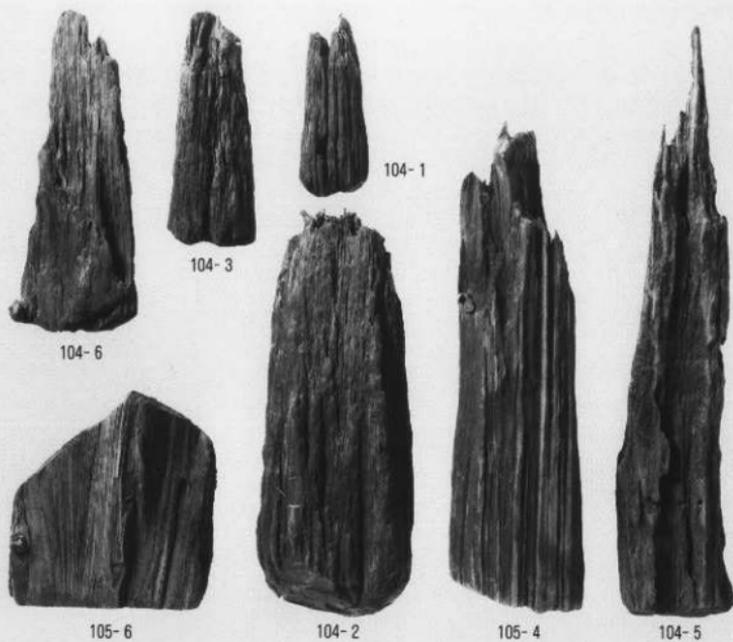
96-9



95-12







報告書抄録

ふりがな	にいぼりいせき							
書名	新堀遺跡							
副書名	静岡県住宅供給公社新堀団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告							
シリーズ番号	第45集							
編著者名	佐野五十三 (特論: 加藤芳朗、三辻利一)							
編集機関	静岡県埋蔵文化財調査研究所							
所在地	〒424 静岡県清水市江尻台町18-5			TEL. 0543-67-1171 (代)				
発行年月日	西暦 1993年 3月 30日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m ²	
新堀遺跡	静岡県 磐田郡 洗羽町新堀	22481		34° 41' 30"	137° 55' 10"	19800401~ 19911120	15,758	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
新堀遺跡	集落 墓 官衙?	平安時代末 ~ 鎌倉時代	掘立柱建物・土坑・区 画溝・井戸	山茶碗・小皿・墨書土 器・青白磁・柱成木製 品・砥石		奈良時代前半期「山名 厨」墨書土器が出土。 L字配置の掘立柱建物 群(6棟)を検出。		
		奈良時代	掘立柱建物・櫓列・区 画溝	須恵器・土師器・墨書 土器・転用硯				
		古墳時代 前期	竪穴住居・方形周溝墓 祭祀土坑・土坑・凹地	古式土師器・鉄鎌・土 鏝・土製勾玉・丸玉				

静岡県埋蔵文化財調査研究所 調査報告 第45集

新 堀 遺 跡

平成4年3月30日

編集発行

財団法人

静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県清水市江尻台町18-5

TEL 0543(67)1171

印 刷

株式会社ニシガイ

清水市本町12-6

TEL 0543(52)2188